唐土名勝圖會

京師

三

唐土名勝圖會第一集卷之三

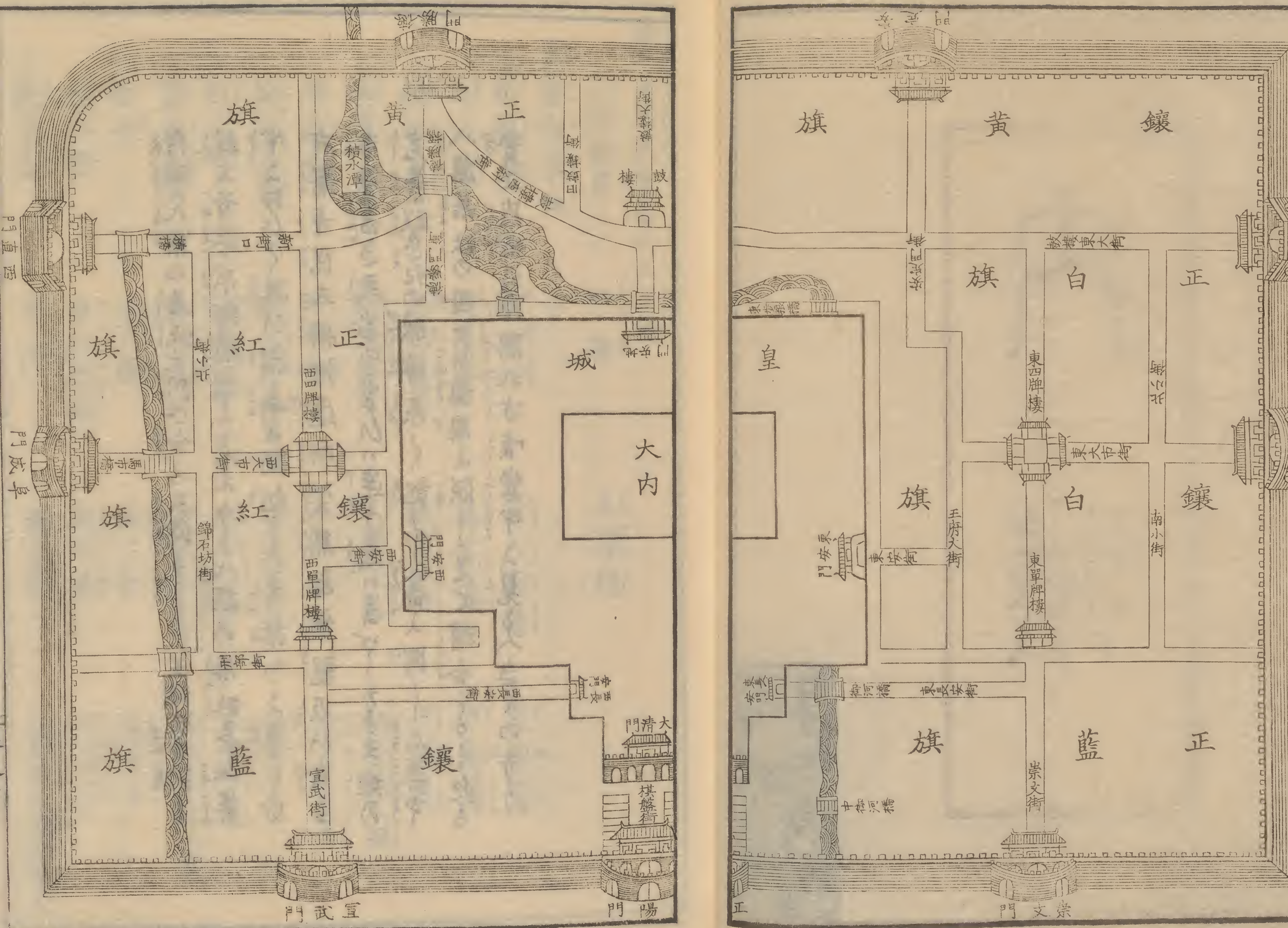
目次

唐土名勝圖會 京師 内城 卷之三

内城

[redacted]

内城總圖分列八旗之居趾



内城は八旗の居址を列ね分て五城をたてゝ五城の分別ある
既に首巻京師總圖にいへり八旗の居址を此巻
中に抄ひて再び旗分に圖記して其旗下に屬せる
府署寺院大街河道閘梁廟祠僧觀及び或は
市の囂き民家のあつまり連り或はまがりなる土地の
光景縦横の形勢悉く記し審に圖し凡巻中
八旗居址の圖を此總圖に照し見て繍合するときは
實に内城の四隅八方唯掌中に見るべきものなり

唐土名勝圖會巻之三目録

鑲白旗居址
王府街
正藍旗覚羅宗学
鑲白旗蒙古都統署
正白旗蒙古都統署
正藍旗滿洲蒙古漢軍三都統署
二郎廟
清泰寺
鑲白旗官学
正白旗官学

正白旗居址
大隆福寺
正白旗覚羅宗学
朝陽門

會同館
播竿寺
臧壽寺
正白旗漢軍都統署
左翼宗学
銅馬坊
宝慶寺
正白旗覚羅宗学
普徳寺
正白旗護軍統領署
正白旗滿洲都統署

豫親王府
賢良寺
燈市
鑲白旗護軍統領署
東西院
雙忠祠
関帝廟
智化寺
證恩寺
順天府儒学
五嶽菴
六倉

寧郡王府
崇真萬壽宮
法華寺
左翼前鋒統領衙門
鑲白旗滿洲都統署
正藍旗官学
維摩菴
禄米倉
老君堂
文丞相祠
大慈延福寺
慧照寺

鑲黄旗居址
鼓樓
顯佑宮
文昌宮
宝泉局西廠
天心堂
安定門
宝泉局
先師廟
五岳觀
鑲黄旗護軍統領署

鑲藍旗居址
振武坊
刑部署

鐘樓
步軍統領衙門
圓恩寺
法通寺
劉猛将軍祠
鑲黄旗漢軍都統署
鑲黄旗蒙古都統署
文廟
石觀音寺
鑾儀衛署
白雲樓

萬寧寺
萬寧橋
鑲黄旗官学
慈隆寺
霊椿坊
大興縣署
開元寺
雍和宮
右翼廠
太常寺署
大理寺署

慈善寺
福祥寺
千佛寺
順天府署
鑲黄旗滿洲都統署
鑲黄旗覚羅宗学
國子監
栢林寺
東直門
都察院署
工部製造庫

通政使司署
西城察院署
南城察院署
象房
吉祥寺
鷲峰寺
鑲紅旗護軍統領署
鑲藍旗官学
鑲紅旗居址
萬松老人塔
石佛寺
関帝廟
普壽寺
正紅旗官学

辦理回人佐領事務處
中城察院署
右翼宗学
鑲紅旗官学
天仙廟
正紅旗漢軍都統署
雙塔寺
顯應觀
大能仁寺
真武廟
右翼炮廠
正紅旗滿洲都統署
歴代帝王廟

北城察院署
時憲局
承恩律寺
鑲紅旗滿洲蒙古漢軍三都統署
圓通禪林
鑲藍旗漢軍都統署
普恩寺
大德顯靈宮
蠟燭寺
護國関帝廟
正紅旗蒙古都統署
弘慈廣濟寺

河南道署
東城察院署
宣武門
鑲紅旗覺羅宗学
鑲藍旗滿洲都統署
鑲藍旗蒙古都統署
鑲黄旗覺羅宗学
都城隍廟
鑲藍旗護軍統領署
右翼前鋒統領衙門
右翼税署

納檀寺
白塔寺
正紅旗居址
朝天宮
十方禪院
火德真君廟
正黄旗居址
大覺寺
藥王廟
旌勇祠
廣化寺
玉皇廟
千佛寺
正黄旗蒙古都統署

関帝廟
正紅旗覺羅宗学
正黄旗官学
火神廟
漢壽亭侯廟
宛平縣署
龍華寺
小藥王廟
華嚴鐘廠
正黄旗滿洲都統署

正紅旗護軍統領署
阜成門
宝禪寺
三旗參領署
賢良祠
海子橋
心華禪寺
雙寺
德勝門
水関

聖祚隆長寺
柳巷
崇國寺
積水潭
半藏寺
銀錠橋
十刹寺
妙緣觀
德勝橋
觀音庵

淨業寺　吉平菴　金剛寺　龍王廟

廣濟寺　崇元觀　正黄旗護軍統領署　正黄旗漢軍都統署

正黄旗覺羅宗学　永泰寺　萬佛寺　崇壽寺

萬寧寺　西直門

唐土名勝圖會卷之三

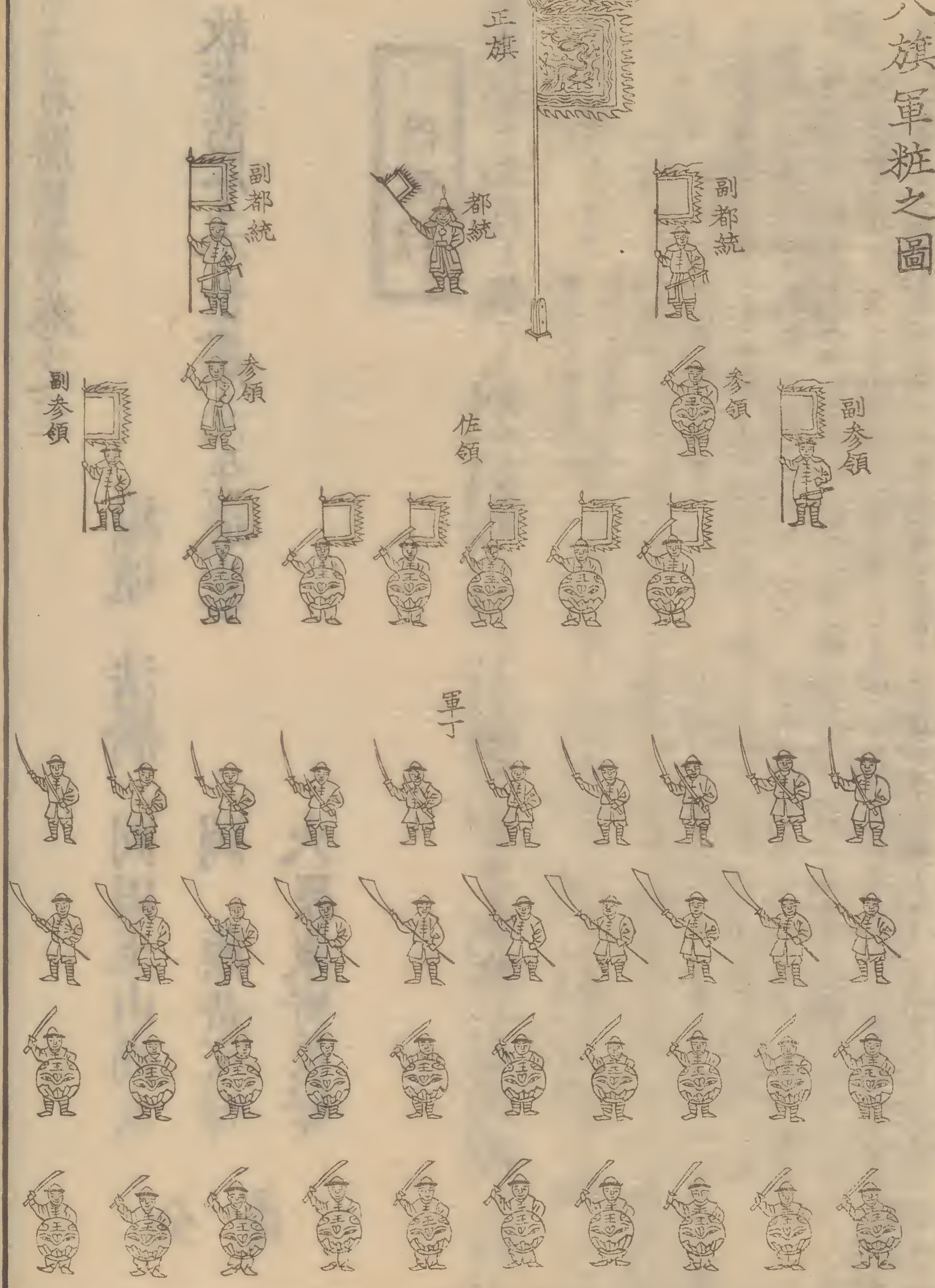
編述　法橋　岡田玉山尚友
仝　岡　熊岳文暉
故蒹葭堂木世肅先生遺意
畫　大原東野民聲

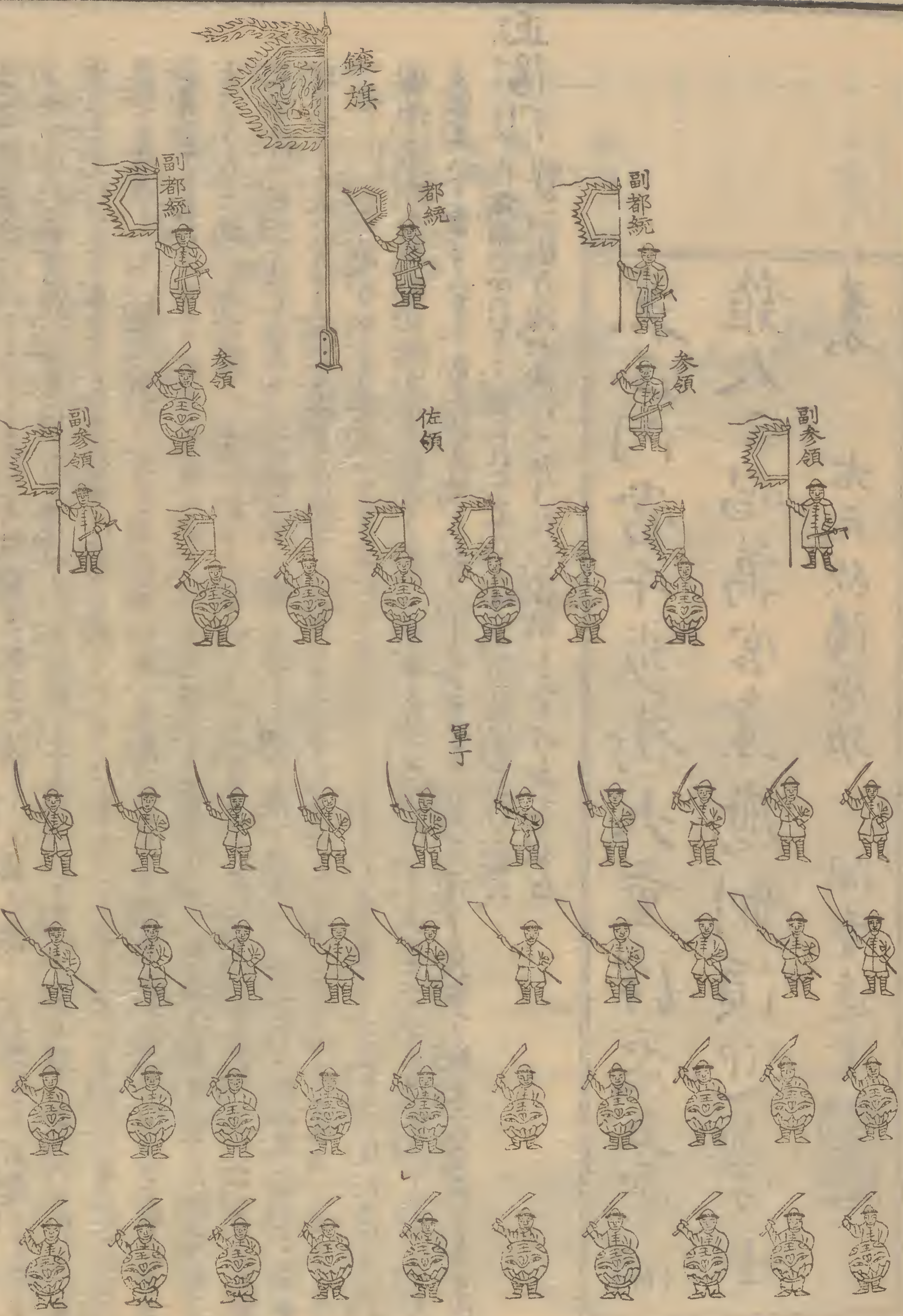
○内城

紫禁城を大内と稱し。外を皇城と号く。皇城を包める曲輪を即内城と称し。又包城ともいふ 周圍凡十里高さ三丈五尺五寸。南に三の门あり。東北西の三方ハ各二门あり。凡て九门とし。正中南を正陽门といふ左を崇文门右を宣武门といふ東に朝陽门東直门あり。西ハ阜城门西直门あり。北ハ徳勝门安定门の二あり ○京師の街を制するや南北を經とし東西を緯とし其大街と称するもの廣さ二十四歩小街と称るもの濶十二歩なり大巷三百八十四衖通二十九なり ○京師の人巷を呼で衚衕といふ蓋京師の方言なり今其字畫を省て胡同と作る巷中悉有り

八旗 清朝鼎を燕京に定るにおよびて八旗の軍旗を分ち。以て皇居の拱衛となせり。居を定む則環衛周防とし出ては則扈衛藩籬とし是を使ふに臂指のごとくなし其遼左の固きハ盤石のごとし兼るに直隷盛京及び十八省外藩等の國に至て八旗の軍を領ち置り。すべて天下國家の遼衛となせり始めハ旗を配列し重ねるに又旗を以てし。合せて八旗とす。八旗に滿洲八旗蒙古八旗漢軍

八旗軍粧之圖





八旗あり。是を合せて二十四旗といふ。所謂八旗とは、正黄旗・鑲黄旗・正白旗・鑲白旗・正紅旗・鑲紅旗・正藍旗・鑲藍旗の八をいふなり。其正黄旗・鑲黄旗・正白旗を上三旗と称し、其餘を下五旗といふ。守るに方位を分て、鑲黄旗ハ安定門の内を護衛とし、正白旗ハ東直門の内を守る。鑲白旗ハ朝陽門の内に居て、正藍旗ハ崇文門の内に居まり。是を左翼の軍と称して、北より東、東より南に至りて羅列す。正黄旗ハ徳勝門の内を護衛とし、正紅旗ハ西直門の内を守る。鑲紅旗ハ阜成門の内に居、鑲藍旗ハ宣武門の内に居りて、是を右翼の軍と名づけて、北より西、西より南に連り、皆宸居の四周を環衛し、凡て旗毎に都統一人、副都統二人ありて、是を一旗の総管職とし、専ら旗下の軍人を治め掌る事なり。又参領・副参領の職あり。その都統・副都統の政令を受て、又其下司佐領の職に通し、遂して悉く旗下の軍丁に令を行ふ。満洲旗の佐領ハ旗毎に或ハ七十人、又ハ八九十人。蒙古漢軍の佐領ハ二十餘人あり。凡て十人より佐領一人の統する軍人ハ三百人を以て一率とし、各内城の中、其旗毎の下に居址を分ち、揚しく皇居を禁護せり。又前鋒統領・護軍統領・驍騎・弓匠・鐵匠・鞍匠等の職あり。悉く旗毎に備ふ。凡満洲蒙古漢軍の二十四旗、両京十八省に分別せる總軍八十餘万人なり。諸其地其員に至りては、記して宮に至り、凡尚其の詳なる事を知んと欲バ、大清會典を考ふべし。

正陽門 内城南の正門なり。俗これを前門と呼ぶ。元の時、麗正門と称し、明の正統の比、正陽門とあらたむ。清朝もまたその名を用ゆ。

麗正門當千歩街
九重深處五雲開
雞人三唱萬宮集
應制須迎學士来
右元欧陽原功
間重遠書

正陽門
晩晴出麗正
門
閣=碧樹歴
宮城
白鳳門楣濬
日明
回首瓊華仙
島上
片雲猶欲媚
新晴
元宋褧



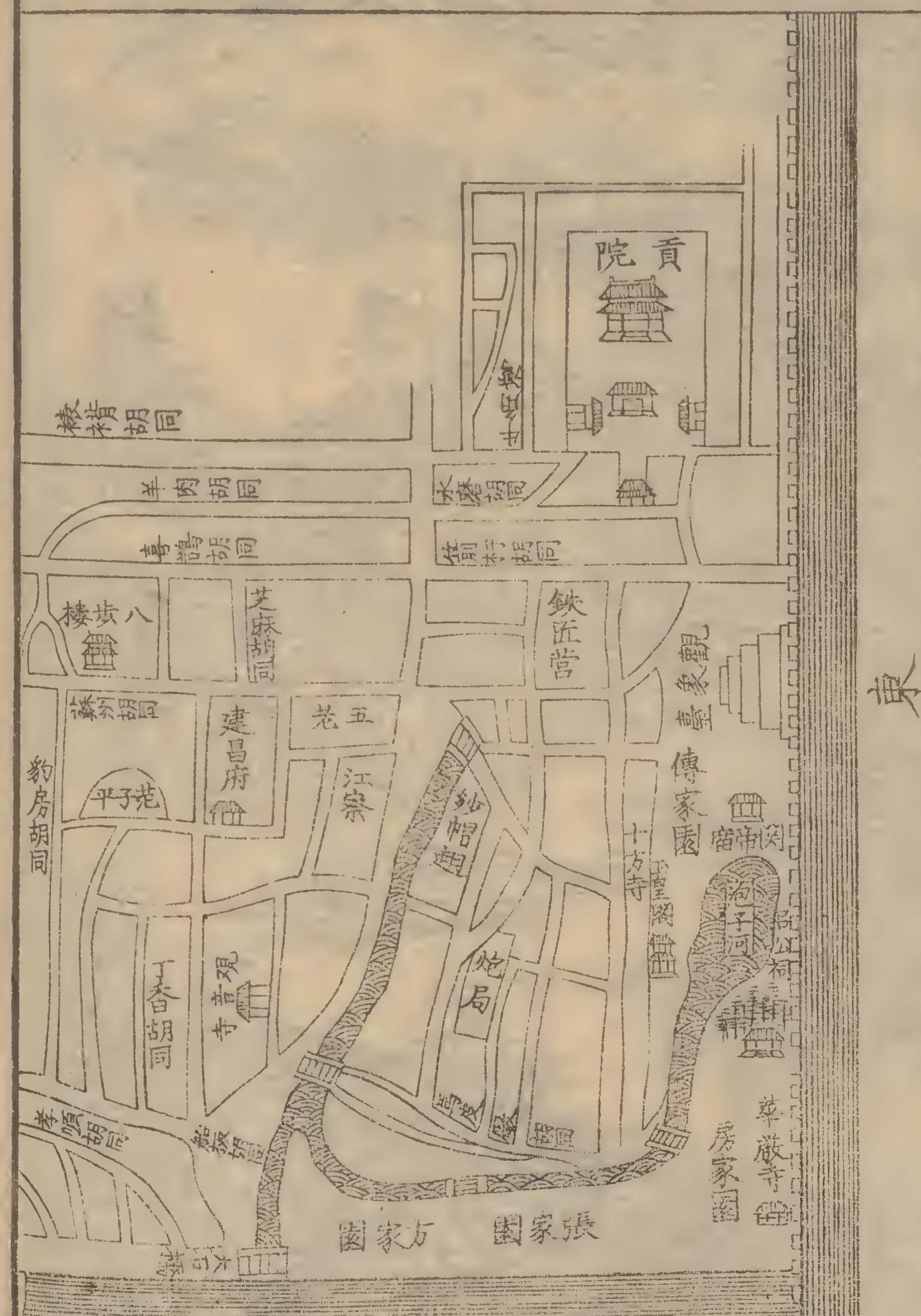
明の崇禎十七年、李自成乱を起して北京を陥入る。刑部右侍郎孟兆祥といふ者此門をまもり、節を失ハずして門の下に死せり。清朝其忠死をあハれミ、謚を忠靖と賜ふ。子の進士章明が妻何氏、婦王氏も此難に逢ひ、縊て節を全ふし。

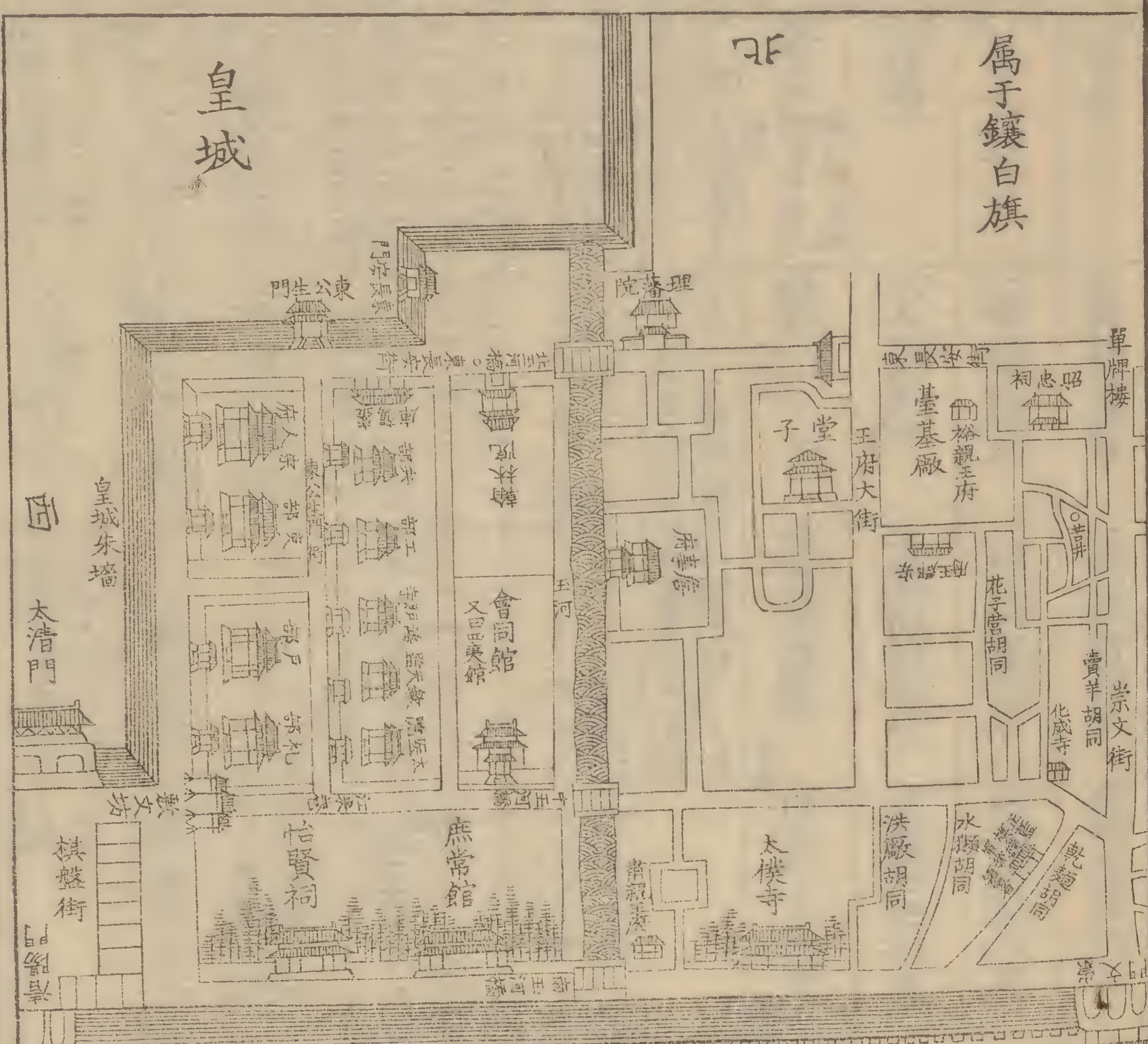
正藍旗居址之圖

○満洲蒙古漢軍の三正藍旗ハ北鑲白旗と界を接る。其界ハ単牌楼より崇文門にいたり、金水橋より東内城の根にいたる。其中に満洲蒙古漢軍の参領佐領の居址を分てり。長安街の牌楼より西に向ひ、東長安門の内金水橋にいたるまでを満洲の頭参領に属せる佐領十六人の居址とし、又新街の南口より北口にいたるまでを満洲の二参領に属せる佐領十七人の居址とし、宗人府より南戸部の園圃にいたり中玉河橋にいたるまでを満洲の三参領に属せる佐領十七人の居址とし、中玉河橋より洪廠胡同の北口にいたるまでを満洲の四参領に属せる佐領十七人の居址とし、鈌胡同より北長安街の牌楼にいたるまでを満洲の五参領に属せる佐領十七人の居址とし、凡満洲正藍旗の参領五人佐領八十四人軍丁二万八千二百人なり。

○単牌楼より崇文門にいたるを蒙古の頭参領に属せる佐領十八人の居址とし、江米巷の東口より鈌胡同にいたるまでを蒙古二参領に属せる佐領十八人の居址とし、凡蒙古正藍旗の参領二人佐領三十人軍丁九千人なり。

○単牌楼観音寺胡同より東に向ひ崇陽門にいたるを漢軍の頭参領に属せる佐領六人の居址とし、単牌楼胡同より東水磨胡同にいたるまでを漢軍二参領に属せる佐領七人の居址とし、橄欖胡同の西口より東口にいたるまでを漢軍三参領に属せる佐領六人の居址とし、蘇州胡同の西口より東馬皮廠の北口にいたるまでを漢軍の四参領に属せる佐領六人の居址とし、船廠胡同の西口より東馬皮廠の南にいたるまでを漢軍の五参領に属せる佐領六人の居址とし、凡漢軍の参領五人佐領三十人軍丁九千人なり。すべて正藍旗の三軍合て凡万三千二百人、崇文門の内の護衛とせり。





○棋盤街 正陽門の内大清門の前にあり。發く皇城大清門の前に位せり。○數文坊 棋盤街の東にあり即東江米巷の西口なり。

宗人府署 闕の東大清門の紅墻に沿ふて斜に北に西を向ふ。敦宗睦族といふ額あり。雍正帝の御書なり。署の後に明代の石碑二。玉牒庫・黄冊庫・銀庫の三あり。凡宗人府署の職とする所は皇族の屬籍を掌るなり。

歳時をもて玉牒を掌り辞めて昭穆の次第を辨じ、爵禄の高下を序して其恵養をひとしくし、教令を布施ふ。其の總官を宗令といふ。左右の宗正各一人あり。皆宗族の中より賢徳の人を撰び此職に居らしむるなり。又理事官副理事官主事等の職ありて宗室及び覚羅の籍を分ち、兼て襲の次第俸禄の高差を考へ婚喪を邮み援る等の事を掌る。凡宗室と称するものは清朝の高祖顕祖宣皇帝の本支をいふ。その伯叔兄弟の支を称して覚羅といふ。宗室の人は金黄帯を束し、覚羅の人は紅帯を束して階級とす。宗室覚羅の封爵を十二等にわかてり。和碩親王世子多羅郡王長子多羅貝勒固山貝子鎮國公輔國公不入八分鎮國公不入八分輔國公鎮國將軍輔國將軍奉國將軍奉恩將軍等これなり。其適子餘子の封爵を此に出して清朝封爵の制を知らしむ

欽定封爵表

	適子 恩封襲封均照若未餘子例考授	餘子 考授	側福晉側室子 考授	別室所居妾媵子 考授
親王	仍襲親王	不入八分公	二等鎮國將軍	三等輔國將軍
世子 親王適子若未蒙封授照餘子例考授不入八分公	恩封不入八分公	一等鎮國將軍	三等鎮國將軍	三等奉國將軍
郡王	仍襲郡王	一等鎮國將軍	三等鎮國將軍	三等奉國將軍
長子 郡王適子若未加恩封授照餘子例考授一等鎮國將軍	恩封一等鎮國將軍	二等鎮國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍
貝勒	降襲貝子	二等鎮國將軍	一等輔國將軍	奉恩將軍
貝子	降襲鎮國公	三等鎮國將軍	二等輔國將軍	奉恩將軍
鎮國公	降襲輔國公	一等輔國將軍	二等輔國將軍	
輔國公	仍襲輔國公	二等輔國將軍	一等奉國將軍	
不入八分鎮國公	降襲不入八分輔國公	三等輔國將軍		
不入八分輔國公	降襲三等鎮國將軍	三等輔國將軍		
一二三等鎮國將軍	降襲一二三等輔國將軍	均封三等輔國將軍		
一二三等輔國將軍	降襲一二三等奉國將軍	均封三等奉國將軍		
一二三等奉國將軍	降襲奉恩將軍	均封奉恩將軍		
奉恩將軍	仍襲奉恩將軍罔替	閑散宗室		

吏部署

藤花廳之詩

手種朱藤已七年
長條緑葉毎相纏
只看葉密清陰覆
忽報花多紫粉懸
風下掉頭嫌一老
雨餘舒眼盼三賢
從今堆字詩還和
寫入當時草木篇

呉寛作

鳴門録



清朝國号を立るのはじめ太祖皇帝の天命年間に八の和碩貝勒を立て國政を勠しむ故よって朝會燕饗の節よし他の宗室とは其礼を異ふし天るもうやくしく定あつらひ給ふ名き徴なりともなつらつきつ於八分とはつなり其後太宗の天聰年間宗室の内に特恩乃封さされ親王の餘子乃封ふと授る者有り其これを不入八分公といふ○九皇女の中宮より出給ふは固倫公主に封せらる妃嬪より出る皇女を和碩公主に封じ親王の御女は郡主に封し郡王の息女は縣主に封せらる貝勒の女は郡君に封し貝子の女は縣君に封じ入八分の鎮國公輔國公の女を郷君に封せらる○親王世子郡王の妻の封号を福晋といふ妻を称して側福晋といふ貝勒の妻より以下鎮國將軍の妻にいたりて夫人と称し奉國將軍の妻を淑人といふ奉恩將軍の妻を恭人といふ○親王には側福晋四人あり世子と郡王には側福晋三人あり貝勒の妻を側室といふ二人あり貝子側室は一人なり。

吏部署

宗人府の南にありて西に向ふ 雍正帝御書の額あり公正持衡といふ後堂に明代の石碑二あり 尚書官滿人漢人各一人左右の侍郎滿人漢人各一人あり即吏部の總官として普く官職の任叙陞降の政を掌て邦を治むるの民をたすく屬る衙司あり文選清吏司考功清吏司稽勲清吏司驗封清吏司各なり文選司は班秩の遷除を掌り并く銓法を平らに及考功司は考察を論勒し功過を旌別する事を掌る稽勲司は名を更籍となし免絶養服制の事を司る驗封司は封爵の襲廕土司の嗣職をつかさどる。

○明の吳寛といへる者手づから植し藤花今穿堂の右にありて其前に三楹の屋を建てこれを藤花廳といふ即吏部長官の居る所なり。

○許公祠 吏部署文選司にあり○許公は文選の主事外考功の員外より名を直といふ字を若愚といへり崇禎甲申明の都李自成がために陥られる許直屈せず詩を賦して自縊る。清朝その忠烈を表して謚を忠節と賜ふ。

○水鏡堂 今南史房といふ明の劉宰長州の劉公が建る所なり。

戸部署 閣の東、吏部署の南にあり。西に向ふ。

「九式經邦」といふ額あり。雍正帝の宸翰也。署の東北に大庫あり。○尚書官滿人漢人各一人、これを戸部の總官とし、天下の田戸口・財穀の政をつかさどり、出納を平準して以て邦儀をひとしくし、又山東清吏司・山西清吏司・河南・河北・江西・江南、各其外江蘇・江寧・蘇州・安徽・浙江・湖廣・陝西・四川・廣東・廣西・雲南・貴州等ことに清吏司の官滿人漢人各数人ありて、其國々の布政使司があづかるところの民数地丁の奏冊をつかさどり、兼ては塩課引鈔・絲布・織造の支銷奏冊をあきらめ正し、銀庫・段疋庫等の出納を節制し、南北の漕糧・京通の倉庾を隷して、禀祿をひとしくし、軍餉を給ふ。凡て錢糧の出納貢税の頒ち悉く滿人漢人並び位して天下國家の大本を職りせさむ。

禮部署 閣の東、戸部署の南にあり。西に向ふ。「寅清贊化」といふ額あり。雍正帝の御書なり。署の左に鑄印局也。

右には韓周歌の祠あり。又視日儀の刻石は寅清堂の前にあり。○尚書官滿人漢人各一人、左右の侍郎各二人、禮部の總官として、凡て吉・嘉・軍・賓・凶の五禮を掌る。屬とする所は儀制清吏司ありて嘉禮・軍禮を掌り、又祠祭清吏司ありて吉禮・凶禮をつかさどる。又主客清吏司は一切て賓禮を掌り、並びて外國の貢使を通じ、外藩朝鮮等の朝覲と接對及び精膳清吏司は五禮・燕饗・御食・其牲牷を掌る。以上に司官禮部に屬する者、又鑄印局は寶印を鑄造ることを得とし。

樂部

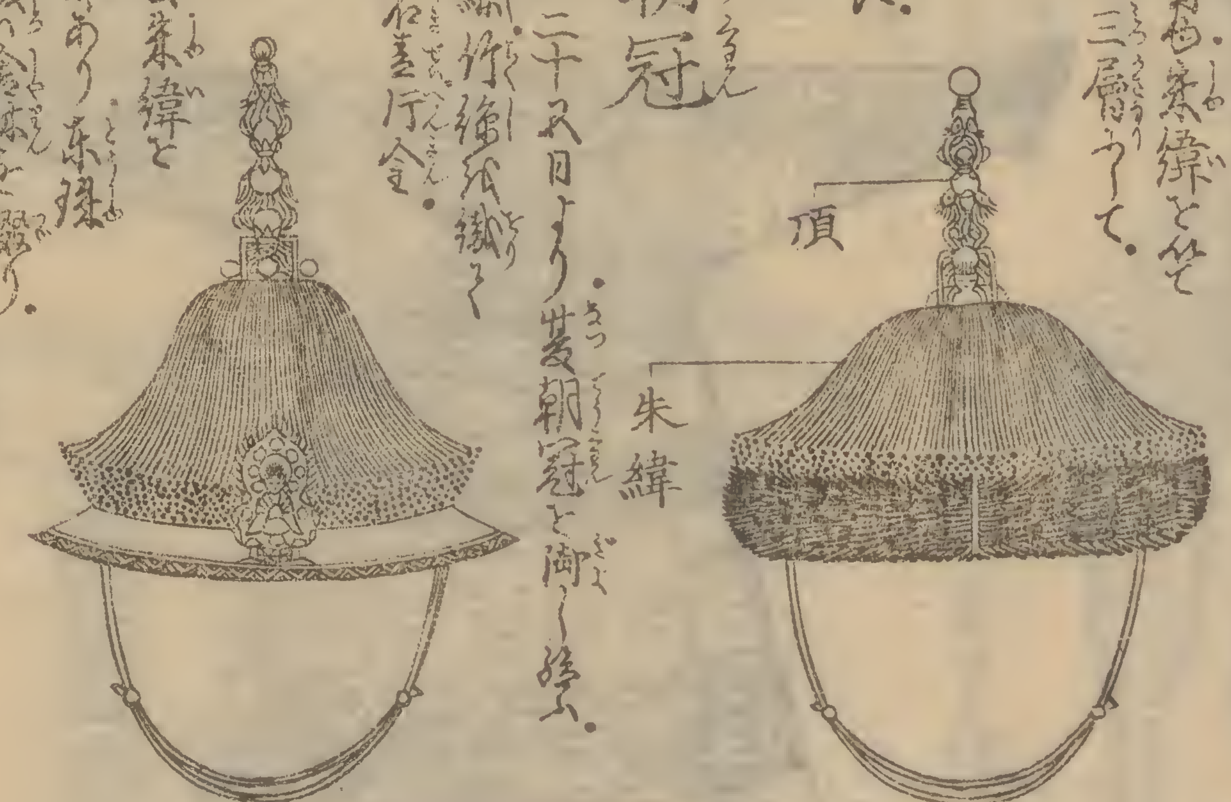
典樂の官ありて五聲・六律を掌り、陰陽の變を和し、凡そ典樂官に充する者は禮部の尚書これを兼掌する。あるいは各部堂官の中より音律通曉したる者を選びて兼つかさどらしむ。又神樂署・和聲署あり。掌儀司の鑾儀衛これに隷して典禮の樂を掌る。

冠服

皇帝皇后及び宗室の冠服は禮部の儀制清吏司これを掌りて、其飾を正して御用に供ふ。

皇帝冬朝冠

九月十五日或は二十五日より皇帝冬朝冠を御し、緑色の薫貂を以てこれを為る。冬より上元には黒狐を用ゆ。朱緯を覆ひ、上は綴り、頂は三層にして、各東珠を貫く。諸飾は金龍にとれてる。



皇帝夏朝冠

三月十五日或は二十五日より夏朝冠を御し給ふ。玉草あるいは藤絲・竹絲織にこれを造る。縁は石青片金・二層紅片金、又は紅紗を以て裏とする。上に朱緯を綴り、前に金佛あり。東珠十五を飾る。後は舍林を綴り、東珠七を飾る。頂の制冬の朝冠と同じ。

皇帝冬朝服

十一月朔より上元の日まで冬朝服を御し給ふ。色は明黄を用ゆ。披領と裳とは紫貂とし、袖の端は薫貂なり。襞積は…を衣の前後に正面龍各一と補し、襞積は行龍六をぬいものにす。其中に十二章とつく。間に五色の雲をなせり。



皇帝夏朝服

三月十五日或ハ二十五日より夏朝服を御し給ふ。色ハ明黄を用ゆ。披領及び袖端ハ石青片金縁なり。紗単袷其時の宜しきにしたがふ。餘ハすべて冬朝服の制のごとし。



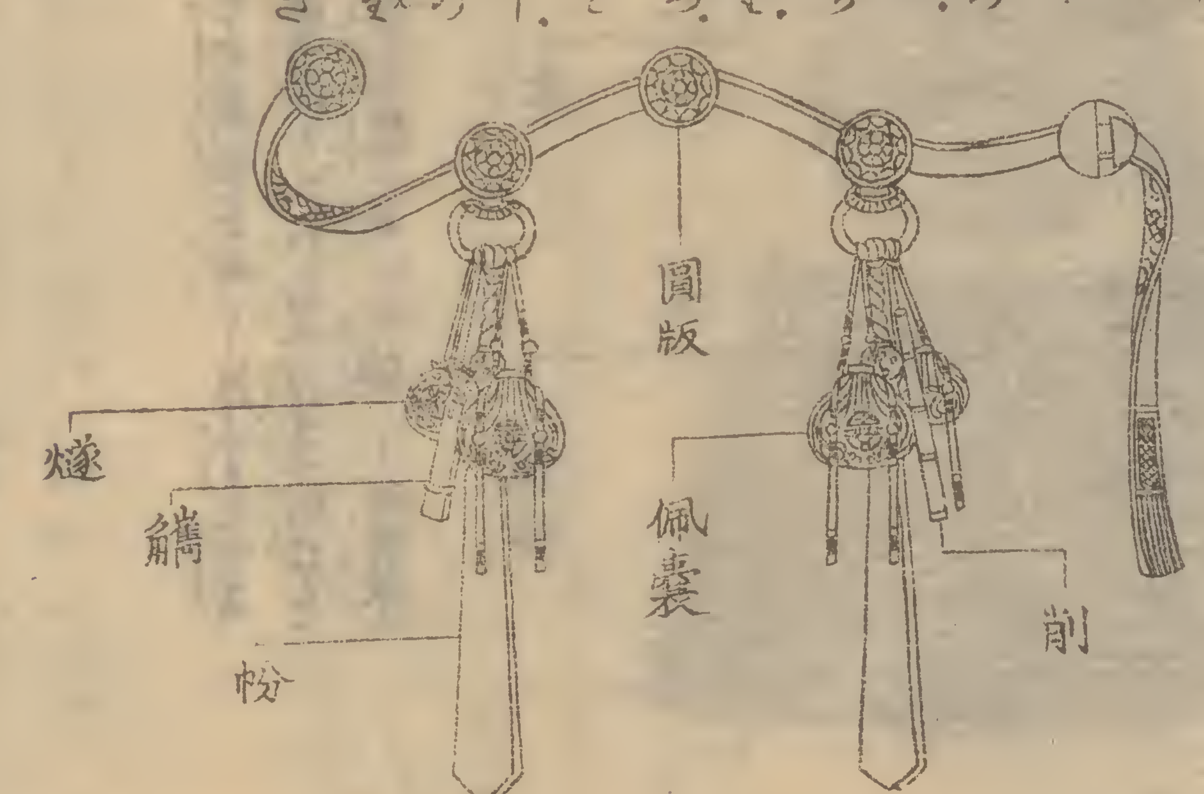
皇帝朝珠

東珠百有八ツをもつて是を造る。大典礼にハ皇帝これを御し給ふ。縧ハ明黄を用ゆ。



皇帝朝帯

色ハ黄にして金の龍文あり。圓版四ツ。紅宝石或ハ藍宝石及び緑松石を飾りとし、皆東珠を銜しめ、ぐるりに珍珠二十を飾る。左右の佩帨ハ淺藍。又ハ白く其形ち下廣くして鋭し。中ハ金を鏤め、ぐるりに宝珠を飾るもの各三十。佩嚢と燧刀の類ハ繍文金飾時の宜しきに随ふ。



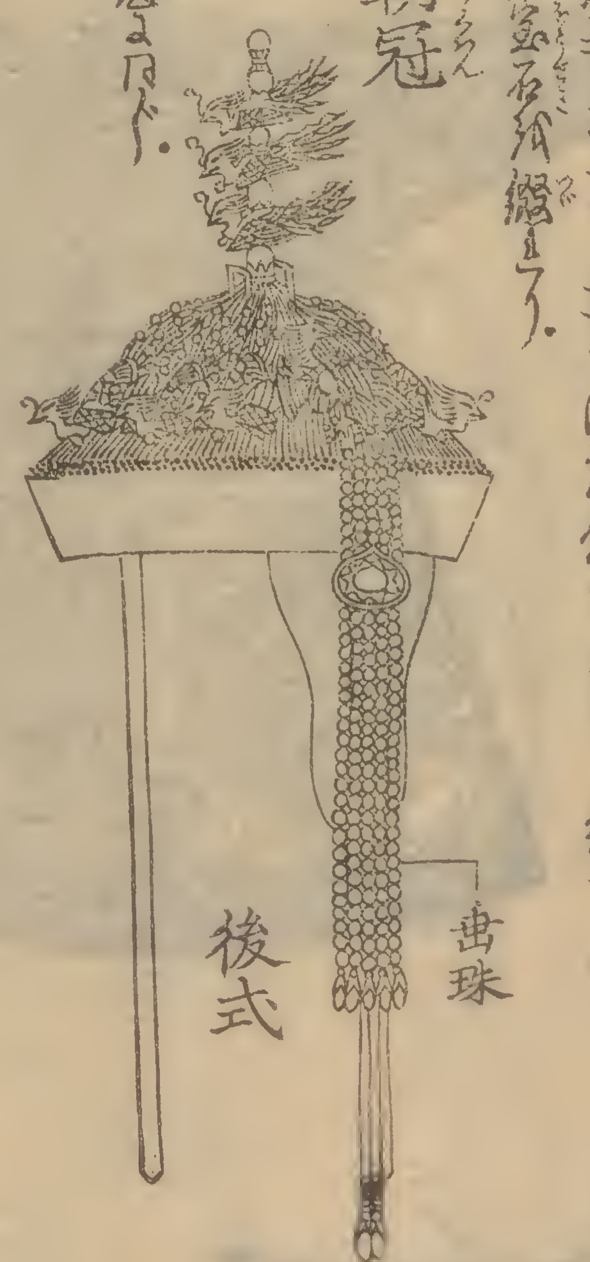
皇后冬朝冠

薫貂を用ひて制す。上ハ朱緯を綴り、頂ハ三層にして東珠各一を貫き、皆金鳳を承く。金鳳ごとに東珠各三、珍珠各十七をもつて飾り、上ハ大東珠一を銜む。朱緯の上ニ金鳳七を周し、各東珠・珍珠・猫睛石を飾る。後ハ金翟一を飾りて、其尾より珠を垂る。凡て珠の数三百有二あり。其下に護領あり、黄なる縧二をさげ、末に宝石を綴れり。



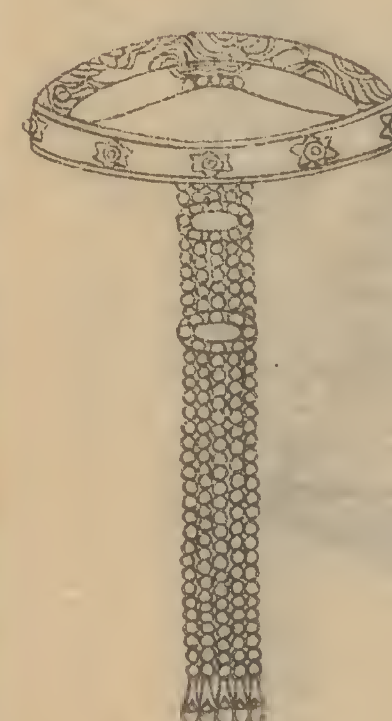
皇后夏朝冠

青絨を用ひて制す。其余ハ冬の朝冠に同じ。



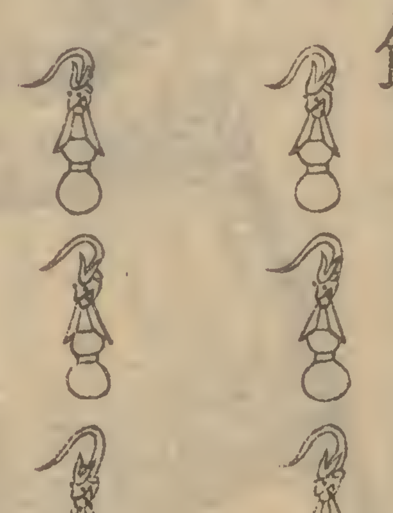
皇后金約

朝冠の下に御し給ふ具なり。金雲十三を鏤め、東珠各一を飾り、金と石と間隔なり。後ハ珠を垂る。五行共に珍珠三百二十四を貫き、末に各珊瑚一つを綴れり。



皇后耳飾

左右各三。皆金龍を具へ、東珠を銜むこと各二つ宛也。



皇后朝褂

色ハ石青片金の縁なり。繍ハ前後に立龍各二、下ハ八層の襞積あり。龍文と萬福萬寿の文と互に相間ふ。領後ハ明黄の縧をさげ、其飾宝珠ハ時の宜しきに随ひ用ゆ。



皇后冬朝服之前式



色ハ明黄を用ひ。披領と袖ハ倶に石青片金貂皮の縁を加ふ。前後に金龍九を繍し。其余の雲を其間に更ゆ中に襞積なし。下ハ八宝平水の文あり。披領ハ行龍二。袖の端ハ正龍をのおの一。袖と衣と相接る所に石青行龍二。領後ハ明黄の絛を垂。珠寶を用て飾とん。

皇后夏朝服之後式



色ハ明黄。縁ハ片金なり。襞積あり。緞紗単袷をのおの其時によるべし。餘ハ冬の朝袍の制の如し。

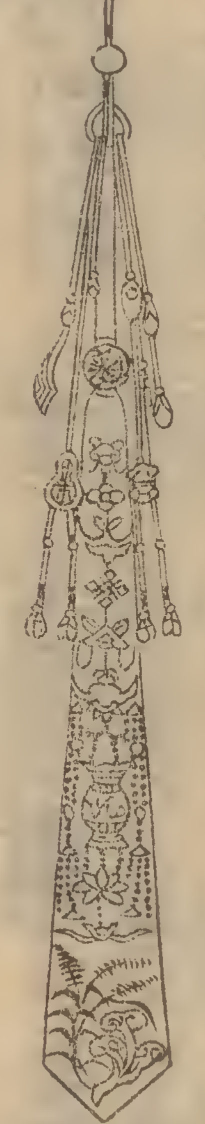
皇后朝珠

皇后朝服の時ハ朝珠三を御したまふ。一ハ東珠二ハ珊瑚なり。吉服の時ハ朝珠一を御し給ふ。珍珠寶石ハ御こゝろに任せ遊ばして交る。式と制ハ皇帝朝珠と同じ。



皇后綵帨

朝服の時御し給ふ。色ハ緑にして。五穀豊登の図をぬいいれたり。



皇后朝裙

冬の朝裙ハ片金に海龍縁。上ハ金寿字の紅緞を用ひ下ハ石青行龍の粧緞を用ゆ。皆正幅にて襞積あり。夏の朝裙ハ片金に縁を緞にし。又ハ紗にす。餘ハ冬の朝裙に同じ。



樂器

○朝會中和韶樂 ○麾一○鎛鐘十二○編鐘十六○特磬十二○編磬十六○琴四○瑟二○排簫二
○簫四○笛八○篪二○笙八○塤二○鼓一○搏拊二○柷一○敔一

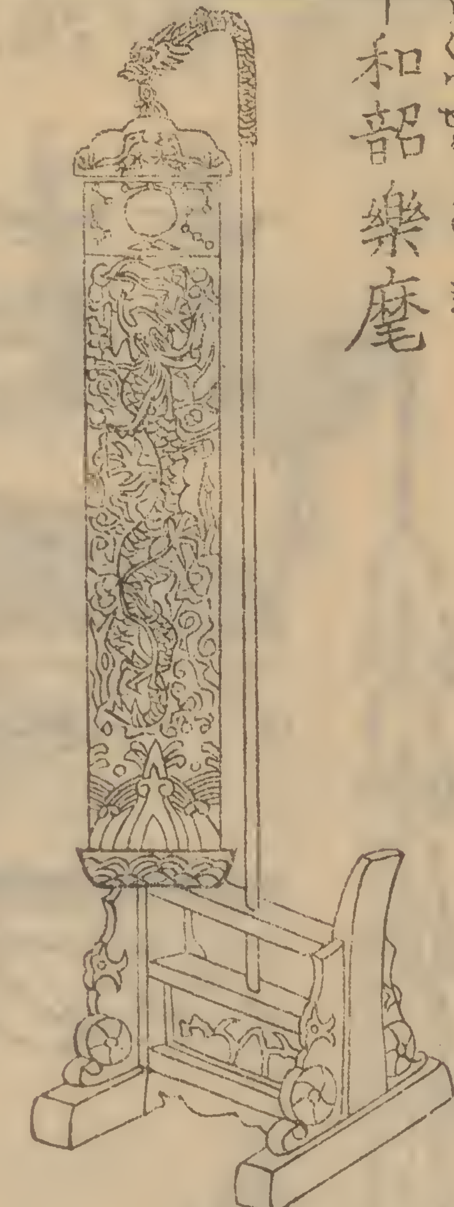
○朝會丹陛大樂 ○戯竹二○方響二十○雲鑼二○管四○簫二
○笛四○笙四○大鼓二○杖鼓一○拍版二

○古廟奉先殿朝日壇太歳壇等祭祀樂 ○麾一○太簇鎛鐘一○編鐘十六○太簇特磬一○
編磬十六○琴十○瑟四○排簫二○簫十○笛十
○篪六○笙十○塤二○鼓一○搏拊二○柷一
○敔一○節四○干六十四○羽六十四○籥六十四

○凱旋凱歌樂 ○方響一○雲鑼四○銅鼓一○正鑼二○大和鑼二○星一
○錫二○管十二○簫四○笛四○笙四○杖鼓二○拍板二

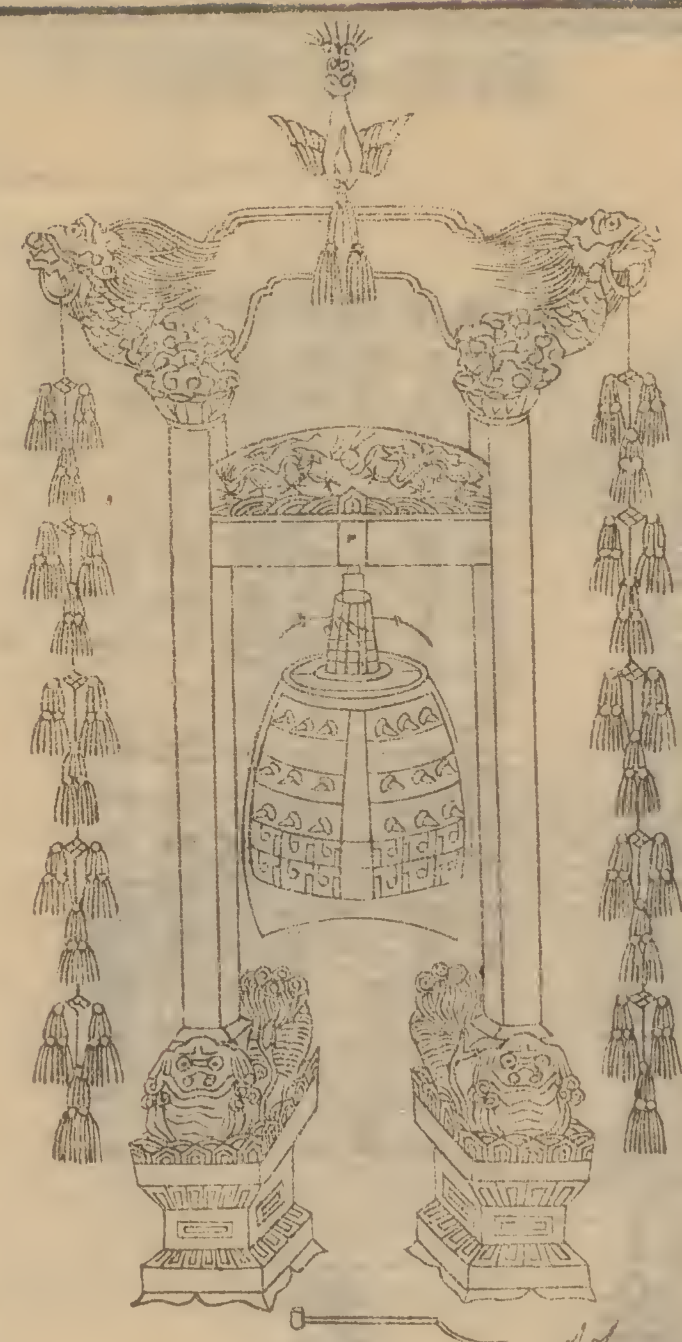
鹵簿鼓吹大樂　鹵簿導迎樂　巡幸鐃吹樂　祭祀中和韶樂　圜丘祭祀樂　祈穀壇祭祀樂　天神壇祭祀樂　方澤壇祭祀樂　地祇壇祭祀樂　夕月壇祭祀樂　先農壇祭祀樂　先蠶壇祭祀樂　采桑歌樂　燕饗中和韶樂　燕饗丹陛大樂　燕饗清樂　燕饗慶隆舞樂　燕饗笳吹樂　燕饗番部合樂　燕饗朝鮮國俳樂　燕饗瓦爾喀部樂　燕饗回部樂　燕饗用安南國樂　燕饗用緬甸國樂等以上の樂器ども悉く是を記すといへども事繁きをもつて此よりしも清朝禮器圖式に載るし・朝儀を俟て觀るべきなり此に載る者は朝會中和韶樂・丹陛大樂・大廟祭祀樂・凱歌樂のことを擧し圖入。

中和韶樂麾



中和韶樂鎛鐘

御製鎛鐘銘
自古在昔功成作樂辨物消吉鑄此鐘鎛　皇祖審
音中和大備詎独是遺或存深意績底西旅瑞出西
江考制象器協和万邦一虡特縣用起律首編鐘繼
奏簫韶成九寬横栾舞必考必精慎遵　前憲敢或
損增宣陽導陰五均出度万事本根百王矩矱繄余
小子蒙業　重熙頼　天眷定惟曰際時範器識年
悉新已盛銘無溢辞懋乾懋敬

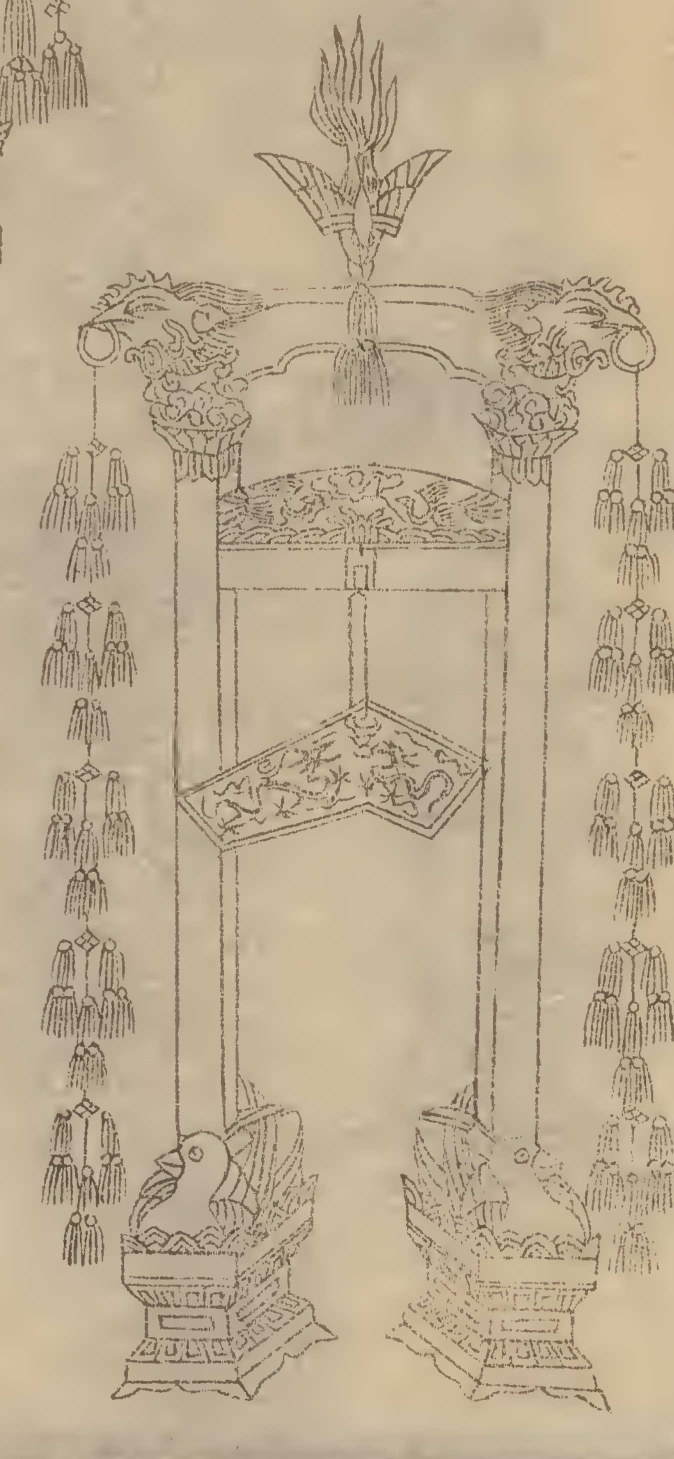


中和韶樂編鐘



中和韶樂特磬

御製特磬銘
子輿有言金邑玉振一虡無双九成遞進今
酌古既製鎛鐘磬不可闕條理始終和闐我疆
玉山是産依度採取以命磬叔審音協律咸備
中和泗濱同拊其質則遜圖經所傳浮磬涇水
誰誠見之鳴球尤此法天則地股二鼓三依我
繹如猷舞鸞鬆考樂惟時乾禧相德翼々繩承
撫是萬国益凛保泰敢或伐功敬識歲吉辛巳
乾隆



中和韶樂編磬

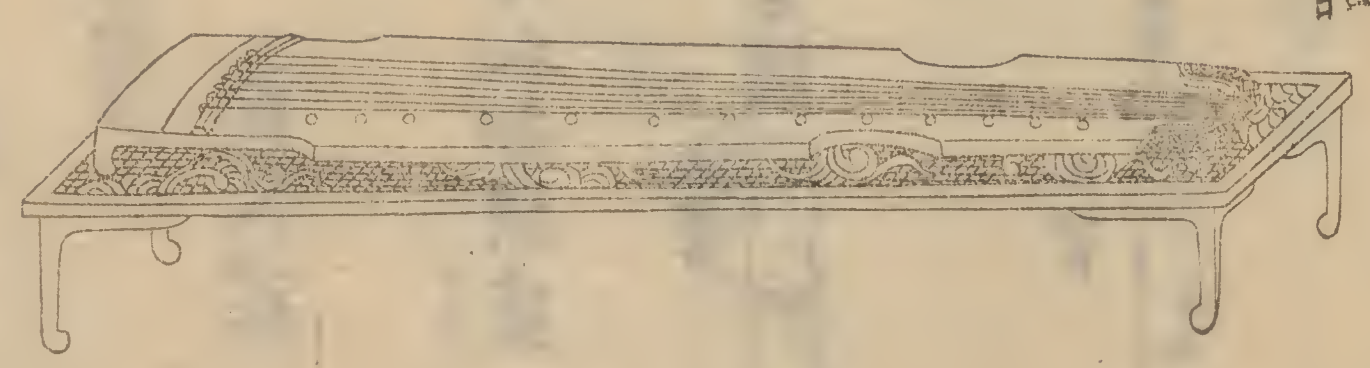


倍夷則 倍無射 黄鐘 太蔟 姑洗 蕤賓 夷則 無射 應鐘 南呂 林鐘 仲呂 夾鐘 太呂 倍應鐘 倍南呂

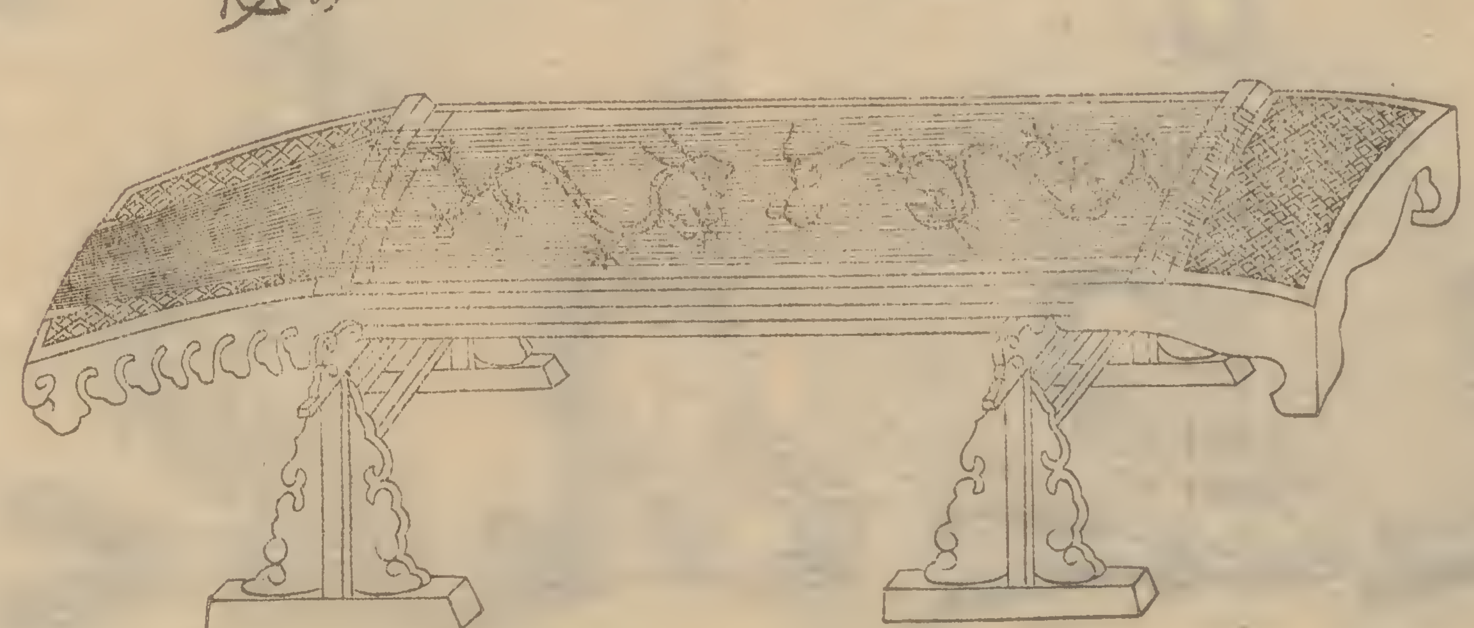
中和韶樂排簫



中和韶樂琴

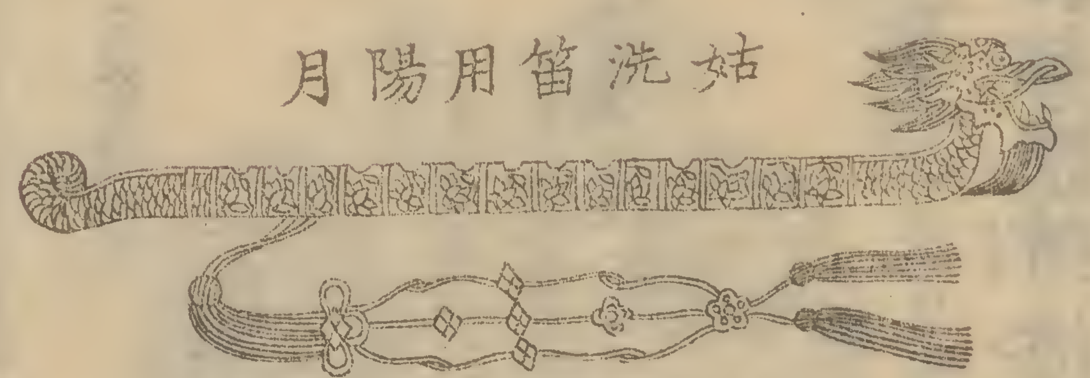


中和韶樂瑟

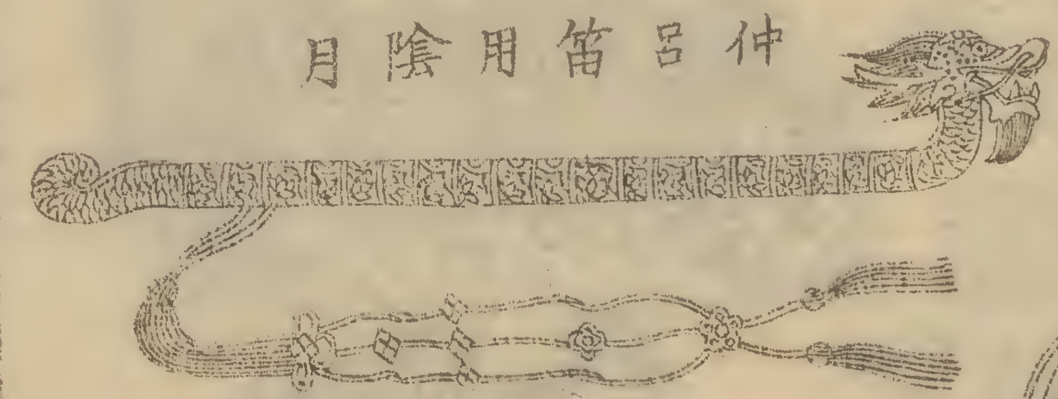


中和韶樂笛

姑洗笛用陽月



仲呂笛用陰月

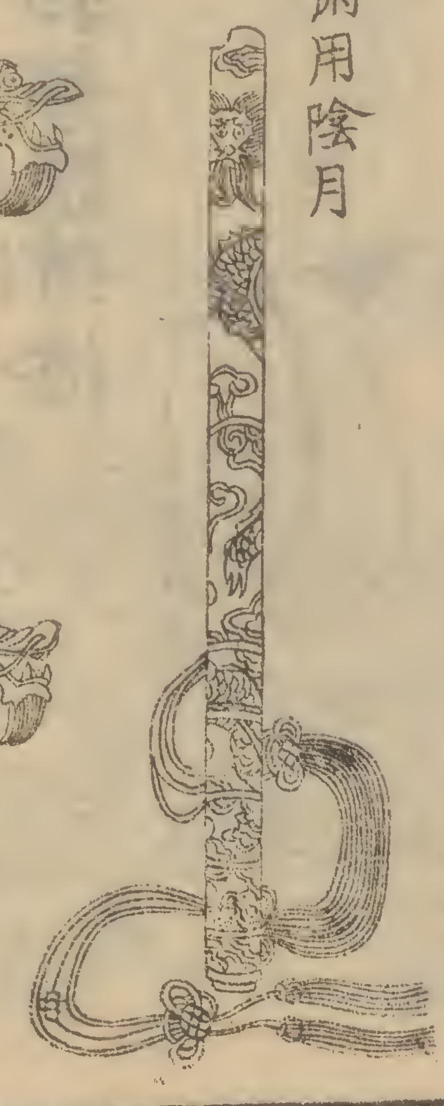


中和韶樂簫

姑洗簫用陽月



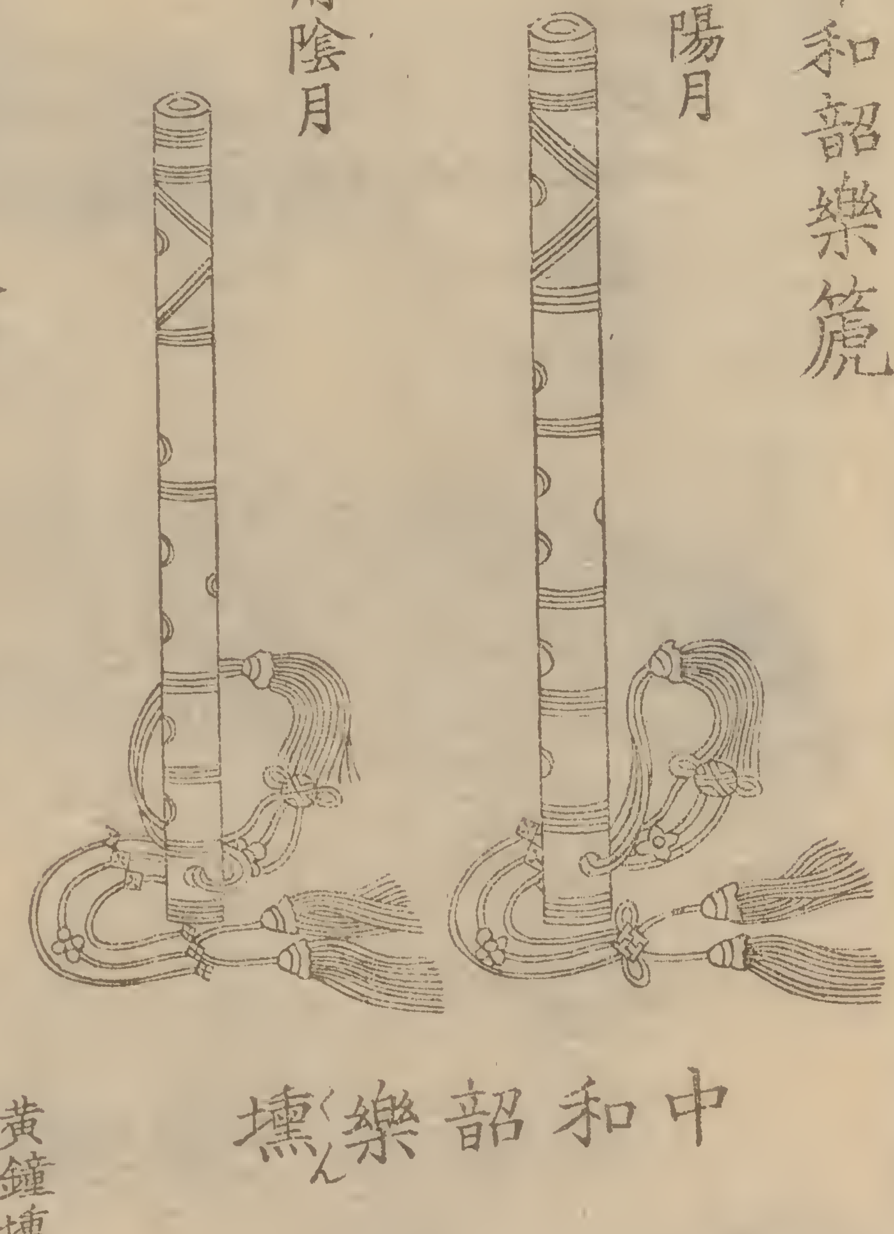
仲呂簫用陰月



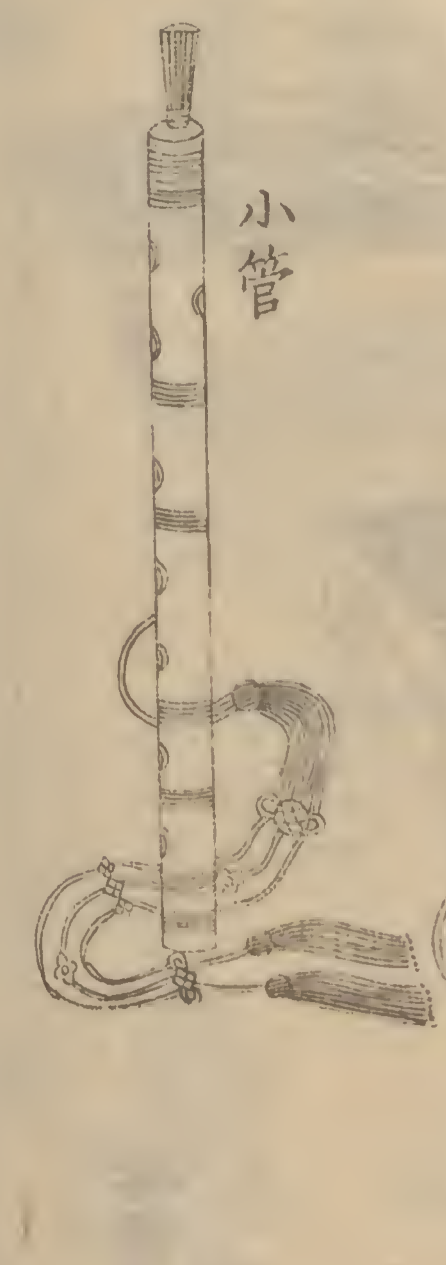
中和韶樂篪

姑洗篪用陽月

仲呂篪用陰月



中和韶樂笙

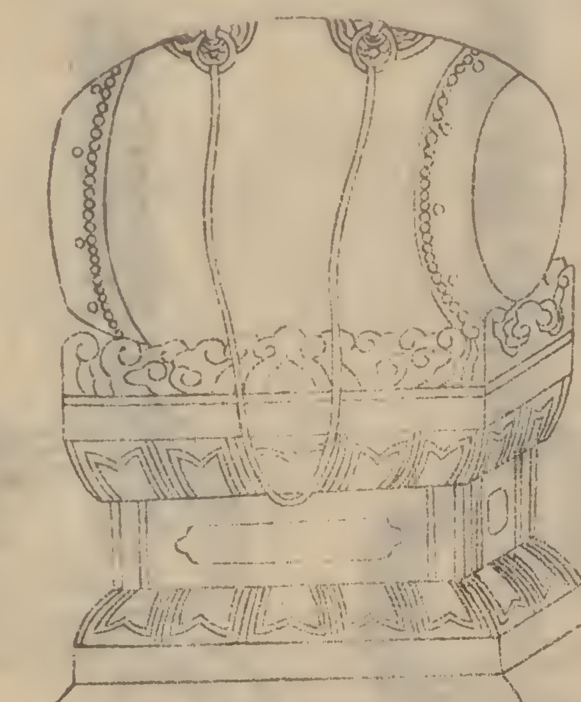


中和韶樂壎

黃鐘壎用陽月大呂壎用陰月



中和韶樂搏拊



中和韶樂鼓



中和韶樂柷

原本脱圖可追考

中和韶樂敔

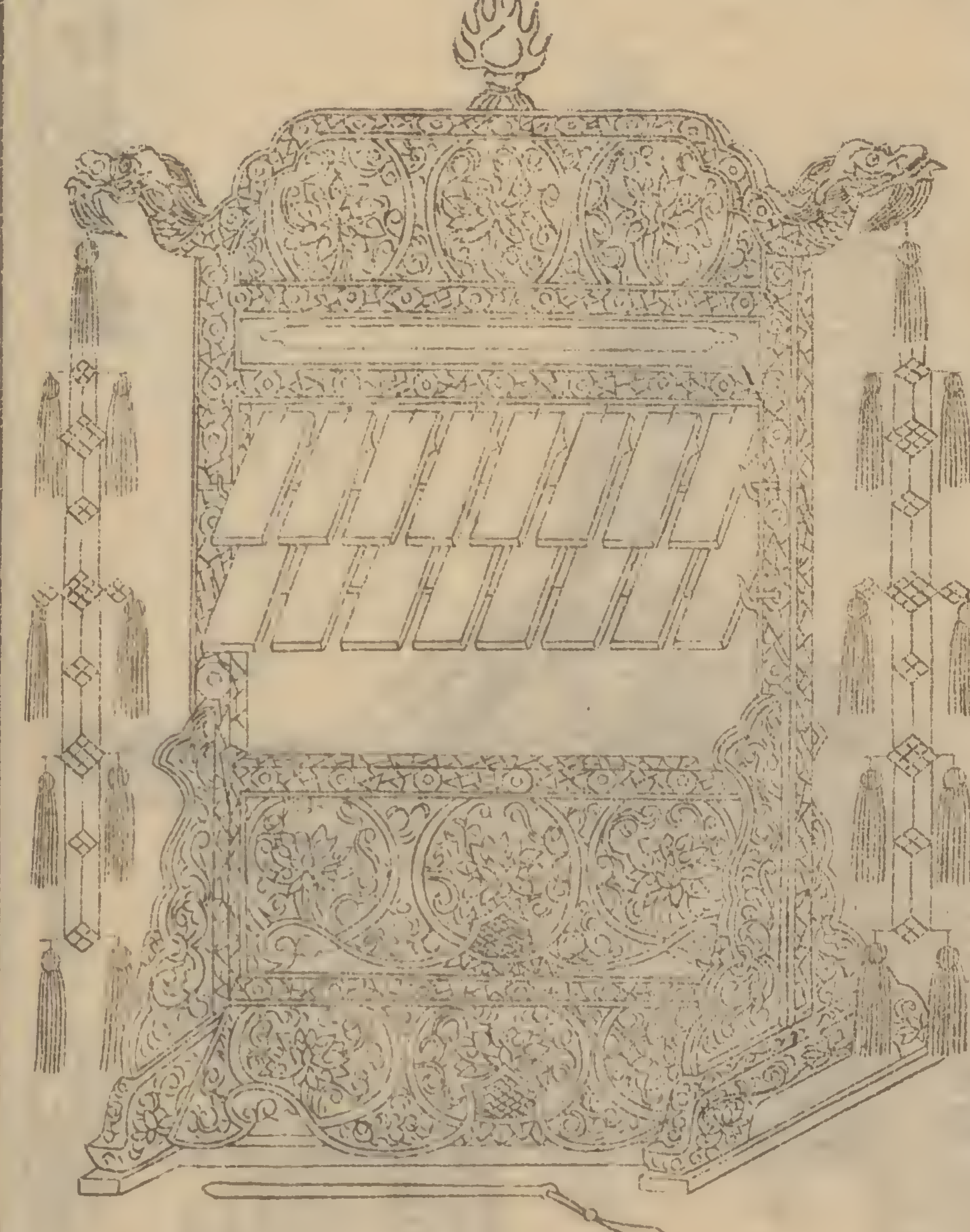


丹陛大樂戲竹

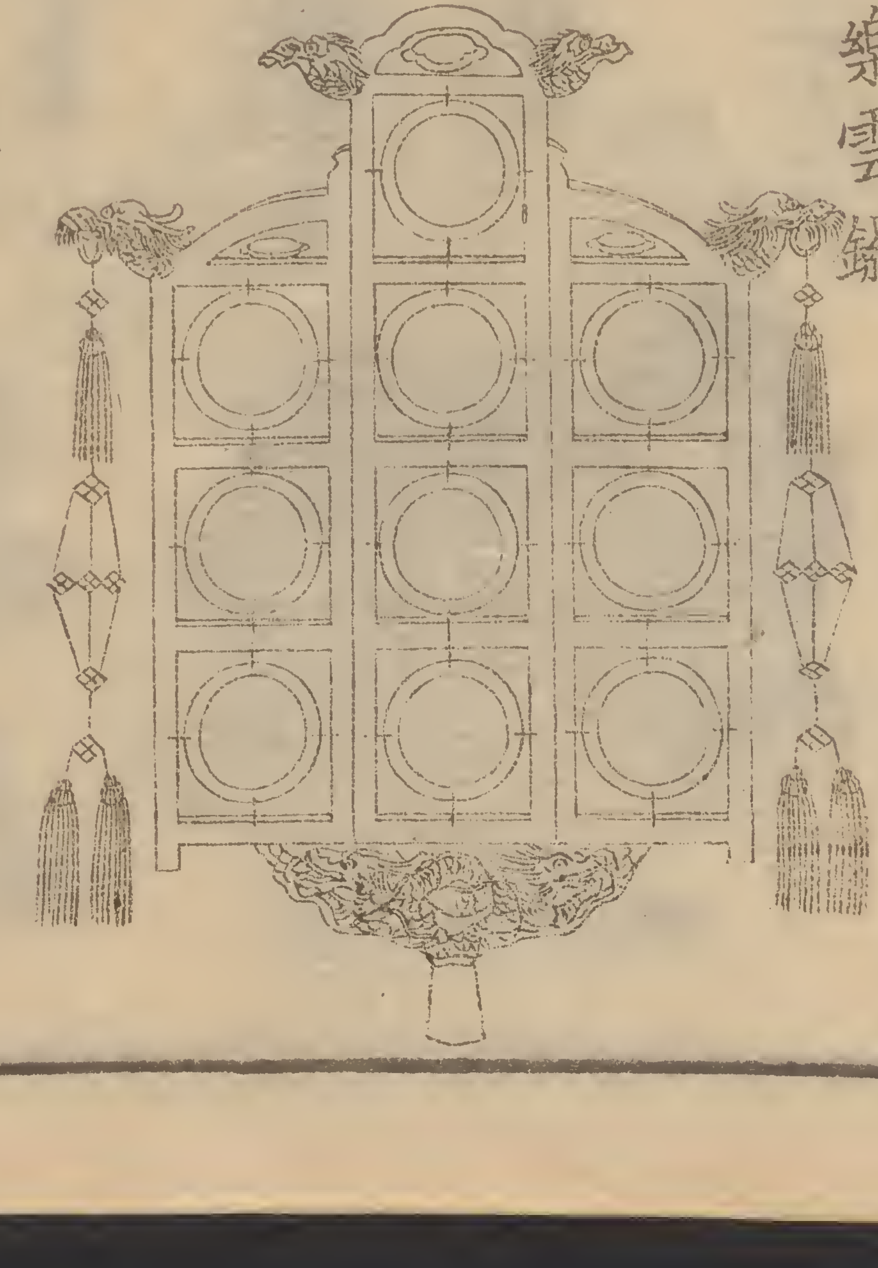
二人執之立丹陛上合則作樂離則止楽



丹陛大樂方響



丹陛大樂雲鑼



丹陛大樂大鼓



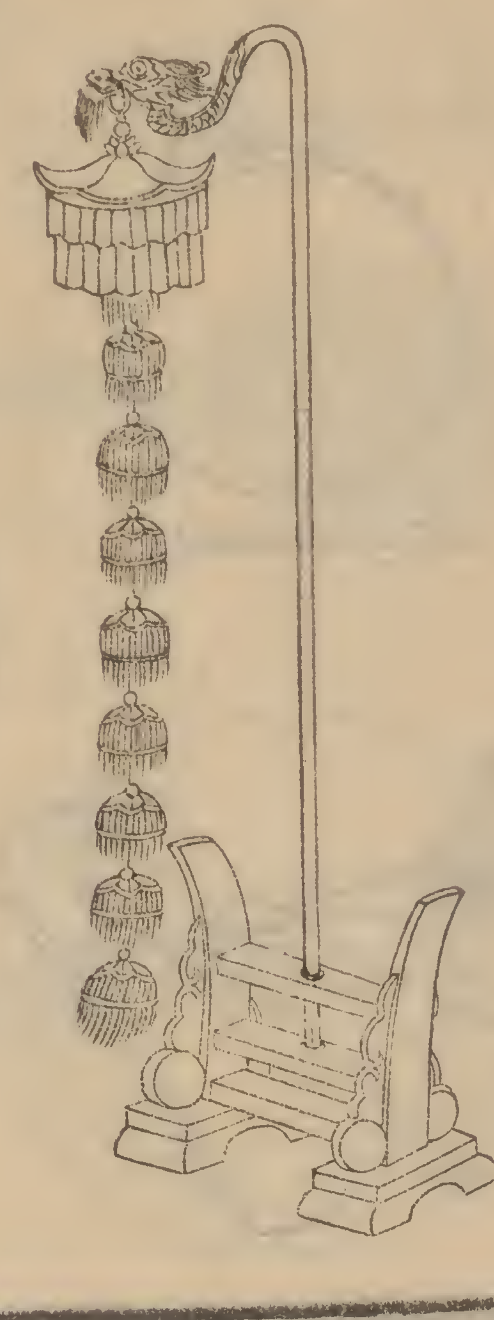
丹陛大樂杖鼓



丹陛大樂拍板

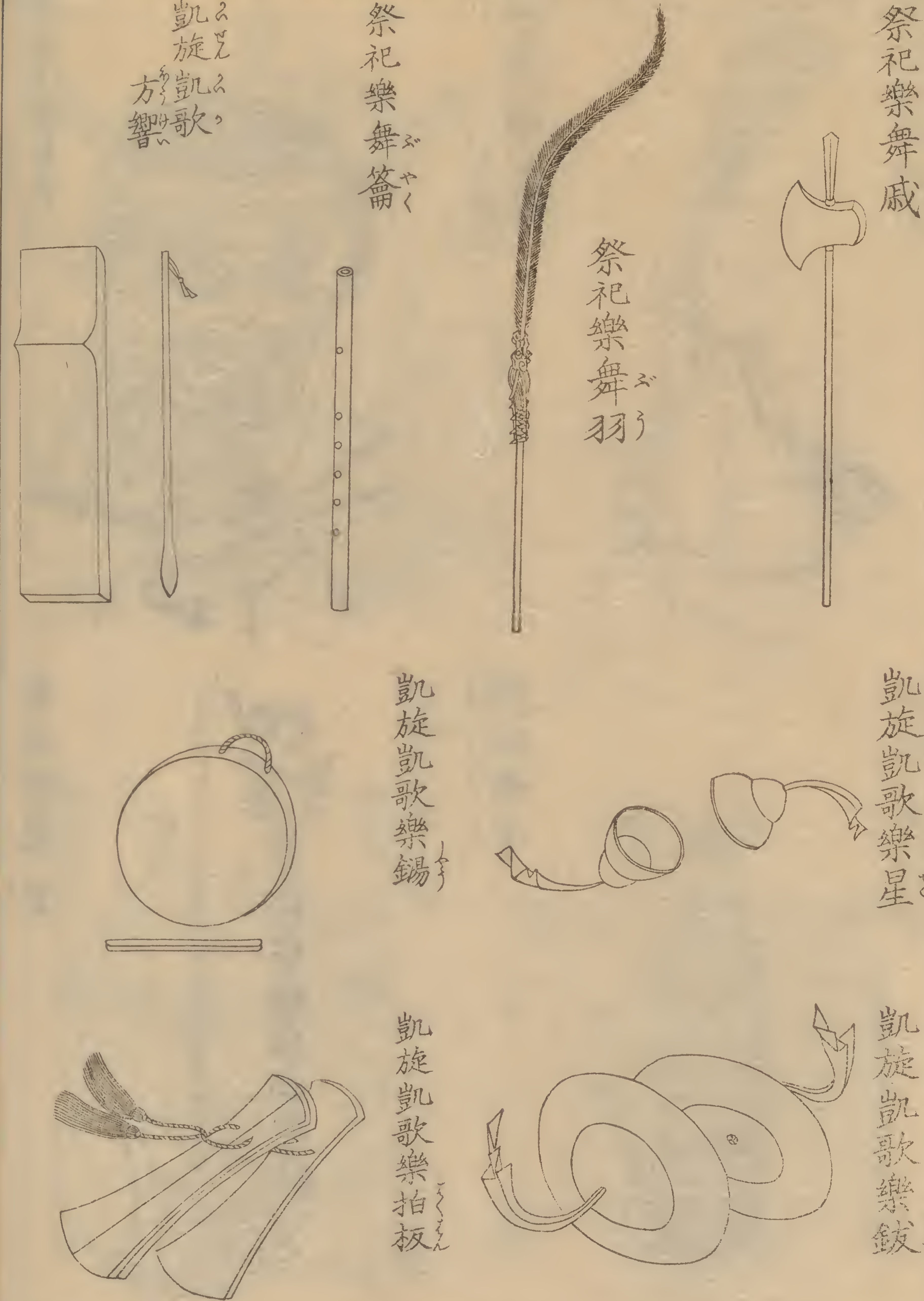


祭祀樂舞節

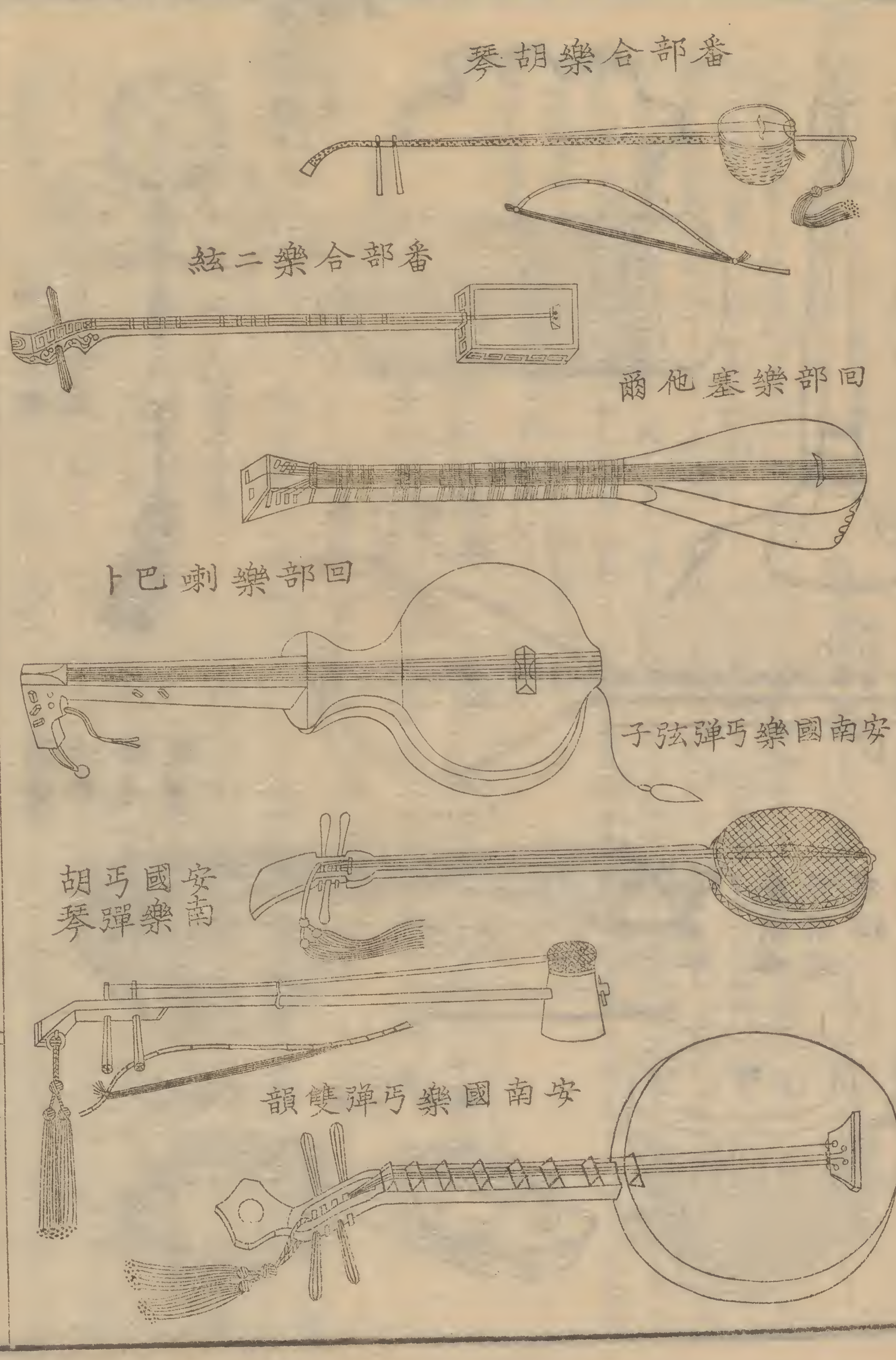


祭祀樂干





以下ハ蠻國回部を燕饗せる樂器の内ニ形の異なるを附録ス

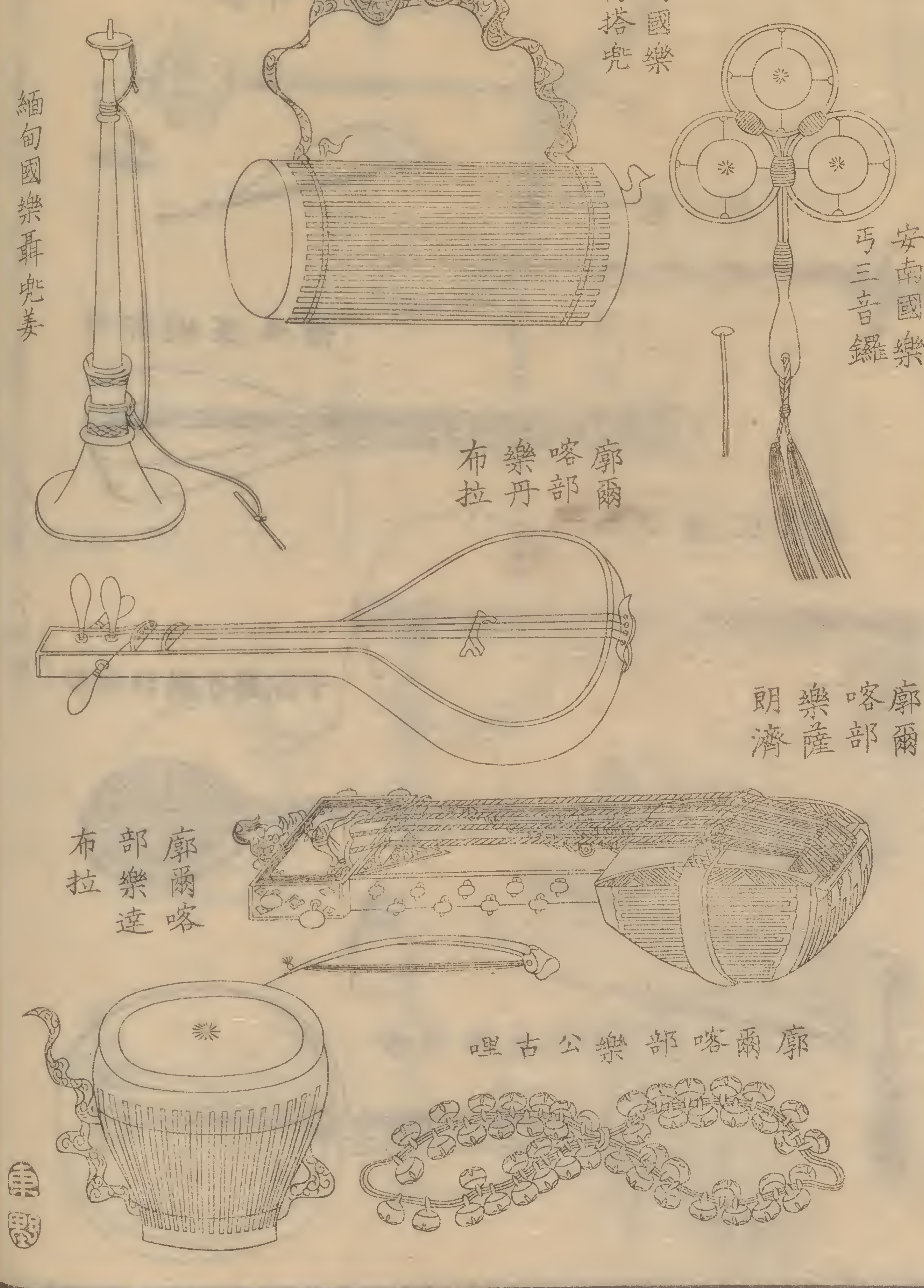


禮部署の儀制司に優鉢羅といふ樹ありしが今は枯たり。此木毎歳四月八日に必ず花を開きて實を結ぶ。その實の形ち蓮蓬のごとくにして、その皮をとれば中に金色の佛一軀ありしといふ。

兵部署 闕の東、宗人府の綏東は生門の直衛にありてみなみにむかふ。整肅中樞といふ額あり。雍正帝の御書なり。二堂の照壁には周禮大司馬の法則を刊。明代の舊物なり。○尚書官滿一人漢一人。左右の侍郎滿人漢人各一人。兵部署の總官として中外武職の銓選軍實の簡數を掌て邦政を助く。屬する所武選淸吏司あり。專ら武職の除選封廕及び征伐の訓誥を司り其政令を頒つ。又車駕淸吏司あり。驛傳の部符及び馬の政を掌る。職方淸吏司は天下の輿圖を掌。其險要を著く知り、又功を叙し過を正し賞罰黜陟を據。武庫淸吏司は兵籍戒器御侮武料及び戍軍を編發するを掌る。以上の四司皆兵部に屬せるなり。○揚繼盛祠 兵部署武選司にあり。椒山先生の祠と號せり。

祖德靈長日孤臣報國年九原終不歿兩疏到今傳異
代還祠廟明神儼豆籩關西二夫子家学仰前賢
王士禎 鳴門録

工部署 闕の東、兵部署の南にあり。西にむかふ。堂の額に敬飾百工といふ。雍正帝の御書なり。○尚書官滿人漢人各一人。左右の侍郎滿漢各二人。工部の總官として天下の工虞器用を掌り物を辨し材を庀し以て邦事を飾るなり。屬する所營繕淸吏司・虞衡司・都水司・屯田司の四司あり。其營繕淸吏司は壇廟宮府城垣倉庫廨宇營房の繕治造作を掌る。其外百工を集むる事は料估所の司是を掌る。陶治の事は琉璃窯の監督これを主る。選事の事は皇木廠の監督これを掌る。皆營繕司の隸に屬す。虞衡淸吏司は山澤の採捕及び器用を陶治し度量權衡を造り軍器を修造して錢を鑄ることを

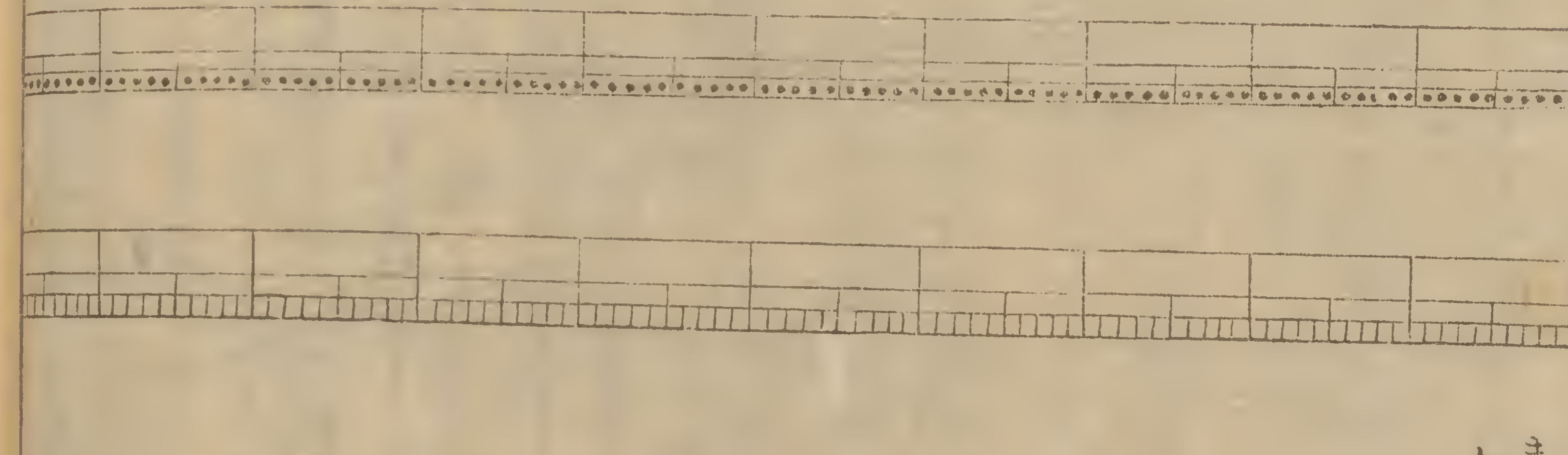


度（ど）

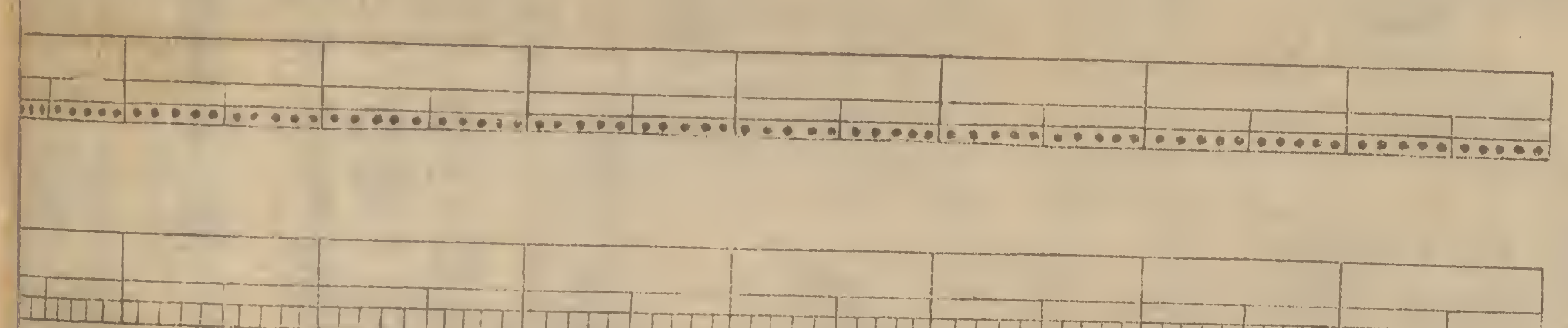
ものさし

古尺（こせき）

度量の制は法と律に受。秦の廣さを以て之れを度とす。故に尺は秦の横を以て一分とし。横秦十を以一寸とし。其十寸は即一尺なり。今は秦の縦の廣を一分とし。縦秦十を一寸とし。今尺の八寸一分を古尺の一尺に當。今の尺の七寸二分九釐を古尺の九寸に當。即黄鐘の長なり。工部に是を制造し。其省の布政使司に頒ち。其屬する州縣に遍頒し。皆準じ用ふて制造し。普天の下に布施せり。



今尺（こんせき）



権（けん）

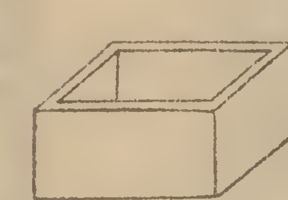
分銅なり。其形圓く。黄銅をもて是を鋳。其重さ一両なるもの。體積一百四十七分八十八釐八百二十四毫。中径七分四釐四毫八絲四忽九微八纖。面径六分六釐八毫七絲七忽九微二纖。高三分八釐八毫八忽二微二纖。



量（りやう）

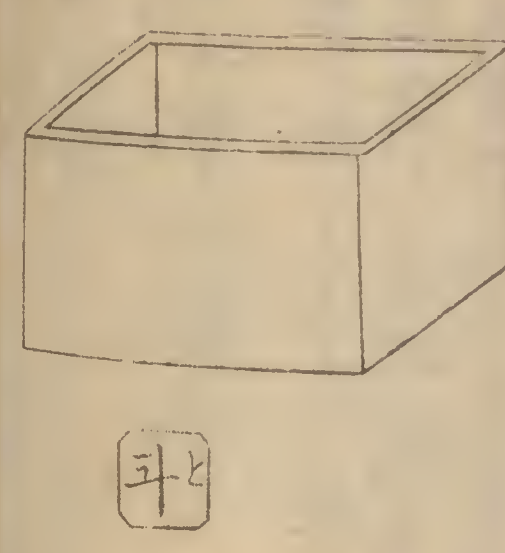
即ますなり。度寸法をもて容積を定む。

○一升の方積三十一寸六百分。面底方四寸。深一寸九分七釐九毫なり。



升

○一斗の方積三百一十六寸。面底方八寸。深四寸九分三釐七毫九絲。



斗

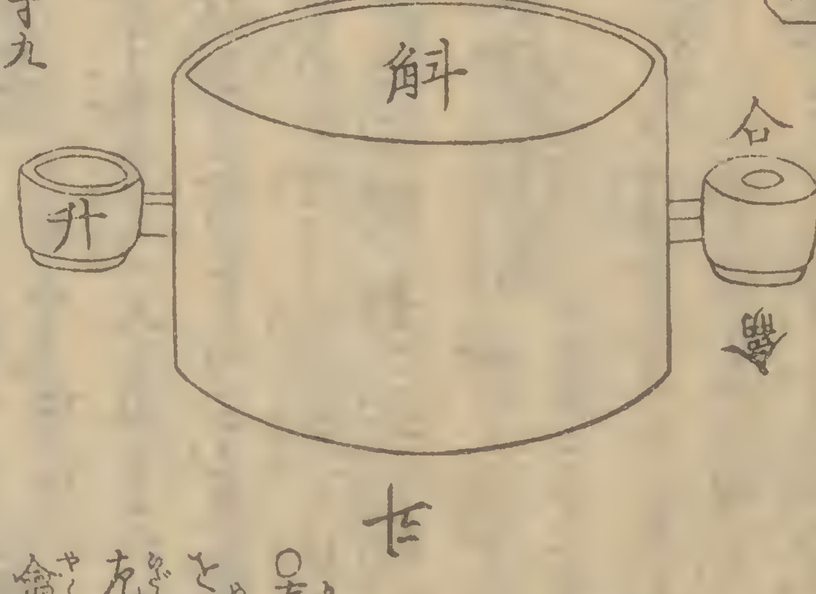
嘉量圓制（かりやうゑんせい）

斛の積八百六十寸九百三十四分四百二十釐。容十斗。深七寸二分九釐。冪一百十八寸九分八十釐。径一尺二寸二分六釐二毫。

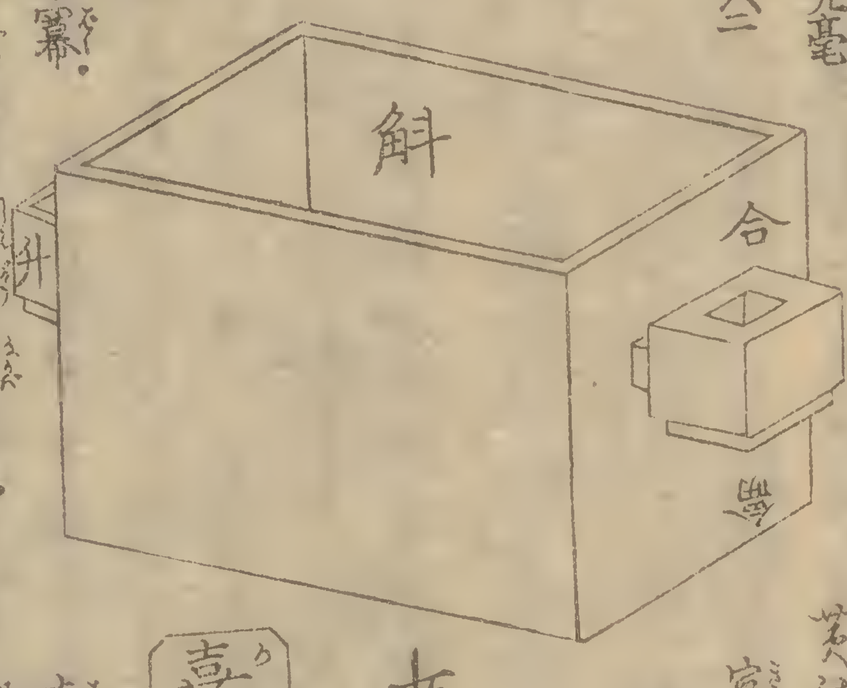
○斗の積八十六寸九十三分四百四十二釐。深七分二釐九毫。冪一百十八寸九分八十釐。径一尺二寸二分六釐二毫。

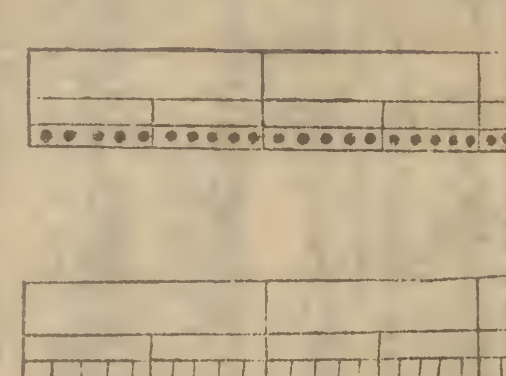
○升の積八寸六百有九分三百四十四釐二百毫。深一寸八分二釐二毫四絲。冪四百七十二分三十九釐二十毫。径二寸四分四釐二毫。

○合の積八百六十分九百三十四釐四百二十毫。深一寸九分有九釐六毫。冪七十分八十三釐九十八毫。径一寸。○龠の積深は合の半なり。冪と径とは合と同じ。



○嘉量の制。銅を範し。金を塗。上を斛とし。下を斗とし。左の耳を升とし。右の耳を合。龠とし。其重さ二鈞。其声黄鐘の宮に當る。

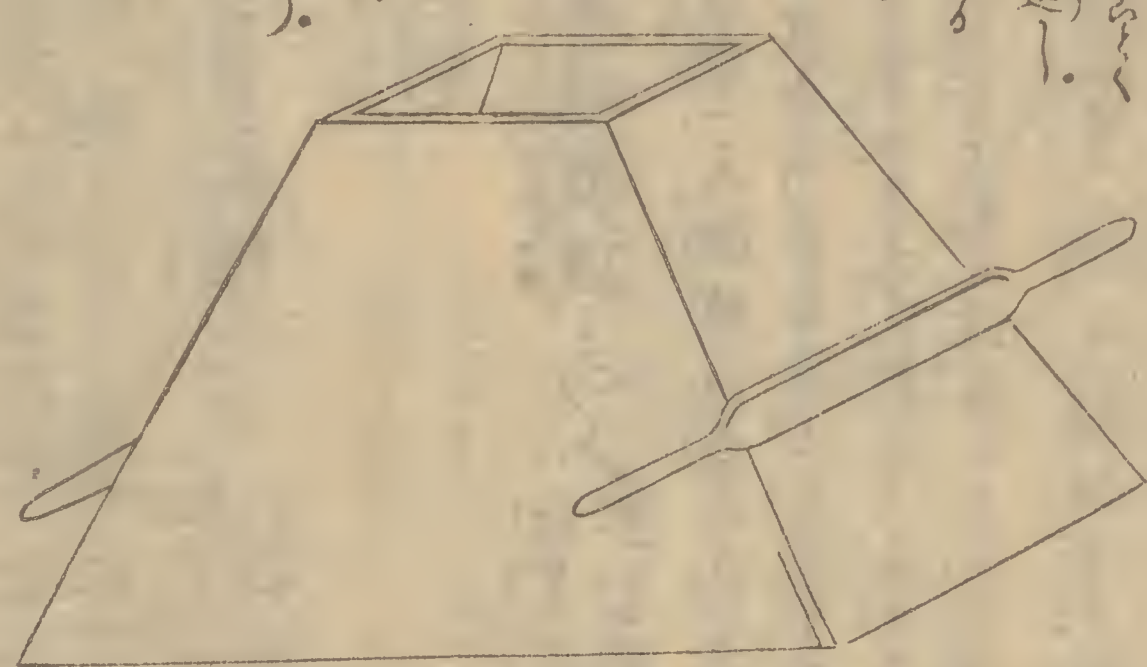




嘉量方制（かりやうはうせい）

寸法をもて此に器し。工部圓方の嘉量各一を制造し。これを殿廷に陳設。並に垂憲し。

○一斛の方積一千六百八十寸。口の方六寸六分。底の方一尺六寸七分。工部これを造る。鐵をもて鑄て。選漕の總督と直省布政司に頒ち。布政使司に木を以て式のごとく制造し。屬する所の州縣に頒ち。倉量の出納となり。



斛

二斛を石として。石の方積三千二百六十寸。

掌る都水清吏司ハ都て水利のこと河防橋梁舩政を掌る其下司ニ街道廳ありて道路を治め溝洫を理を屯田清吏司ハ陵寝を修繕し薪炭のことを掌る○節愼庫あり即郎中員外郎などの職ありて金銀出納を掌る又製造庫あり即中司匠の職ありて金革を以治むることを掌る○節愼庫ハ工部署の东にあり此ニ金の元宝銀の元宝各一あり續庫の物とん撒して營るに其辺尚人より見るしよに永樂九年の字を識す○工部長官等を視る所を又叢花廳と云ふ叢樹竹ニ蔽して枝幹鈎蟠実に廳と彷彿す何人の植しものを知らず○吏部戸部禮部刑部兵部工部以上六部と称し天下の政令皆此部より定む

○鴻臚寺署〈闕の东工部署の南ニあり西ニむかふ〉雍正帝御書の額あり肅贊朝儀と云ふ〈卿官滿人漢人各二人少卿官滿漢各一人ありて總官より凡朝會祭祀燕饗御食等の儀を掌る其屬とろ所鳴贊官ありて各引礼唱贊を司る又序班官あり百官の班位序接を掌〉

○欽天監署〈闕の东鴻臚寺署の南ニあり西ニ向ふ〉雍正帝御書の額あり欽時敬授と云ふ〈總官監正員あつし兼官監副の滿漢〉臣一人と監正し西洋人一人をかねてこれを換く監副官あり滿漢西洋各一人測候推歩の法をつかさどり天象を占ひ民ニ時をさづく其屬とろ所時憲科あり春夏中秋冬の五官博士天文生等の官と使へ天行の度を推し歲の差を證し氣節と協しくとろことを掌る又天文科あり掌ることろハ天象の變るを觀雲物を書し以て歲占ニ照しむ漏刻科ハ壺漏を調へ中星を測り陰陽を分んで以て營建を卜ことを掌る

○太醫院署〈闕の东欽天監署の南ニあり西ニ向ふ〉堂中ニ康熙帝の院臣黄運ニ賜ひたる御製衣の詩を懸たり院使一人左右の院判各一人これを太醫院の總官とし醫の政令をつかさどり其屬ひをを率ひて以て醫の事ニ供ふ御醫十五人吏目三十人醫士四十人醫員三十人皆九科の法をわかて療と藥とのことを掌る其余醫生數十人等制藥を掌る又御醫吏目醫官の中より才能の者を選み教習として醫を習ふ者ニ治術を授しむ先醫廟〈堂のひがしにありてミなミにむかふ〉

康熙帝の御書永濟群生と云額あり三皇三聖の像を供せり西廡〈句芒風后を列し王冰より以下各神位を祀す〉藥王廟〈先醫廟の外ニあり北ニ向ふ〉廟中神像の前に古銅人一あり中空にして水を注ぎのこさせバ関竅ニ通し古き蒼碧色を顕し人の目を射る此銅像海中より湧出づるものなりといひ傳ふ實ハ宋の天聖年間ニ作りたる所なり其後元の至元の間是を修造し又明の英宗帝かさねて修む。

○怡賢親王祠〈正陽門の内玉河橋の西墻ニあり雍正八年勅してこれを立らる〉

○庶常館〈南玉河橋の西ニあり〉乾隆帝御書の芸館培英の額あり後ニ樓あり翰臣ニ揚ふ不の文書を修ふ。

○四夷館〈东江米巷中玉河橋の西ニあり〉○今东城庶常館の东ニ朝鮮人の居ることあり即四夷館の別宮なり。

○玉河橋〈东城根ニあるを南玉河橋といふ东長安街ニあるを北玉河橋といふ东江米巷ニあるを中玉河橋といへり〉其水皇城の内南菜園より流れ出て南の方皇城を出正陽橋の城の下にて帰る玉河橋の东西両岸ニハ多く揚柳を植へ翠華水面ニ映して風光畫くが如し。

○詹事府署〈玉河橋の东岸ニあり西ニ向ふ〉康熙帝御書の額あり徳業仁義と云ふ〈詹事官滿人漢人各一人少詹事官滿漢各一人これを總官とし經史文章のことを掌る翰林院のごとし〉孔子廟〈署の後の堂の側ニあり〉乾隆帝御書の存誠の二字を刻む碑あり〈廟の前に古松二株あり數百年の古樹なり又詹事府署の立薄廳の址ニ一の扁石あり上ニ二枝間と云ふ三字を刻む即王石穀の書之○京師の井水多く鹹くして飲がたし唯詹事府署の井水至て佳し都人汲で飲料とす〉

○翰林院署〈小玉河橋の西ニあり北ニ向ふ即元代の鴻臚署之三堂門ニ登瀛門と云ふ堂ハ又樞西ニ讀講廳あり东ハ又編修廳あり左即圖門の内を韓昌黎の祠とし南ニ向ふ又北ニ向へ者ハ土穀祠之堂の後ハ穿堂なり左ハ待詔廳右ハ典簿廳なり後ニ後堂ありて南ニ向ふ中ニハ皇帝御筆の寶壁を設く後堂东西の屋を藏書庫とし院の内西の方ニ亭あり劉井と名く翰林学士劉定之が鑿井〉

翰林院署



られがあり。其西南に亭あり。柯亭と名く。翰林学士柯所岩が建る所なればなり。又後堂の南門のうちに敬一亭あり。列井の東は清秘堂其前を瀛州亭といふ亭の下は池名は鳳池と名く池の南に宝善亭あり清秘堂の後は陶楽軒なり。又柯亭の西に先師の祠あり。祠の南を西斎房といふ。南を原心亭といふ。**堂の額を道徳仁義といふ**康熙帝の宸翰なり。乾隆八年。翰林院の傾破せしを修葺ありて新に御書の額二を掲ぐ。其一は稽古論思といひ一は集賢清秘といふ。且古今図書集成一部を賜ひて宝善堂に之を蔵めしむ。其賜ひし日帝親ら翰林院に臨幸ありて大学士鄂爾泰張廷玉等に宴をたまひ又詩を賦せしむ。此時文帝も諸臣と同じく栢梁体の一篇を探韻ひ列ね御製の詩に首を続して諸臣に示し凡此宴会にあづかる儒臣百六十人御製の韻を和する者総て百首実に玉堂の盛典千載一時なりと伝へて佳話とするのこにあり。

○翰林院の総官は掌院学士兼礼部侍郎満人漢人各一人。国史図籍制詰文章の事を掌る又詩讀学士侍講学士修撰編修官検討官などあり皆撰述編輯を掌る。経幄に侍直し其外庶吉士画〔漢〕孔目待詔筆帖式等の職あり。或は出納の文移を掌る。図籍章疏の文史繕書の藩譯等を頒掌す。

宝善亭 即鳳池の南にあり亭之軒窓に臨て翁々勢玉河の西涯が賦し詩に採案玉堂陰と云は是なるべし。

鰲峯 国史院の庭中にある石の名也。学士此石を愛せし詩多く甚だ。

孔子廟 則翰林院の内にあり庭中古き槐樹あり。

采桑玉堂陰　分蚕長安郭　一労累百枚
再分連数箔　寧知富貴地　此物能沃若
右李東陽詩
鳴門書

史官所居 翰林正廳の西にあり。むかしハこれを第三廳と稱し。又検廳といふ。其庭上に大槐樹あるをもつて却い呼りとぞ。

乾隆癸巳の年四庫全書の館を開ひて翰林院を維理の所とし武英殿を繕写の所とし總して殿板館書の外、善く天下に詔して歴代の遺書を集め及び之の書共に一万三千七百二十余種を得る。此書の中明代永楽大典より出て今の世に絶たるもの書籍、凡そ帝即詞臣に詔て数をわけて纂輯しめ其佳書には題詞を偏し其巻の首に冠らしむ。且四部の條目は前代とハ稍異なり。經の部凡十類。易書詩禮春秋楽孝經四書總經解小学等なり。其ハ易類の中卜筮をわけて子部の術数に入れ緯類の中歴代の儀注をわけて史部の政書に入れ楽類の中宮調絃竹の譜をわけて又小学類の中八法をわけ共に子部の藝術に入れ史部十五類正史編年紀事本末別史雑史詔令奏議傳記史鈔載記時令地理職官政書目録史評等なり。其外雑史類の中に講譜の記録をわけて子部の小説雑家に入る。子部凡十四類。儒家兵家法家農家醫家天文算法術数藝術譜録雑家類書小説釈家道家等是也。集部五類。楚辞別集総集詩文評詞曲等之諸派々に選び叙次を定め大内の文淵閣円明園の文源閣熱河の文津閣盛京の文溯閣等の四庫にわかち蔵む。皆御製の記あり○四部の書の中に抄ひて精確なるものを撰らみ集めて薈要を作りこれを大内と円明園にわかち扣さむ凡て編録十二年を経て功を終ふ。四庫に蔵むる書三千四百六十一種七万五千八百五十巻あり。其庭前ハ皆翰林院に扣さむ清朝文選の盛んなるを見るべし。

○**鑾儀衛外駕庫** 東長安門の外なる小巷

○**理藩院署** 玉河橋の東東長安街にあり清朝はじめて此官を設く外藩蒙古喇麻回部金川等の政を掌らしむ。

雍正帝御書の額を宣化遐方といふ 尚書官満人一人左右侍郎満人あるひは蒙古各一人。額外侍郎蒙古一人。理藩院の總官なり。属官に旗籍清吏司あり蒙古科爾沁等諸部落の封爵會盟及び帰化城索倫の官授を除授する事をつかさどる王会清吏司ハ科爾沁等の諸部落朝貢賜与を掌る典属清吏司 喀爾喀及び西藏蒙古

厄魯特乃諸部落封爵會盟疆屯田游牧察哈爾喇嘛番僧の事を掌る。柔遠清吏司ハ喀爾喀の部落及び喇嘛番僧乃朝貢宴賞を掌る。徠遠清吏司ハ哈密吐魯番及び回部諸爵禄貢織幣よ務る回民耕牧の事を掌る。理刑清吏司ハ蒙古及び番回の刑罰を掌る。以上六司皆ナ院の尚書官ニ類し政務を行ふ。

堂子 長安左門の外玉河の東にあり。順治元年これを建る。街門ハ西に向ひ内門ハ西に向ふ。正中を神殿とし又南に向ふ。其前に拝天乃圜殿あり。殿乃南正中に大内致祭の立杆石座を設く。其前の両翼に各六行乃神杆を立る。後に列ね各六重。其第一重ハ皇子致祭乃立杆石座とし其次ハ親王郡王貝勒貝子公乃次第よりて列して北に向ふ。又祭礼を執行ふ元旦并び月朔又ハ國に大事ありて出兵の時ハ天子ミつから儀て出入する時ハ必ず是に祭る。凡て凱旋を告る時ハ先の祭儀を行ふ事也。

○**照忠祠** 玉河橋乃東南にあり 雍正帝御製の碑あり。雍正二年勅して祠を建清朝乃王公大臣をすべて乃官員等忠節を全ふせしものを此所に祭り祠る。

○**裕親王府** 照忠祠乃西 臺基廠にあり

○**安郡王府** 臺基廠の南にあり

○**太僕寺署** 東城根乃南玉河橋のひがしにあり 勤宣天育とよべる額あり。雍正帝乃御書なり。御官満人漢人各一人并御満漢各員を總官として両翼牧場馬を掌り賞罰の政を掌る。齊ふ屬官の左右の二司あり。左司ハ騎戦を掌り馬匹の蕃殖を掌る。又巡幸の用に備ふ。右司ハ牧場馬匹の盈虧を稽し印綬をつかさどる。

○**肅親王府** 南玉河橋乃東にあり

崇文門 内城南面左の門なり。元代文明門といふ。又哈達門ともいふ。門内に哈達大王の府あり。依て名く。明の正統間今乃名に改む。

○**雲藏觀音寺** 觀音寺の胡同にあり。明の正統間重修し。即ち陳文華が碑あり。寺内に萬暦乃海潮觀音の像あり。明代内府に出し像ちと云。

堂子

堂子ハ満洲開闢の神を祭る所也。又満洲の風俗にて國家の大事を天に告る其祭天の所なり。堂子の神ハ皆大内に奉安し玉ふ。将の護となし給ふ。又國家の大事あるとき軍を出し軍を入るるの時ハ大内より堂子の神を出し神殿に移し皇帝親詣して祭りを行ふ。満洲開闢の神なれば大臣といへども漢人ハ此祭りに陪従する事を許さず。満一品の文武大臣皇帝と共にこれを祭れり。



○總督倉塲公署 裱褙胡同にあり　雍正帝御書の額あり。愼儲九穀といふ。

○苦井 蘇州胡同の内、麻線胡同三元菴の前にあり。明の時この井の味ひ苦し。故に苦井と名けて汲むものなし。正統間一人の術士あり。此井水の苦味を治せんとて正月元日の晨に此水を汲みて他の甜井の水と汲易ゆ。かくて此に来て井に向ひてさまざまの説詛を為し、終に甜水をこの井の中へ下したりしに、奇なるかな此より遂に變じて甜水となれり。今京師の居民此水を汲で日毎の資けとなせり。

柳鑿流傳事不併
澄分涇渭定千秋
獨將苦水成甜水
喚作蘇州是薊州
查嗣瑮
淡齋豊書

○大石橋 崇文門内の东南にあり。其东は泡子河橋なり。

○泡子河 崇文門の东、城隅にあり。○流るゝ汗は雨のごとくたかひにひろがる袖は幕ぞとなりし。むかし京師の繁花なりし徳勝河より二三里が間、東の廟市の数の囂きを見聞ど、閑寂なる勝地なるに騒客の此に駕を寄するもの稀なるぞうらみなり。柳泡子河の風色都下に同じからず。西には渓の流れあり。後には廣き澱をなす。高塚其东にめぐり、水を顧みれば天甚空く澄み、河の両岸には巨樹垂柳いやがうへに生茂り、渓と流れの澄てさまたるに林木の蔭鮮に映りそひ、荒たる園廃たる圃の不可思議に入るぞ。黍離のむかしをおもひやるべし。されば泡子河にある寺観佛閣の大ひならざるものなれど、俗するさまの京師の中の眺めなれば又見も捨がたし。

○慈雲寺 泡子河の西岸にあり。俗呼て十方寺と云。

○呂公堂 泡子河の東にあり。呂公堂の神に祈りて夢を乞ふ。其夢のさまによりて吉凶を占ふに果して験しありとつたへ人つどへり。よりて歳の始りには都下の老若男女夜に詣で夢を祈る者踏絶ずとなせり。いかなる夢をか見るらんと排ず。

○華嚴禪林 呂公堂の南にあり

○関帝廟 呂公堂の北にあり

○大清宮 呂公堂の南にあり。即ち玉皇閣なり。此閣はむかし遷し。明の萬暦の間、孫師劉静祝といふ者拓て是を大ひにせり。其時明の内府より金を賜ひ、福祿壽の三星の像を作り此に安置し、額を玄清宮と賜ふといふ。

○觀象臺 城の東南の隅、堞の上にあり。観象臺は元の至元十六年に建る所なり。中を紫微殿と名付。乾隆帝御書の額扁あり。臺のうへに元の郭守敬が製作の渾天儀、簡儀、新製渾天儀等の諸器をつらね、系を明の正統年間に至りて渾天儀を鋳造し、又天体儀を製し、乾隆九年に璣衡撫辰儀を製し、共に台上に置て測候す。康熙十二年に新製天体儀、地平経儀、地平緯儀、紀限儀等の六儀を御製ありて、舊儀は臺下に納て今にあせり。又十年に地平経緯儀を製し、乾隆九年に璣衡撫辰儀を製し、共に臺上につらね用ゆ。天度を測るには又天風旗あり。一名相風旗、其制竿の上に織纏二十八道あり。天の二十八宿に象る。凡測候の法は欽天監の職官漢官共に一人、天文生十五人を率て観象臺に至り、儀器を考へ乾象を窺ひ、昼夜を分ちて天文象を測る。凡臺の四方に於て天象を考、観風雷雲氣流星等の諸象を委く書記し、同官に告げて、官奏をもとへことも有る。

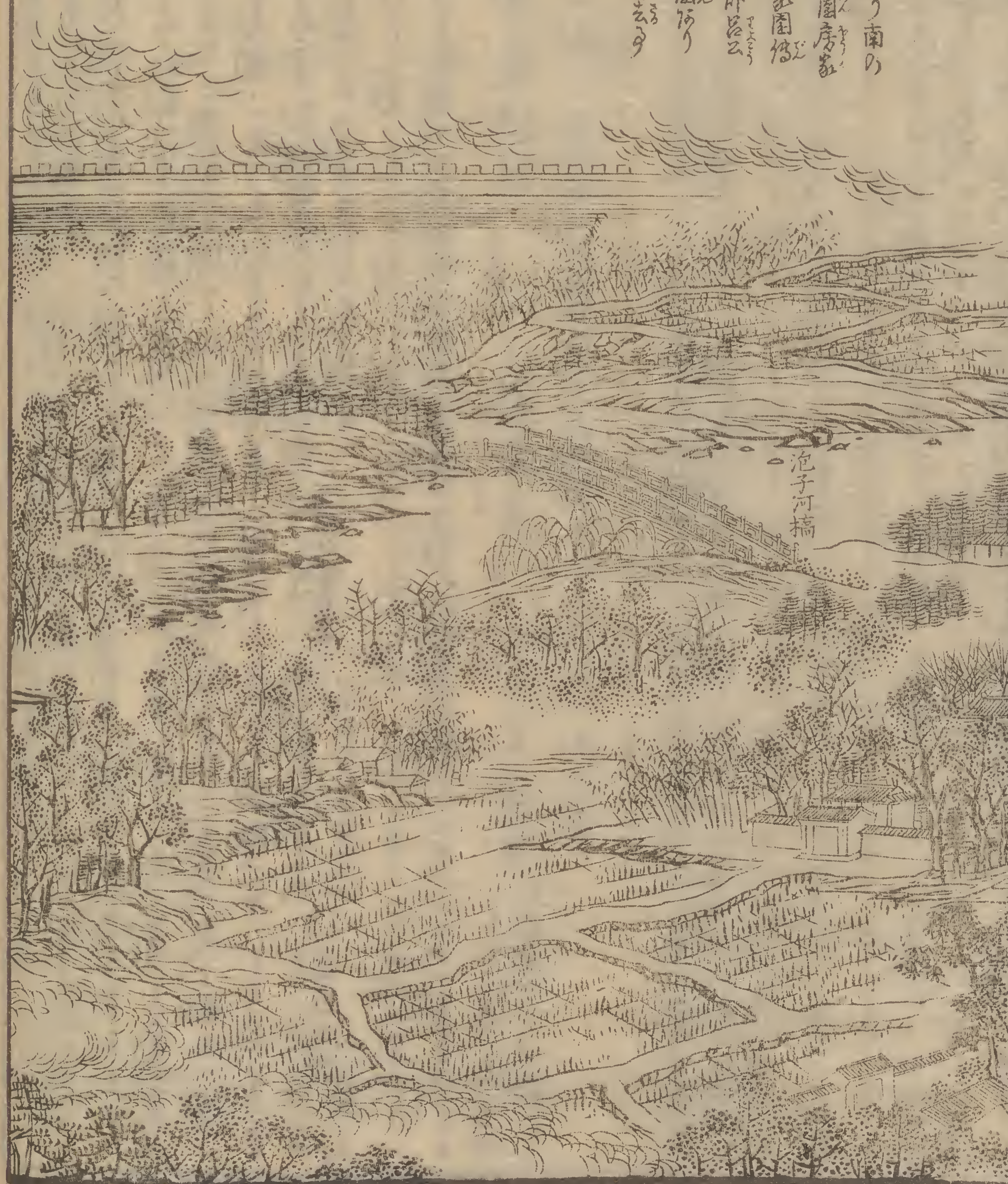
泡子河呂公祠の後に蔵なる物あり其色白く胴のごとく長は一丈余り泡子河の水面に游ひあり てうたとみれが怒ある庵より洗で將を數くの声をなし名て水猴といふ



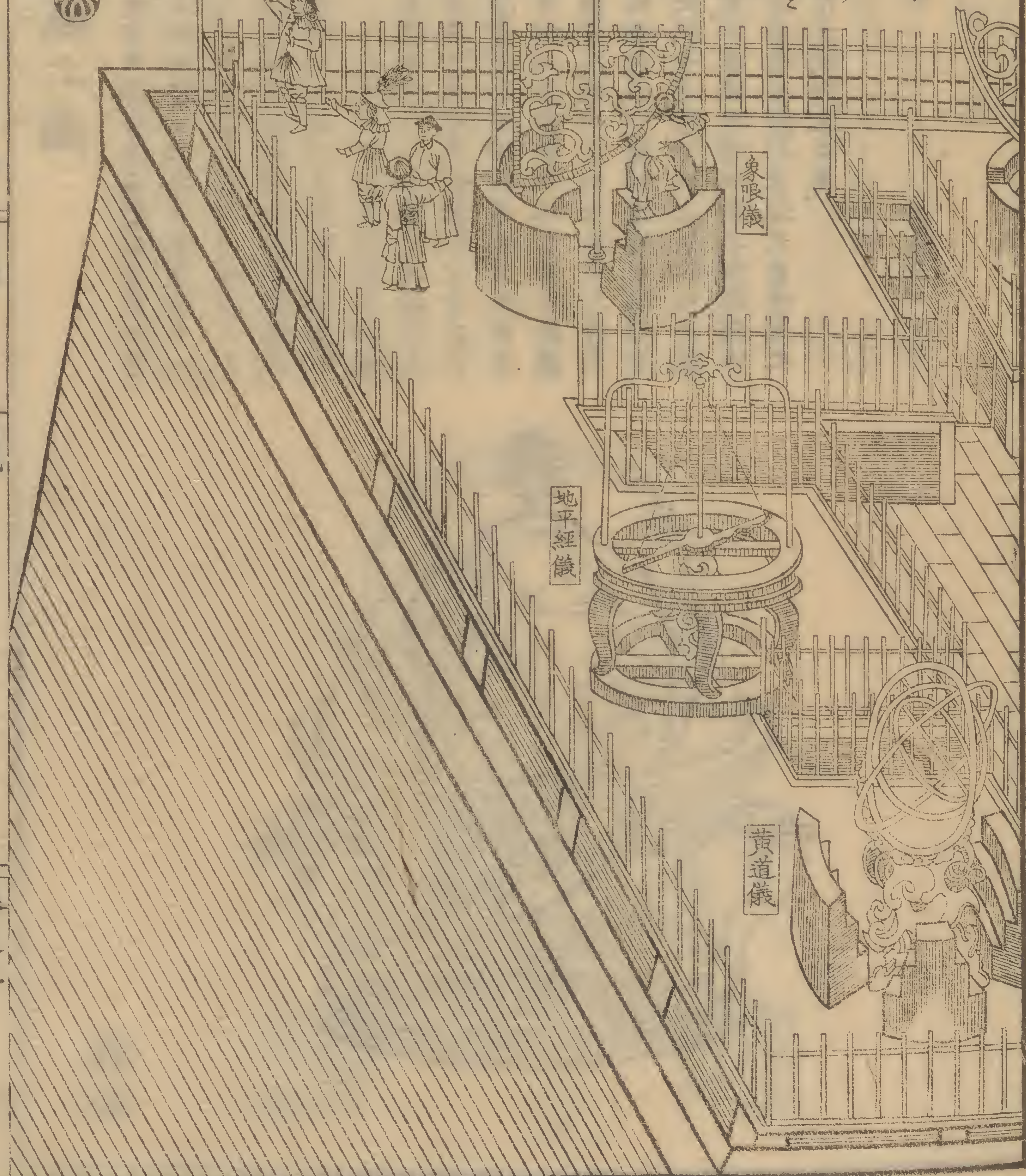
泡子河

河のほとりに室源あり南のきしは方家園張家園房家園あり北のきしには張家園傅家東西の園あり中は即呂公堂なり西は揚氏の秘園なり東は玉皇閣也貢院を去る一里計

不逐市塵外
泓然別有天
石橋将盡岸
春雨過平川
双闕晴分影
千樓夕起烟
因河名泡子
悟得海無邊
明陸啟

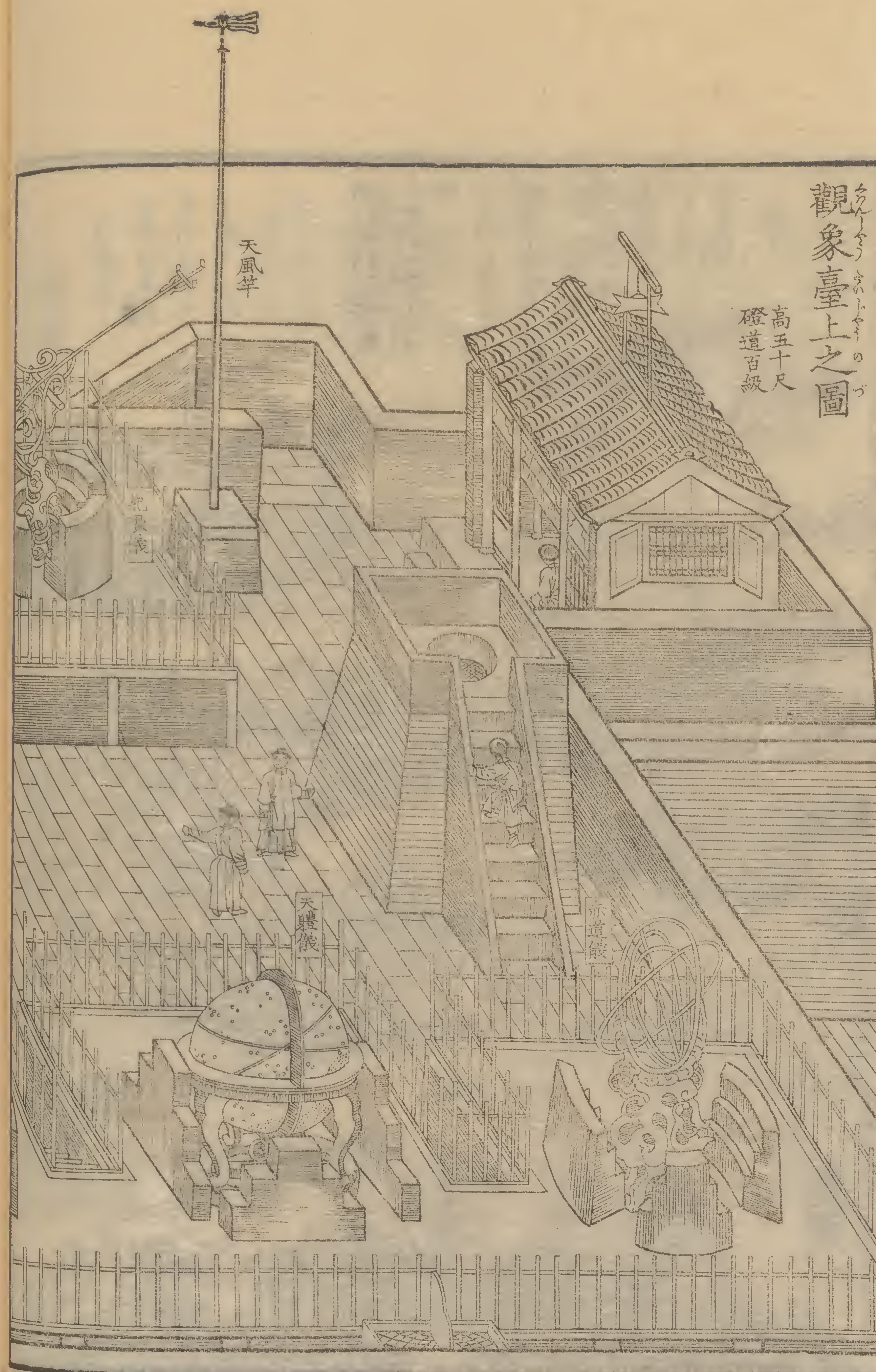


此圖ハ康熙欽定の靈臺儀象志を摸して此り出せり今の觀象臺上ニ於ハ儀器八と陳ね即大清會典ニ載る天儀器八と次こ出ん能し圖説と本文を略し家く儀器の微きるまで干と陳設の序次と考ぶし



觀象臺上之圖

高五十尺 磴道百級



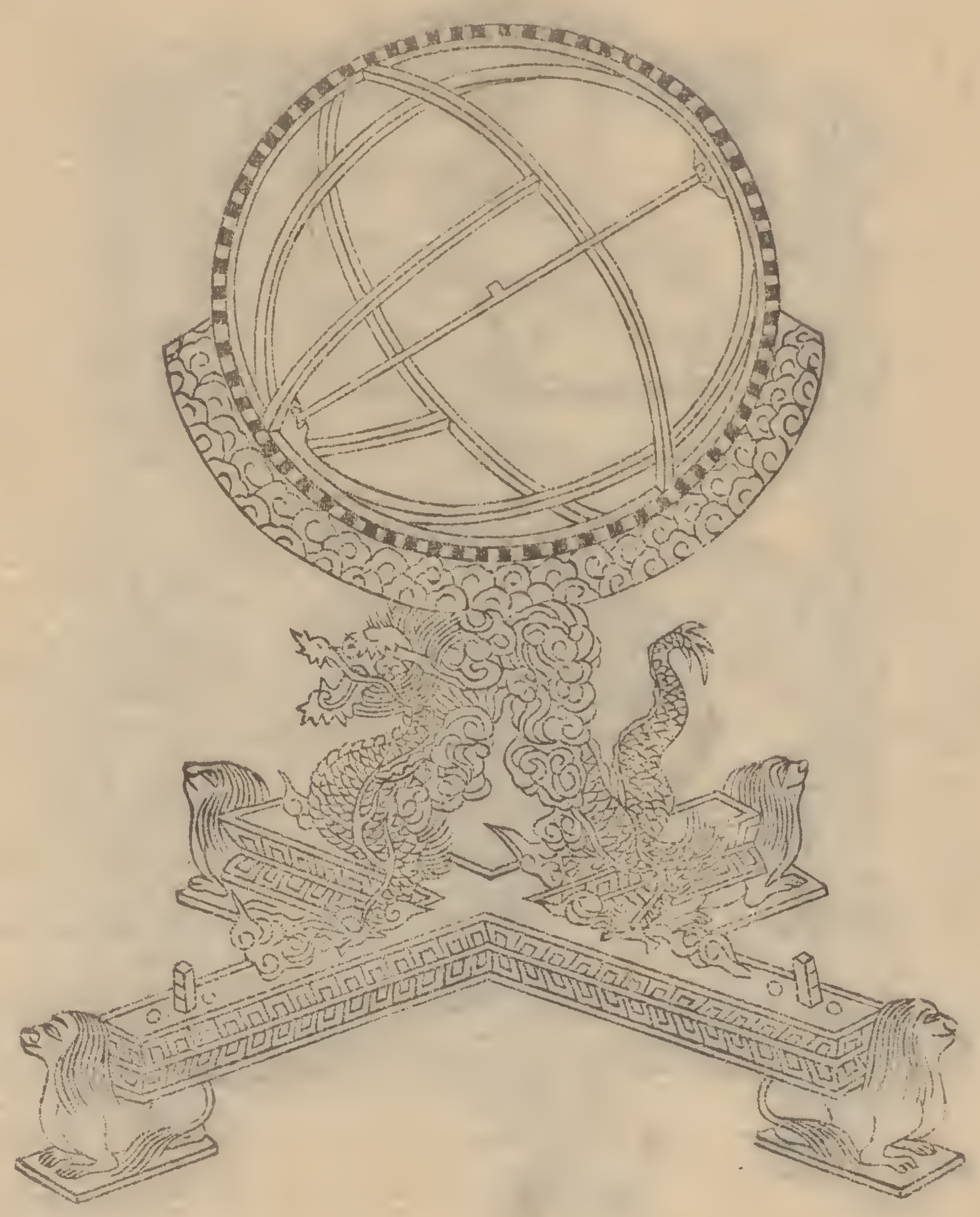
天體儀之圖

漢初洛下閎造渾天儀後漢張衡製渾象隋志云渾天象者其制有璣而無衡本朝康熙十二年製天體儀即古之渾象也鑄銅為球徑六尺兩端中心為南北極以鋼軸貫之面刻黃赤二道平分十二宮布列星漢以肖穹象其外為子午圈徑六尺一寸兩面刻去極度東面兩極開半圓孔以受天體之軸列以半圓合而固之共下為地平圈徑與子午圈等面闊七寸用為水渠外刻四象限度及地平時刻方位下施四足承以圓座設螺柱以取平南北正中嚮西開闕口以受子午圈半入地平下半出地平上自天頂設高弧帶地平遊表以■諸曜地平經緯度北極安時盤定於子午圈設遊表於極樞令能自轉以指日度又能隨天體旋轉以指時座下又設機輪使北極能升降則各地天象隱見之界皆可瞭然尤古制所未及焉



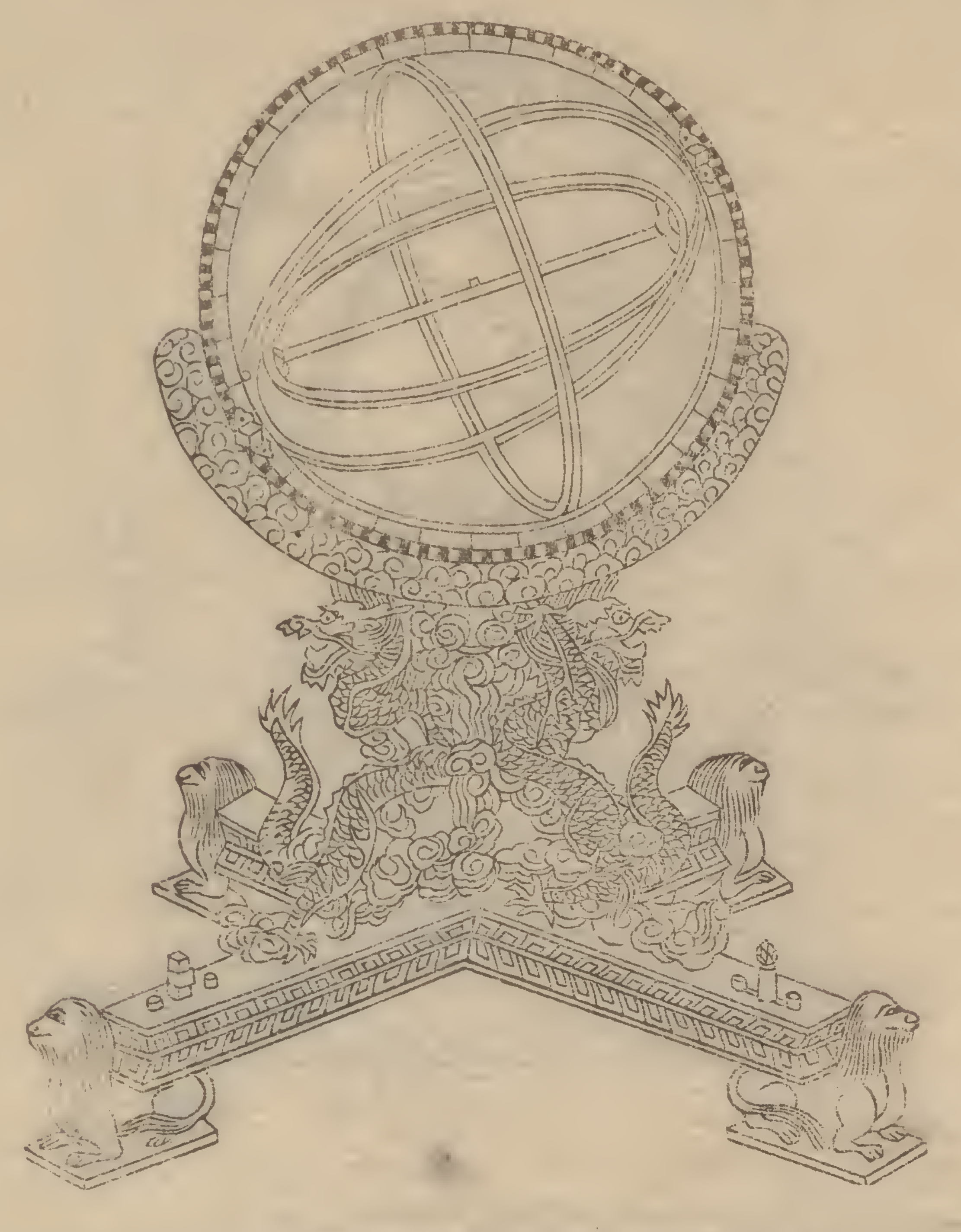
赤道儀之圖

渾天儀制為儀三重外曰六合儀次內曰三辰儀最內曰四遊儀凡七圈本朝康熙十二年製赤道經緯儀三重凡三圈蓋合三辰於六合而又省一地平圈也其外正立為子午圈外徑六尺一寸兩面皆刻去極度數京師天頂距北極五十度五分北極出地南極入地各三十九度五十五分兩極側面各安鋼軸以半圓合而固之距兩極各九十度橫直赤道緯圈外徑五尺九寸內規面及上側面刻周天時刻外規面及下側面刻周天度分又自南極兩旁承以兩象限弧使不傾墊次內為赤道經圈外徑五尺六寸四面刻赤道緯度貫於南北極之兩軸其內又為通軸徑一寸中半安橫表長三寸赤道上設遊表對直軸以測赤道經度經圈上設遊表對橫表以測赤道緯度其下為半圓雲座以龍架承之



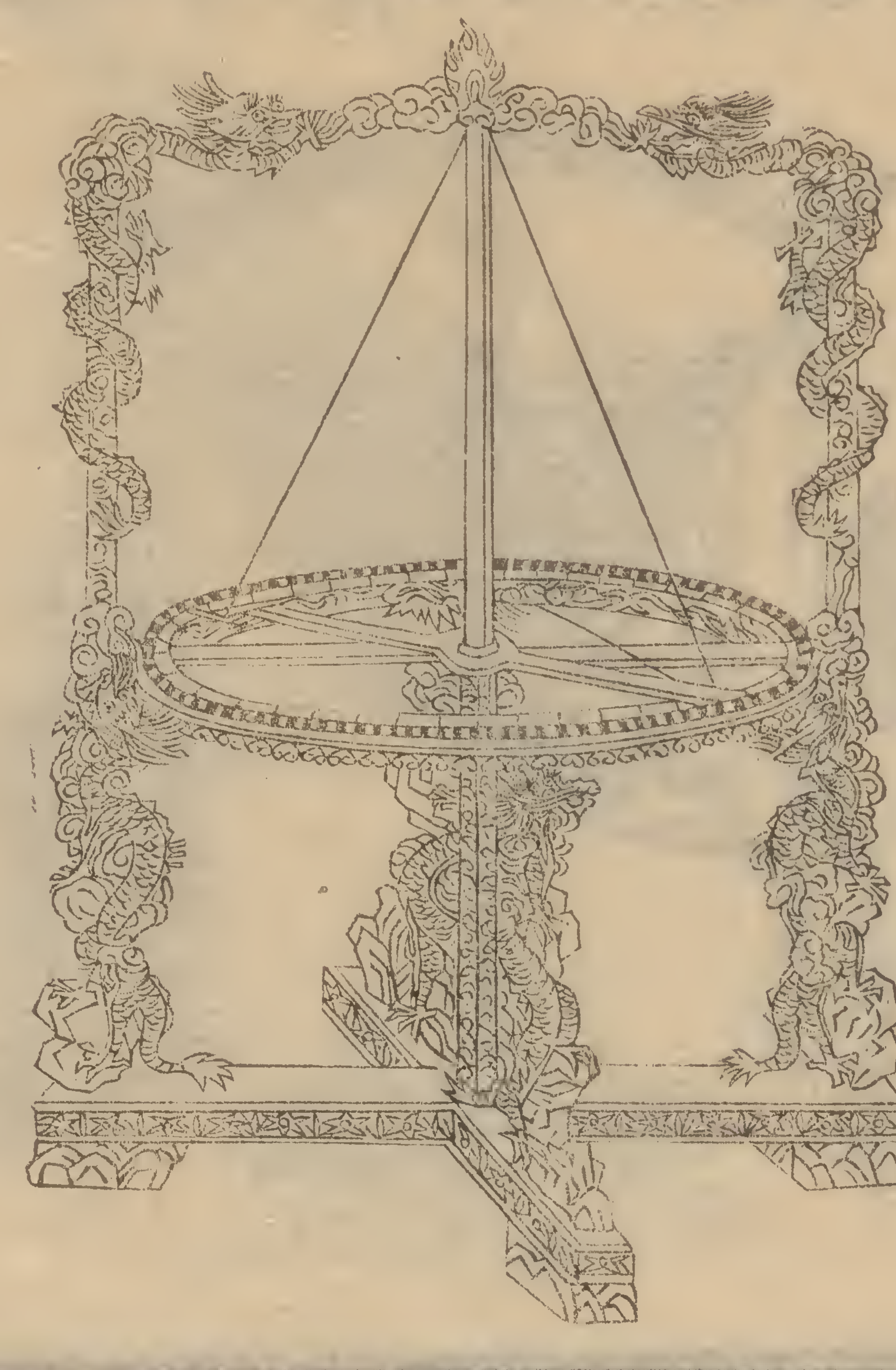
黄道儀之圖

渾天儀制有黄道緯圈而無黄道經圈本朝康熙十二年製黄道經緯儀三重凡四圈其外正立為子午圈制與赤道儀子午圈同次内為過極至圈外徑五尺五寸規面濶二寸三分側面厚一寸一分兩面皆刻去極度數貫於南北極之兩軸以象天之左旋距赤道極二十三度三十一分三十秒為黄道極距黄極九十度横置黄道緯圈其徑及濶厚皆與過極至圈等四面皆刻黄道經度以象七政之右旋又次内為黄道經圈外徑五尺一寸四分規面濶九分側面厚二寸三分四面皆刻黄道緯度以鋼軸貫於黄極以象黄道之四遊兩極安直軸徑一寸中半安横表長三寸緯圈上設遊表對直軸以測黄道經度經圈上設遊表對横表以測黄道緯度其下為半圓雲座以龍架承之



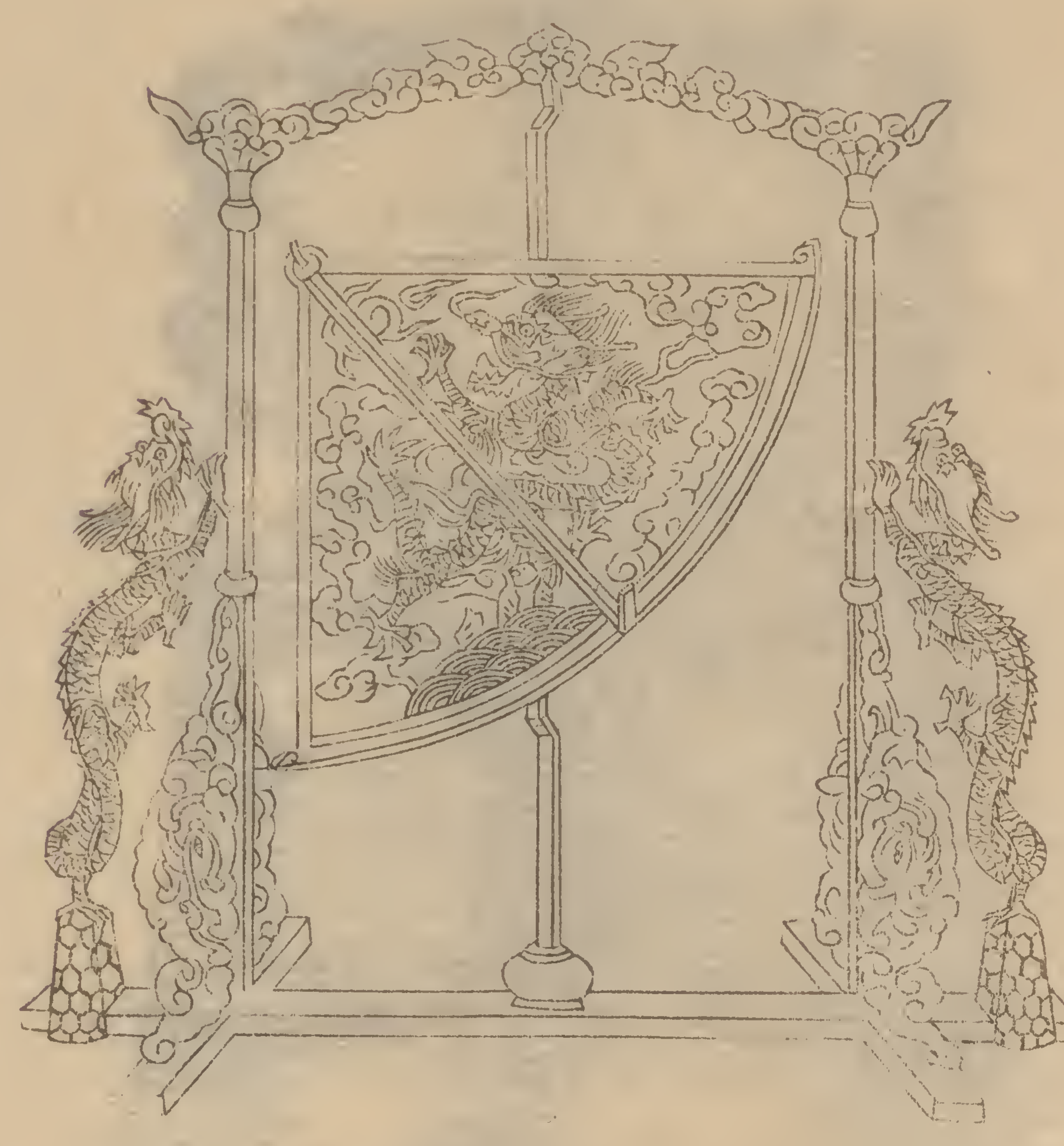
地平經儀之圖

渾天儀制右地平圏能測三辰當地平之經度而不能測地平上之經度本朝康熙十二年製地平經儀平置地平圏外徑六尺二寸濶二寸四分厚一寸二分上面側面皆刻四象限度上面自南北起初度側面自東西起初度東西設通徑下設圓盤四面以立龍承之地平圏之下中心安立柱高與地平圏等適當地平圏之圓心上出圓軸地平圏之上東西植二龍柱結為横梁中心開孔下與圓心相直中間安立表長四尺四寸上應天頂下應地心立表之末結十字横表與地平圏相切長與地平圏全徑等立表中空上下設倒正小圓柱頂開一孔旁開二孔中結直線斜貫於横表之兩端成兩三角形凡測日月星無論距地平上若干度但將横表推轉令三線與所測參直視横表所指度分即得各曜之地平經度焉



象限儀之圖

渾天儀制。有地平圈。而無地平經圈。元郭守敬簡儀設立運圈。以測三辰出地之度。即地平經圈也。本朝康熙十二年。製象限儀。為全圓四分之一。亦名地平緯儀。其制上正方角。為圓心。縱横兩邊。皆為半徑。各長六尺。濶二寸一分。厚一寸一分。象限弧濶二寸六分。厚一寸一分。正面刻九十度。分外規面刻度數字。其數自上而下者。以紀距天頂度。自下而上者。以紀地平高度。中間聯以雲龍。背面正中。為立軸以運之。立軸與儀之直邊平行。長九尺七寸。濶二寸一分。厚一寸七分。圓其兩端。東西立柱。高九尺四寸。上下為横梁。濶七尺八寸。飾以雲龍。正中設圓孔。以受立軸。東西運轉。圓心安横軸。長一寸三分。軸本安遊表。濶二寸一分。厚三分。長與半徑等。遊表之末。設立耳以測地平緯度。較之全圓尤便焉。



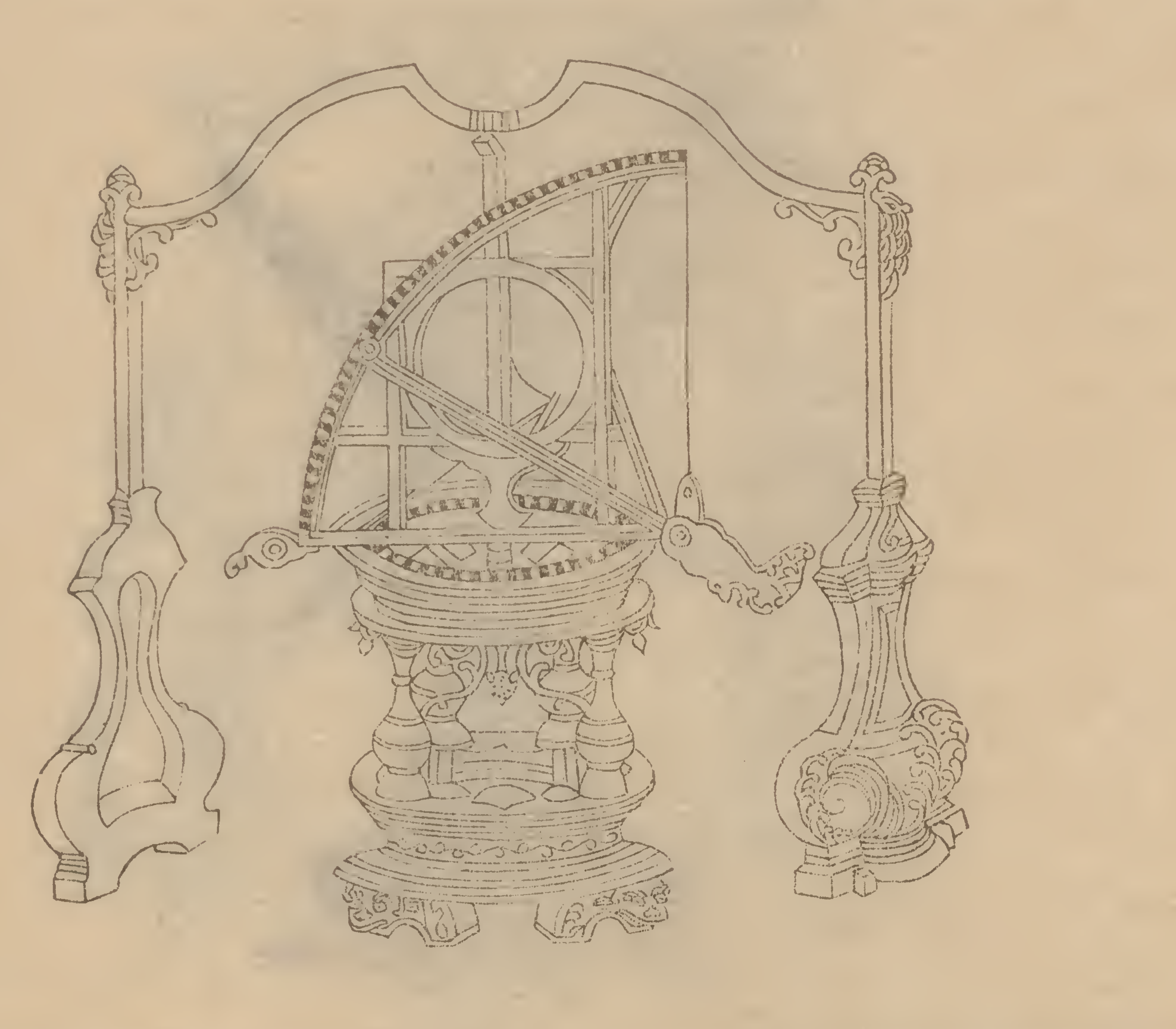
紀限儀之圖

諸曜在天之度。赤道經緯。以南北二極為宗。黄道經緯。以黄極為宗。地平經緯。以天頂為宗。至於兩曜斜距之度。古無測器。本朝康熙十二年。製紀限儀。亦名距度儀。其制一弧一幹。弧為圓周六分之一。通弦六尺。面濶二寸五分。中至兩旁。各列三十度。幹為圓之半徑。長亦六尺。幹末安柄。以便推移。半徑上端。為圓心。設立柱以安遊表。長與半徑等。遊表之末。設立耳為測一曜之用。弧背左右。各設窺表。為別測一曜之用。又於幹之兩旁。設兩立柱。相距應弧背之十度。以為借測之用。儀面聯以流雲。背安樞紐。可使低昂。承以半圈。周施輪齒。可使平側。其下立柱。入於儀座。可使轉旋。而凡兩曜相距之度。皆可測焉。



地平經緯儀之圖

康熙五十四年聖祖仁皇帝命監臣紀利安製地平經緯儀合地平象限二儀而為一其制平置地平圈外徑五尺濶七寸七分周圍刻四象限度下設四柱以圓座承之地平圈之中心倒安螺柱上出立軸東西安立柱高一丈一尺上結曲梁正中開孔以容立軸之上端中間安象限儀圓心在下半徑六尺弧濶二寸七分正面刻九十度中聯方圓及弧矢形背面結於立軸以運之圓心安遊表長八尺本設横耳末設横柱以備仰窺凡測諸曜將象限儀推轉又將遊表低昂令與諸曜參直則横半徑所指即地平經度遊表所指即地平緯度是一測而經緯悉得矣



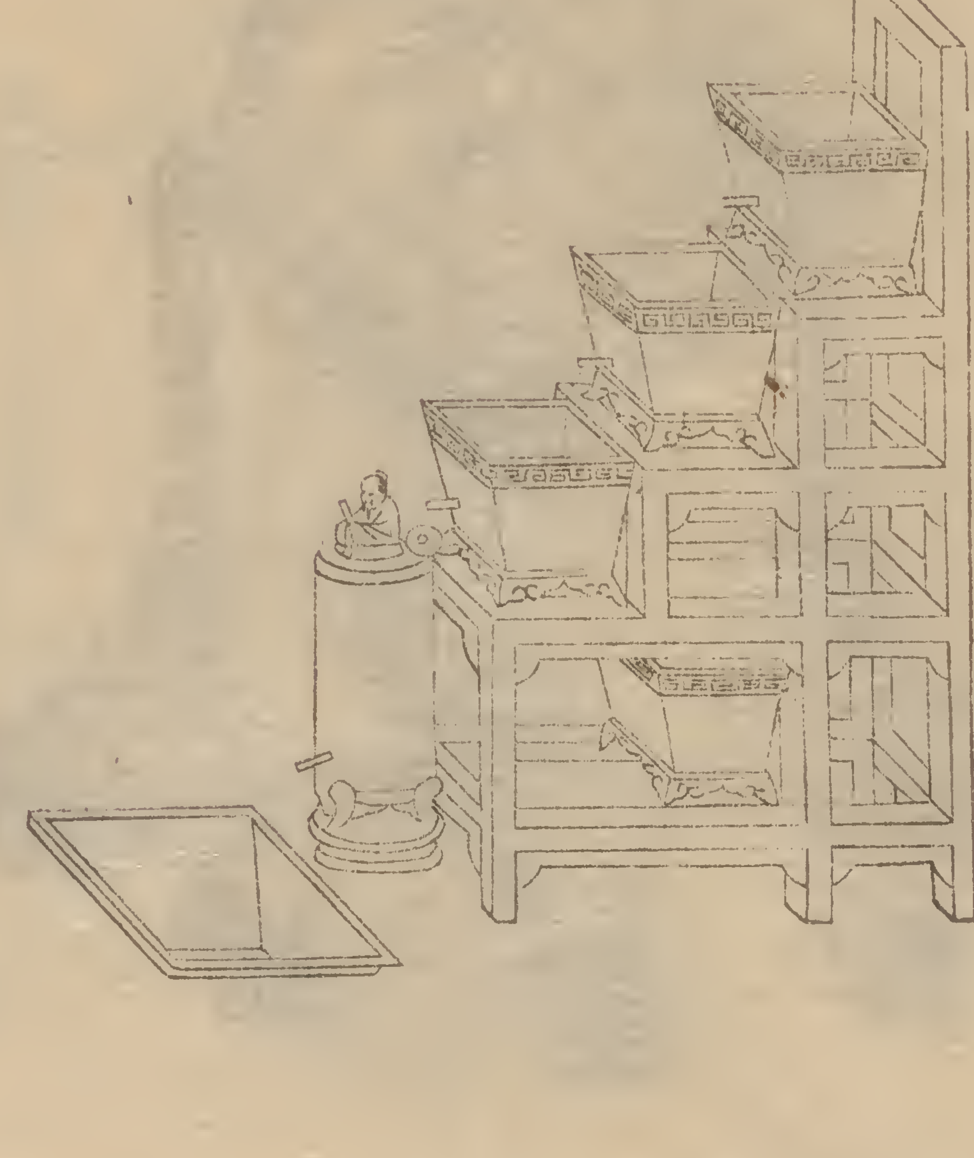
璣衡撫辰儀之圖

虞書舜典在璿璣玉衡以齊七政孔疏曰璣衡者王者正天文之器漢世以來謂之渾天儀者是也乾隆九年御製璣衡撫辰儀徑六尺其外即古之六合儀而不用地平圈正立子午雙環為天經兩面刻去極度數以雲座承之北極出地三十九度五十五分天頂距北極五十度五分距而極九十度結赤道單環為天緯兩面刻周日十二時九十六刻以龍柱扶之次内即古之三辰儀而不用黄道圈兩極綰赤經雙環而面刻去極度數中要結遊旋赤道而面刻周天度分以象七政之運行最内即古之四遊儀通徑設直距中心施窺衡以測七政之經緯架座施縲柱以取平天頂施垂線以取正體制彷乎渾天之舊而時度倍為整齊運量同於赤道新儀而重環更能合應至用遊表窺測則上下左右無不宜焉



漏壺之圖

隋志云黄帝創觀漏水制器取則以分晝夜其後因以命官周礼挈壺氏則其職也宋志有求壺複壺廢壺建壺及平水壺之制本朝因前明舊制播水壺三形方承以木架上名日天壺即宋之求壺水欲常滿上濶一尺九寸下濶一尺三寸高一尺七寸次名夜天壺即宋之複壺次名平水壺高濶皆遞減一寸分水壺一如平水壺之度置於平水壺後稍下即宋之廢壺受水壺一形圓徑一尺四寸高三尺一寸置於架前地平上名萬水壺即宋之建壺播水三壺前面近下皆有龍口以次漏於萬水壺平水壺後面近上開孔洩於分水壺以平其水而均其漏萬水壺蓋安銅人抱時刻漏箭下安箭舟浮於水面水長則箭上出周日水盈箭盡則落其下口洩之於池而時刻復起午正壺安室内各設水蓋龍口小管以玉為之



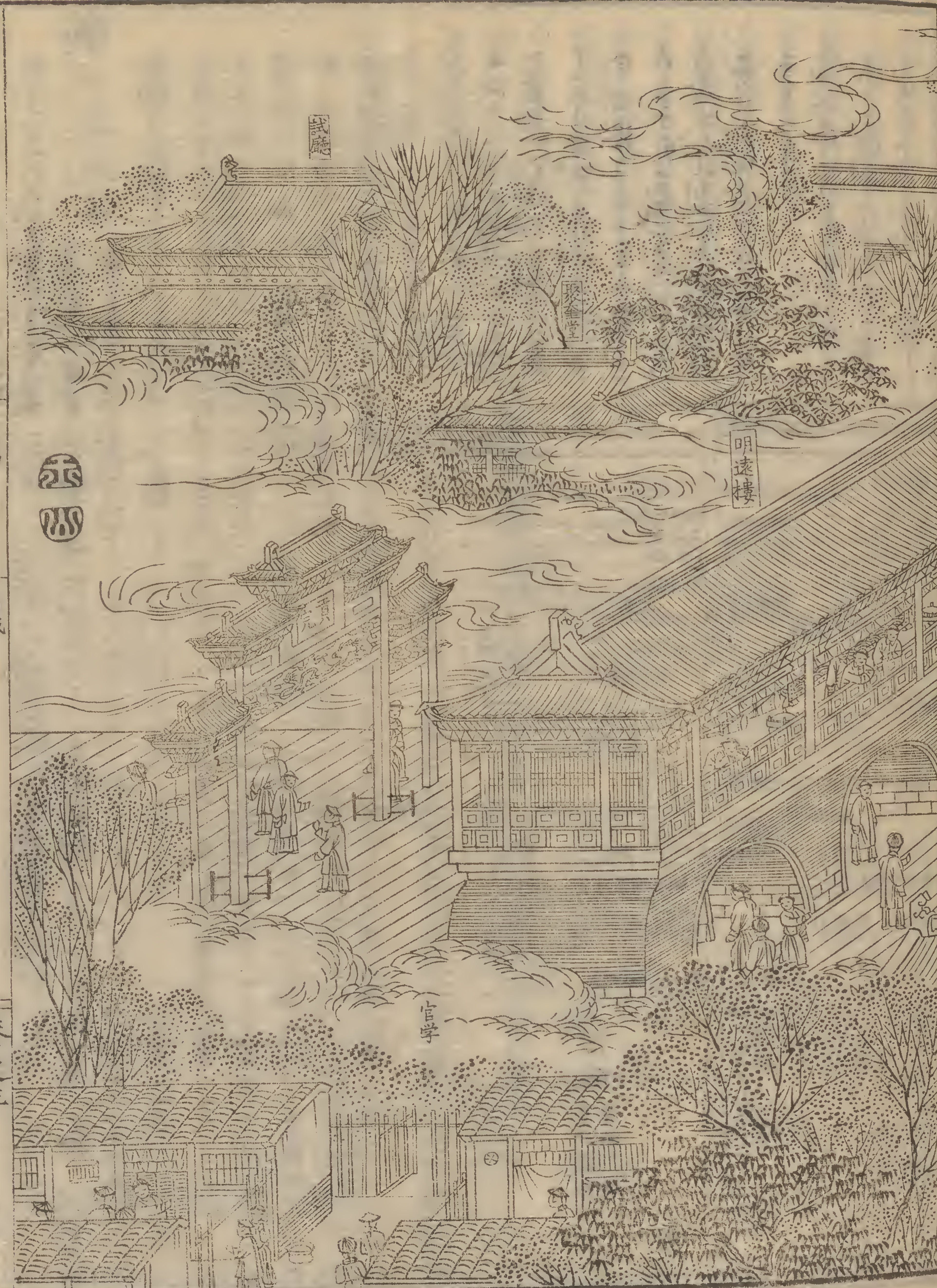
尚委く考へ定めて密封してこれを奏し其餘の細かなるまで冊に記して納め置き翌年二月朔日上覧に備ふ。毎歳元日寅の刻風の来る方角を見て歳の吉凶を占ひ八節もかくのごとし。其外雷の鳴りはじめて聲を發する時も其鳴る方を見て皆司に告て奏聞す。日々の晴雨は別冊に記しこれも翌年二月朔日併せ奏す。○京師直省及び蒙古の部落朝鮮等の日月出入の時刻北極出地の度数を計り節気の早晩は東西の偏度を計てこれを定めて又外國を冊封する時は欽天監より官人を遣はし其地の天度地経をしらしむ。

壺房 觀象臺紫微殿の東にある小室なり一名浮漏堂漏壺を設て晝夜の時刻を測る所なり又東の廂に圖を測量する所となる。

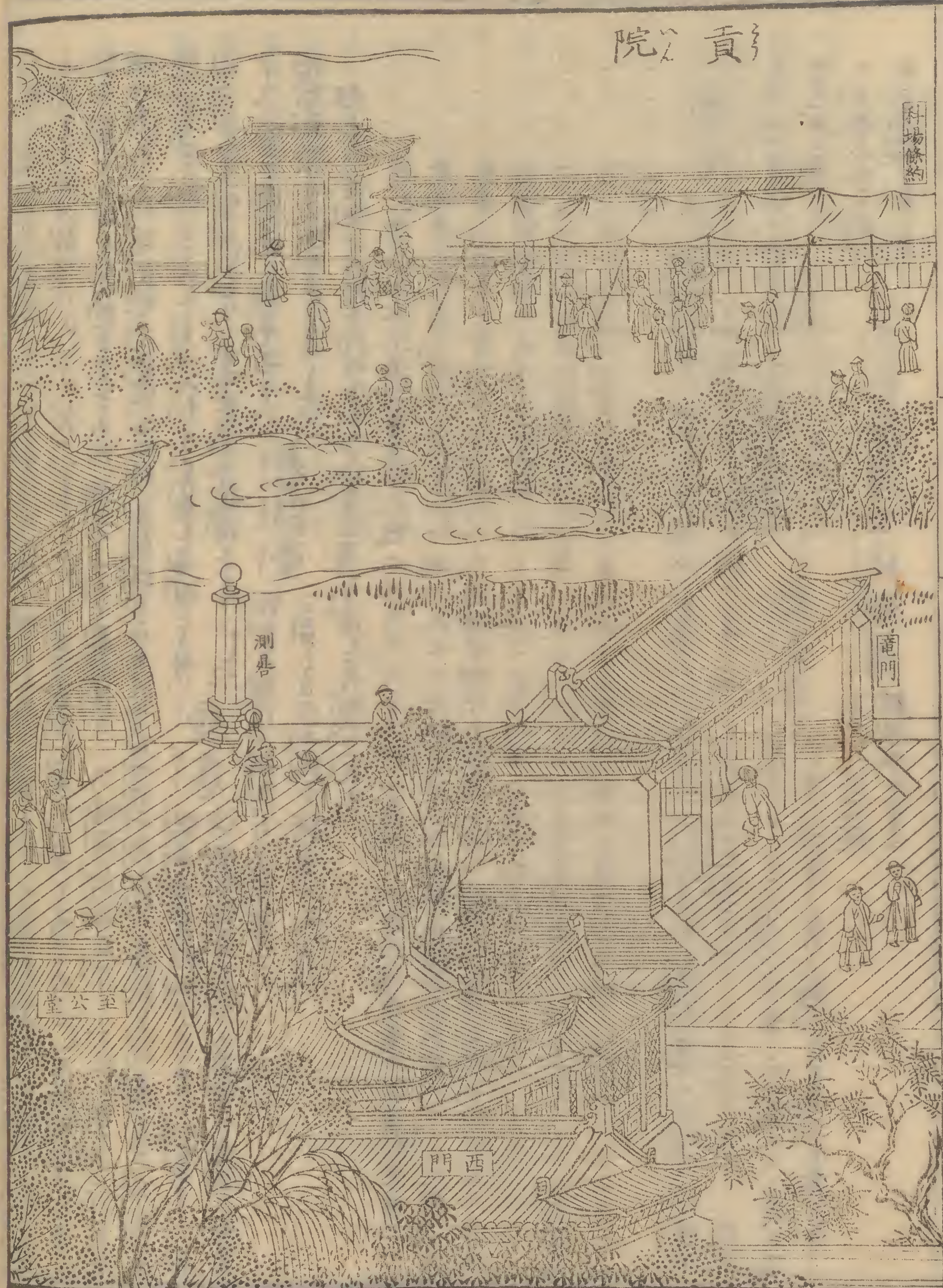
晷影堂 別室三楹内に銅圭一あり石臺の上に置く日の長短を測量する所となる。欽天監官司の集る所となる。圭表の圖は大内午門の下に出づ。爰に圖を除て其制を記す。

周礼考工玉人土圭尺有五寸以致日宋史云何承天始立表候日影前明觀象臺下設晷影堂南北平置銅圭於石臺上長一丈六尺二寸濶二尺七寸周設水渠以為平準南端植銅表高八尺上設横梁用影符以取中影清朝加二尺表高一丈上端安銅片中開圓孔徑二分午正太陽之影自孔射至圭面成橢圓形南界為日体上邊之影北界為月体下邊之影中心為中影京師夏至之影長二尺九寸四分八厘是為最短過此則漸長冬至之影長一丈九尺九寸四分是為最長過此又漸短因圭長不及長影之數又於北端設立圭高三尺五寸冬至之影上立圭二尺七寸四厘用以比例太陽高亦同於平圭之比例焉。

○**貢院** 城の東隅觀象臺の西北にあり秀才と貢挙をなるの所なり元代此所を禮部署とし明の永楽の間貢院とし萬暦にいたりて地を擴く院を濶くし清朝屢修造を加へ今吾区を整せり乾隆九年帝貢院に御幸ありて七言律詩首御製し給ひ石に勒して試院のうちに揭さむ。○**聚奎堂** 貢院の中にあり明代王図といふ者あり庚戌取士の詩を作れり其子海卜なる者又の額を記して石碑の間に刻めり。○**正藍旗護軍統領署** 崇文門の内乾魚胡同にあり。



貢院（こういん）



以上の〆門内正藍旗護衛の界とす。以下も朝陽門内鑲白旗乃護衛軍乃居址とす。

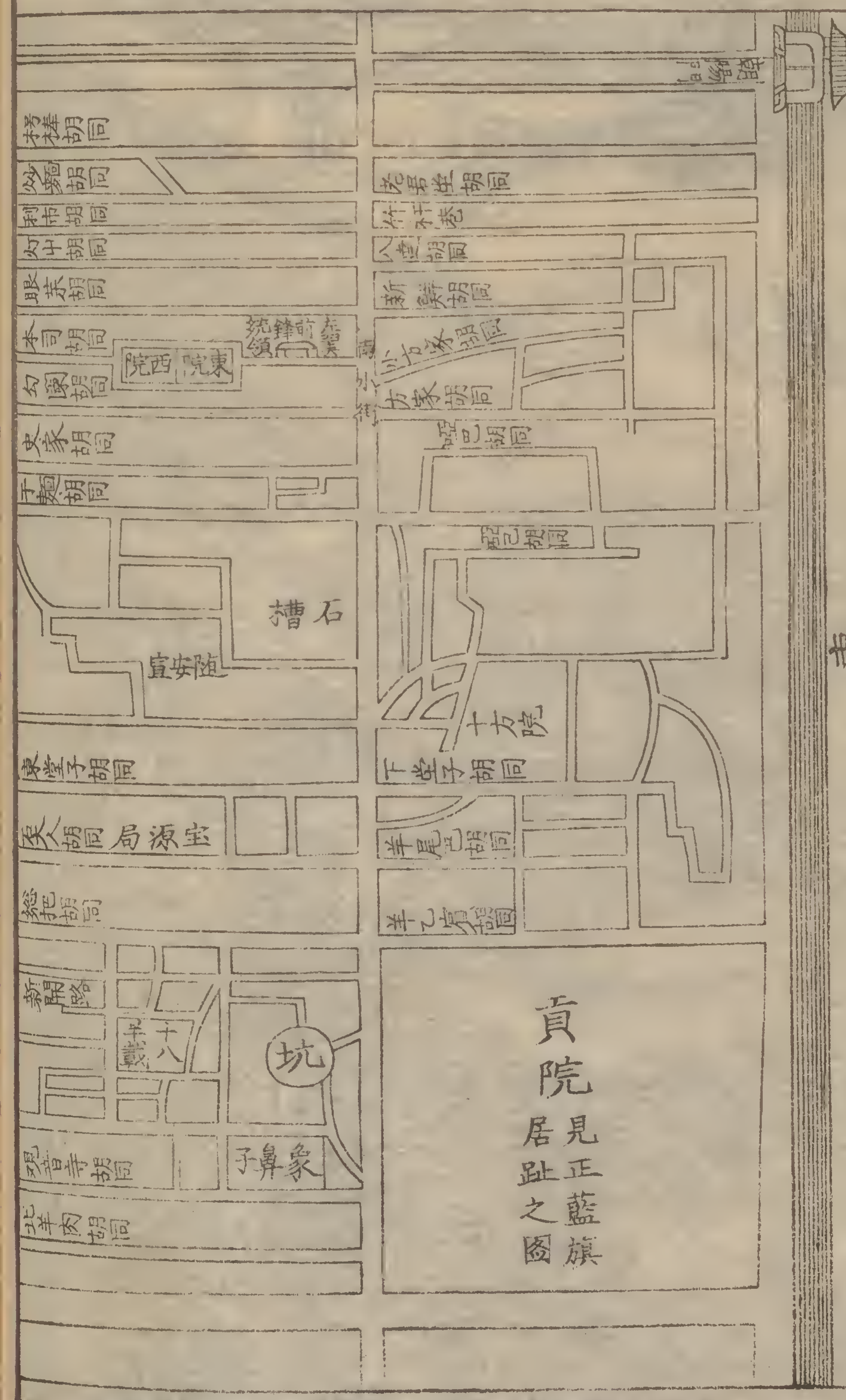
満洲蒙古漢軍三の鑲白旗ハ勠房胡同より南単牌楼に至り正白旗と界を接し。正藍旗

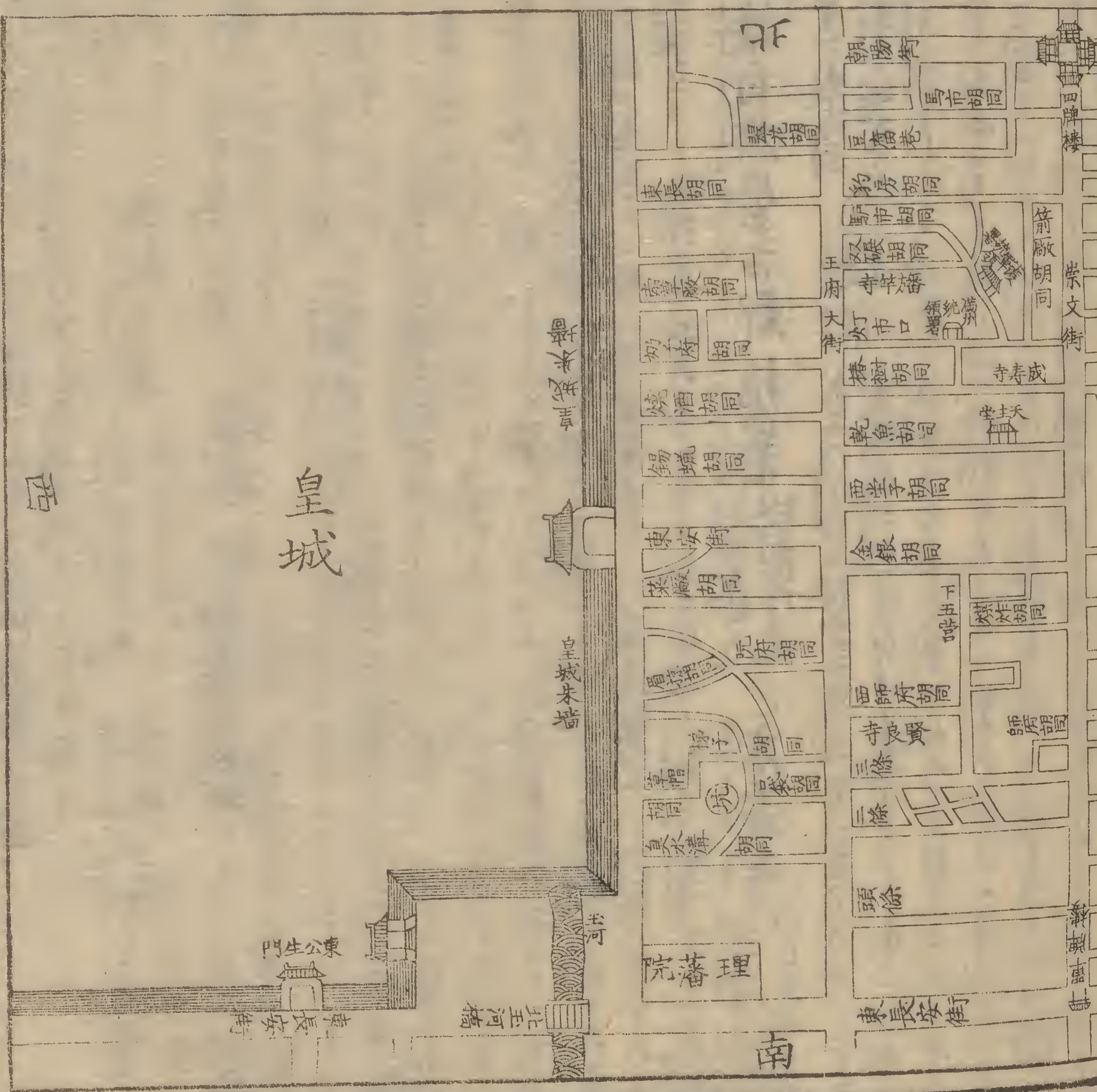
鑲白旗居址

と界を接す。示れハ皇城の根より東に向ひ内城の根に至る。其中に満洲蒙古漢軍の参領佐領の居址を分てり。東長胡同より大街に至るまでを南豆府胡同の東口に至るまでを満洲の頭三参領に属せる佐領十七人乃居址とす。豆府胡同より長安街牌楼に至るまでを満洲の二参領に属せる佐領十六人の居址とす。又東長安大街の両辺郭家苑胡同。葦殿胡同。東長胡同。奶子胡同。焼酒胡同。理藩院後胡同 以上を満洲の三参領に属せる佐領十八人の居址とす。長安街牌楼より東に向ひ単牌楼に至るまでを満洲の四参領に属せる佐領十七人の居址とす。焼市口大街の西口より東四牌楼大街を南に向ひ。椿樹胡同。乾魚胡同。堂子胡同。金銀胡同。螺獅胡同。師府胡同。頭條。二條。三條の胡同を満洲の五参領に属せる佐領十六人の居址とす。凡満洲鑲白旗乃参領五人佐領八十四人馬軍丁二万五千二百人あり。

○四牌楼より南に向ひ大街に沿ひて東堂子胡同に至るまでを蒙古の頭参領に属せる佐領十二人の居址とす。堂子胡同より単牌楼に至るまでを蒙古の二参領に属せる佐領十二人の居址とす。凡蒙古鑲白旗の参領二人佐領二十四人馬軍丁七千二百人なり

○四牌楼より東に向ひ小街に至るを漢軍の頭参領に属せる佐領五人乃居址とす。小街より朝陽門に至るを漢軍の二参領に属せる佐領四人の居址とす。禄米倉周囲の啞巴胡同方家胡同を漢軍の三参領に属せる佐領四人の居址とす。小街の史家胡同。乾麪胡同。小啞巴胡同を漢軍の四参領に属せる佐領四人の居址とす。羊尾巴胡同。石大人胡同。羊乙宮胡同。德祀胡同を漢軍の五参領に属せる佐領五人乃居址とす。凡漢軍鑲白旗乃参領五人佐領二十五人馬軍丁六千六百人。三軍合て三万九千人。朝陽門内鑲白旗の居址とす。





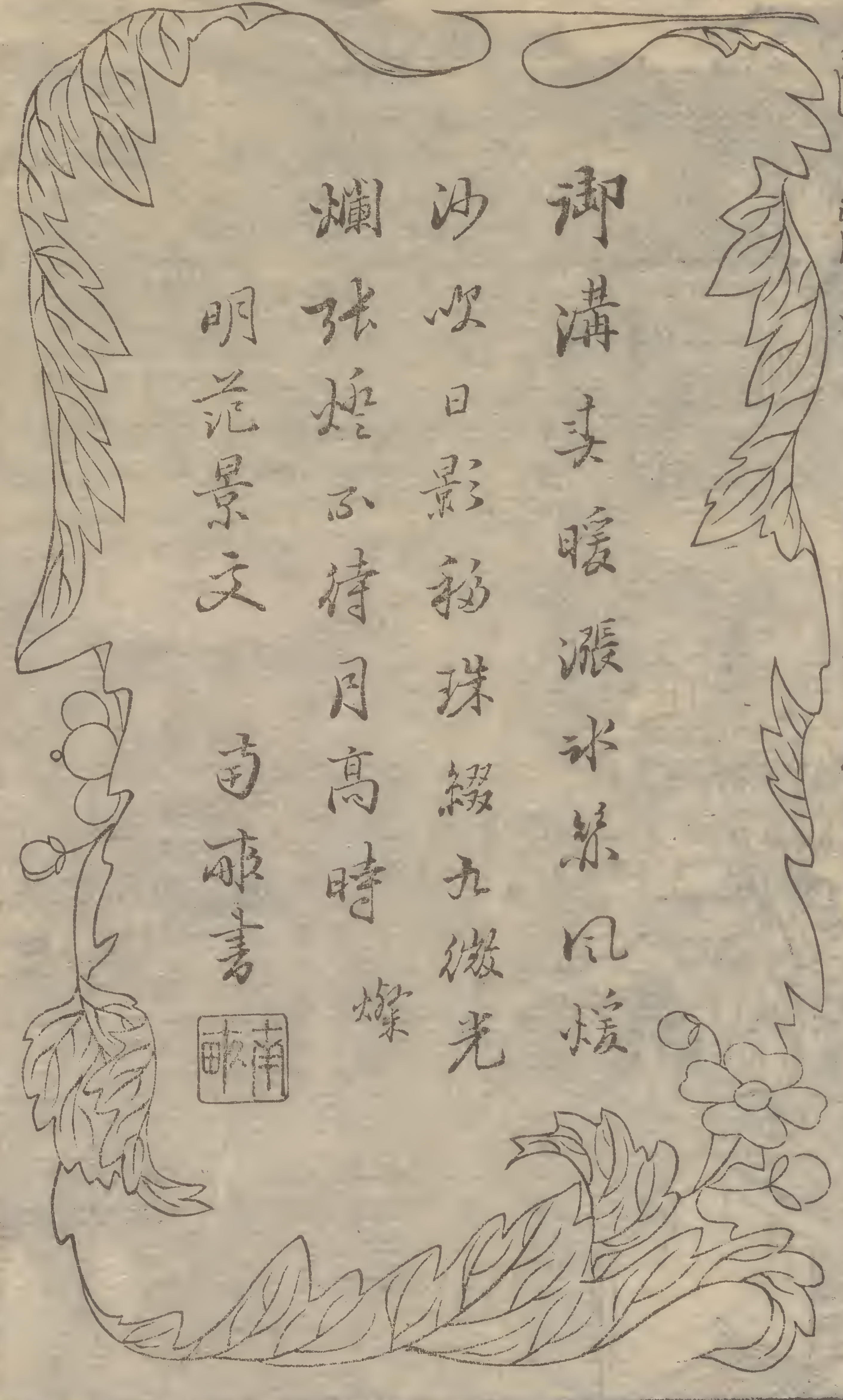
○王府街　皇城の東安門外、南の街なり。明の永樂十五年、十王邸を建造ところ也。凡三百五十楹。又宣德の間、公主の府三所を諸王邸のそばに建てり。

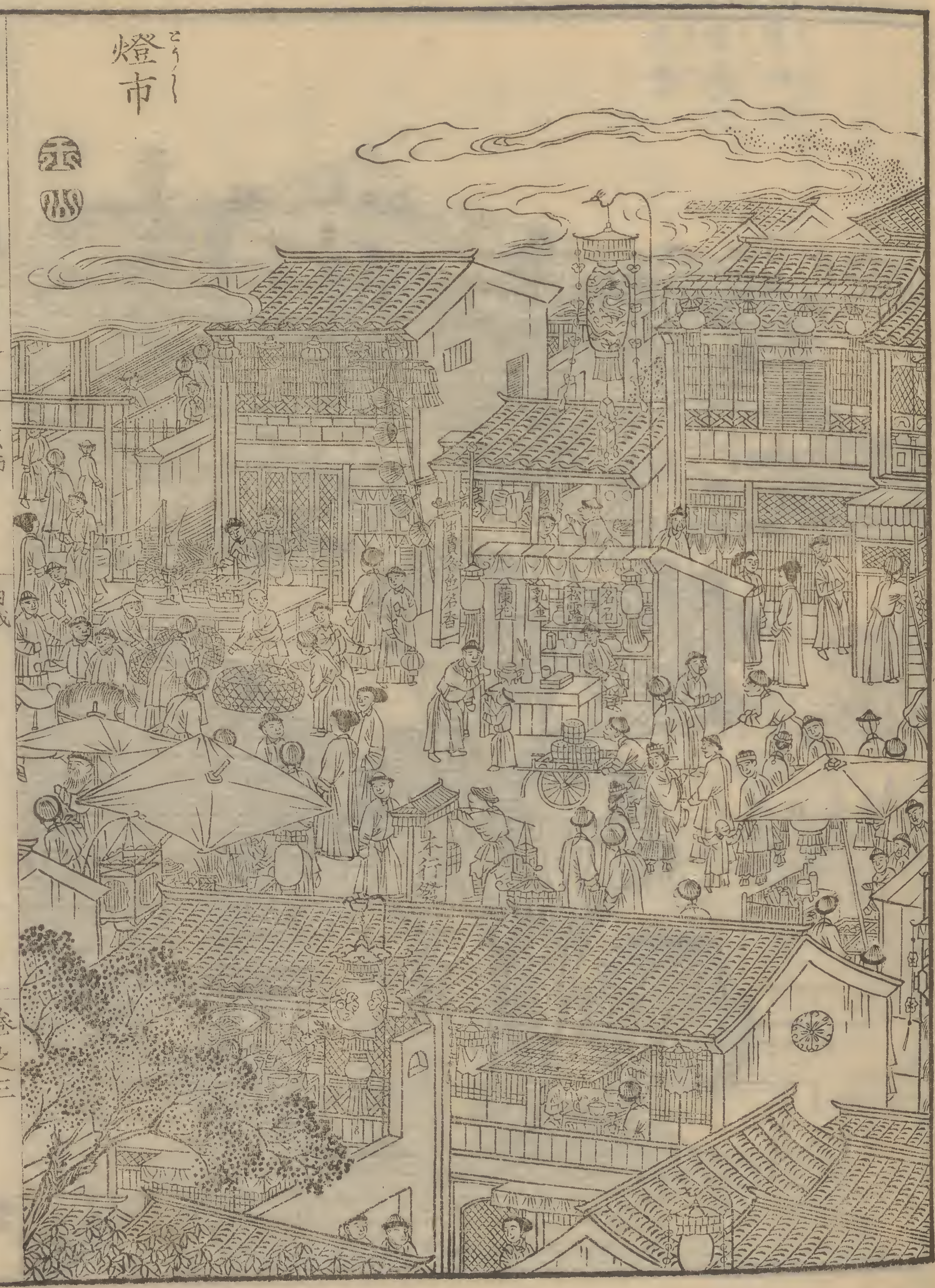
○會同館　王府街にあり。在京の旅客の宿る驛亭なり。○豫親王府　東單牌樓の西、三條胡同にあり。○寧郡王府　東單牌樓の北大街にあり。

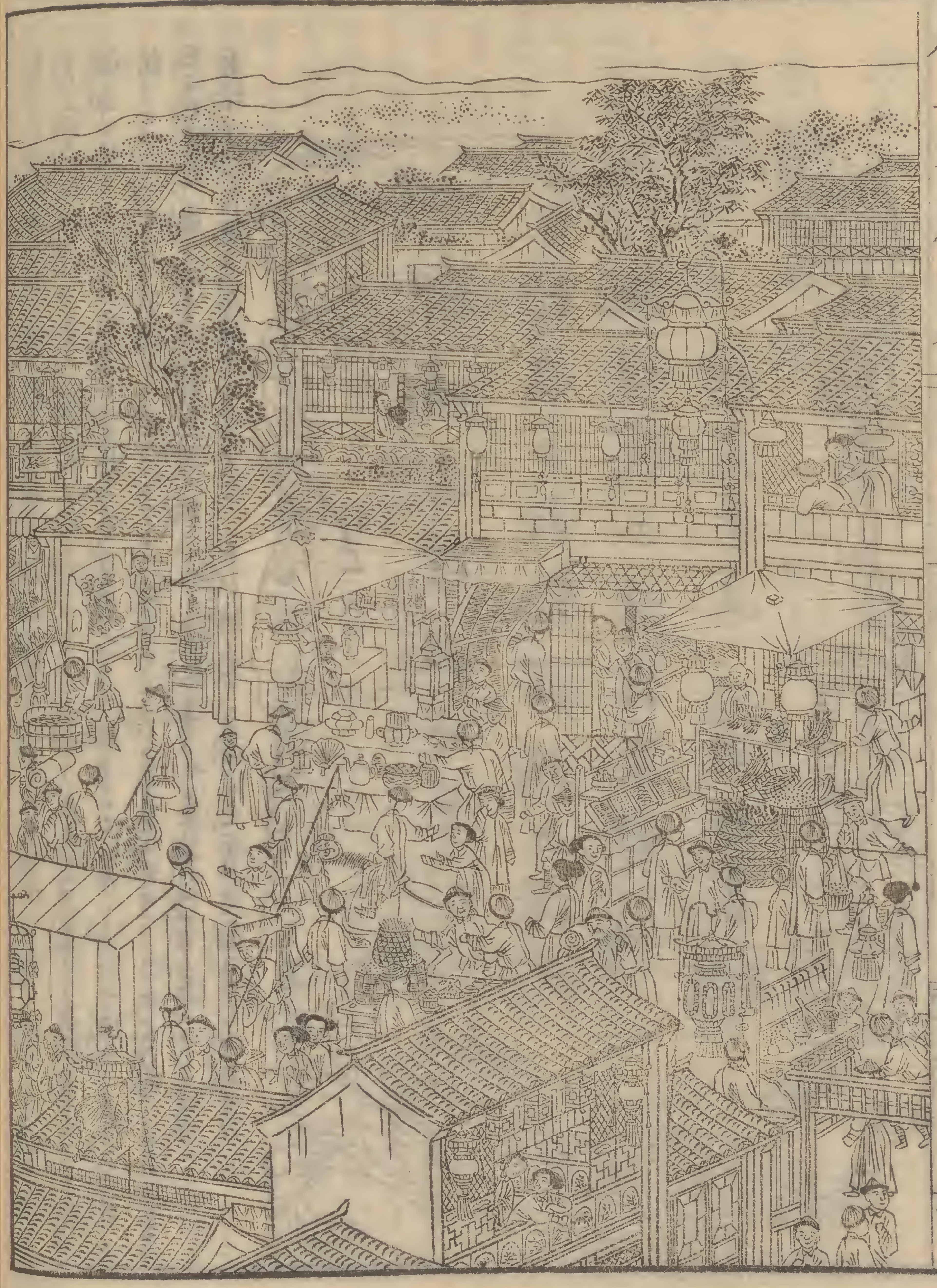
○正藍旗覺羅宗學　皇城東安門の東南、大院胡同にあり。○旛竿寺　俗大房双雁胡同にあり。明の永樂の間勅して光孫寺の額を賜ふ。此寺はもと飯を炊て窮民に施し給ふ故に、俗に捨飯寺とも云。嘉靖没て真禅禅林と称す。○賢良寺　東安門外師府胡同にあり。雍正十二年に世宗帝御製の碑及び乾隆帝御書の心經の碑あり。

○崇眞萬壽宮　蓬莱坊茶廠眉棕胡同にあり。元の至元間に建る。張留孫は信州貴溪の人なり。全節眞人祠翁ひく此宮に居より。曽て龍虎山に入く道術を学ぶ。祠觀あり、張留を見て驚ひていつくしみ、神仙宰相の相ありと。至元年中、張留孫天師に従ふて都に至る。世祖帝めして諸るに皆旨に叶ふよりて、留孫を開府に居しめ、此崇眞宮を建て張留孫が居所とし給ふ。留孫歿ありて玄道德崇く、祠廟の前にその上に鶴来て飛翔まり、世人皆崇ひ歿に天師の号を賜ふ。俗天師菴と称す。○宮内に元の薔薇あり。眞人某自ら植ると云。後世不今に尚存せり。○鑲白旗蒙古都統署　王府大街の北、乾魚胡同にあり。○慈壽寺　燈市灣湯房胡同の北、明の成化年間内監麥時と云者此寺を建、其額に微禪師を住持せしむ。又勅建の碑あり。○燈市　東安門王府大街の東、崇文街の西にあり。亘り二里斗、月をわりたる所なり。凡そ珠玉寶器より日用の雜物に至るまで悉く備へてこれを商ふ。京師の貴族禮をなし、集ひて其の簾の花を見、風に動揺する其間より窈窕たる美女の媚を見る。其外人々の耀輸に座をしむる楼をもて、心勝りしめるこそ、とりわけて其を…

紫禁の美酒、詩を作し韻を和し、或は舞ひ或は唱ひ、醉て了然に戯るゝあり。耐どして眠を催ふもありて、万真景をなし、是まさに聖代の娯楽なるべし。毎歳八月の頃より十八日に至りて、貴もいやしきも、麗しき細工する花燈を樓閣の檐にかゝげ、火の光の燦爛なるは星のつらなり照るがごとし。故に名付けて燈市と云ふ。又冰燈と称するあり。いろいろのかたちをつくり、巧をこらしたる花燈に水を注ぎ凍らせ、地に置てより彩色を施し、それにかゝるが内に氷となり、恰も玉をつらね白銀を綴るごとく、其形も集りて光を輝く。此燈市、宋の時よりて九月菊燈よりはじまり、正月にいたるよし。然ひ傳へ今は廢して、正月の數日のみ尚存せり。




燈市 とうし



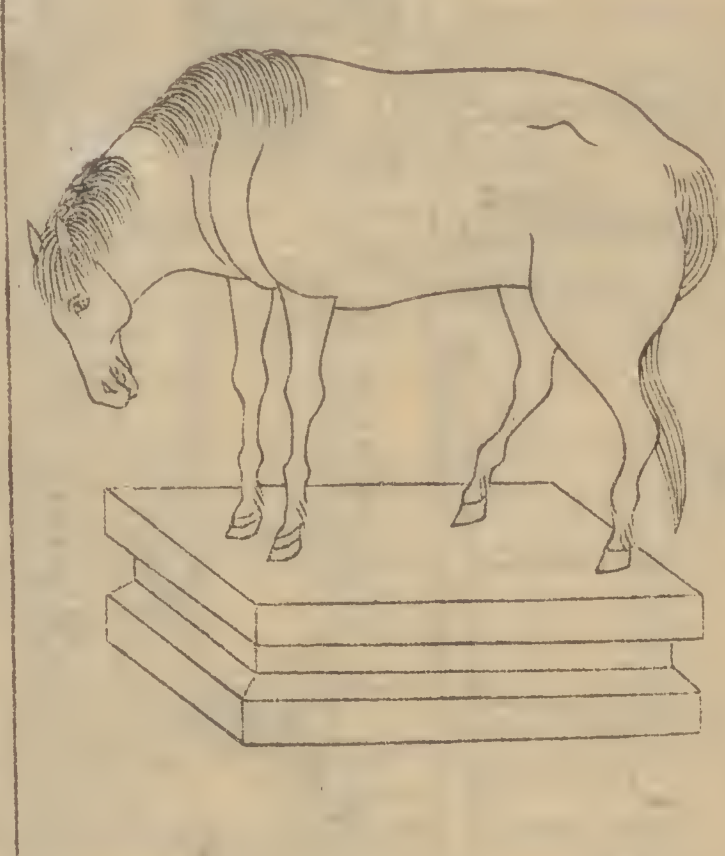
東西院青樓之光景





○法華寺 豹房胡同にあり。明の景泰年中太監劉通といふ者自ら宅地を捨て建る所なり。天啓間翰林経筵書を撰ぶ文、学士黄立極の碑あり。○正白旗蒙古都統署 ○正白旗漢軍都統署 共に豹房胡同にあり ○鑲白旗護軍統領署 驢市胡同にあり ○報恩寺 驢市胡同にあり。寺内に大鐘一あり。照寧寺の字を鋳る。又小鐘一あり、報恩寺の字を鋳る。天順の間寺号を照寧寺といふ。今大鐘は其ころ鋳る所なり。○鑲白旗漢軍都統署 炒豆胡同にあり ○左翼前鋒統領衙門 本司胡同にあり ○正藍旗満洲蒙古漢軍三都統署 本司胡同にあり ○東西院 黄華坊に東院本司胡同あり。本司とは教坊之楽隷の偶家なり。其東西院籍みて教坊に隷す。旧時是院の宜春院乃遺址なり。其東院の妓女は琵琶をもつて籍とし西院の妓女は琵琶をもつて籍とす。凡此両院は勲戚の人の遊ぶところにして豪族の子弟と同じく燕飲するを禁ず。○鑲白旗満洲都統署 炒市口大街にあり ○二郎廟 黄華坊の炒市口大街の東にあり小殿なり。二郎神は秦の蜀将李冰の子にて離堆江を鑿て功あり。蜀の民以て李二郎を祠る。清の雍正五年詔して李冰を敷澤興済通祐王に封じ、李二郎を承績広恵顕英王に封ぜらる。既に康熙の間重修す。○左翼宗学 炒市にあり ○雙忠祠 石大人胡同にあり。乾隆御製雙忠の詩乃碑あり 都統贈一等伯諡襄烈傅清左都御史贈一等伯諡壮果拉布敦二人を祀る。○正藍旗官学 東四牌楼の南新開路にあり ○鑲白旗官学 斉化門牌楼胡同の内新開路坑にあり ○銅馬坊 東掖門の外にあり。昔慕容儁といふ者駿馬一疋を飼ふ。其毛色鱗白寿紋ありて甚だ之を愛す。後馬力並びなく隠れ死して甚だ儁の寵を受け年を重ねる事四十九年。然るに駁馬に比し工に命じて其の馬の像を銅にて鋳させ自ら讃の詩を作り頌と其像の側に刻り暗むべし。此像の成る日其馬卒にして死せり。儁即ち其の銅馬を此地に置き、故に銅馬坊の名あり。今其銅馬はなし。其古地も又其所は知れがたし。西直徳勝二門の外なるべしと其寄蹟なるを以て此に記して好事者の観に備ふ。

郡國志云。薊城南北九里。東西七里。開十門。燕慕容儁鑄銅為馬。因名銅馬門。



○関帝廟 羊尾巴胡同にあり。鼎一あり。明の萬暦乙巳の年作る所なり。又鐘一あり。是も萬暦癸未の年に鋳る。○維摩菴 黄華坊乃小啞巴胡同にあり。明の左光斗が碑あり。嘉靖の代の古刹なり。○清泰寺 大啞巴胡同にあり。明の正徳の間清泰の額を賜ふ。又嘉靖中鴻臚寺序班王璋が重修乃碑あり。○寶慶寺 雍正の間重修あり。○智化寺 黄華坊の禄米倉の東にあり。明の宦官王振が建る所なり。天順の間詔して王振が宮を復し、像を作りて寺中に置けり。清の代に至りて御史沈廷芳といふ人、王振は元国の臣なり何ぞ像を作りて祭るの事をせんやと其像を毀たり。又寺より西に石獅二あり。明の武学の遺址といふ。○禄米倉 南小街にあり ○正白旗官学 朝陽門の内南小街新鮮胡同にあり ○正白旗覚羅宗学 同所にあり ○證国寺 南小街竹竿胡同にあり。明の天順六年の建立なり。○老君堂 胡同にあり

以上朝陽門内鑲白旗護衛の界とし、以下は東直門内正白旗護衛軍の居址とす。

○大隆福寺 仁壽坊の東にて牌樓の大市街の西馬市の小隆福寺街にあり。明の景泰三年景帝詔して一万の人夫を役して是を建。且先帝英宗の舊宮を毀ち、南内の木石を穿ち、翔鳳等の殿を毀ちて其白石の基堂閣を飾して此隆福寺を造立せしめ給ふ。清朝雍正九年重修ありて喇嘛を住持せしむ。雍正帝御製の碑あり。○毎月九日十日乃両日此所に市あり。商賈物を寄せて集り、百貨をつらね、名付けて廟市といふ。京師乃諸市此所にまさりたる者なし。○普德寺 小半市の西口猪南にあり。俗に大佛寺と稱す。王府街の ○順天府儒学 教忠坊府学胡同にあり。此地は元の報恩寺といへる刹なり。元の季此寺破壊して傾きんとす。僧あり相議して潮潭の地に移さんと材を募り材を集めて京に帰り既に修理を加へ、其造営いまだ半ならざるに明の軍京師に乱入し、且士卒みだりにはじめて曰く、孔聖の廟とせんには損りに乱入をなさじと。乃ち孔子の本像を備へ寺中に置て孔聖の廟と称す。故に寺僧明の軍の命を受けたれども久しく徙る事なく、孔子の像を除かず。他の佛閣多く乱妨せられしかども此寺のみ全きことを得たり。明朝統一の代になりて、彼聖像を除かず、終に遷して儒学となし、今に至りぬ。○文丞相祠 府学胡同にあり。文丞相は文山と号し、人に明の宣德乃間有司に命して春秋両度の祭りをなさしむ。景泰中、謚を忠烈とたまふ。其像を改めて丞相の衣冠とし、添て祠を代々修る。清朝又謚を忠肅とたまふ。元歷代忠臣の祠と其ハ府尹の祭る所なり。いつの比より衣冠せしや。此祠の祭祀すつ乃服もまたこれを用ひる。文山が叢に日課の書祠傍に出て此祠にて板刑せしに至り今に存す。唯祠乃前に破れる屋の三間斗あり。内に衣冠を着せる塑像あり。元の宋の雲麾将軍李秀が像なりといへり。則ち唐の李邕が書る碑の断たる二塊を以て礎とし、秘むつ此祠堂の右に石刻の像あり。易を抱てこれを得るを写す。其ハ易に孔日成仁、孟曰取義乃数語を彫刻む。○正白旗覺羅宗学 東に牌樓乃東にあり。明代羽士ここに居りて嶽を祀れて後ち、五嶽乃真形の圖を供せり。嘉靖間工部侍郎張嵩が碑文あり。○正白旗護軍統領署 十條胡同にあり。○五嶽庵 同所にあり。

○大慈延福寺 思城坊齊化門大街にあり。明の成化年中に建る所なり。乾隆三十六年重修ありて御製乃碑あり。天地水府の三元神を祭る。

朝陽門 内城東乃大門なり。元の代是を齊化門といふ。明の正統年中今の名に改む。元の代の末る時、明の大将入りて元朝の臣丁好禮といへる者を召して用ひんとす。好禮義を守りて肯く給はず。明乃兵士等強て好禮をとらへて東に歩せ、この齊化門に至りし所、好禮終に屈せずして此所に死せり。○元乃代寅賓里の大廟の西に安楽寿房といへるあり。居士蕭文正乃建る所なり。居士ハもと山陽の人なり。至元の間乱あり、兵火の為に延らへく、開平といふ所に逃る。唯其老母ありて相別ることを恨とし、朝夕南を望て歎くる間、後にこれより葷酒を絶て佛を念じ、来まて安楽寺乃滿禅師乃名を学び、後世の祀しけりしを聞て安楽寿房と建て己が母の善提を弔ふ。其いとまあるは母を後へ園にのうひたづね梨木を植て世を楽む。至元二十七年正月七日沐浴し衣を改め頌を作りて佛乃来迎を待つ。咏に室中より向ふ虹るびき屋中にまでうるりて、橋乃ごとし。居士端座拱手して逝去りたりし。安楽寿房慶して法とすといへども、昔の寅賓里といへる地ハ今の思城坊之東にして此所安楽寿房の旧地なるべし。

○正白旗滿洲都統署 胡同にあり。

○六倉 南新倉、舊太倉、富新倉、興平倉ハ俱に朝陽門の内、小小街の東にあり。海運倉、北新倉ハ小小街乃ひがし、東直門乃近きにあり。

○慧照寺 小小街の北口にあり。其巷を慧照寺胡同といへり。明の成化中僧延結といへる者、永寧伯譚氏が家宅を寄附してこれを建る。

○以上東直門内正白旗護衛乃界とす。以下ハ安定門内鑲黄旗護衛軍の居址とす。

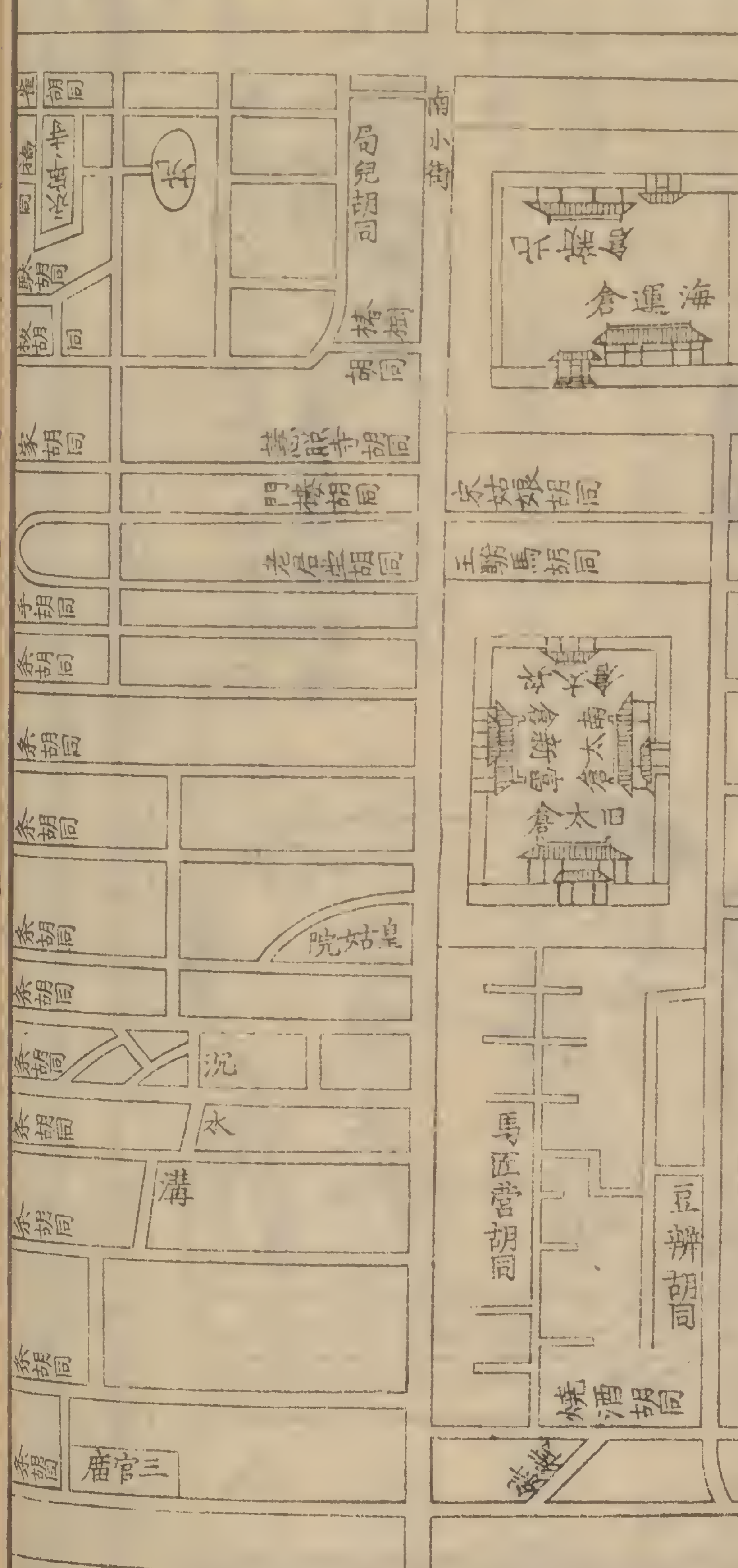
○鑲白旗正白旗乃下に公廨府第寺院廟祠等其説の祀をべき事有る者、物数多く皆略して此に載せず。

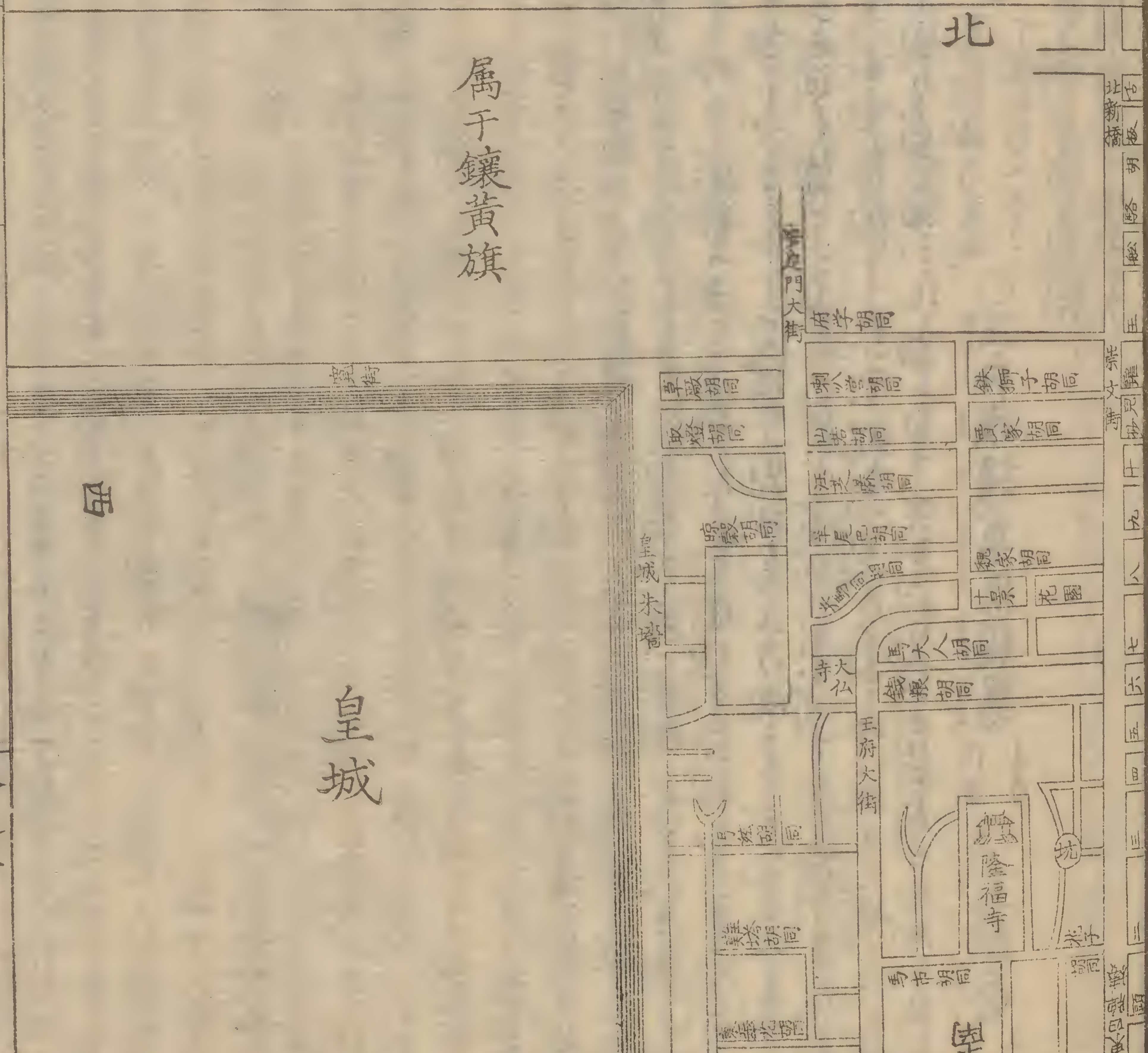
正白旗居址

満洲蒙古漢軍三の正白旗、鑲黄旗と界を接る所は、府学胡同より南に向ひて牌楼豹房胡同にいたる。棉花胡同・循大街より大仏寺乃西北の角にいたるまでを満洲の頭参領に属せる佐領十七人乃居址とし、大仏寺西北の角より豹房胡同の西口にいたるまでを満洲乃二参領に属せる佐領十六人の居址とし、皇城東辺の寛街・草廠胡同・取燈胡同・喉穀胡同・弓弦胡同・双塔胡同等を満洲の三参領に属せる佐領十六人の居址とし、両大街にある所乃鐵獅子胡同・賈家胡同・汪芝蔴胡同・魏家胡同・十景花園・馬大人胡同等より老児胡同・喇叭営にいたるまでを満洲四参領に属せる佐領十六人の居址とし、馬市によりて東にすゝみ、牌楼・隆福寺乃周囲にある細小胡同にいたるまでを満洲の五参領に属せる佐領十六人の居址とし、凡満洲正白旗の参領五人、佐領八十一人、軍丁二万にして三百人なり。

○府学胡同乃東口より大街にいたるまでと又條胡同にいたるまでを蒙古の頭参領に属せる佐領十五人の居址とし、又條胡同より北牌楼にいたるまでを蒙古の二参領に属せる佐領十七人の居址とし、凡蒙古正白旗の参領二人、佐領二十九人、軍丁八千七百人なり。

○新橋大街より東直門にいたるまでを漢軍の頭参領に属せる佐領十人の居址とし、北新倉・海運倉・興平倉・南新倉・旧太倉・富新倉の六倉門に相近きあたりを漢軍の二参領に属せる佐領十人の居址とし、東直門の南小街乃小口より新板胡同にいたるまでを漢軍の三参領に属せる佐領十一人の居址なり。北新橋大街の六條・七條・八條・九條・十條胡同を漢軍の四参領に属せる佐領九人の居址とし、小小街の頭條・二條・三條・四條・五條は漢軍の五参領に属せる佐領九人の居址とし、凡漢軍正白旗の参領五人、佐領四十九人、軍丁一万にして七百人なり。満洲蒙古漢軍の三軍都合に万七千に七百人なり。



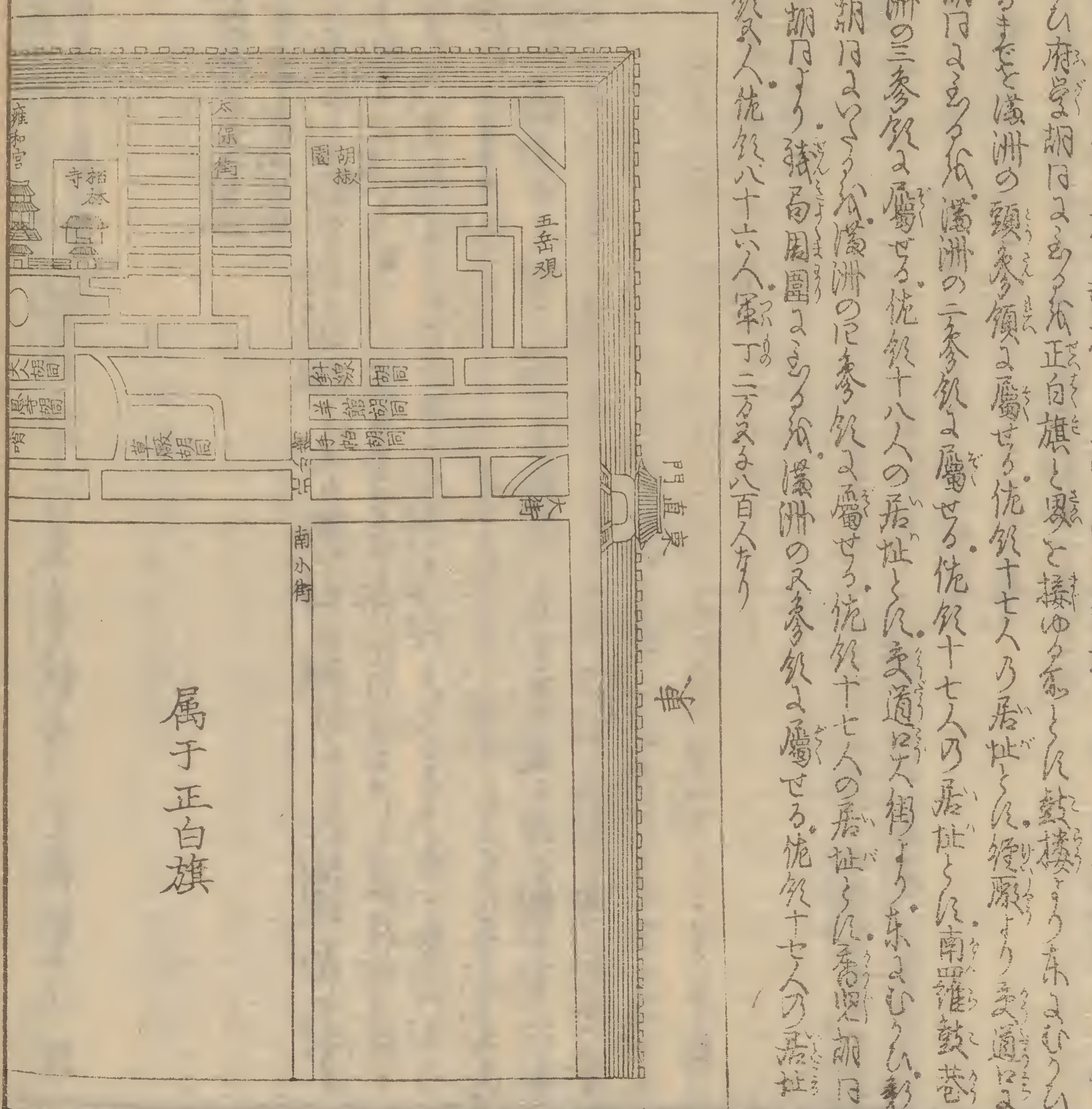


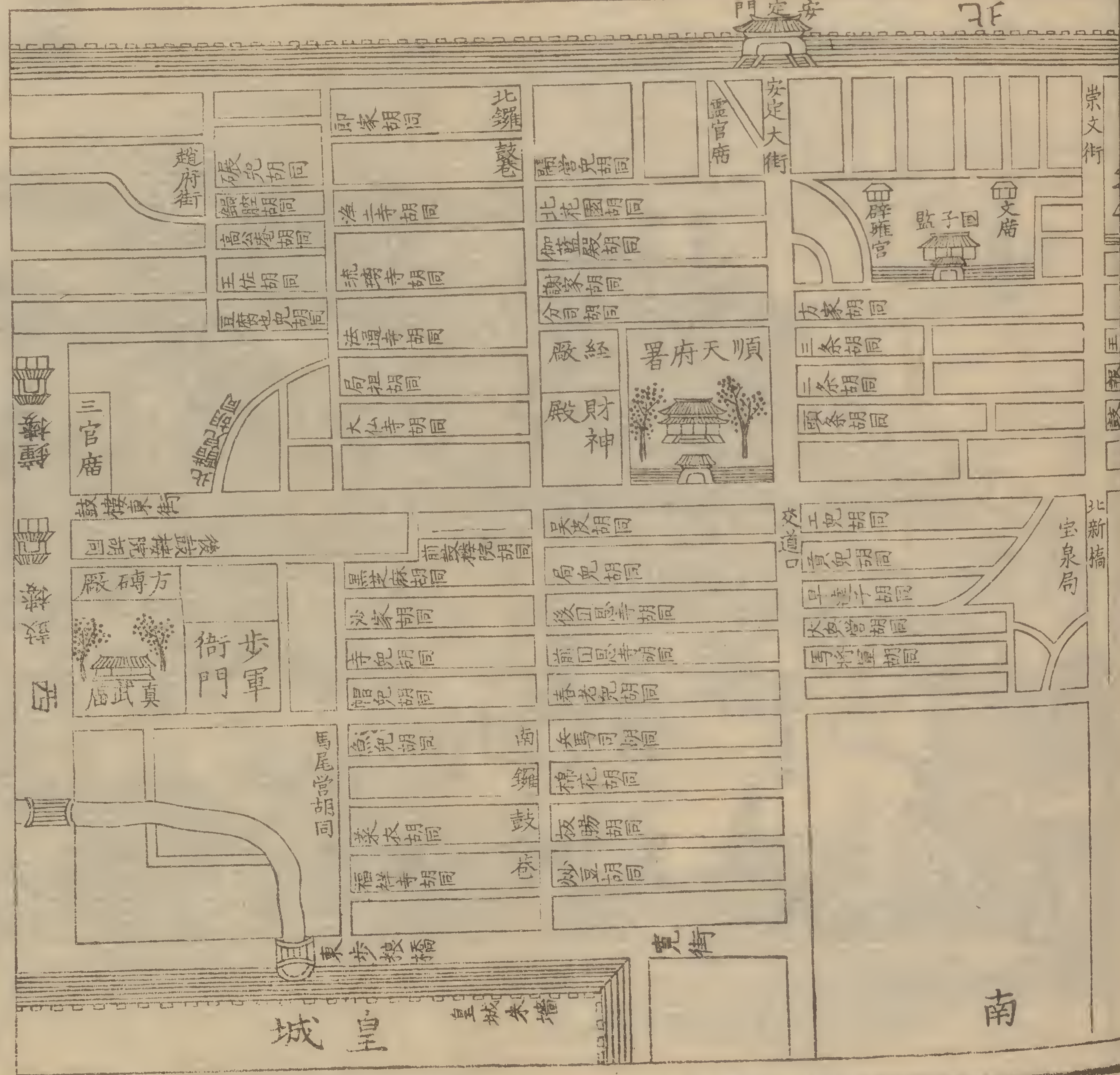
鑲黄旗居址

滿洲蒙古漢軍三の鑲黄旗ハ鼓樓より東にゆひ新橋にいたり新橋大街の西は撫擬より南にゆひ府学胡同にいたるまで正白旗と界を接ゆるところ鼓樓より東にむかひ大街にいたりて經廠にいたるまでを滿洲の頭参領に屬せる佐領十七人の居址とし經廠より交道口に又さかひ南に轉じ棉花胡同にいたるまでを滿洲の二参領に屬せる佐領十七人の居址とし南羅鼓巷の北口より南にいたるまでを滿洲の三参領に屬せる佐領十八人の居址とし交道口大街より東にむかひ新橋に至りて南に轉じ香兒胡同にいたるまでを滿洲の四参領に屬せる佐領十七人の居址とし香兒胡同の東口より南にゆひ府学胡同より錢局周圍にいたるまでを滿洲の五参領に屬せる佐領十七人の居址とし凡滿洲鑲黄旗の参領又人佐領八十六人軍丁二万又千八百人なり

○交道口大街より西にむかひ安定門にいたるまでを蒙古の頭参領に屬せる佐領十四人の居址とし北羅鼓巷より西辺にいたるまでの倒海胡同經樹數子亭謝家胡同伽藍殿法通寺淨土寺豆腐池兒胡同高吉巷郎家胡同鴉兒胡同を蒙古の二参領に屬せる佐領十四人の居址とし凡蒙古鑲黄旗の参領二人佐領二十四人軍丁七千三百人なり

○新橋大街より西にむかひ方家胡同にいたるまでを漢軍の頭参領に屬せる佐領十八人の居址とし方家胡同より西にむかひ城根にいたるまでを漢軍の二参領に屬せる佐領十一人の居址とし國子監の東頭條二條三條胡同方家胡同國子監大溝巷蕭家胡同を漢軍三参領に屬せる佐領十一人の居址とし栢林寺の東の鼓嘲胡同並慶王大人胡同を漢軍の四参領に屬せる佐領十二人の居址とし北小街の南口より城根の胡撫園の周圍及帽胡同針線胡同等の寬街を漢軍の五参領に屬せる佐領十人の居址とし凡漢軍の参領又人佐領十三人軍丁二万又千九百人なり滿洲蒙古漢軍合して凡一万八千九百人なり







鼓樓（ころう）
鼓樓西大街

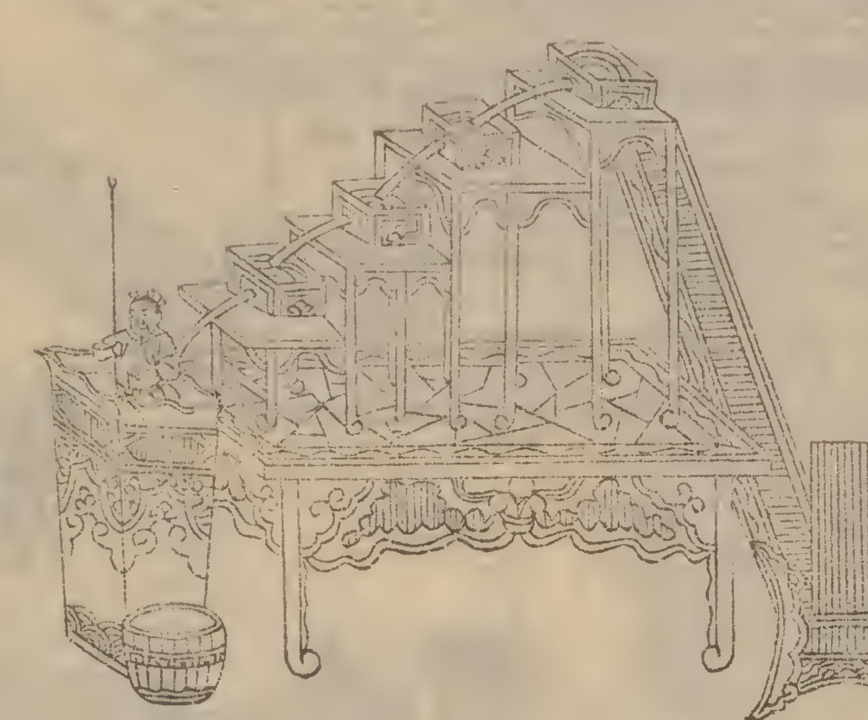


南海子
望湖亭
鼓樓大街
鼓樓東大街

○鼓樓 地安門の内金臺坊にあり元の時齊政樓といふ樓の上に銅をもて作れる刻漏あり其製極めて精妙なりしと古老の語り傳へたり今は時辰香を以て時を測り刻漏を用ひず然れども漏壺室は尚存せりといへども刻漏は亡びたり○鼓樓は都城の鎮護にして元の内城の正中なり樓の下三の門あり東西の衢は皆針線鋪みちて西の斜街より南海子にあるまで悉く鼓臺酒館をつらね其中には皆酒肆あり京師の人ここへ来て遊宴の地なり左右の屋上には奇異の鍾鼓其外紫山殿前閣にあり其上を臨みて望む[illegible]さかりの賑はしさ京師の繁花を見るべし元代此樓を齊政樓と名付る時刻をさだむる所なればなりいふ書への璇璣玉衡以齊七政といふ義をとりて名付けり

古制漏壺之圖

漏刻之制爲銅漏壺四上曰天池次曰平水又次曰萬分下曰收水中安鐃神設機械時至則每刻擊鐃者八以壺水漏爲度涸則隨時增添冬則用溫水云



御溝流水暁潺々直似長虹曲似環流入宮墻才咫尺便分天上與人間
元馬祖常御溝春日作 紫鳴門書

○鐘樓 金臺坊の東にあり即ち萬寧寺の中心閣元の至元年中に建る所といへども其地詳ならず明の永樂年中に建其後火災に係り清の乾隆十年に改建らる則御製の碑あり抑鐘樓の製雄敞高明東西南北の衢道最も廣闊なりやうれば八隅に各の号あり○萬寧寺 金臺坊鼓樓の東偏にあり元の大德年間に建成宗皇帝の御像を奉安し穹碑二あり各二丈余あり又堂中に秘密の塑像一あり其形容きはめて醜く陋し布爾罕皇后此に詣で其像の醜さを恥ぢ幗をもて像の面を掩ひ遂に是を祝髪して宮に帰りて人と逢はずとの像を毀しむ布爾罕は蒙古の語にて佛のことなり○慈恩寺 鼓樓大街の東にあり明の萬暦の間勅建を頒ちたまひ寺に勅書一通及び通政司参議の碑あり清の康熙の間再修る清の聖祖皇帝御書の額あり○顯佑宮 皇城地安門の西北にあり眞武の神を奉じ明の永樂年間に建成化間修造し後に碑あり清朝雍正九年重修し領侍衛内大臣數拱大臣都統尚書等の官をおくりて祭りを致す乾隆帝御書の額幷に御製の碑あり宮は南に向て周垣を繞らし正殿又間基たかく石闌あり三の陛を設く中はは九級左右各七級あり後殿又間廊門三間顯佑門三間なり○正殿 兩廡みな各又間殿の前左右に碑の亭各一西東の燎爐一ツあり又間廊門の内東西に鐘鼓の樓各一あり廊門の外牌坊あり其正殿の殿門樓後に玉琉璃の瓦を覆ひ餘の殿は瓦を覆ふ門楹は丹雘を塗り楹は又色を用ひてこれを飾る○萬寧橋 河を俗に後門橋といふ鼓樓の南にあり是を澄清閘といふ即今後門橋と称し金水河是より東南に流れ東歩粮橋を經て皇城の東南に出づ右は今俗に指揮衙門といふ内城の九門の啓閉を掌る○歩軍統領衙門 顯佑宮の

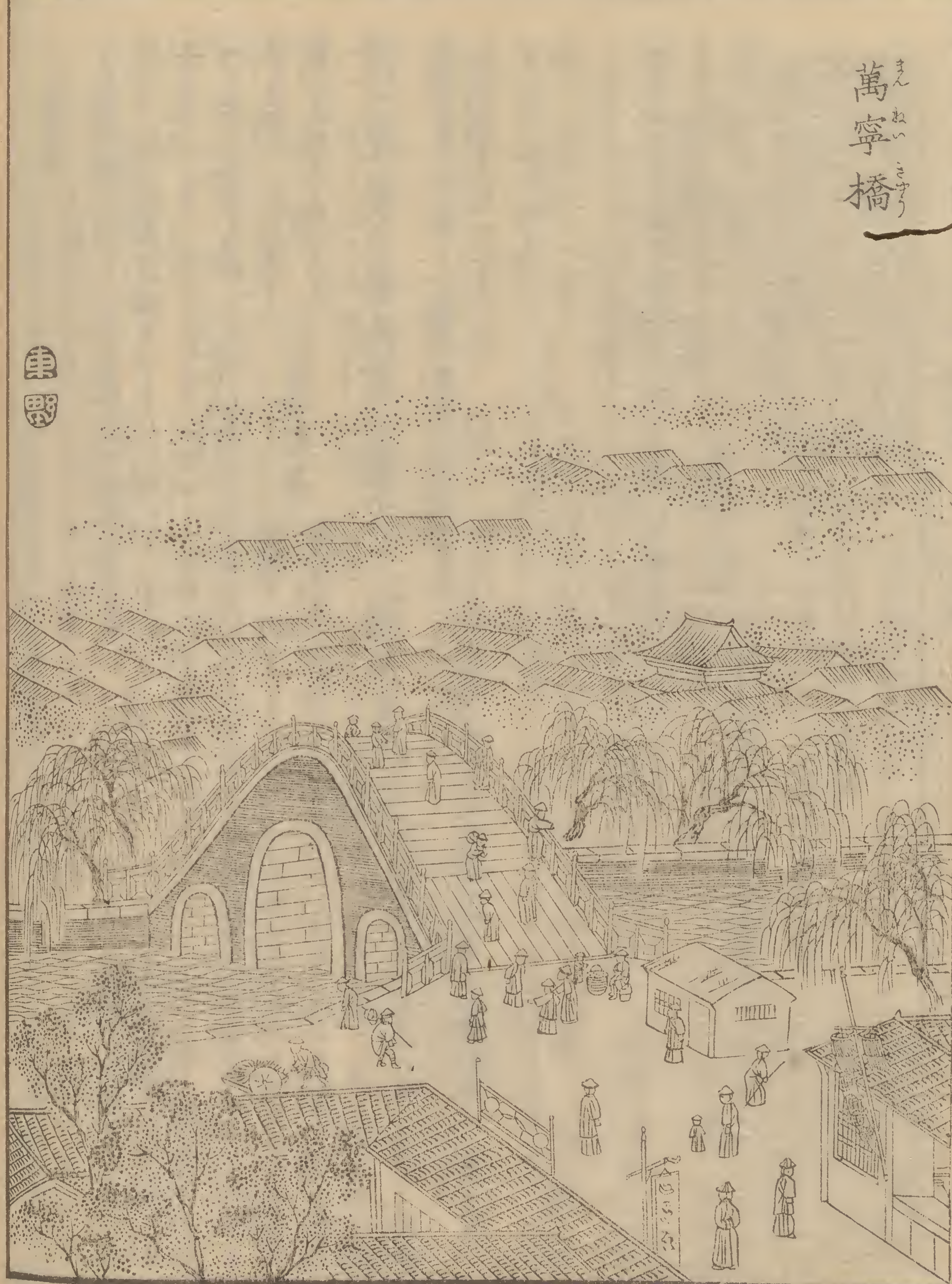
○福祥寺 澄泰坊の蓑衣胡同にあり。皆に蓑衣寺と號す。明代の碑二あり。○文昌宮 澄泰坊の帽児胡同にあり。西の方は井の路なり。○圓恩寺 照回坊の圓恩寺胡同にあり。元の至元中にこれを建つ。西に慶慈庵の碑あり。延壽十方院、永泰寺、寶光陳の寺あり。○鑲黄旗官学 安定門大街圓恩寺胡同にあり。○千佛寺 金臺坊順天府治の西にあり。明の正統の間、吉祥寺の跡と號す。今徳勝門の内に小さき佛寺あり。○寶泉局西廠 北鑼鼓巷にあり。○法通寺 佛寺胡同にあり。

元の至元の間に建つ。明の成化年中再建して淨業寺と云ふ。清朝康熙年中修営を加へ改め名けて淨因寺といへり。康熙帝御書淨因寺指花正覺乃二の額あり 侍讀学士查昇が撰ひたる石碑あり ○慈隆寺 教忠坊高公胡同にあり。明の洗馬朱國祚が宅址

順天府署 鼓樓の東霊椿坊安定大街の西にあり。元の代の大都路總治の舊署也。明の代改て順天府署となし、清朝これによるとなり、又順天府署と云ふ。雍正帝御書の額あり。肅清畿甸と云。兼管府事大臣一人、府尹一人、丞一人、治中一人、通判、經歴、照磨、司獄、知事、大興縣知縣、宛平縣各一人あり。

天心堂 順天府署の後にあり。内に兆洞あり上に…那國古經の圖あり。… 其中央道を…… 方位を…… 即漢書にいへる…

○劉猛將軍祠 順天府治の西。將軍は呉州の人にて名は承忠といふ。…… これを祀る。清の雍正三年、勅して此祠を建つ。



○靈椿坊　北城の武衛を司る坊なり。是古跡の靈椿坊は城の西にありしも、或は昌平に在ともいふ。又涿州にありといひ、又薊州にありともいへり。今北城の靈椿坊は疑くは元代賈十郎が園墅なるべしといへり。

元　張翥　買屋靈椿坊詩

五槐濃緑蔭門前東宇西房十數椽不是袁翁買屋住歸時留作催船錢

○鑲黄旗滿洲都統署　安定門大街交道口にあり

安定門　内城北の東にある大門なり。元代安貞門といふ。永樂の頃今の名にあらためらる。○鑲黄旗漢軍都統署　安定門の大街にあり　○大興縣署　安定門の東胡同にあり

安定門の内通に南教忠坊あり。秦の薊縣の地なり。遼は此地を析津といふ。今は大興と名く。元明之に據て大興といふ。○鑲黄旗覺羅宗學　安定門内胡同にあり。

○寶泉局　小新橋南大街の路西にあり。後に鑄錢倉たり。○鑲黄旗蒙古都統署　小新橋南大街にあり。○開元寺　崇教坊南

小新橋の路西にあり。唐の開元年中に建る所の古刹なり。明の代に勅して慈明寺といふ。清の乾隆三十年重修し勅して慈壽寺と改め給ふ。○國子監　安定門の東南崇教坊の西なり。明の永樂の間に設て國子監とし、中を彝倫堂といふ。康熙帝御書の額、御製聖祭酒箴あり。又雍正帝御書の額あり。文行忠信といふ。東の廊を繩愆廳とし、又鼓房といひ、別に率性堂・誠心堂・崇志堂あり。西を博士廳といひ、講房あり、修道堂あり、又正義堂・廣業堂あり。各扁額諸列聖及び乾隆帝の辰翰なり。又御製聖蒙南學の碑あり。○元國子監　滿人漢人各一人。司業滿洲蒙古漢人各一人おく。成均の法を掌る。以て國子及び俊選の士に教ることを司る。又監丞廳官あり。學規を掌る。教課を總し勤惰を糾し廩餼を均しく。又博士官あり。經説を闡明し講述を助く。典簿官ある。簿書を掌て文移の出納を考へ、典籍官ある。經史を掌る。滿洲の繙譯を總べ、又八旗官学あり。助教

官滿人十六人、蒙古八人を置て八旗の子弟を分ち教ゆ。算法館あり。学生に算法を教ゆ。俄羅斯学あり。俄羅斯の子弟を教ることを掌る。璧雍宮　乾隆五十年璧雍宮を國子監の集賢門の内に建らる。宮制四面に出宮の廊あり。環池あり。橋にて之を繞ん。南に丹陛をつくり、孫勇に琉璃の牌樓一、碑亭二、鐘鼓樓二あり。乾隆五十年春二月上丁皇帝親此に幸して釋奠の禮を行ひ給ふ。御製國学新建璧雍圜水工成の碑記あり。又釋奠の後新に建し璧雍に臨み学を講する御製の詩に首及び御製三老五更の説あり。皆石に勒す。○國子監儀門の内に宋の蘭亭の記帖に樂毅論、明の王月卿が丁香花の詩の石刻、元の代題名せる碑三、明の代題名せる碑七十六を藏む。

○國子監の庭に古柏樹あり。元の祭酒許衡が植る所なり。

先師廟　國子監の東にあり。南に御橋、櫺門　三間。西を持敬門といふ。一間西にむかふ。大成門　五間。崇基石闌中は三門。左右の陛あり。左右は戟二十四、石鼓十。石鼓の文韓愈の歌一首を刻む。左右の門各一門。内東西の列舍各十一間。皆北に向ふ。大成殿　先師孔子十哲を合せ祭る。正面は十二級。東西は各十七級。両廡は各十九間。東と西に向ふ。殿の廣さ七間。崇基石闌三の陛。列舍各十一間。南に向ふ西廡の南に御碑亭あり。甬道の左右に八の亭あり。神廚　五間。東に向ふ。御碑亭西北にあり。神庫　五間。東に向ふ。燎爐一あり。西北に瘞坎一あり。致齋所　東三間。東西の間に更衣亭一、皆大成門の外西にあり。先正殿正門御碑亭は皆黄琉璃の瓦を覆ふ。崇聖祠　正殿五間。東西の餘屋は各三間。燎爐一。廟門三間。南に向ふ。圍垣一重。門みな西に向ふ。先正殿の正門は皆しく緑琉璃の瓦を覆ひて其門欄は丹雘なり。廟御門の外東西に下馬牌各一あり。每歳春秋仲月上丁天子親ら此廟に詣で釋奠の禮を行ひ給ふ。○様式一、雷紋壺一、子爵一、内言卣一、康侯鼎一、盟簋一、雷紋觚一、召仲簠一、素洗一、犧首罍一。皆周の代の法物なり。乾隆三十年大成殿の庭に列して永く設く。

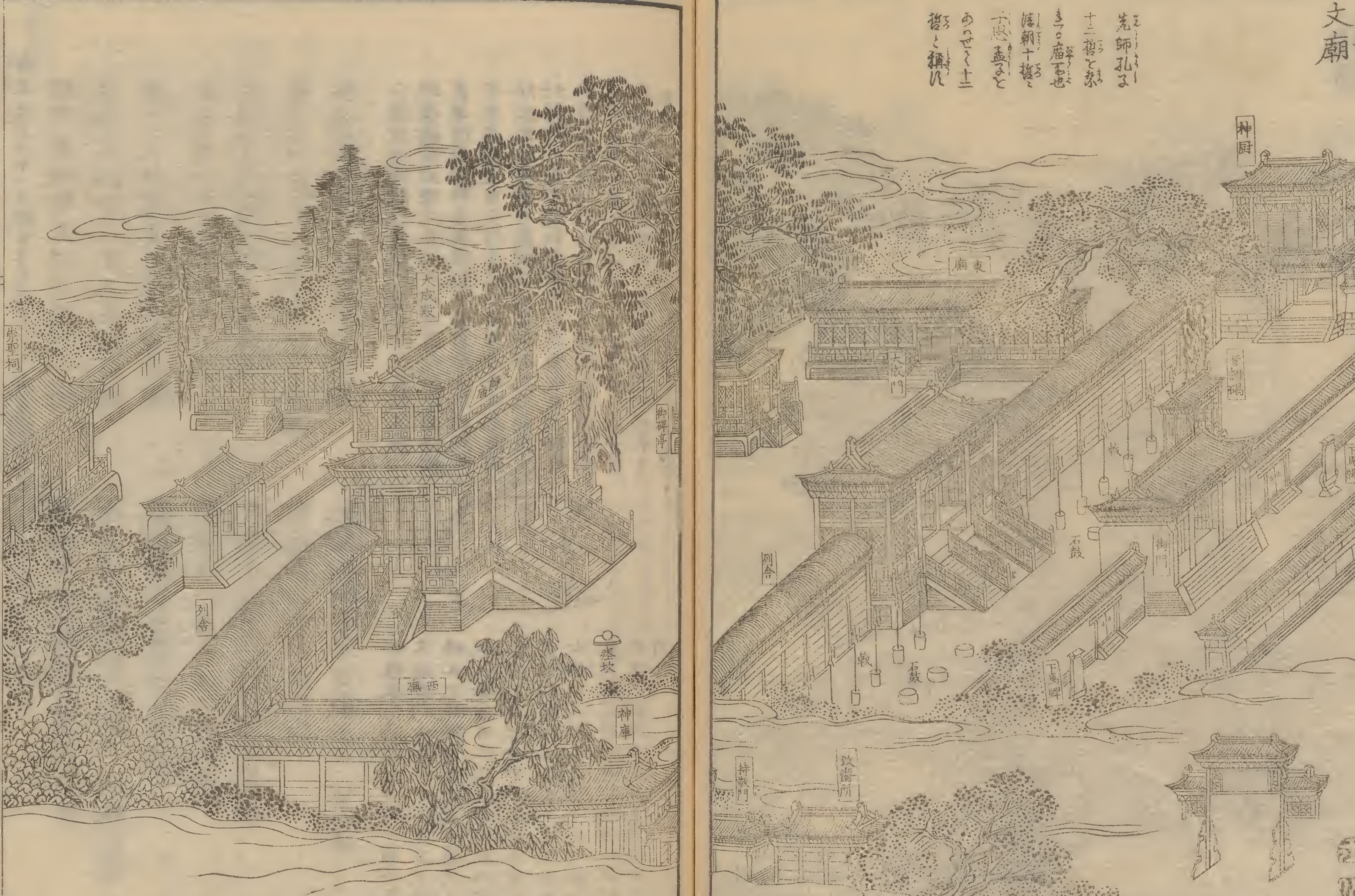
辟雍宮

天子の材と学び礼を行ふ所なり古へより辟雍と云ふ四方に水を引て周牆を設けし諸侯の学舎は泮宮とて泮水を三方に引く辟雍の半なりといへれ義也




文廟

先師孔子十二哲を祭るの廟也清朝十哲に有子孟子とあはせて十二哲と稱し



御屏亭の中に勅をうろものなれ十八あを記を

康熙帝御製至聖先師孔子賛

康熙帝御製平定朔漠告成碑

雍正帝御製平定青海告成碑

乾隆帝御製釋奠詩凡五碑

乾隆帝御製重修　文廟碑

乾隆帝御製平定準噶爾告成碑

乾隆帝御製平定回部告成碑

○陳設大成門内石鼓之圖并吳苑石鼓之歌

辟雍鐘鼓羅俊奇恭臨六館重皋比廇楹洒掃釋菜畢顧視石鼓環廡墀彭亨菌蠢數盈十刻画文字無禹彝文百二行字五百從甲至癸究無遺始終記述漁狩事中載策命諸臣詞細文浅刻堅且好閲三千載光娥義曽経炊爨受風雨豈用蟠負承鼇螭韋韓二蘇添大筆助流宝氣長赫曦周宣王時史籀作車攻吉日堪肩随篇章排比類吉甫体源質古趨相斯誰何小儒恣評駁不究根本多然疑先秦西魏駕空説嗤點欲使成瘢疷自來神

康熙帝御製顏曽思孟四子賛

雍正帝御製仲丁詣祭　文廟詩碑

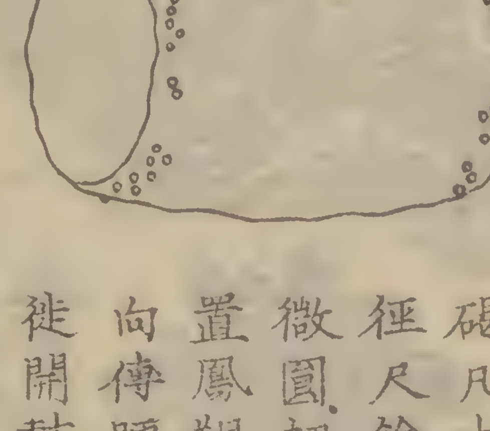
乾隆帝御製臨雍紀事碑

乾隆帝御製太學古槐詩碑

乾隆帝御製平定金川告成碑

乾隆帝御製伊犁勒碑

乾隆帝御製平定兩金川告成碑



明愼蒙名勝記云石鼓在國子監文廟戟門内左右世傳周宣王獵碣凡十辞類風雅字畫蓋籀文大徑尺餘高可三尺其形似鼓而頂微圓初在陳倉野中唐鄭餘慶遷置鳳翔縣学而亡其二宋皇祐間向傳師求得之十鼓乃足大觀中徙開封置辟雍靖康末金人取歸燕置大興府文廟元皇慶初移今所

物多隠見晩出往々千秋垂周官左氏佑六籍卵金専門業詆諆至今首冠甲乙庫儒生穮蓘如畬菑撫茲鼓質寂麗厚琱琢山骨窮巖厓雍城々南久托迹蛟鼉鸞鳳藏瓌姿辞嚴義密難諷讀句奇語重誰思維鴻生鉅学茫不識任春烟鎖秋風吹縱敲牧火礪牛角却免摸搨傷皮肌譬如深山石犖确歳月久遠無成虧文王紐在禹追蝕其故豈屬声音為自唐迄今始的皪日星雲漢光天逵高駝巨艦凡四從終然碁置文宣祠百靈呵護神作合傳万々世遐無期方今天子闡絶学玉函金版皆繙披詎惟琱辞追雅頌直使鉄畫倖緜芝黼帷丹扆多制作慶雲五色紛葳蕤黄支烏弋遠受吏海外来学航於茲峩々髦士拂芹茆軌度粛整趍委蛇聖謨文治四洋溢浩蕩匽匪無津涯謌蒐前制載編牒或按周典揚戈麾感靈宣暢謦函夏珊弓彤矢斑陸離從臣才藝敢誇詡稽首拜献成功詩天球琳瑯刻金石潤色鴻業華姚嬀炳麟煌煒照六合焯然此事有戦司研捜故実更参考名為石鼓良乗冝建康天発石三截壁禹岣嶁堪旁推石形似鼓制非鼓徇迹忘本差毫厘摩挲彷彿古人意定作闕武岐陽碑

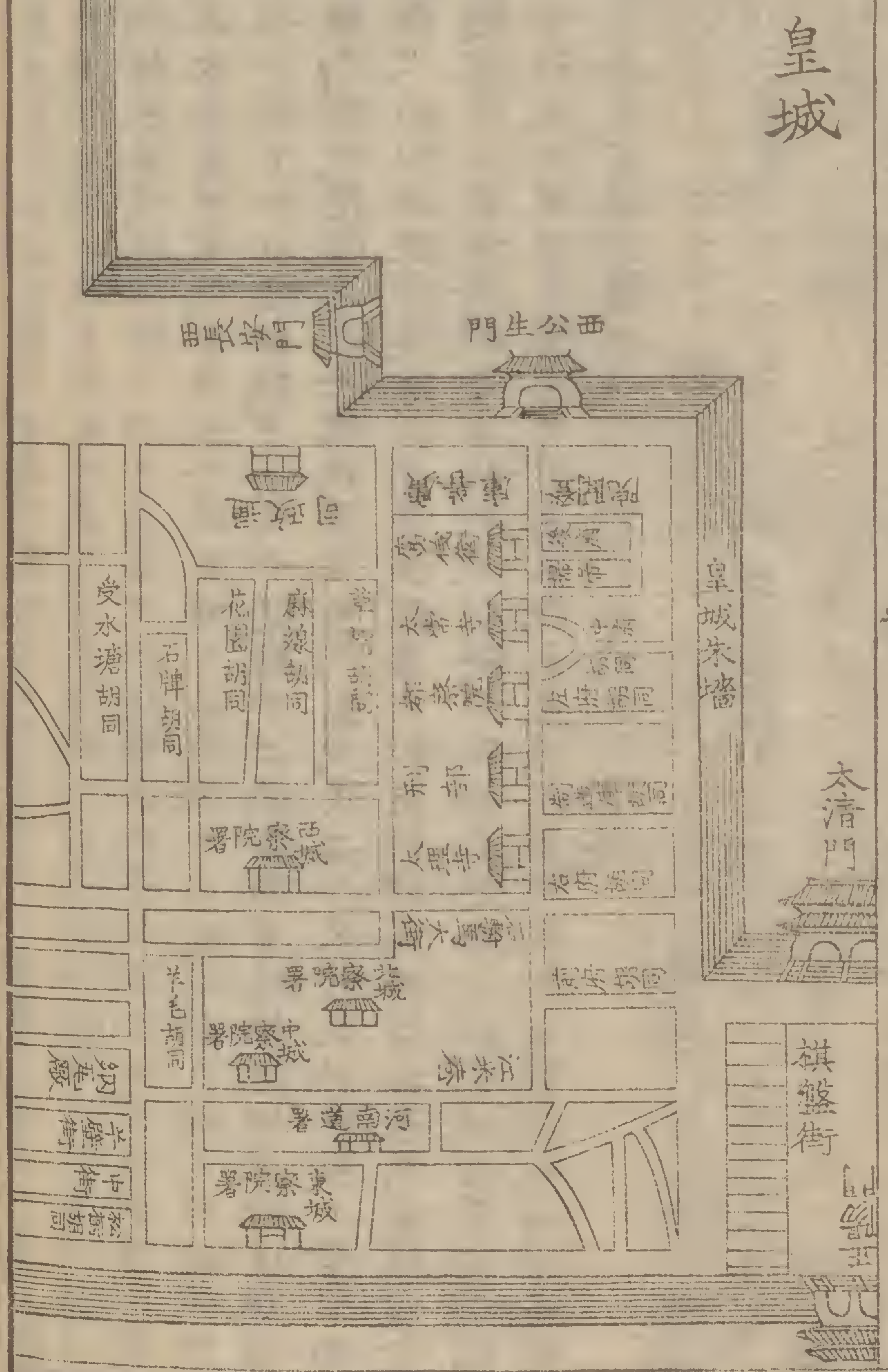
○雍和宮　小彩橋の東北、栴檀寺の西にあり。雍正帝のはじめ在せし所なり。前を昭泰門といふ。次に雍和門あり。門内に天王殿、雍和宮あり。後を永佑殿といふ。又其後に法輪殿あり。西ハ戒壇、其後ハ萬福閣、東ハ永康閣、西を延寧閣、後を綏成殿といふ。又雍和宮の西の後に関帝廟あり、東に観音殿なり。○雍和宮の東に書院あり。門三間内を平安居といふ。後に堂あり。其の後を如意室といふ。室の後に正南に向ふを書院正室といふ。雍正帝御書なり。和斎の家あり。斎の東南を靄筋といふ。正室と五福堂といふ。斎の西を滋亭院あり。北に長房之其後ハ延樓、西ハ斗壇、壇の東に佛樓あり。東に平安室、ひがしに佛堂なる。

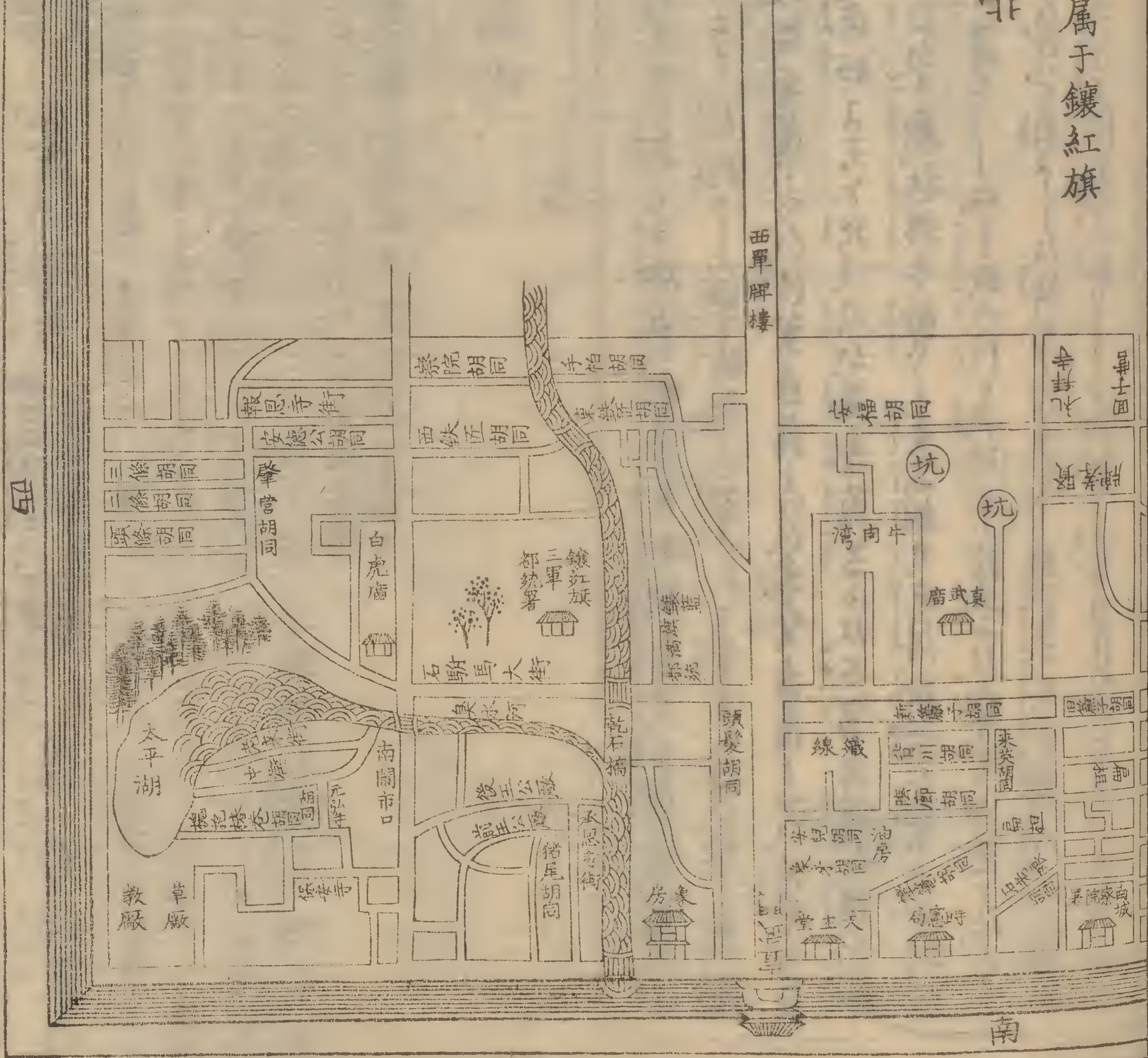
○栴檀寺　國子監の東北、元の至元七年に建。今雍和宮に隣近し。康熙の間修造し。堂に額あり萬古栴檀といふ。即康熙帝の宸翰也。餘殿の額も皆雍正乾隆両帝の御書なり。乾隆の間重修ありて御製の碑あり。又西に行宮あり。額を心香室といふ。○五岳観　五岳観胡同の南にあり。明の吏科給事中、呉文燦が碑あり。

東直門　内城東の北の大門なり。元の代これを崇仁門といふ。○以上安定門内鑲黄旗護衛の界なり。以下ハ鑲藍旗宣武門内護衛軍の居址なり。

鑲藍旗居址

滿洲蒙古漢軍の三の鑲藍旗ハ西の方界を鑲紅旗と接る。西單牌樓より宣武門にいたり、金水橋より西にむかひ大城根にいたるまでを鑲藍旗纛の所とす。○長安街牌樓よりひがしに向ひ西長安門にいたり、金水橋にいたるハ滿洲の頭參領に屬せる佐領十八人の居址とし、旧刑部街よりむかひ長安大街中府右府に距る安の四圍にいたるまでを滿洲の二參領に屬せる佐領十八人の居址とし、河漕より東に向ひ石駙馬胡同文昌閣拴馬莊馬神廟胡同にいたるまでを滿洲の三參領に屬せる佐領十八人の居址とし、獅子口より東に向ひ後市南口を西に轉じ擇第胡同の西にいたるハ滿洲の四參領に屬せる佐領十七人の居址とし、西單牌樓より南に向ひ東に轉じて六部口神廟胡同關帝廟胡同牛肉灣にいたるまでを滿洲の五參領に屬せる佐領十七人の居址とし、凡滿洲鑲藍旗の參領官五人、佐領八十八人、軍丁二万六千五百人なり。○宣武門より鐵線胡同の西口油房胡同南拴馬莊梁家園胡同象坊街にいたるまでを蒙古の頭參領に屬せる佐領十三人の居址とし、中街東鐵衚衕細尾殿彰義胡同養馬胡同にいたるを蒙古の二參領に屬せる佐領十二人の居址とし、凡蒙古鑲藍旗の參領官二人、佐領二十五人、軍丁七千五百人なり。○西單牌樓より抱子街東口より西口にいたるハ漢軍の頭參領に屬せる佐領五人の居址とし、半截胡同の東より西口にいたるハ漢軍の二參領に屬せる佐領八人の居址とし、鐵匠胡同の東口より西口にいたるハ漢軍の三參領に屬せる佐領八人の居址とし、石駙馬大街東口より報子胡同にいたるハ漢軍の四參領に屬せる佐領五人の居址とし、?胡同の東口より西に向ひ豆胡同にいたるを漢軍の五參領に屬せる佐領八人の居址とし、凡漢軍鑲藍旗の參領官五人、佐領二十二人、軍丁六千六百人なり。凡三軍合して四万七百人なり。





○振武坊 正陽門の内棋盤街の西、西江米巷の東にあり。○鑾儀衛署 闕の西西長安門の西にあり。東ハ即ち明の錦衣衛也。雍正帝御書の額あり。膽恭輿衛といふ。掌衛事内大臣・鑾儀使満人二人、漢人一人、總官として鑾輿の供奉・鹵簿の秩序を掌る。属とする所左右中前後の五所あり、又馴象所あり。旗手一衛あり。其左所ハ輦輅の事を掌る。右所ハ繖蓋・儀刀・弓矢・槍・殳の事を掌る。中所ハ旛幢・麾・節・仗・戟を掌る。前所ハ扇・拂子・盥・合・交椅・杌・轎・星・拂・仗・静鞭・瓜等を掌る。後所ハ旗・纛・五色旗等を掌る。馴象所ハ儀象・鞍・轎・駕・鹵簿・鐃歌大樂を掌る。旗手衛ハ金・鉦・鼓・角・鐃歌大樂・前部大樂を掌る

皇帝大駕鹵簿圖式

鹵簿ハ天子乃天地を祀る者廟及び朝日・夕月・耕耤・先農の祭式ハ朝會式ハ巡狩等ニ設けらる列なり。鑾儀衛乃署これを掌りて陳ね設く。鹵簿ニ四等あり。大駕鹵簿といひ法駕鹵簿といひ鑾駕鹵簿といひ騎駕鹵簿といふ。凡皇帝南郊ニ天を祀り及び萬壽節等ニハ大駕鹵簿を陳ね北郊ニ地を祭り及び太廟・社稷を饗し・堂子・朝日・夕月・耕耤をまつり、大朝會等ニハ法駕鹵簿をつらね皇城の内を巡行しその他ハ鑾駕鹵簿を陳ね遠く省方を巡狩行ひ或ハ大閲などすには騎駕鹵簿をつらね又皇太后・皇后の列行と儀駕鹵簿といふあり。各大同小異にして其大概ハかくのごとし。故ニ大駕鹵簿の圖を此ニ出して其餘を略す。

一 黄龍大纛 一

二 導象 四
民尉二十八人

三 寶象 五
民尉八十八人
雲麾使一人
治儀正二人



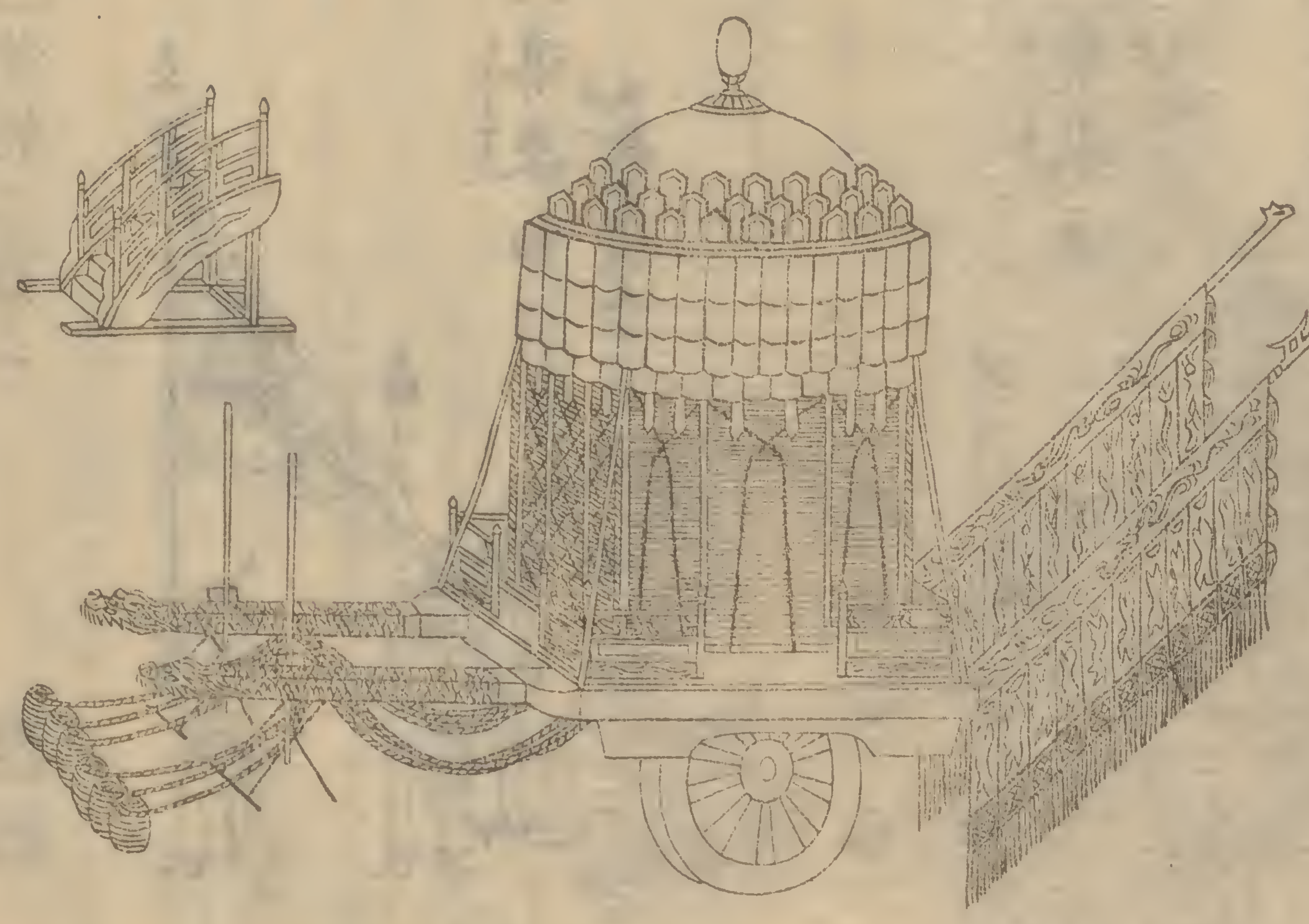
四 伏馬 十
民尉十四人
治儀正一人

五 静鞭 四

六 前部大樂
大銅角 四
小銅角 四
金口角 四
和聲署史十二人



七 革輅一 駕馬四 民尉三十三人



九 象輅一 駕馬八 民尉三十二人

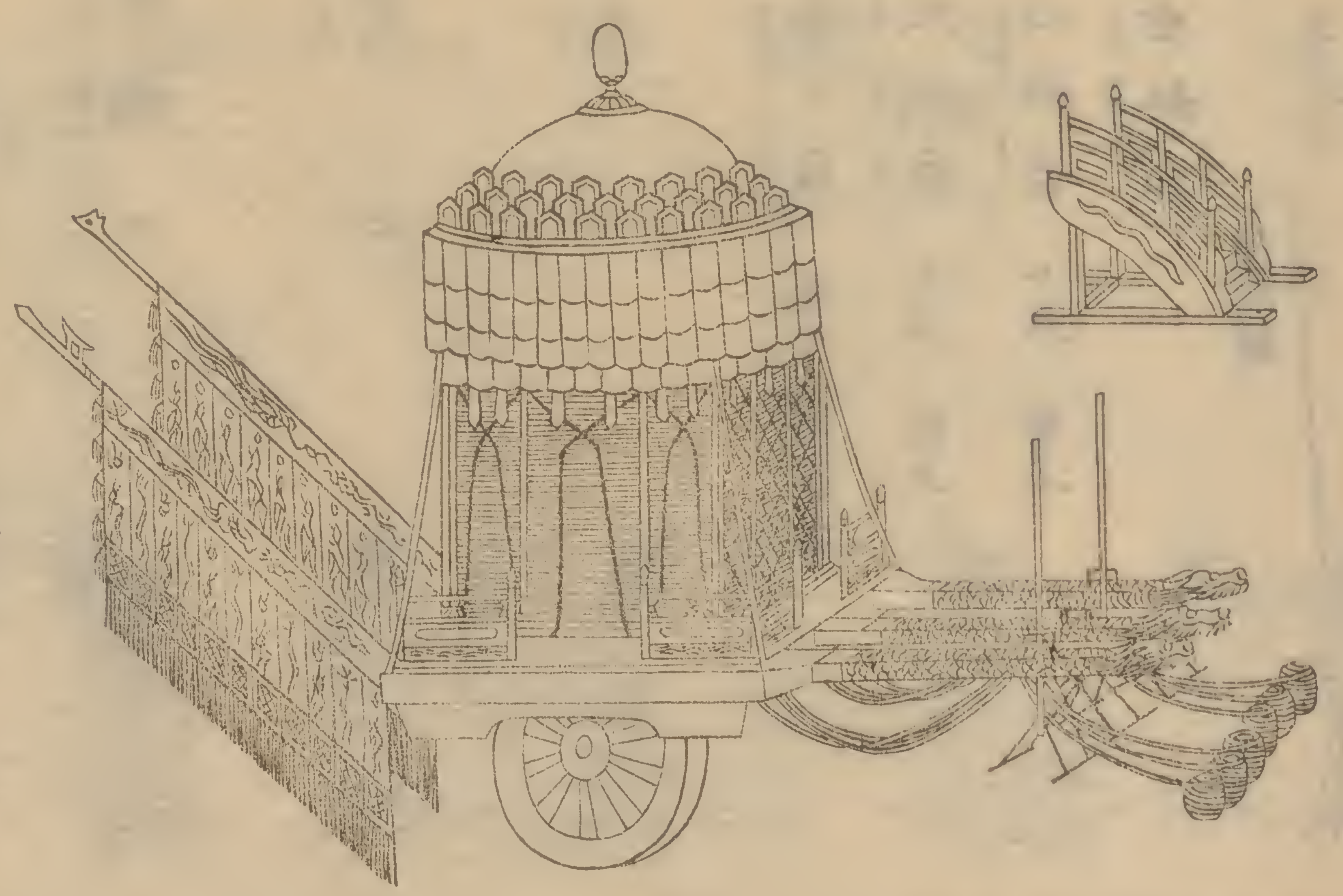
十 金輅一 駕象一 民尉四十四人

十一 玉輅一 駕象一 民尉四十四人 雲麾使一人 治儀正二人

十二 鐃歌大樂 金二 鉦四



八 木輅一 駕馬六 民尉二十二人



鈸二 鼓二 點四 笛四



雲鑼 二

管 二

笙 二

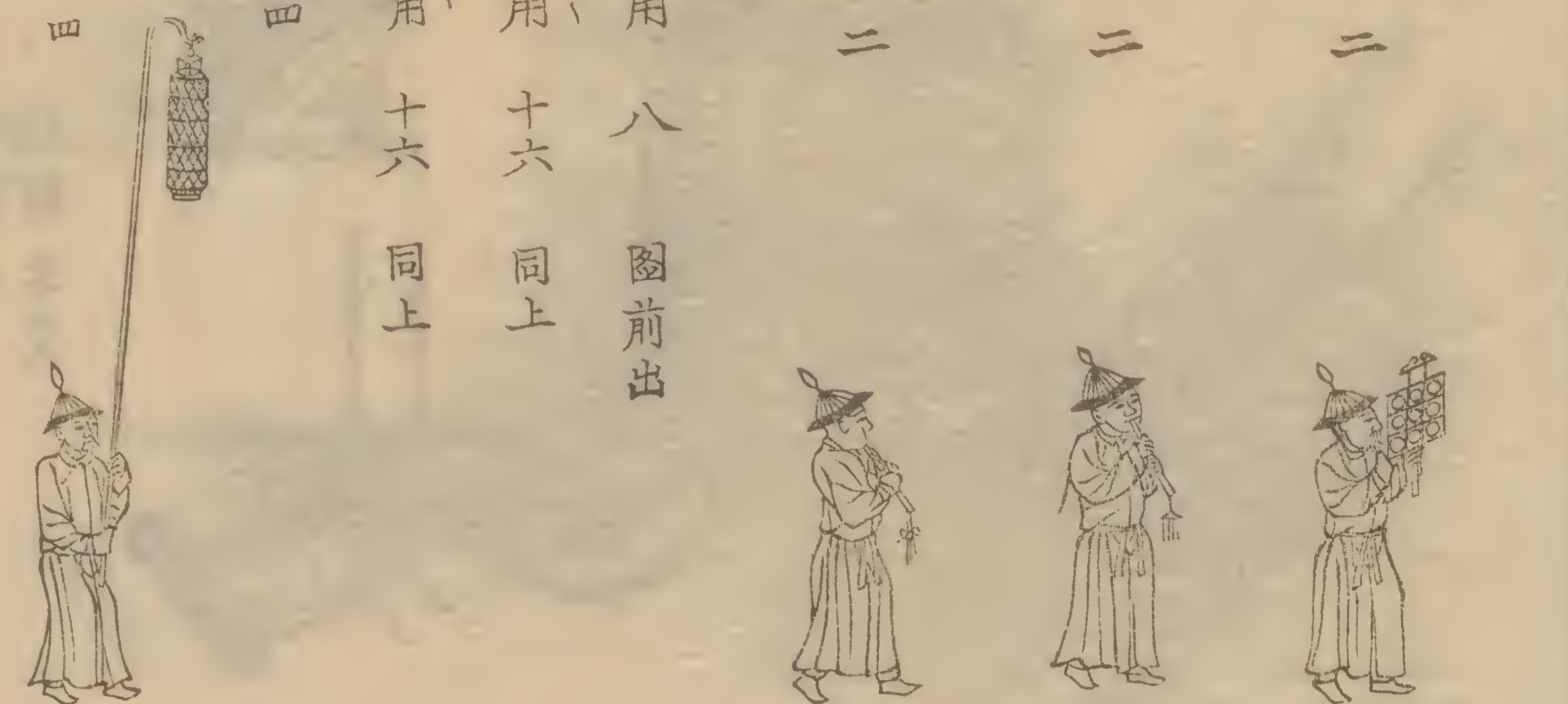
金口角 八 図前出

大銅角 十六 同上

小銅角 十六 同上

金鉦 四

紅鐙 四



十三 引仗 六

十四 御仗 十六

十五 吾仗 十六

十六 立瓜 十六

十七 臥瓜 十六



唐土名勝圖會

畫角 二十四

掆鼓 四十八

笛 十二 図前出

拍版 四

仗鼓 四

金 二 図前出

署吏 四十八人 民尉 百八十八人

冠軍使 一人 整儀尉 二人



十八 星 十六

十九 鉞 十六

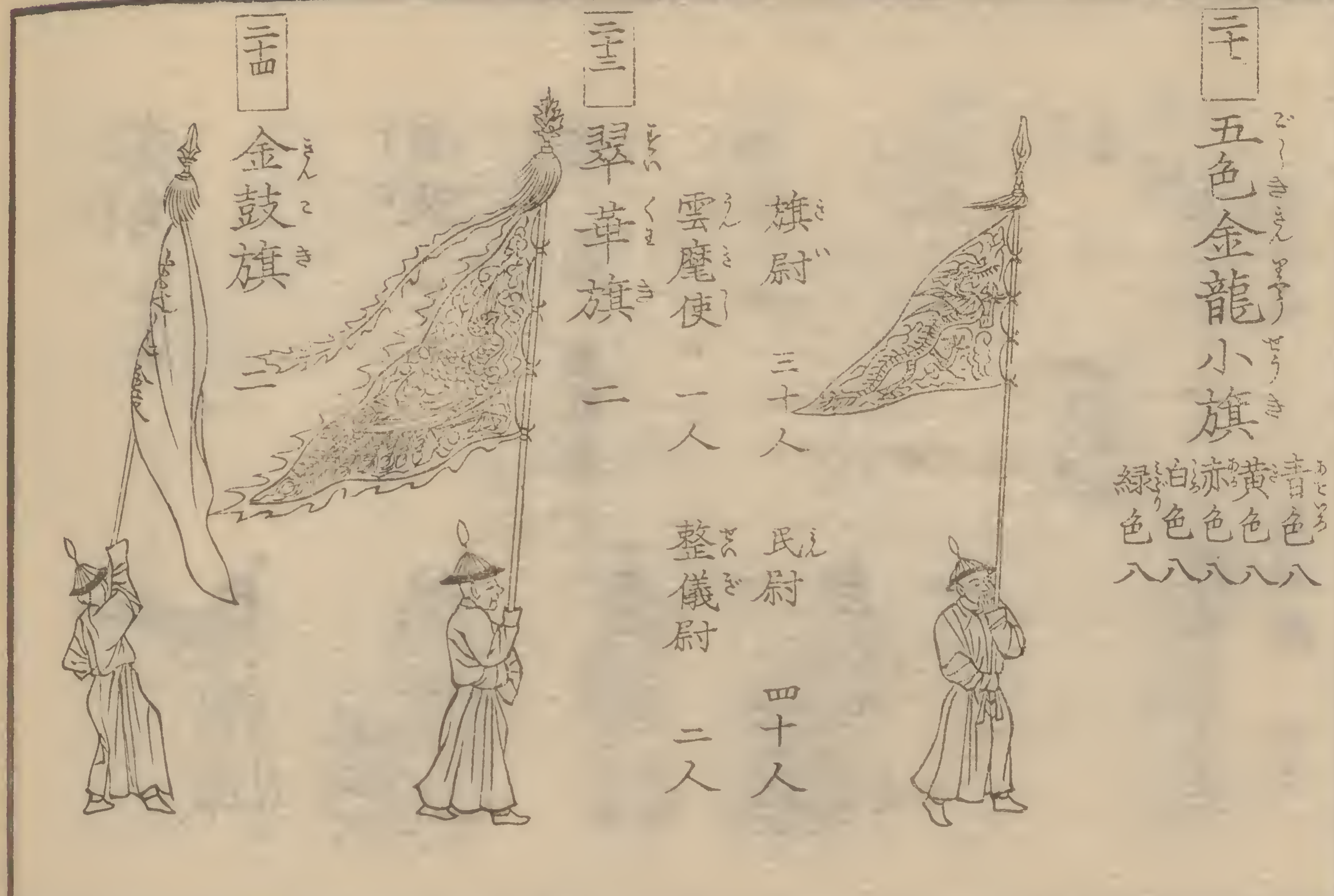
二十 出警旗 一

二十一 入蹕旗

旗尉 九十人

民尉 六十七人





二十七 五色金龍小旗 青色八 黄色八 赤色八 白色八 緑色八

二十三 翠華旗 二 雲麾使 一人 旗尉 三十人 民尉 四十人 整儀尉 二人

二十四 金鼓旗 二



二十八 五色雷旗 五

二十九 風旗 八 毎旗繪乾坎艮震巽離坤兌八卦

三十 甘雨旗 四 民尉 七十二人



二十五 門旗 八

二十六 日月旗 各一

二十七 五色雲旗 五



三十一 列宿旗 二十八 毎旗繪二十八宿

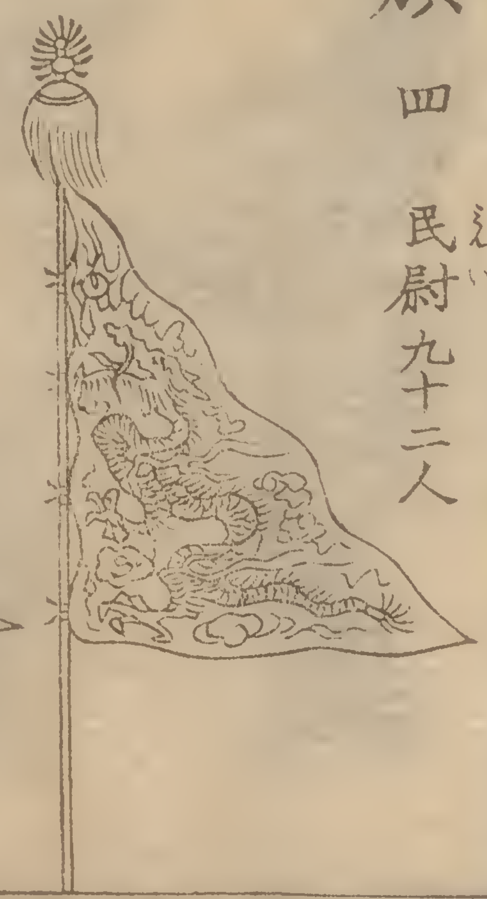
三十二 五星旗 五

三十三 五岳旗 五

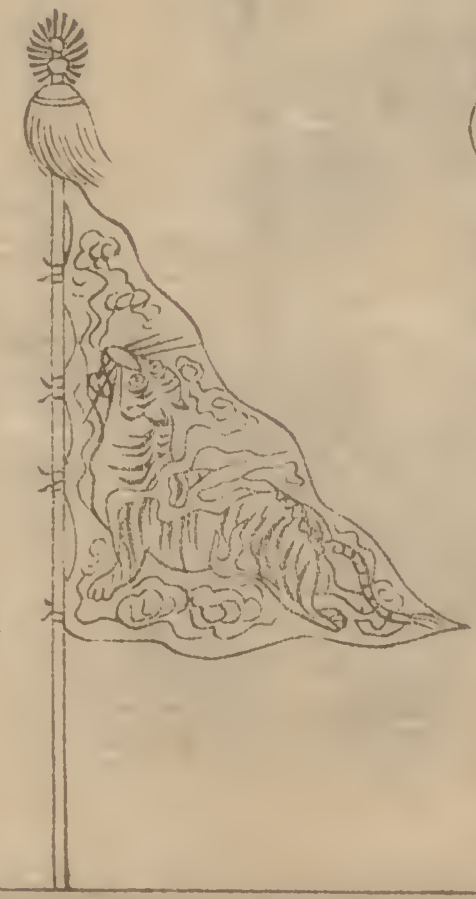
三十四 四瀆旗 四

三十五 四神旗 四 民尉九十二人

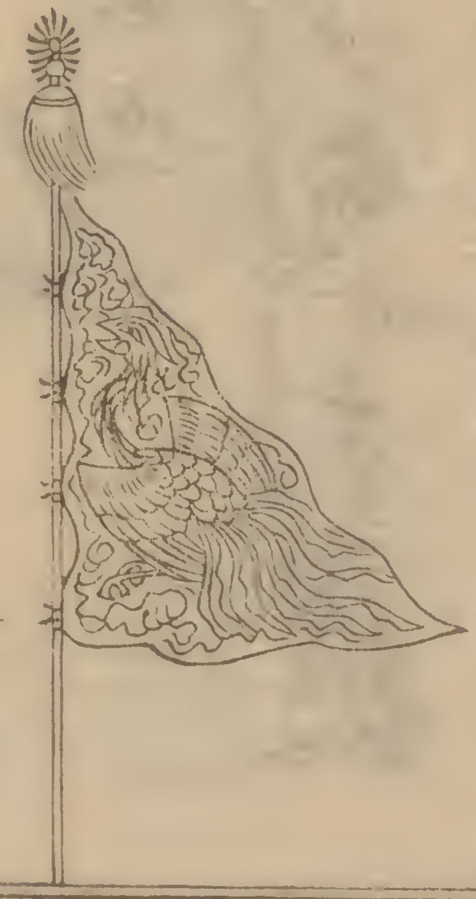
青龍



白虎



朱雀



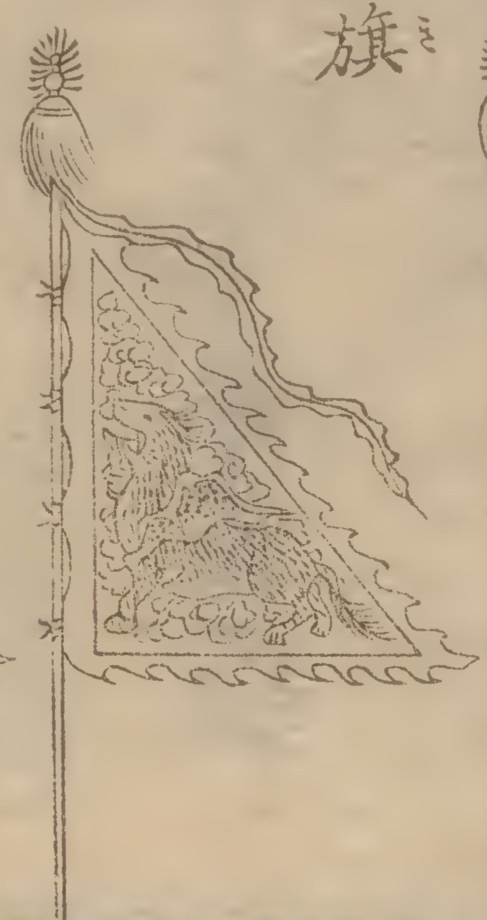
玄武



四十 赤熊旗



四十一 黄羆旗



四十二 白澤旗



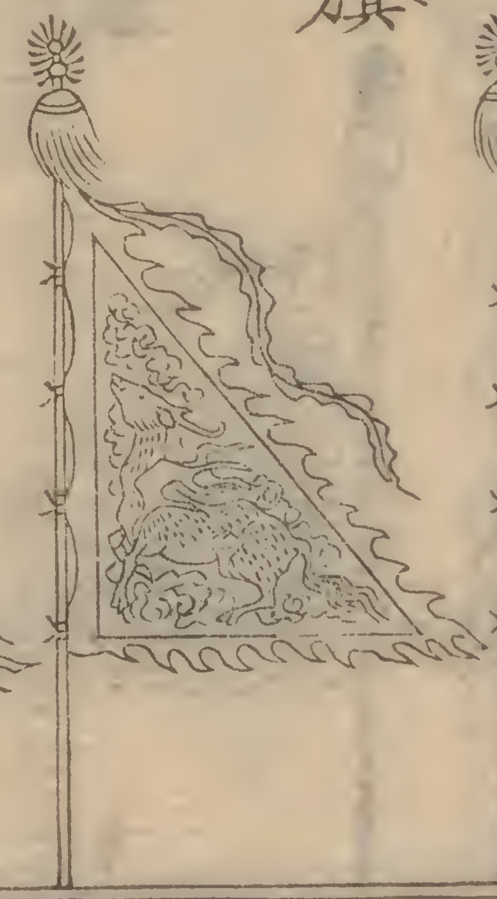
四十三 角端旗



三十六 天馬旗



三十七 天鹿旗



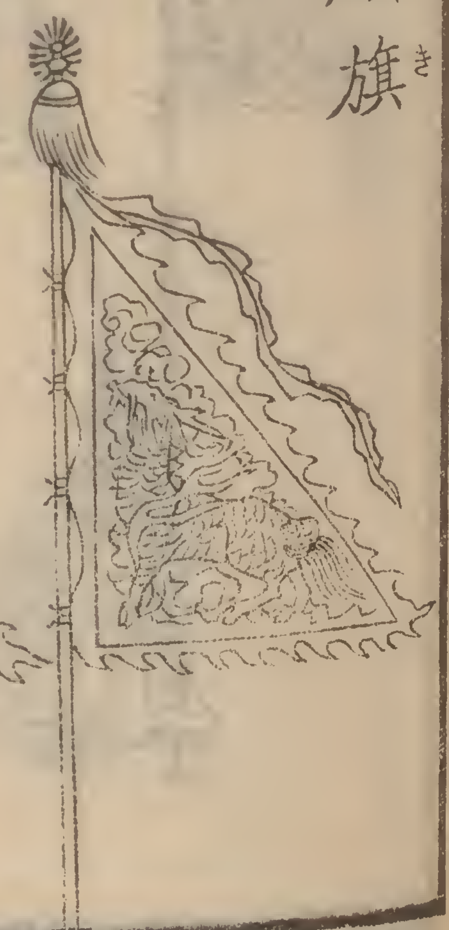
三十八 辟邪旗



三十九 犀牛旗



四十四 遊麟旗



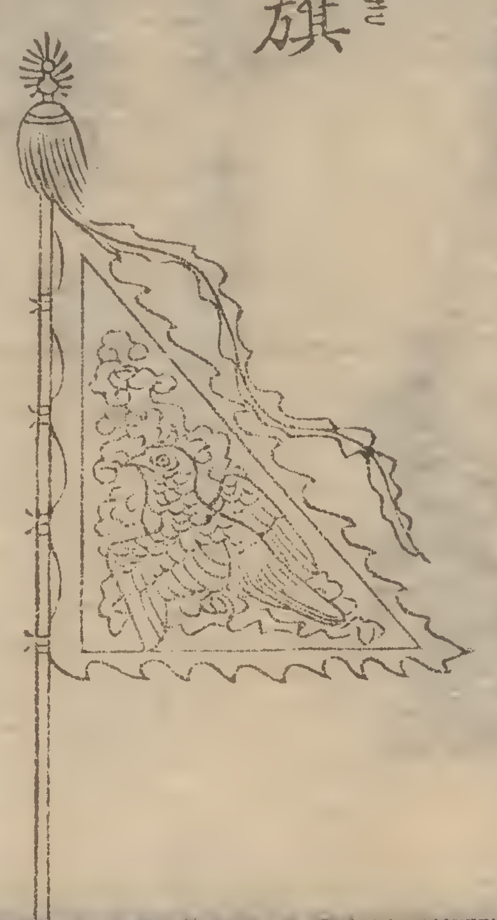
四十五 彩獅旗



四十六 振鷺旗



四十七 鳴鳶旗

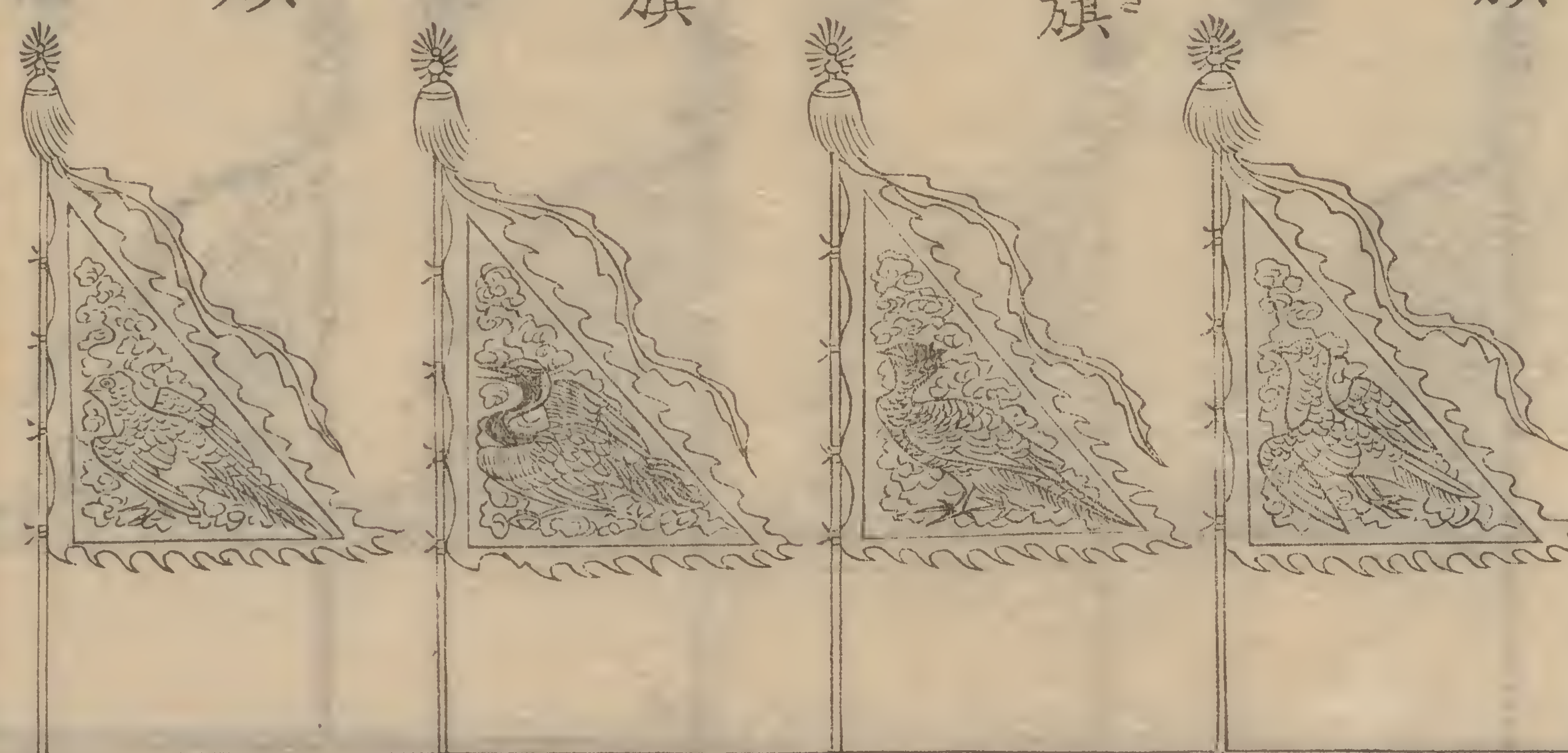


四十八 赤烏旗

四十九 華蟲旗

五十 黄鵠旗

五十一 白雉旗



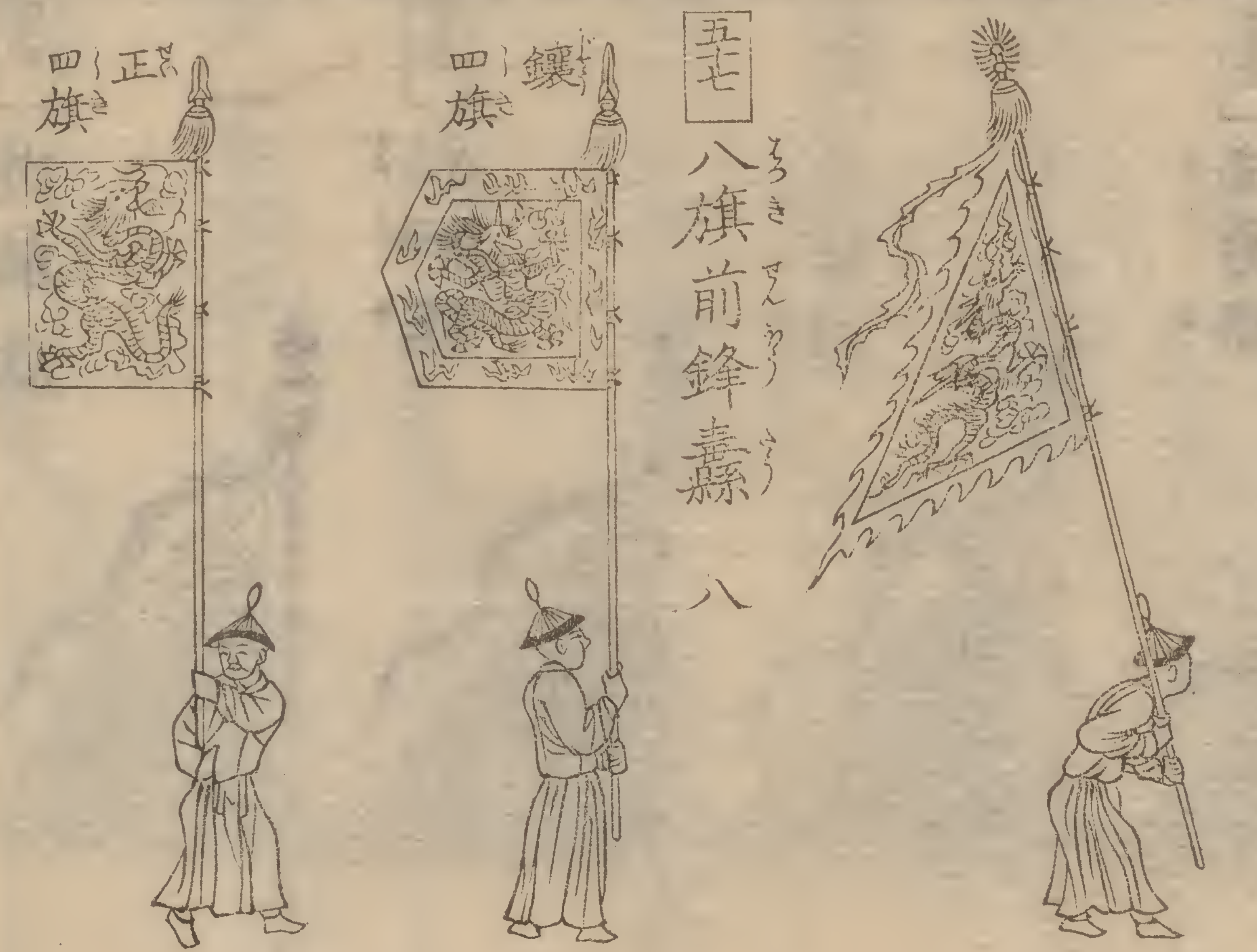
五十六 五色金龍旗 四十

民尉 四十人

五十七 八旗前鋒纛 八

鑲四旗

正四旗



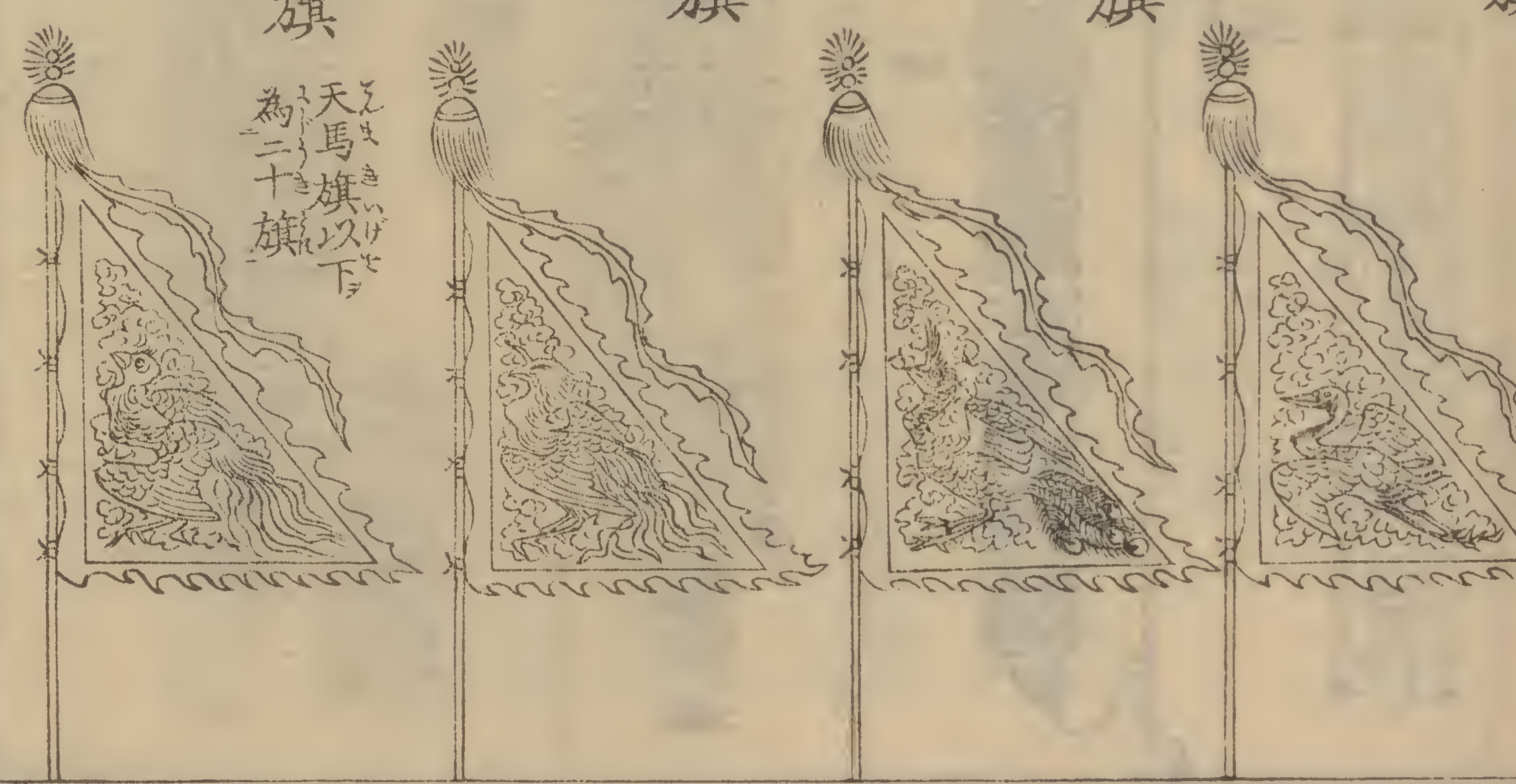
五十二 雲鶴旗

五十三 孔雀旗

五十四 儀鳳旗

五十六 翔鸞旗

天馬旗以下為二十旗



五十八 八旗護軍纛 八

五十九 八旗驍騎纛 二十四

鑲土旗

正土旗

旗尉 四十人

雲麾使 一人

整儀尉 二人

民尉 百二十人

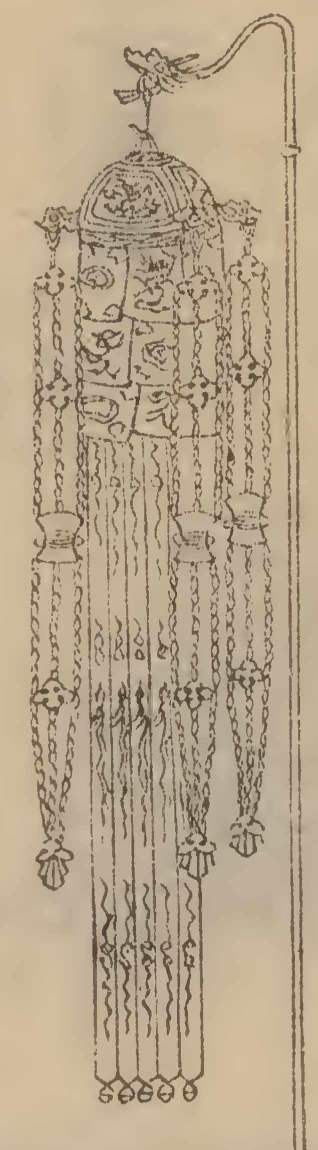
治儀正 二人



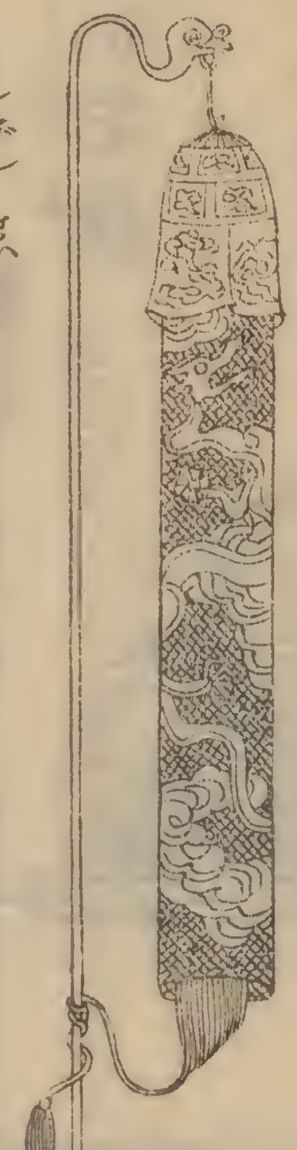
六十 黄麾 四



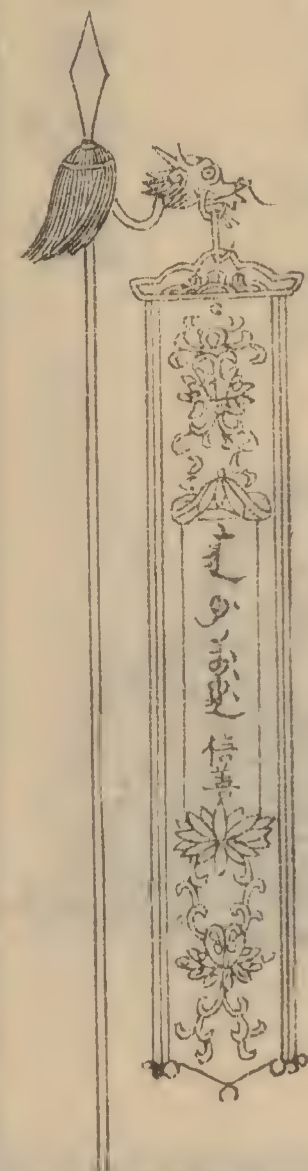
六十一 儀鍠氅 四



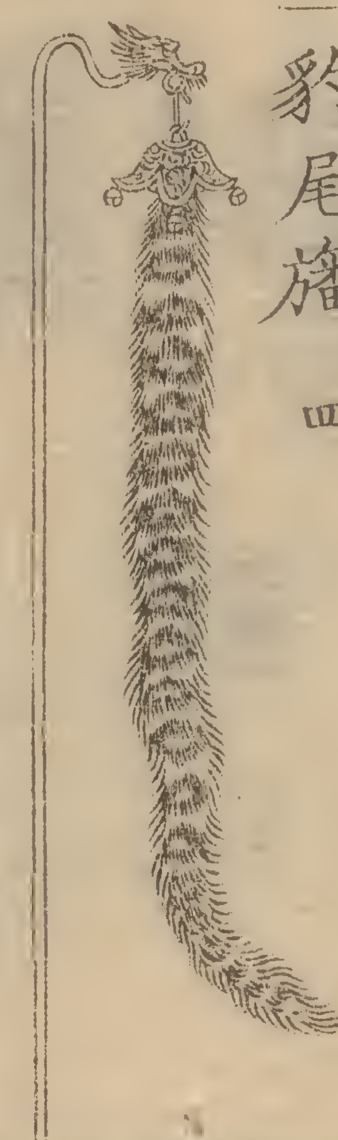
六十二 金節 四



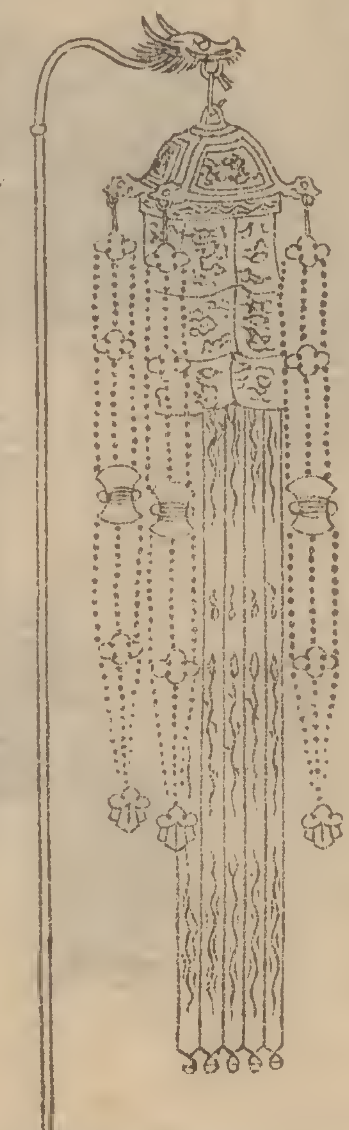
六十三 進善旌 二



七十二 豹尾旛 四



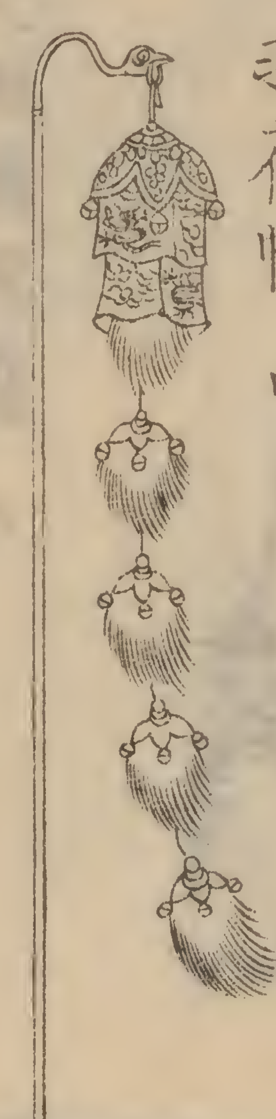
七十三 絳引旛 四



七十四 信旛 四



七十五 羽葆幢 四



六十四 納言旌 二
制如進善旌繍金納言清漢文

六十五 敷文旌 二
制如進善旌繍金敷文清漢文

六十六 振武旌 二
制如進善旌繍金振武清漢文

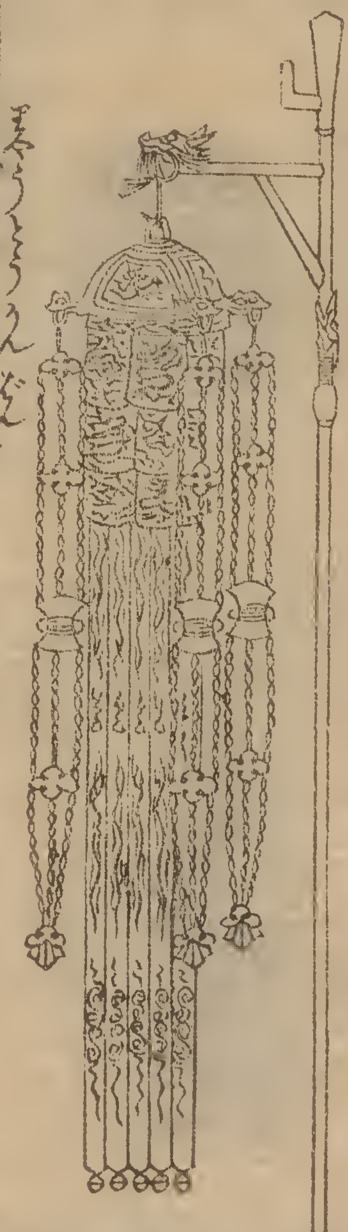
六十七 褒功懐遠旌 二
制如進善旌繍金褒功懐遠清漢文

六十八 行慶施恵旌 二
制如進善旌繍金行慶施恵清漢文

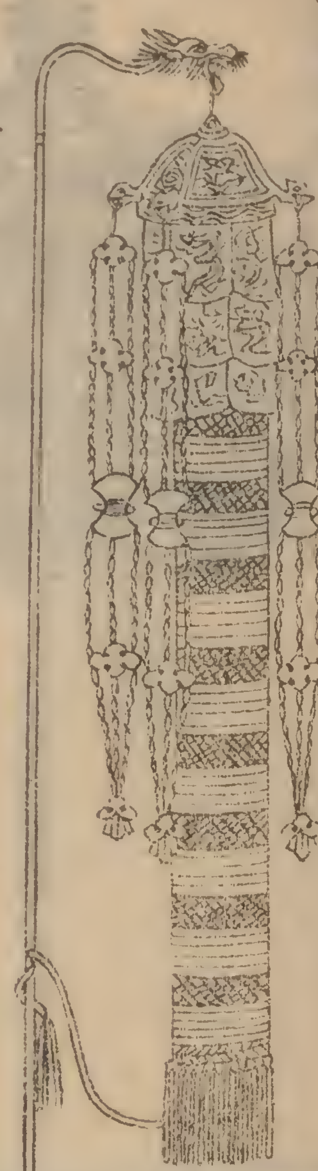
六十九 明刑弼教旌 二
制如進善旌繍金明刑弼教清漢文

七十 教孝表節旌 二
制如進善旌繍金教孝表節清漢文

七十一 龍頭竿旛 四



七十六 霓幢 四



七十七 紫幢 四



七十八 長壽幢 四

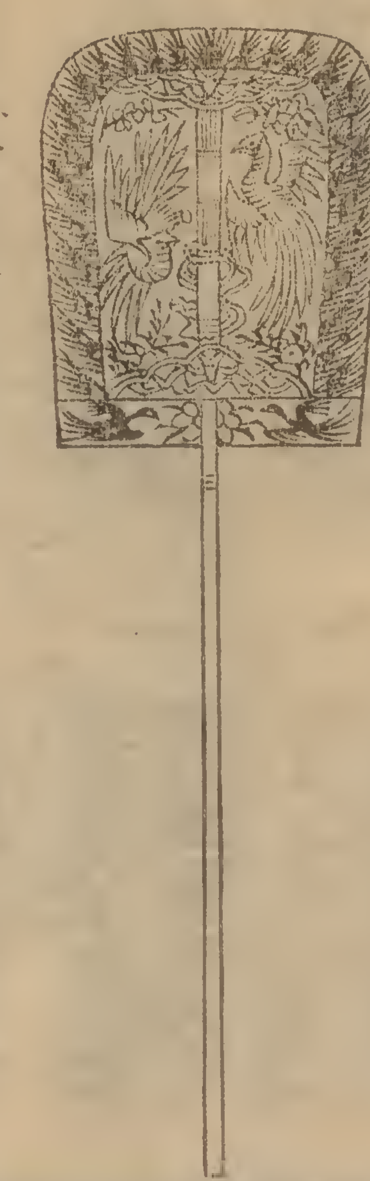


民尉 六十四人
雲麾使 二人
治儀正 二人
整儀尉 二人

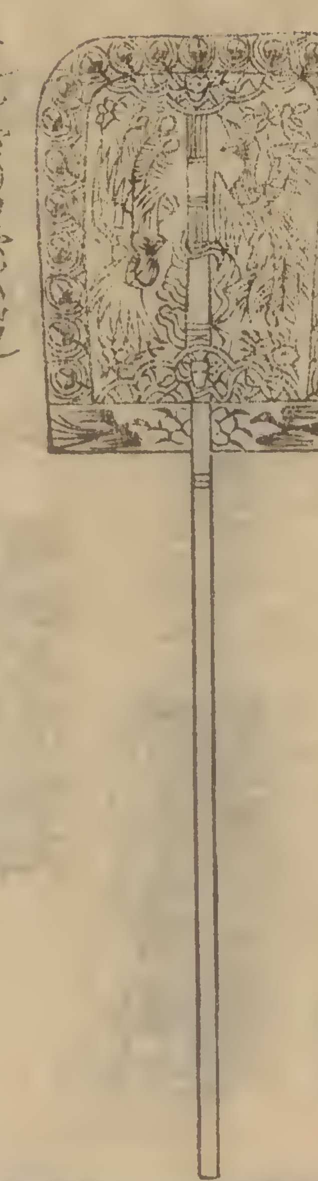
七十九 鸞鳳扇 八



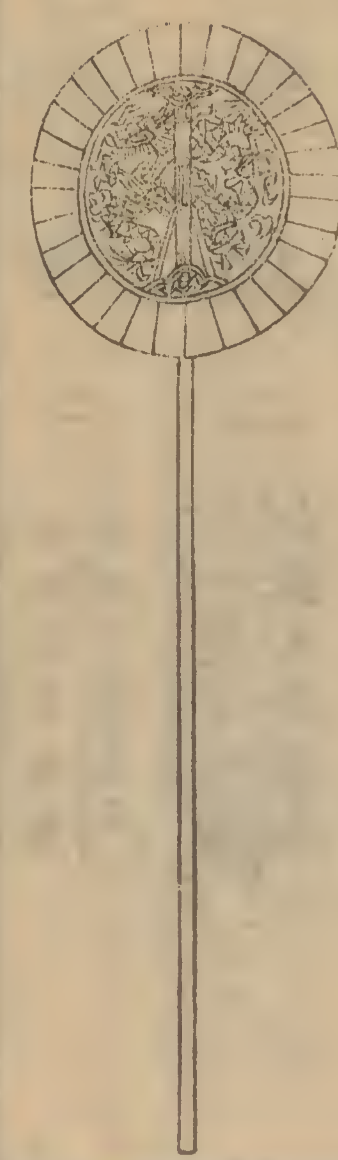
八十 雉尾扇 八



八十一 孔雀扇 八



八十二 單龍赤扇 八



八十七 赤素方繖 四 紅緞為之



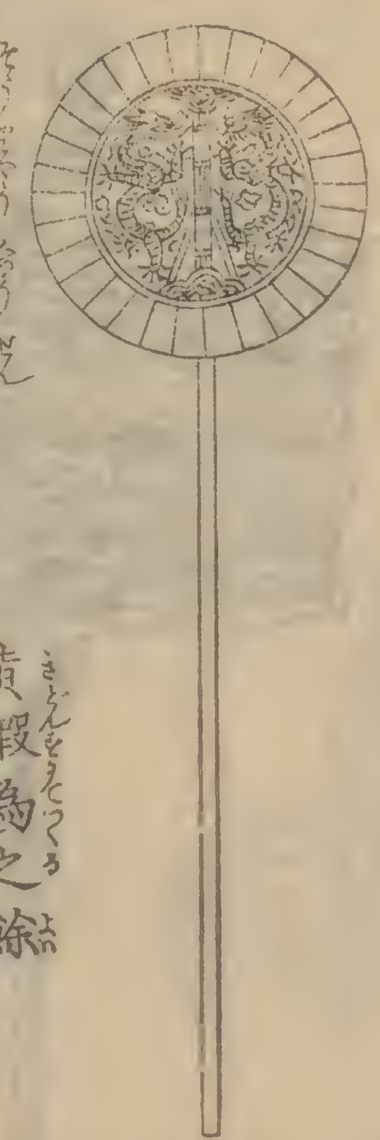
八十八 紫素方繖 四 紫緞為之

八十九 五色花蓋 二十 間以五色



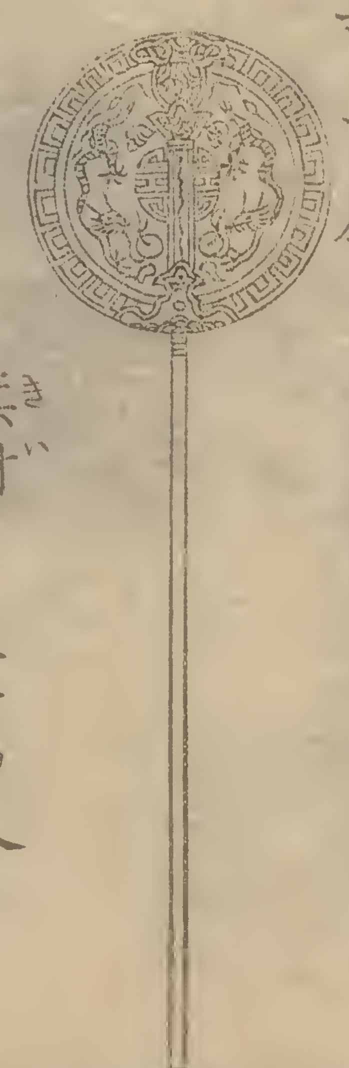
八十三 單龍黄扇 八 黄緞為之餘如單龍赤扇

八十四 雙龍赤扇 八



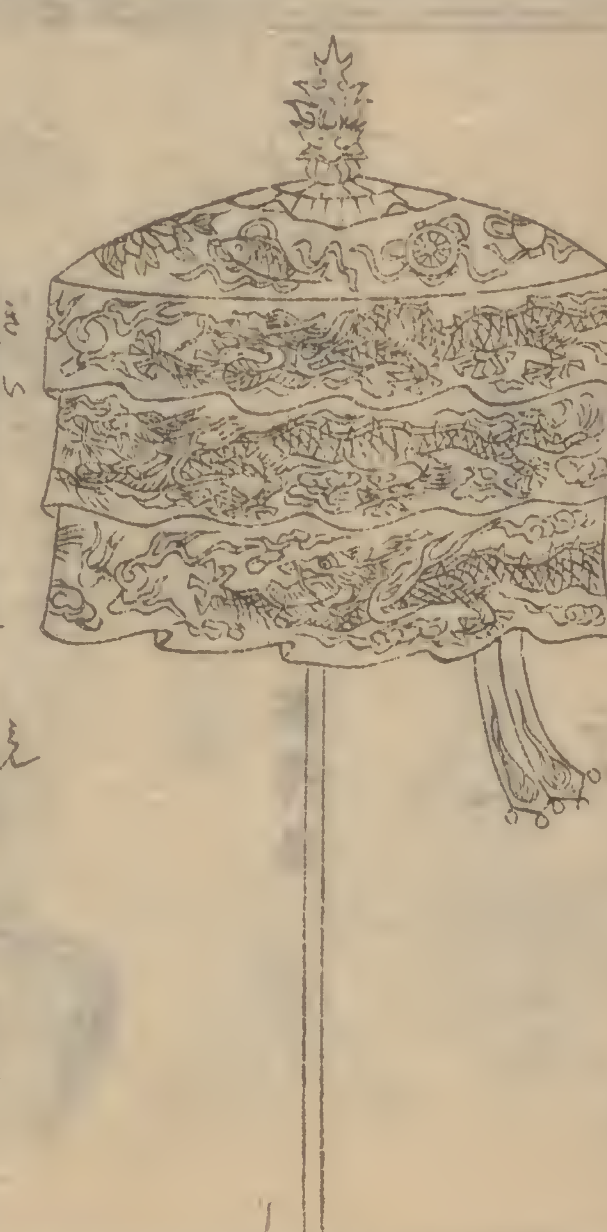
八十五 雙龍黄扇 二十 黄緞為之餘如双龍赤扇

八十六 壽字扇 八



旗尉 二十四人
民尉 百二十八人
雲麾使 一人
治儀正 二人
整儀尉 二人

九十 五色九龍蓋 十 與花蓋相間



九十一 九龍黄蓋 二十 旗尉 三十人 民尉 八十四人 黄緞為之餘如五色九龍蓋

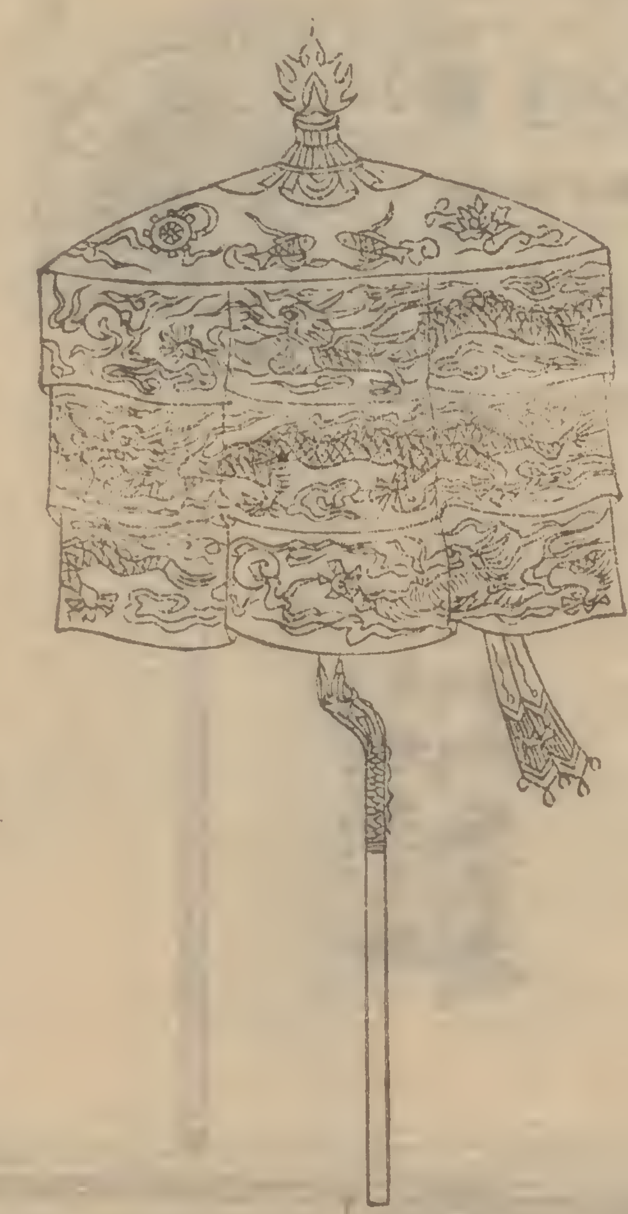
九十二 紫芝蓋 二



九十三 翠華蓋 二



九十四 九龍曲柄蓋 四



旗尉 三十人
民尉 八十四人
鑾儀使 一人
雲麾使 一人
治儀正 二人
整儀尉 二人

九十八 弓矢 三十
親軍 六十人



九十九 儀刀 三十
親軍 六十人
雲麾使 一人
治儀正 二人
整儀尉 四人



百 仗馬 十
圖前出
護軍 二十人
冠軍使 二人
雲麾使 二人

九十五 戟 四
親軍 八人



九十六 殳 四
親軍 八人

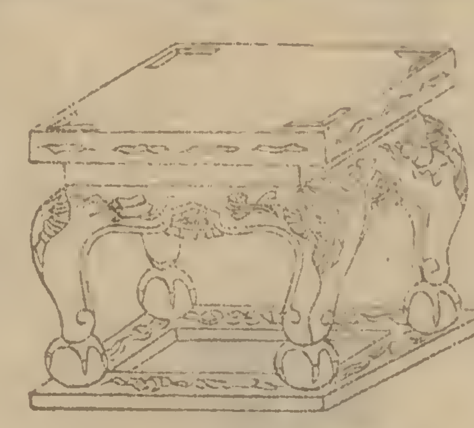


九十七 豹尾槍 三十
護軍 六十人

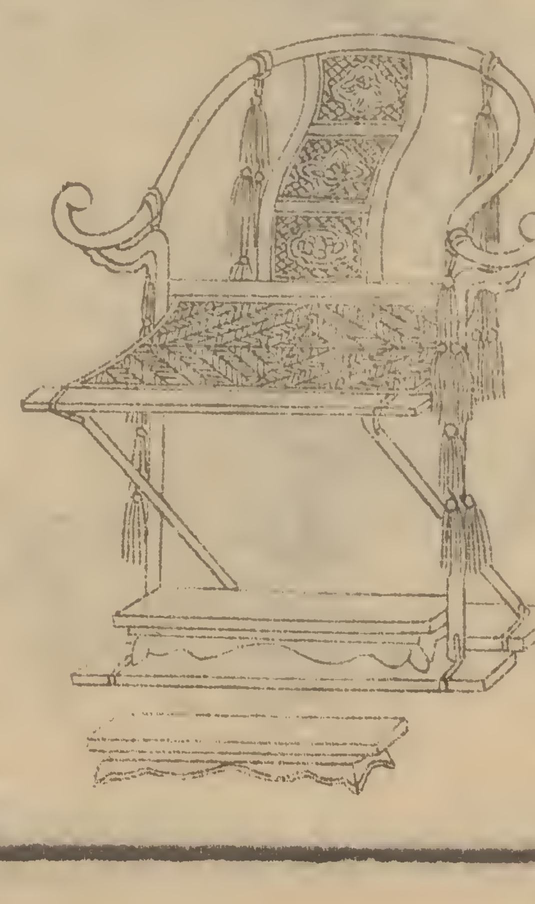


百一 金方几 一





方几之圖



交倚之圖

百二 金交倚 一



百三 金水瓶 二

陳設水瓶之圖

百四 金盥盆 一

百五 唾壺 一

陳設盥盆圖



百六 香合 二

陳設唾壺之圖

陳設香合之圖

百七 提鑪 二

陳設提鑪之圖



百八 拂塵 二

自立夏至立秋用此拂塵



百九 九龍曲柄導蓋

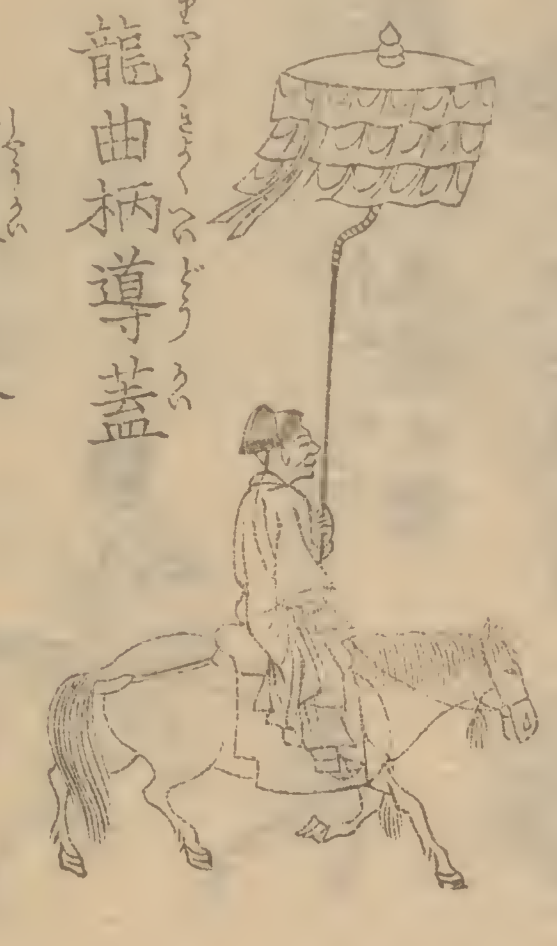
旗尉 二十二人

治儀正 二人

雲麾使 一人

掌蓋 四人

司蓋 四人



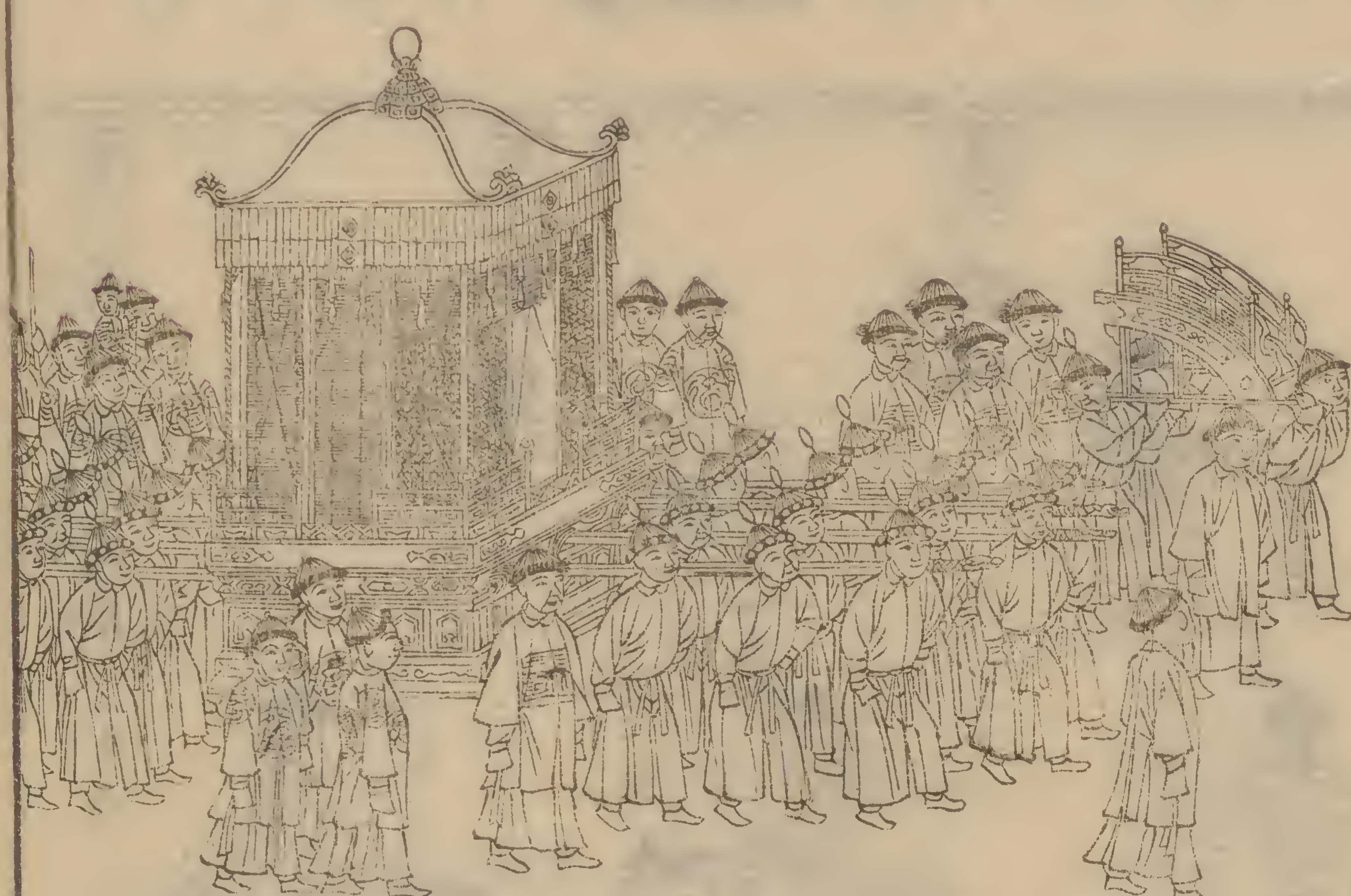
百十 前引佩刀大臣 十人

百十一 寶璽

百十二 提鑪 二



玉輦
奉輦鑾儀使　四人
扶輦冠軍使　二人
雲麾使　二人
治儀正　四人
整儀尉　四人
旗尉　三十六人
民尉　三十六人
後扈佩刀大臣　四人
豹尾班執豹尾槍侍衛　二十人
佩儀刀侍衛　二十人



佩弓矢侍衛　二十人
後營散秩大臣　二人
前鋒護軍統領　二人
給事中御史　四人
各部郎中　八人
各部員外郎　八人
侍衛班領　二人
署侍衛班領　二人
領侍衛内大臣　二人
散秩大臣　二人
司纛侍衛什長　四人



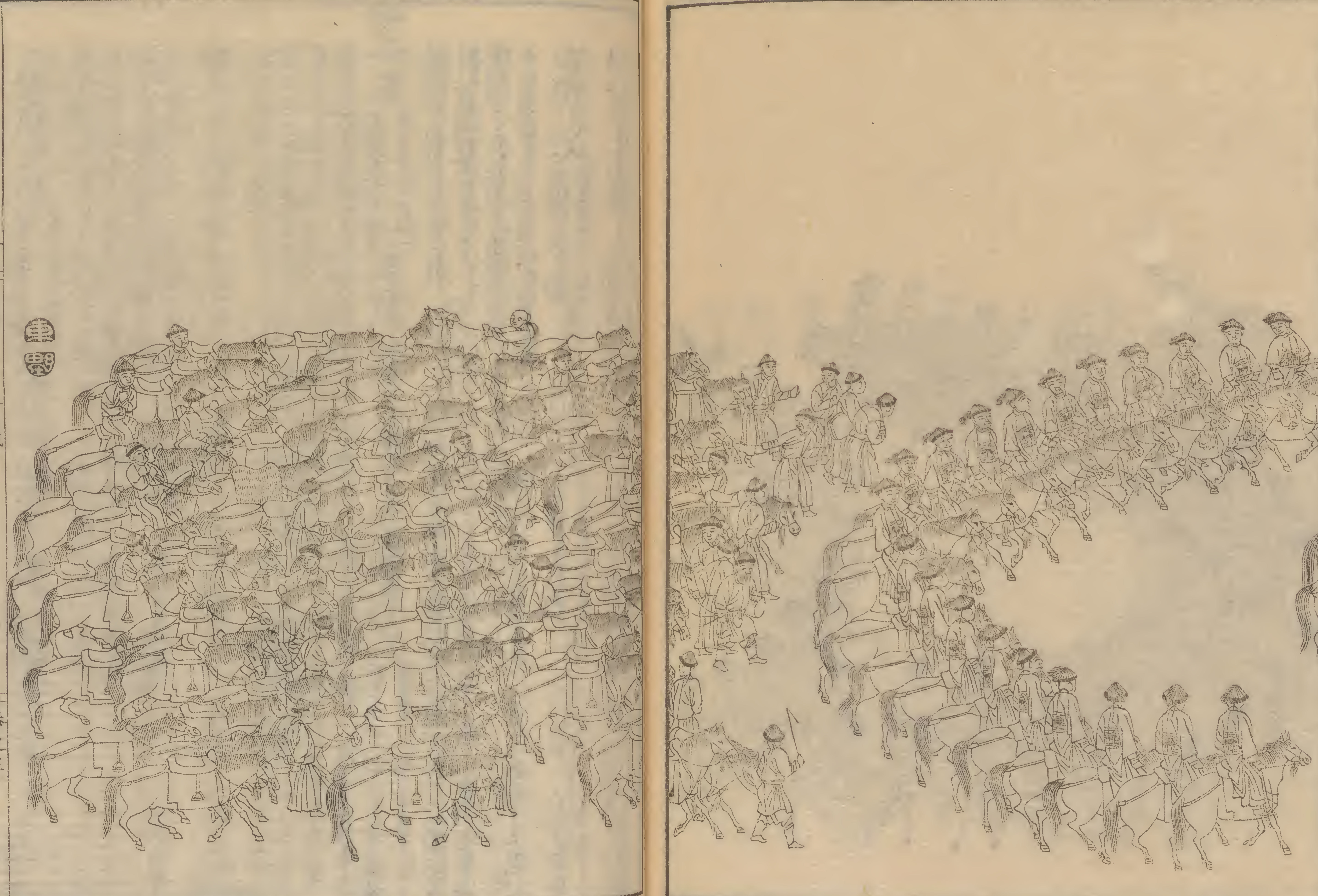
建纛親軍　八人
佩鳴螺親軍　十二人
右護玉輦左右











○太常寺署 闕の西、鑾儀衛署の南にあり。雍正帝御書の額あり、肅祇明禋といふ。満漢各一人。少卿満漢各一人、これを太常寺の總官として壇壝廟社を掌て歳時を以て其祭祀を序次す。屬もろ〳〵寺丞官博士讀祝官贊禮郎あり。掌儀序引、俎物祭器を掌る司庫、庫使の官、又庫藏のことを掌る犠牲所は犠牲を滌ぐことを掌り、祭祀に供することを掌る神樂署は祭樂の節奏を掌る。○都察院署 闕の西、太常寺の南にあり。康熙帝御書の額を都俞吁咈といふ。又御製の甚當歳あり。一は満字一は漢字也。明代

都察院署長安街の西にありて刑部と大理寺を係て三法司と稱す。○左右都御史満漢各一人、左右副都御史満漢各二人。是を都察院の總官として官常を察覈し、綱紀を整飭し、又吏戸禮兵刑工の六科掌印給事中を以て各部及び諸署の事務を注銷し、又京畿道河南道江南道浙江道山西道山東道陝西道湖廣道江西道福建道四川道廣東道廣西道雲南道貴州道等の十五道各掌印監察御史を以て各省の刑名公事を理し、又諸署を稽察す。

刑部署 闕の西、都察院署の南にあり。雍正帝御書の額あり、明刑弼教といふ。尚書満漢各一人、左右侍郎満漢各一人、刑部署の總官として法律刑名を掌て以て邦の憲を肅しむ。屬する所直隷奉天江蘇安徽江西福建浙江湖廣河南山東山西陝西四川廣東廣西雲南貴州等の十七省各清吏司郎中官ありて、各省の刑名を掌て兼ては諸府諸署の文移關白のことを掌る。又督捕清吏司あり。中外旗人の逃亡るの者を追る。以上十八司皆本部の尚書に隷して刑律を執行ふ。凡刑制に五あり。これを五刑といふ。其一を笞刑といふ。小竹板を用ひて撻打。十より五十まで。其二を杖刑といふ。大竹板を用ひて撻打。六十より一百まで。其三を徒刑といふ。犯者の驛遞を徒一年より三年に至る。其四を流刑といふ。遠國へ遣りて終身帰ることを許さず。其五を死刑といふ。死刑に二あり、絞と斬となり。若罪大に悪極る者は剮を用て衆に示す。罪に十悪

あり。犯す者は原されず。一を謀反といふ。社稷を傾んと計る者をいふ。二を謀大逆といふ。宗廟山陵宮殿を毀んと計る者をいふ。三を謀叛といふ。本國を背て私に他國に從んと謀る者をいふ。四を悪逆といふ。祖父母父母夫の祖父母父母を殴ち殺んと謀る者、又伯叔父母姑兄姉外祖父母及び夫を殺す者をいふ。五を不道といふ。又一家死罪に非る者三人を殺し及び人を支解し、人を採て生るがら漸剤し、蠱毒魘魅を畜ひ造るをいふ。六を大不敬といふ。祭祀の供物を盗み、又乗輿の御物を盗み、及び御寶を偽造し、及び天子に進る御藥の調合を誤り、又は誤つて御膳に禁食を調じ、御乗の舩を堅くせざるをいふ。七を不孝といふ。祖父母父母を罵詈し、及び祖父母父母のいますに財を分ち籍を異にし、若くは朝夕の養ひを闕き、又父母の喪中に嫁娶楽をなし、喪服を除て吉服を着、又父母の喪を匿して哀を擧ず、又祖父母父母を犯せりと稱する者をいふ。八を不睦といふ。緦麻以上の親を殺さんと謀り、又は夫及び大功以上の尊長小功の尊属を殴ち告する者をいふ。九を不義といふ。部下の民其本府州縣の正官を殺し、軍士の本管官を殺し、吏卒の其本部五品以上の長官を殺し、又業を受し師を殺し、及び夫の喪を聞て匿して哀を擧ず。十を内亂といふ。小功以上の親族に姦淫し、及び父祖の妾を犯し、或は和ぐる者をいふ。又八議の典あり。其一を議親といふ。宗室の人をいふ。二を議故といふ。天子の故人たりしき御なじみのものの人をいふ。三を議功といふ。國に功ある人をいふ。四を議賢といふ。賢名世に聞えたる人をいふ。五を議能といふ。堪能ある人をいふ。六を議勤といふ。勤めて怠ることなき人をいふ。七を議貴といふ。高官なる位の人をいふ。八を議賓といふ。外藩の王公等國の賓客の人をいふ。以上八の者罪を犯すとも常人のごとく擅に問ふことなし。まづ奏聞を經て旨を請ひ而して後究問し、犯人本の罪に照らし上裁を待て刑を定む。又議者の祖父母父母妻及び子孫の罪を犯したるも又かくのごとし。唯十悪を犯したる者は此律の例法に照らず罪に

せらるべし。又議者の親族貴等其外貴人の威勢に倚て民と雇罪と犯せる人よりも罪一等重きを加ふ之。又贖刑あり。贖刑とハ罪の軽き者銀を出して其罪をつぐのふと云。或ハ年七十以上十五歳以下の者罪あるハ亦幼者にてこれと贖ハし其外廢疾歩行の自由ならざる者又流刑以下軽き罪ある者又婦人の罪ある者ハ贖をなして免るゝといへども其婦人にて殺傷盗窃不孝等の大罪を犯すものゝ贖刑を免さず。凡皆法のごとく罪せらる。其余ハ天文学を学びたる諸生の罪に逢て人に傷をなせる者等のすべて杖笞の刑以下の者ハ悉く銀を出せバ罪を贖ひ免るゝなり。又是より以下罪の軽き者ハ贖刑と同じて贖銀の定ありてこれを納て罪を免さる。勢力ある官員の正妻又ハ婦人等の軽き罪ハ準贖といひて皆贖銀を出しこれに準じて罪を免す。凡其一等重き罪ハ納贖と名けて身上の大小に應じて贖銀を出して罪を赦さるゝをすべて贖銀の定なしところ分限に應じてこれを贖しむ。○官ある者の軽き罪あれバ聴罪といひて皆贖銀を出して罪を免さるゝ。盗賊盗竊詐偽の罪ハ免さるゝ事能はず。又官に叙せらるまじき以前に犯したる罪ハ贖銀を出し免る。其中に受贓乃罪小なりといへども免されず。受贓とハ官にありて非理の遺物を受るといふなり。又刺字の定あり。刺字とは罪ある者に黥して印とするなり。凡其職を捨て身を逃るゝ者又ハ盗をなす者又謀殺せる者又罪を再び犯せる者其外捕人を拒ぐ者人を殺せし者犯罪の後して附を待者など皆刺字ある刺に名あり。八旗の軍人ハ臂を刺し、其奴僕ハ面を刺し、庶民の徒刑に處せらるべき以上の罪を犯したるハ先も面を刺し。杖罪に處せらるべきより以下の罪軽き者ハ臂に刺せらる。又罪を再び犯せる者も面に刺。其面の刺ハ鬢の下顴のところに刺。臂に刺さるゝハ腕の上肘の下に刺さるゝ。職を捨てのがるゝ者ハ逃罪と名けて左の臂を刺し、其余の罪ハ皆右の臂を刺す。○流刑徒刑の二ハ罪の名と地の名を左右の臂に刺。刺罪乃名地の名とは何々の罪を犯し何乃国何の所に流徒せらるゝといふ字をいふ。さまに刺字の大さ一分又鑿其全体ハ一寸五分乃間に入るゝなり。

刑具

刑具六あり。板と云。枷と云。杻と云。拶と云。夾棍と云。拶指と云なり。○板ハ竹篦を用ひてこれを造る。板に二あり。小竹板を笞といふ。重さ一斤八両。濶さ一寸五分。大竹板を杖といふ。重さ二斤。濶さ二寸。長さ各五尺五寸。根よりハ梢の細き事又分。○枷ハくびかせのごとくなり。乾木を用ひて造る。長さ三尺。濶二尺九寸。重さ二十五斤なり。頭に從て鐵をもつて封す。枷に紙を設け罪人の罪名罪状を記し是を令んこれを無宗といふ。長七尺。重さ又斤なり。凡罪乃軽重を論ぜず禁獄せらるゝ者悉くこれを用ゆ。○杻ハ手械也。乾木を用ひて造る。長さ一尺六寸。厚さ一寸。死罪を犯す者これを用ゆ。○鎖ハ鐵をもつて造る。其形連環る環のごとし。重さ一斤。徒の罪より以上の者これを用ゆ。○夾棍ハ刑具なり。乾木をもつて造る。都て三根。中なる木長三尺四寸。旁木長さ三尺。槍ハ圓く徑一寸八分。根ハ方にして濶二寸。三本相合す。凡宛の徑一寸六分。深さ七分なり。重罪乃者実情を告げざるにハこの具を用ゆ。○拶指ハ圏木五本を以て造る。長各七寸。圓周二分五厘。婦人重罪を犯し実情を告ざるに此具をもつて拷責す。凡夾棍。拶指ハ極て苦悩のあまり、かく用ゆるも三次と定る者也。

○刑部署乃堂の後西南と西北の両所に獄屋を建置ところ也。凡犯罪の者を禁獄せらるゝハ内監に囚禁す。軍流以下の罪ハ外監に禁ず。又強盗十悪。謀。故。殺等重罪の犯し明かなる者ハ頭と手足に各三の械を施し、きびしく禁獄す。又竊盗闘殴并び軍流徒の罪軽き者ハ手足頭に各一の械を施して禁獄す。又罪の軽く杖笞の刑に止る者或ハ婦人の軽き罪を犯したるものハ頭に械するのみにて手足にハせず。凡婦人罪あるものハ別に獄屋を設けて禁囚し男子と同室に處せず。○老たると幼きと廢疾乃者ハ散禁とて禁獄を赦し禁卒をして看守らせしむ。又官人公罪を犯し其罪流刑より以下のもの、私罪其刑杖罪より以下の者も皆散禁せらる。

此所の圍垣の外に大楡樹あり。明の楊繼盛が手づから植る所なり。

明代乃刑部署ハ長安街の西にあり。今も俗呼で刑部街と称す。嘉靖の間、李攀龍・王世貞・徐中行が輩、西曹に官たり。相集りて詩を論し、則ち川司の内に白雲樓を建、時の人これを外翰林と称せり。査嗣瑮

雑咏詩　甘露飛來綴柏枝。白雲樓下坐談詩。時平刑措原無事。間殺西曹似鳳池。

○大理寺署 闕の西刑部署の南にあつて東に向ふ 執法持平といへる額あり。雍正帝乃宸翰なり。滿人。漢人各一人が卿。滿漢各一人が大理寺署の總官として寺を平反し以て邦の刑を正しるを掌る。又左右寺丞官あり。京師五城順天府直省に屬せる府州縣乃死罪の刑を獄とゞむるをつかさどる。昔大理寺乃廨舎に一の怪石あり。其高さ尺ばかり。両峯侍中に竅數あり。紋理の文彩紫と縷を織なすがごとし。誠に天壤乃奇物なりし。好事の者の為に持去られしが今其在る所をしらず。

○工部製造庫 刑部署の東衣府胡同にあり。丙丁戊の三庫は西長安門内にあり。

○通政使司署 西長安街路の南にあつて北に向ふ 雍正帝御書乃慎司喉舌の四字乃額あり。通政司官滿人漢人各一人。副使滿漢各一人ありて天下乃章奏を達し又署中に登聞鼓といへる鼓を置り。凡冤民訟ある者有司其理を受ざれば即登聞鼓を撃て其冤を訴。司其實否を察て奏聞し。其直を得せしむ。冤邪正を決斷する之。明代別に登聞鼓院を設けゝりしが今は通政司に併せて署中に置り。

○辨理同人佐領事務處 附獲坊西長安街路の南にあり。今地名を回子營と名く。禮拜寺を建つ。乾隆帝御製の碑あり。署の南胡同にあり。此地舊京畿道署ありしが故俗尚此ところを京畿道胡同と呼ぶ。

○西城察院署 刑部署の後高牌胡同にあり。○北城察院署 俗に西來巷江米胡同にあり。○東城察院署 ○南城察院署 俗に西陽門の西城根道乃胡同にあり。清朝内城外城を東西中南北乃五城に分つ。各に察院署を設く。○中城察院署

○右翼宗學 宣武門の小城緑胡同にあり。

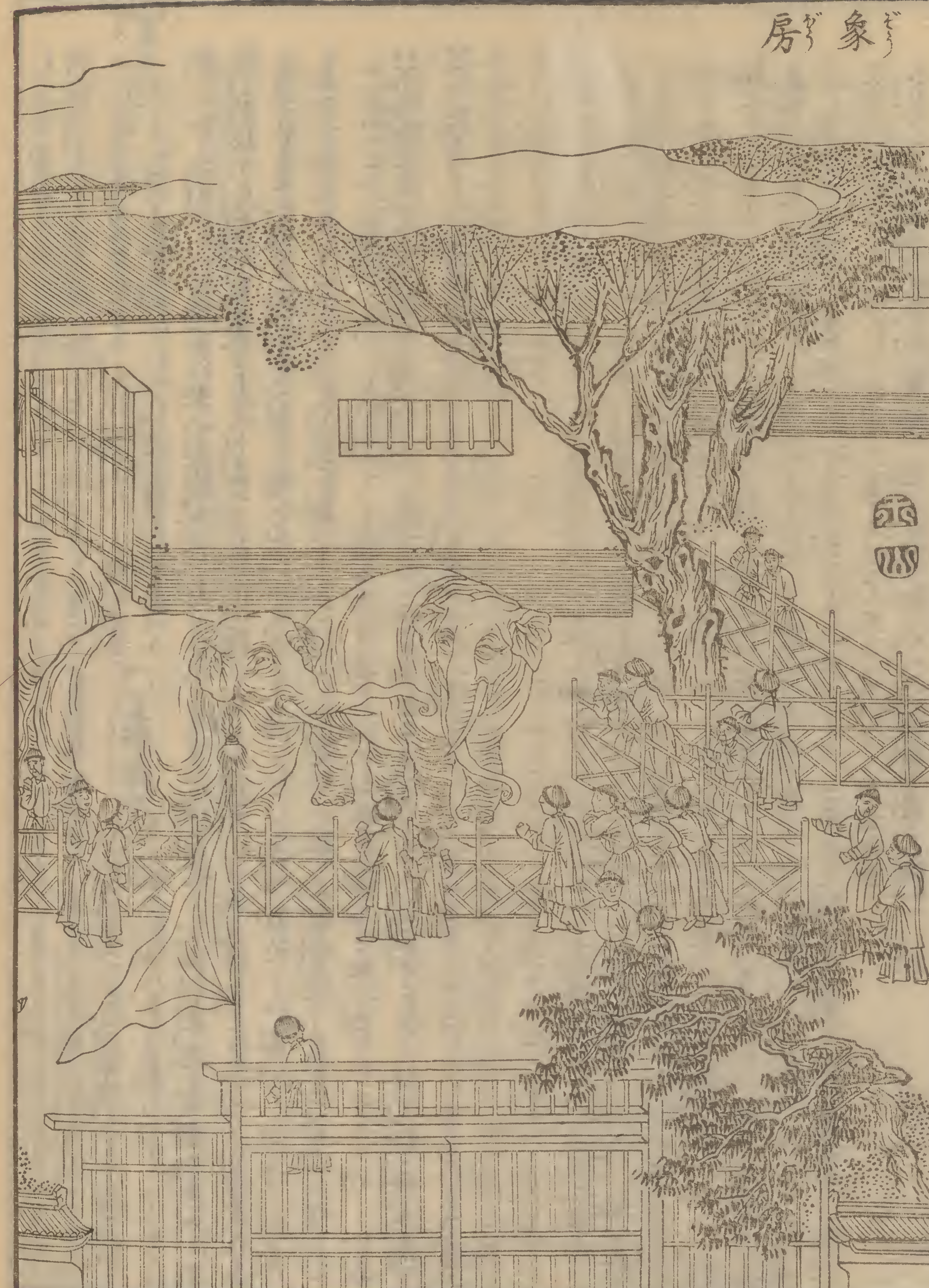
○時憲局 宣武門乃東沿城根の西にあり。欽天監に屬し時憲書を彫る所と。凡明の禮部尚書徐光啓といへる人西洋の人湯若望といひし者等數人を此に居らしめ曆書を修せしむ。續けて曆局といふ。清朝是これによりて西洋人を居らしめて時憲書を治理せしむ。凡歳の二月一日より來

年の時憲書乃式を奉り十月一日に其刻を直省に頒ち刊刻せしめ。然て十月一日にいたりて之を太后皇帝皇后に進め又妃嬪に頒ち王公百官にまで分ち賜ふ。○康熙帝御書の門額あり。天文曆法可傳永久といふ。

宣武門 内城南の右門なり。元代順承門と云ふ。明の正統の間今の名に改むといへども俗尚順承門と呼ぶ。

○象房 阜財坊宣武門の内西城墻象房橋の側にあり。明の弘治八年に建る。象を都にをさむるは先これを社苑に率て進退出没を習はしむ。其所を演象所といふ。象元來鑾儀衛の管として馴象數十疋象奴象隻なるといへる象つかひを指揮し司る。大朝會ある毎に役象多く鸞駕輅寶を挽せしむ。又日毎に常の朝會には象六隻を午門の前左右に立しむ。門と鐘鳴鼓ひゞく時肅然と員侍し百官と入午を俟て御左右の象たがひに其鼻を搆へて立て敢て一人も進むべからず。朝會終りて百官門を出る時はまさじめのごとし。○朝會乃附し象病ありて朝に之る能はざれば象奴其病ある象を率て他の象の不に到りしむ。病象面を撃ち象を以て代りて役に當るべしと説がごとし。他象これを視て敢て病象に代りて役を勤るなり。若病象の此證のなき時は象奴名るへく小令もしれども敢て動くべからず。或は象道とうれる或は人々に傷る時は朝廷勅して杖しむ。象其杖の數にいたるまで地に跪きて杖を受く。杖終りて杖き恩を謝して退く。象の人の言をきくこと然しかなり。朝會の時當る象の己が立べき所ありて下位に位ぬるをすべて其班位の數に異りて腰むべき所に從はし。○京師まつりの人先象坊に來て視る。又其技を見んと乞て錢を象奴にあたふ。象錢の數乃滿ざるを見て鼻をもたげて觱篥銅鼓の聲を作す。見る者直に入て錢をあたふれば又鼻を上げて吼る。若錢負に異されば又教てうしろ技をなさず。○象病める時は必耳の中より油を出す。名けて山性といふ。山性起る時は猛大絶にして象の糧と駆急なり。先人戒めれが犯しても後動いやすきによりてなり。故に象の病める者を兵部署に送り兵部より朝廷へ奏し旨を得て光祿寺もと無く象死して十余日を經よ。其奧乱制に儀送る者道を避くきなり。小都下の太庖何某なる者喰象肉を嘗て美とし。客として其味美なるふとをいひ訳しむ。象肉と稱して集り食ふ者多し。京師の漢文なる話めくのごとし。○歳六月象を引て河の岸に浴せしむ。象河中にありて雌雄交合し。形勢は雌は仰き雄は伏し人の交合に異てなし。




象房

宣武門の西南の隅に王恭廠胡同あり。明代此所に火藥廠あり。今は廢せり。明の天啓六年。五月朔日の巳刻ばかりし。此王恭廠の地震ひ裂け。平地陥りて二の穴となる。長三十歩。濶十三尺歩。深さ二丈計。其響雷の震ふが如く。崩れ倒るゝ民家一万九百三十軒。壓れ死る男女五百三十七人。此時一道の飄風吹来り。風の内に一点の火光らしく見ゆるが如くに。忽ち火藥廠に燃へ移り。焔硝の火氣と引うつし。満廠火となり。黒煙ことごとく燒用き火焔空中にみちて。黒烟八隅に覆ひ。百雷の電の鳴わたるが如し。廠中火薬を製する人夫三十余人悉く死せり。唯其二三人ある者一人不思議に命を全ふせり。そのとき驚むべきは。此辺の大木巨樹根よりぬけて半里一里の外へ飛くりしに。枝葉ともに焼たる程也。楽楼は飛去て数十丈の処に落るといへども。庫車家器の類は旧のごとし。又石附馬街にありし石獅其重さ五千斤なるもの飛て順城門の外に落り。就中此日京師の婦女輿に乗りて往来せる者若さる衣服飛去て裸体となり。故に物なく其衣装を引集めたるごとく。衣服は空に起て昌平州に堕たりといや。

○讓紅旗官学 宣武門の内。象坊胡同にあり。○象恩律寺 都城の西南象恩寺街にあり。○讓紅旗覺羅宗学 象恩寺街にあり。○吉祥寺 猪尾胡同象恩寺の右にあり。○天仙廟 南闹市口にあり。○此わたりに元弘寺・保安寺・撫抱徳観・庵等あり。みな寺号ありて巷街の名を称す。

○讓紅旗滿洲蒙古漢軍三都統署 絨線石附馬大街にあり。○鷲峰寺 内城の西隅城隍廟の南にあり。唐の貞観年中に建る古刹なり。唐代には澱泥寺といへり。又別に佛寺ありしも独此寺に唐人の石刻心経あり。中に栴檀瑞相の佛像あり。其体製踊として動くがごとし。近世の人のよく辨ずる所とある。清朝康熙年中勅して此栴檀瑞相を弘仁寺に移され。新に銅観の如来を鋳て安置せり。乾隆二十六年重修御製の碑あり。○正紅旗漢軍都統署 宣武門内。鷲峰寺街にあり。○圓通禅林 鷲峰寺の東にあり。殿内に呈士雲が撰ひたる水塘庵の記あり。○讓藍旗滿洲都統署 華嘉寺胡同にあり。

○以上宣武門讓藍旗護衛の界とし。以下は阜城門内讓紅旗護衛軍の居址とし。居址の図は次に見ゆ。

○讓紅旗護軍統領署 西單牌樓抱子街にあり。○雙塔寺 小時雍坊西長安街にあり。金の章宗帝の時に建らる。元の代には慶壽寺と称し。寺の塔あり。其一は九級一は七級なり。九級の塔の額は特贈光天普照佛日圓明海雲佑聖國師の宝塔といふ。七級の塔の額は佛日圓照大禅師可菴靈塔の字あり。明の正統の間重修して大興隆寺と号し。其後寺廢して射所となし。講武堂と名づく。又後に此地を演象所となす。國朝の乾隆の間その残りたる殿廡を重修し。雙塔を今に寺の西偏にあり。

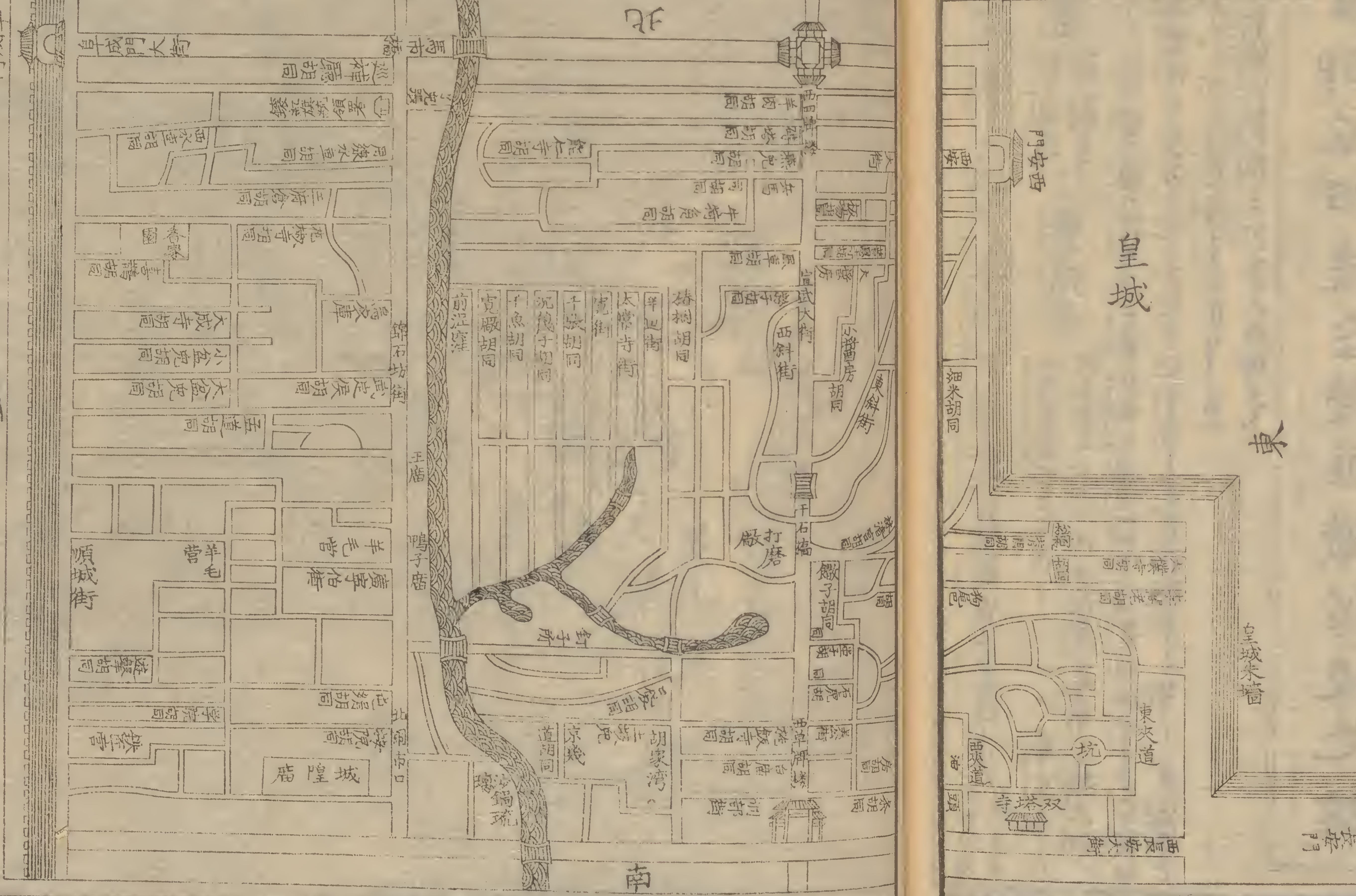
石塔參差御苑西凌空雙雁識招提梵鈴
風起聲相激仙筆雲分勢欲齊似列飛鳧
朝帝闕豈煩鳴馬護禅棲長安落日馳車
騎何處逢人跡不迷　明 呉國倫 双塔寺詩 半江田書録

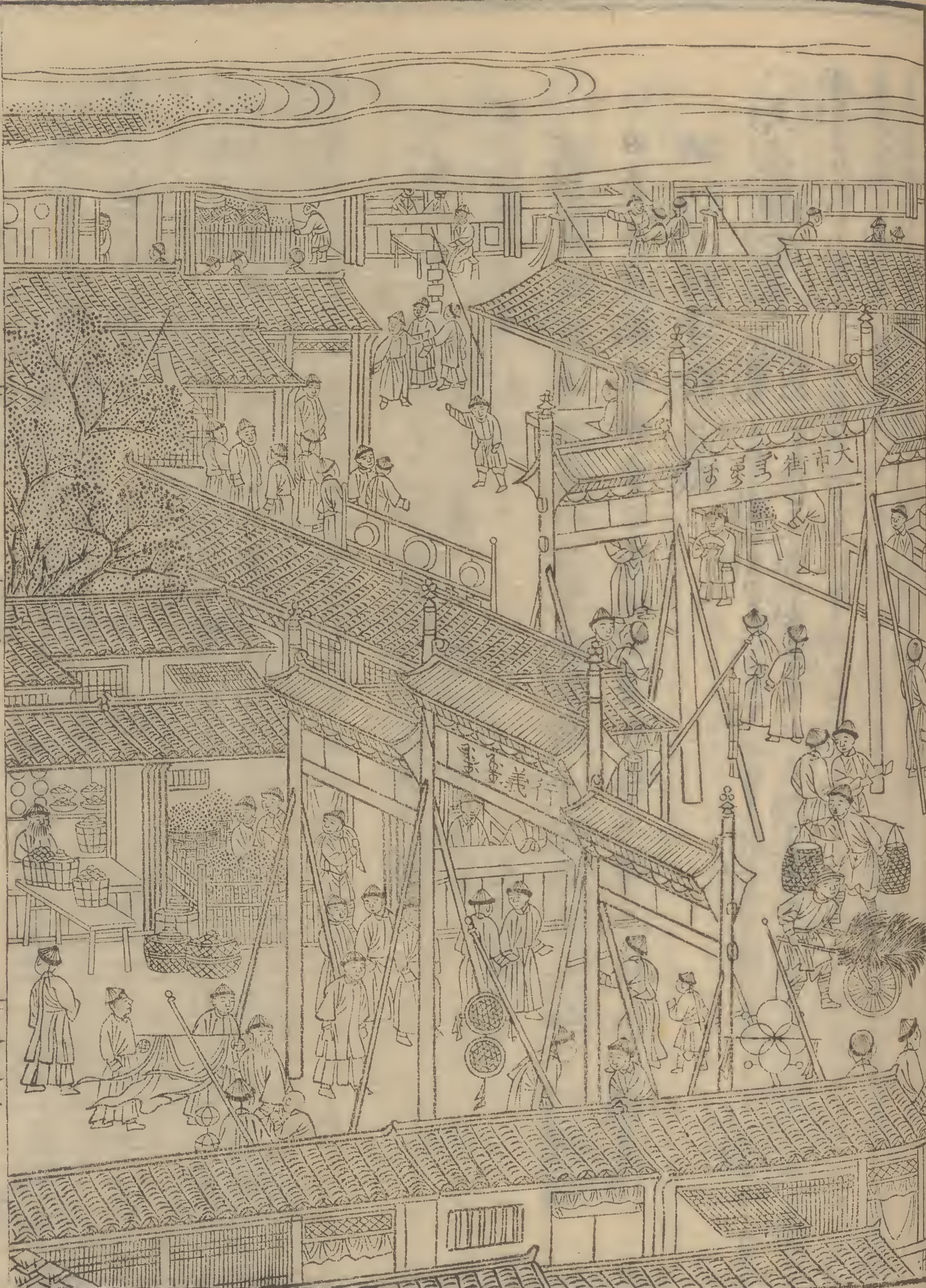
○讓藍旗漢軍都統署 西單牌樓の東堂子胡同寛街にあり。○讓藍旗蒙古都統署 大僕寺胡同にあり。○讓藍旗官学 乾石橋斜街にあり。○顯應觀 宣武大街乾石橋にあり。乾隆帝御製重修の碑あり。○普恩寺 安福坊乃乾石橋の北にあり。

鑲紅旗居址　満洲蒙古漢軍三の鑲紅旗ハ羊肉胡同より南にむかひ東單牌樓にいたるまで正紅旗と界を接るの所とし西ハ牌樓より南にむかひ單牌樓と東に遶し長安街の牌樓にいたると満洲の頭参領に屬せる佐領十三人の居址とし西安門大街の南板場胡同廊房胡同醬房胡同東斜街細瓦胡同を満洲の二参領に屬せる佐領十七人の居址とし細米胡同より南にむかひ繳子胡同羊尾巴胡同背陰胡同太僕寺街李閣老胡同までと満洲の三参領に屬せる佐領十七人の居址とし李閣老胡同より東に向ひ東夾道東岳廟演象所官磨房にいたる満洲四参領に屬せる佐領十八人の居址とし繳子胡同より堂子胡同石虎胡同懶松胡同池房胡同茶葉胡同西夾道正溝胡同にいたる満洲の五参領に屬せる佐領十七人の居址とし凡満洲鑲紅旗の参領五人佐領八十二人軍丁二万四千六百人なり。

○四牌樓大街より西にむかひ粉子胡同緞匠營十八半截巷盤胡同等を蒙古の頭参領に屬せる佐領十人の居址とし巻盤胡同より北にむかひ兵馬胡同燕兒胡同轆轤胡同にいたるを蒙古の二参領に屬せる佐領十二人の居址とし凡蒙古鑲紅旗の参領二人佐領二十二人軍丁六千六百人なり。

○四牌樓大街より西にむかひ向廟胡同半截街と漢軍の頭参領に屬せる佐領二人の居址とし向廟胡同より北に向ひ車子胡同臭水河胡同流觴胡同にいたるまでを漢軍二参領に屬せる佐領六人の居址とし千張胡同より北に打磨廠字圏子胡同口袋胡同まてを漢軍の三参領に屬せる佐領四人の居址とし口袋胡同より旌飯寺後街の胡同東夾道胡同までを漢軍の四参領に屬せる佐領六人の居址とし東夾道の胡同より南に向ひ白廟胡同刑部街まで漢軍の五参領に屬せる佐領四人の居址とし凡漢軍鑲紅旗の参領五人佐領二十二人軍丁六千六百人之三軍合して三万七千八百人阜城門内守衞の官兵とし。





四牌樓

四牌樓ハ十字街にある坊なり大街の牌を雙く四面に掲るをもつて四牌樓と云



○萬松老人塔　西に牌樓の南大街の西にあり。これ即ち轉塔胡同といふ。錬瓦を以て累ね、九級の塔を此に建つ。塔の製造舊に倣へり。又乾石橋の北に七級の塔あり。高さ一丈あまり、石額あり、萬松老人塔の字を刻む。そもそも老人は金元の間の僧なり。自ら萬松野老と號し、燕京の報恩寺に住す。文正王耶律楚材といふ者、老人に師事して參禪すること三年、老人即ちこれに湛然居士の號を授く。老人嘗て文正王に語て曰く、以儒治國以佛治心と。文正王常に此語を稱し、萬壽語録釋氏新聞等の書は即老人の著なり。又よく琴を操る。文正王にすゝめて琴譜を集む。文正王萬象殿の春雷及び種玉翁の悲風の譜を老人に送る。又一日文正王孔雀の便面を寄せ謝するに詩を以てす。其詩に曰く、風流彩扇出西州、寄與白蓮老社頭、遮日招風都不愧、休從侍者索犀牛云々。今も尚これを法門に傳へて一時の佳話とせり。

○大能仁寺　兵馬胡同にあり。旧名は能仁寺、元の延祐年中に建つ。明の洪武元年重修して大能仁寺の額をたまふ。

寄大能仁寺還一和尚　　毛奇齢

遥望巖城隔翠微靈山自昔會来稀堂開謌席龍初下門傍間田鳥自飛蹋足頓穿三宝地閑身不掛七條衣從他法臘年〻換何日相逢話息機

○大德顯靈宮　旧服寺にあり。昔此宮の前門、此を去る事里許、兵馬司胡同に通じより石額今にありて、旧門の跡を標せり。明の永樂年中の創建、嘉靖の間、殿宇擴通明殿を建て、東に輔蒼殿を建てこれを昭德殿と名(?)し、西に獨王師殿を建てこれを保眞殿といふ。又龍虎殿を建て眞武の像を安んずといへり。清の乾隆年間重修す。○西殿の前に古栢の大樹あり。雷に傷られしより地に倒れて今尚臥龍のごとし。又老松六株あり。虬枝屈曲並に數百年のものなり。

道家の書に云ふ、崇恩眞君姓は薩氏、諱は守堅、蜀の人なり。宋の徽宗皇帝の時、虚靖天師張繼先及び林靈素に從ひて道を學び法を傳へたり。又隆恩眞君といふは則ち王樞使府天將王靈官なり。嘗て薩眞君に從ふて符法を傳授し、又明の永樂年中、杭州の道士周思得といふ者靈官が法をもつて京師に顯はる。其術に誘るに奇驗ありければ、皇城の西に天將廟及び祖師殿を建られたり。宣德中に到て改て火德觀とし、又薩眞人を封じて崇恩眞君と稱し、王靈官を隆恩眞君とし、又封じて別に一殿を建て二眞君を封安す。其左は崇恩殿、右は隆恩殿といふ。成化の初年觀を改めて宮とし、靈顯の二字を加へ、偏に敕額を賜ふ。歳ごとに萬壽正旦冬至及び二眞君示現の日は朝廷官を遣りて祭りを行はしむ。俗に○靈官が姿像ありて文皇帝東海に獲給ふ所なり。朝夕此像を崇禮して寶容に祀せるがごとし。征伐に行かせ給へる時は此像を持し給ふ。金川を伐給ふ時、金川の河にいたりて此姿像敢て動くことなし。懼して其故を像に問はせ給へて曰く、上帝の界止ありこゝより外國へ越くべからずと。今其像の在所を知らず。

○穰黄旗覺羅宗學　乾石橋の西南。西帝胡同にあり。

○石佛寺　咸宜坊乾石橋の西南、西帝胡同にあり。昔寺僧地を掘りて彌勒の石佛一尊を得たり。これに石佛寺と號く。元の統元元年司禮監を置て、太祖太宗睿宗三朝の御容を此寺に奉安したまふ。

○眞武廟　乾石橋の西南大木廠の内にあり。門外に石獅二あり。數百年のものなり。

○蠟燭寺　捨飯寺胡同にあり。今の名は法光寺。明の時飯粥を此所にて施し貧人を賑はれし。

○都城隍廟　城西四刑部街にありて南に向ふ。像は周頂あり。廟門を順德門といふ。内に闡威門あり。凡三重、悉く三間。左右門各一。前殿五間、東西に廡あり、各三間。回廊各二十二間。擔をつく。後宮を通じて前を南とし、東に御碑亭一あり。西に燎爐一あり。後殿五間なり。闡威門の外に洛牲所あり。又井亭一を西門の南に、東西には鐘樓鼓樓を設く。殿宇門廡題額を蒙し、門極は皆丹護、梁棟は五彩を以てこれを塗る。雍正帝乾隆帝御製の碑前に詩あり。元代此廟を佑聖王靈應廟と號し、天曆二年にあたりて大都城隍神を加へ封じて護

國保寧王と云。明の永樂中大威靈祠と改む。清又改て都城隍廟と称す。○寝殿の内に朱塗の木桶二あり。大きさ数十石を入べし。又萬暦中浴盆及び換水を造り同じく寝殿の内に置。帝二の碑を立るより今浴盆二は尚存せり。換水と二碑は亡り。此地もとより乏しき故に木桶を備ふ。且つ不虞の用に備ふといふ。此祠を守る者は道士多し。此處は竟神の沐浴し給ふ事ありて眼疾の患ある者は目を洗ひ祈て甚驗あり。毎歳五月一日より十日が間この都城隍廟の前にて市をつらぬ。西は廟の前より東は刑部街に至る。と称し、遊ぶ人をたぶらかし以て米穀をむさぼる。○廟市 三里ばかりがほど貨物ひしと列り、其他の群集夥しく城市と同じありさまなり。廟前に設るをもて市の名とす。

祠垣森列樹蒼々　風馬雲旗儼在堂　世仰威靈関社稷　誰傳姓氏擅于楊　四時禮祀皇情肅　萬邑安和帝道昌　屹立豐碑垂聖藻　顧瞻時雨與時暘
右題京都城隍廟詩　閩中陳景山

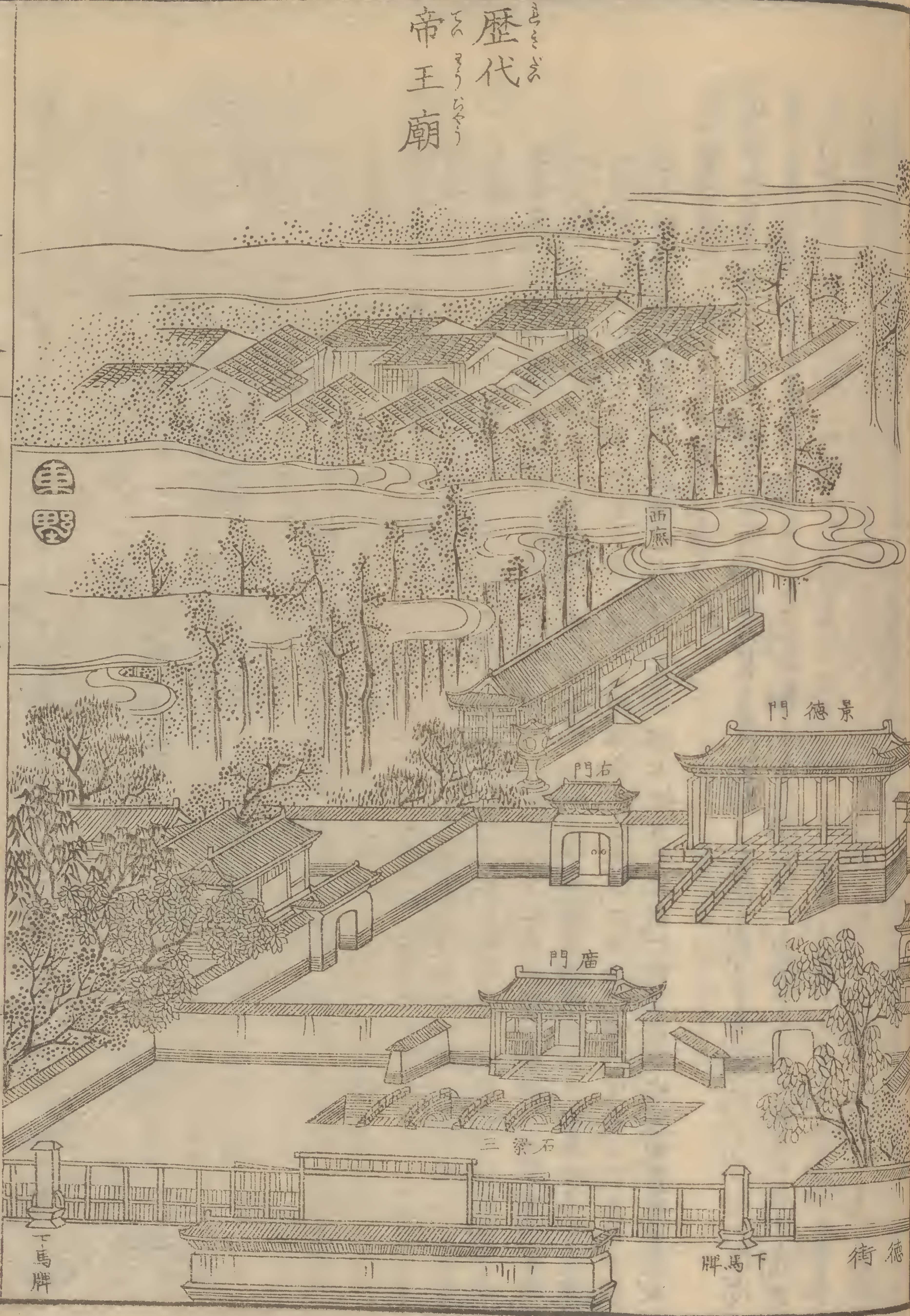
○關帝廟 都城隍廟の西にあり。明代萬暦中に建る碑一あり。清朝順治中元君殿を建廣吉士周瀚が記あり。○右翼炮殿 宣武門内都城隍廟の北にあり。

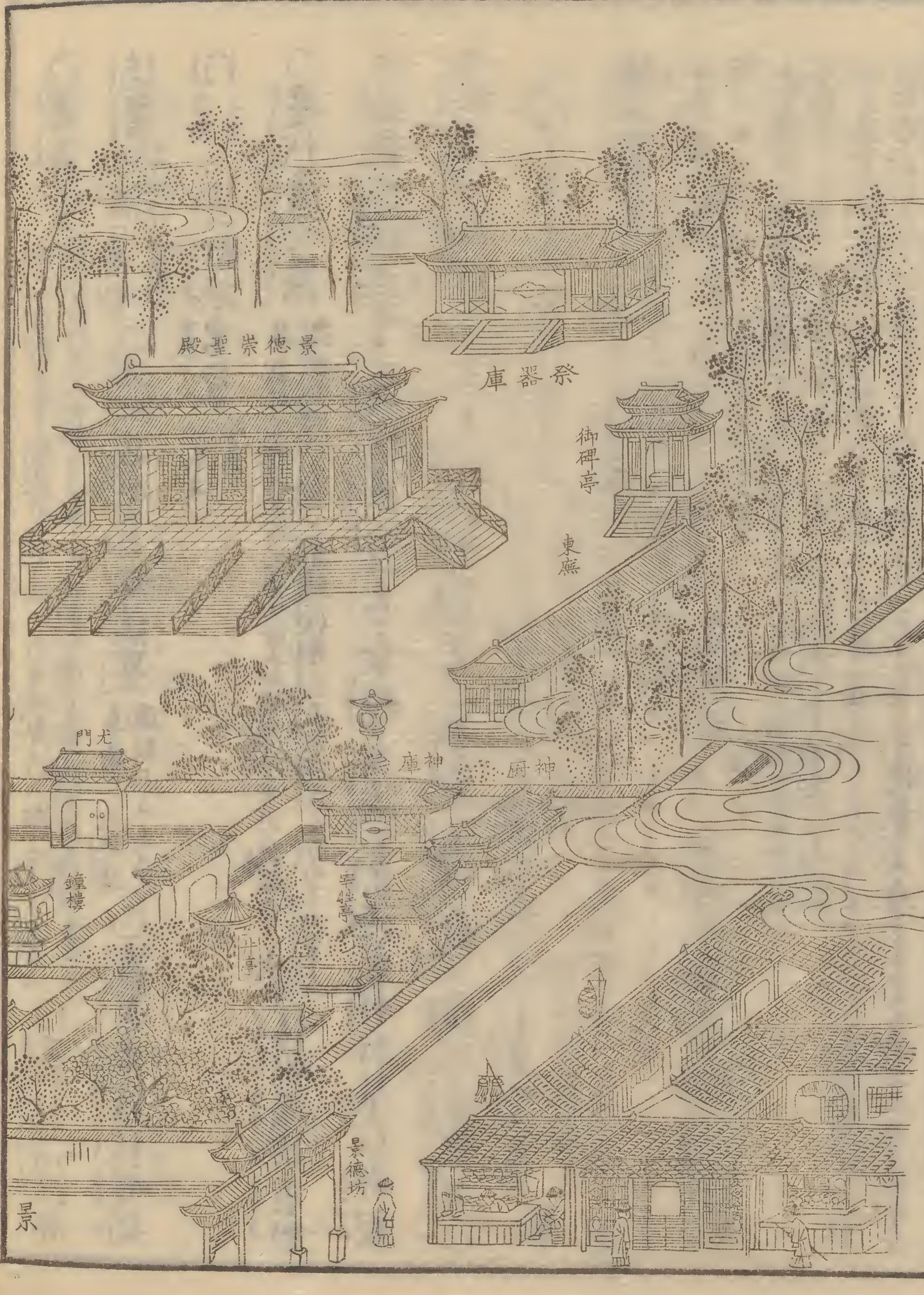
○護國關帝廟 此廟口の北古東橋にあり。俗稱る廟と呼ぶ。○鑲藍旗護軍統領署 小廟口の北也衚衕にあり。

○普壽寺 錦石坊街にあり。勅建の額を掲く。此寺回部の人都に来る者が寓する宿所にて門内に小樓あり。高くして遠く回部を望む。朝夕日を禮拜すといふ。○正紅旗滿洲都統署 阜成門内錦石坊街にあり ○正紅旗蒙古都統署 阜成門内巡捕廳胡同にあり ○右翼前鋒統領衙門 同所にあり ○正紅旗官学 同所にあり

○歴代帝王廟 阜成門大街にありて南に向ふ。此地保安寺の故址なり。明の嘉靖の間此に廟を建歴代帝王及び名臣をまつりたまふ。清朝順治康熙の間欽定壇祀あり。其後雍正二年帝親ら論て祭禮を行ひなされ御製の碑文あり。乾隆二十九年再び造営ありて黄瓦をしいて殿を覆ひ帝親ら行て祀りを給ふ。御製の詩文あり。廟門三間左右門各一。前に石梁三を跨し内に景徳門と云門又同崇基石闌前後三の陛あり。中十一級左右各九級なり。景徳崇聖殿 門内正中にあり。則歴代帝王の廟なり。殿九間重檐崇基石闌南面に三の陛あり。中十三級左右各十一級。東西に又陛一あり。各十二級なり。東西に廡あり。各七間名臣の位を奉安す。各東に燎爐一あり。○御碑亭 殿の東にあり。又殿の後に祭器庫あり。又向 ○神庫神廚 各三間 ○宰牲亭井亭 倶に景徳門の外東にあり。西は鐘樓一あり。官致齋所の東西に鐘樓一あり。園垣周百八十六丈三尺八寸。廟門の外東西に下馬牌各一あり。殿廡悉く黄琉璃の瓦を覆ひ、棟は丹を塗、梁柱は皆金彩。

○凡歴代の帝王の祀りは明の洪武六年廟を金陵の地に建て祭祀を行ひ給ふを始めとし、其後嘉靖の初年今の京都に移されより明代の祀る者は三皇五帝三王漢高光武唐太宗宋太祖元世祖各創業の


歴代帝王廟
西廡
景德門
右門
廟門
石梁三
下馬牌
下馬牌
德街


景德崇聖殿
祭器庫
御碑亭
東廡
左門
神庫
神厨
鐘樓
景德坊
景

君を奉り給ふ然るに嘉靖の間に至て貴人通名乃諸臣思へらく元ハ蒙古の夷なり何ぞ我中國乃天子これを祭り給ふ乃理りならんやとて則元の世祖の神位を廢し今の清朝ハ滿洲の夷なれバ順治の間再び元の世祖乃神位を奉じ又明の太祖と倶に陪祀せり康熙六十一年勅して歴代帝王の位にありし者悉く此廟にまつり其中に無道の君弑せられたる君國を亡せしの驕君ハ皆これを除き去り則蜀漢東西晉元魏後五代金遼天下一統乃世ならざれバ遼に除きて祀るにあらざりしが乾隆の時に至りて蜀の昭烈帝ハ漢家の正統仁義の君なればとて此に陪祀し歴代帝王の列に入られたり元魏代帝王の名大清會典にのせたるを左のごとし

大昊伏羲氏。炎帝神農氏。皇帝軒轅氏。少昊金天氏。顓頊高陽氏。帝嚳高辛氏。帝堯陶唐氏。帝舜有虞氏。夏王禹。啓。仲康。少康。杼。槐。芒。泄。不降。扃。廑。孔甲。皐。發。○商王湯。太甲。沃丁。太庚。小甲。雍巳。太戊。仲丁。外壬。河亶甲。祖乙。祖辛。沃甲。祖丁。南庚。陽甲。盤庚。小辛。小乙。武丁。祖庚。祖甲。廩辛。太丁。帝乙。○周武王。成王。康王。昭王。穆王。共王。懿王。孝王。夷王。宣王。平王。桓王。莊王。僖王。惠王。襄王。頃王。匡王。定王。簡王。靈王。景王。悼王。敬王。元王。貞定王。孝王。威烈王。安王。烈王。顯王。愼靚王。○漢高祖。惠帝。文帝。景帝。武帝。昭帝。宣帝。元帝。成帝。哀帝。光武帝。明帝。章帝。和帝。殤帝。安帝。順帝。沖帝。桓帝。靈帝。昭烈帝。○唐高祖。太宗。高宗。睿宗。肅宗。代宗。德宗。順宗。穆宗。文宗。武宗。宣宗。懿宗。僖宗。○遼太祖。太宗。景宗。聖宗。興宗。道宗。○宋太祖。太宗。眞宗。仁宗。英宗。神宗。哲宗。高宗。孝宗。光宗。寧宗。理宗。度宗。端宗。○金太祖。太宗。世宗。章宗。宣宗。○元太祖。太宗。定宗。憲宗。世祖。成宗。武宗。仁宗。泰定帝。文宗。寧宗。○明太祖。惠帝。太宗。仁宗。宣宗。英宗。景帝。憲宗。孝宗。武宗。世宗。穆宗。愍帝。　東西廡名臣位略此

以上の帝王ハ廟中に位を祀し春二月秋八月官を遣して祭りを致し給ふ元ハ乾隆帝親から行て祀り給ふ乾隆二十一年會典に載たる所いまだ備らずとして重て勅し東西晉の帝王元魏の太武道武周の世宗を増祀せり然るに康熙帝乃論旨に明の神宗熹宗の兩帝ハ全く亂國の主なれバ祀を除き崇禎の愍帝ハ亡國の時に主たりといへども政を執て過ちの行なく其身社稷に殉死に愍帝と奉じて祭り給ひ乾隆帝も又漢の桓帝靈帝をもつて明の神熹に比し改めてこれを除き給へり

○弘慈廣濟寺　歴代帝王廟の東にあり康熙年中王國卿といふ者其弟王國臣と俱に旃檀香木のうるはしき数丈なるものを得て蔵施せり然るに江南の劉拱北といふ者あり世に名ある良工なり王國卿ら旃檀香木を劉拱北に囑し佛像を刻しむ劉拱北深して三年を經て佛像成り京師に送へて此廣濟寺に安置せり康熙帝勅をよく自ら臨み像に對ひ給ふ御製の像の賛并に碑文勅額を給ふ寺中に故樹あり老幹奇特堂宇を覆ふ寺僧是を鐵樹と稱す乾隆帝御製鐵樹の歌を石に勒す。

○以上阜成門内鑲紅旗護衛の界なり以下ハ西直門内正紅旗護軍の居址とす　居址の圖ハ次に見えたり

○右翼税署　西に牌樓の東大街にあり。○栴檀寺　紅羅廠の南にあり　○關帝廟　西に牌樓の北宣武街にあり額に雙關帝廟といふ關帝の像二神あり合せ祀るをもつてかくいふなり何れの代に建るかを知らず。○正紅旗護軍統領署　奥に胡同にあり。○聖祚隆長寺　西に牌樓の北胡同にあり明の萬暦の間創建し乾隆二十一年重修し御製の碑并御書の額あり。○白塔寺　河漕西坊阜成門街にあり遼の寿昌のころ創立し元の至元中重修して大聖壽萬安寺と號す明の天順の間妙應寺と号く清朝康熙の間重修ありて寺塔の荘嚴を尽せり康熙帝御製の碑あり又乾隆中重修ありて御書の心經及ひ尊勝の呪御製重修の碑白塔の銘あり寺内の鐘樓皆乾隆の御書なり又滿漢蒙古西番合璧の大藏全咒十套西番番字嚴經一分維摩詰の所說大乘經全部をおさめて寺僧に命じて看誦せしむ

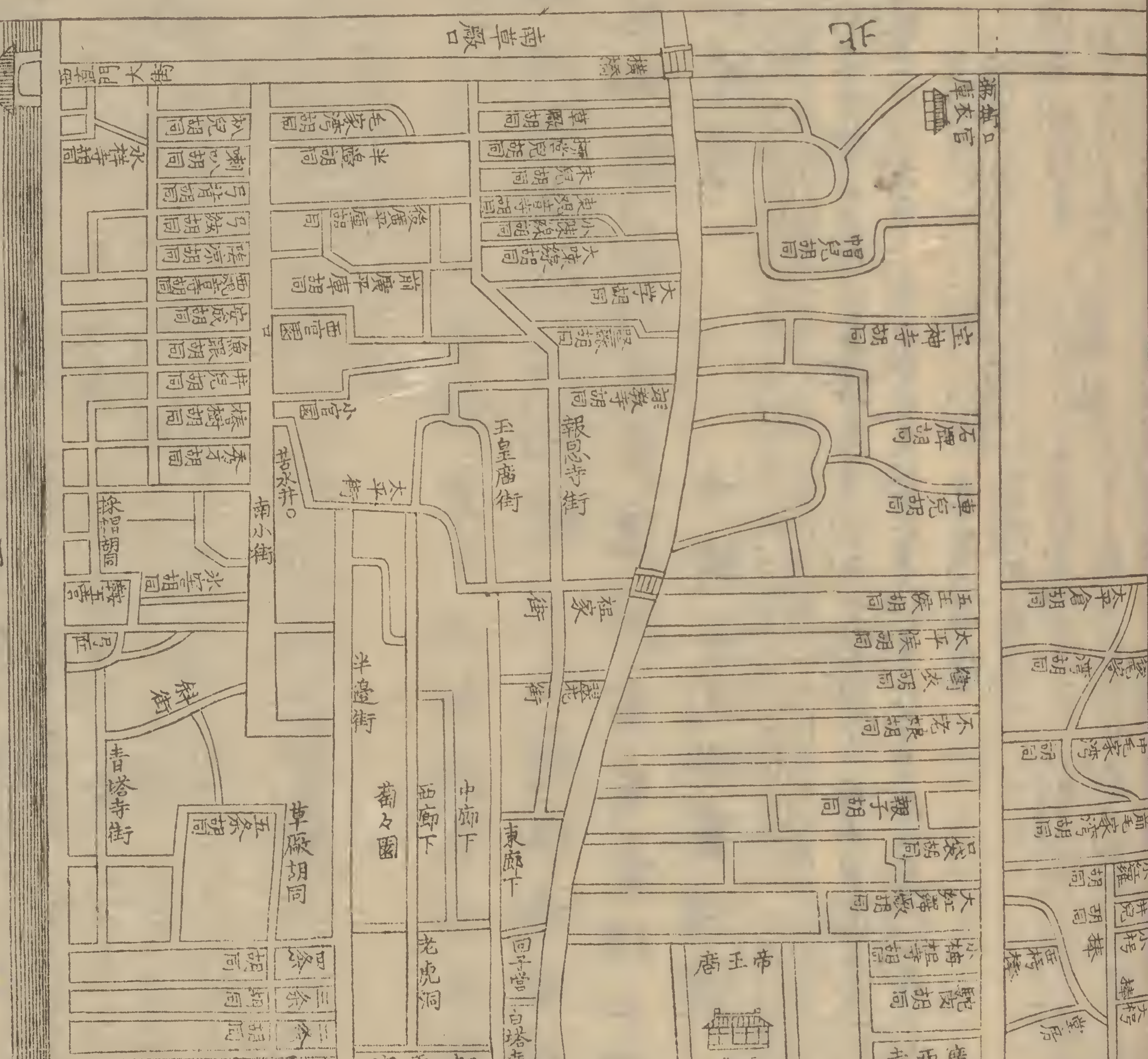
遼の寿昌二年釈迦佛舍利を藏るために此白塔を建らるてう底に白塔寺と号く塔の中には舍利戒珠二十粒香泥の小塔二十并陀羅尼經五部を藏す元代より至元八年世祖帝此塔中よりこの舍利の石函を開き見給ふに中に銅瓶あり香水を盈しめ其色ぶどうのごとし舍利の形ハ圓くして堅し其光金粟を見るがごとく前に龍王二あつて跪てこれを護まもり其香水を湛る銅瓶の底に銅錢一あつりて見

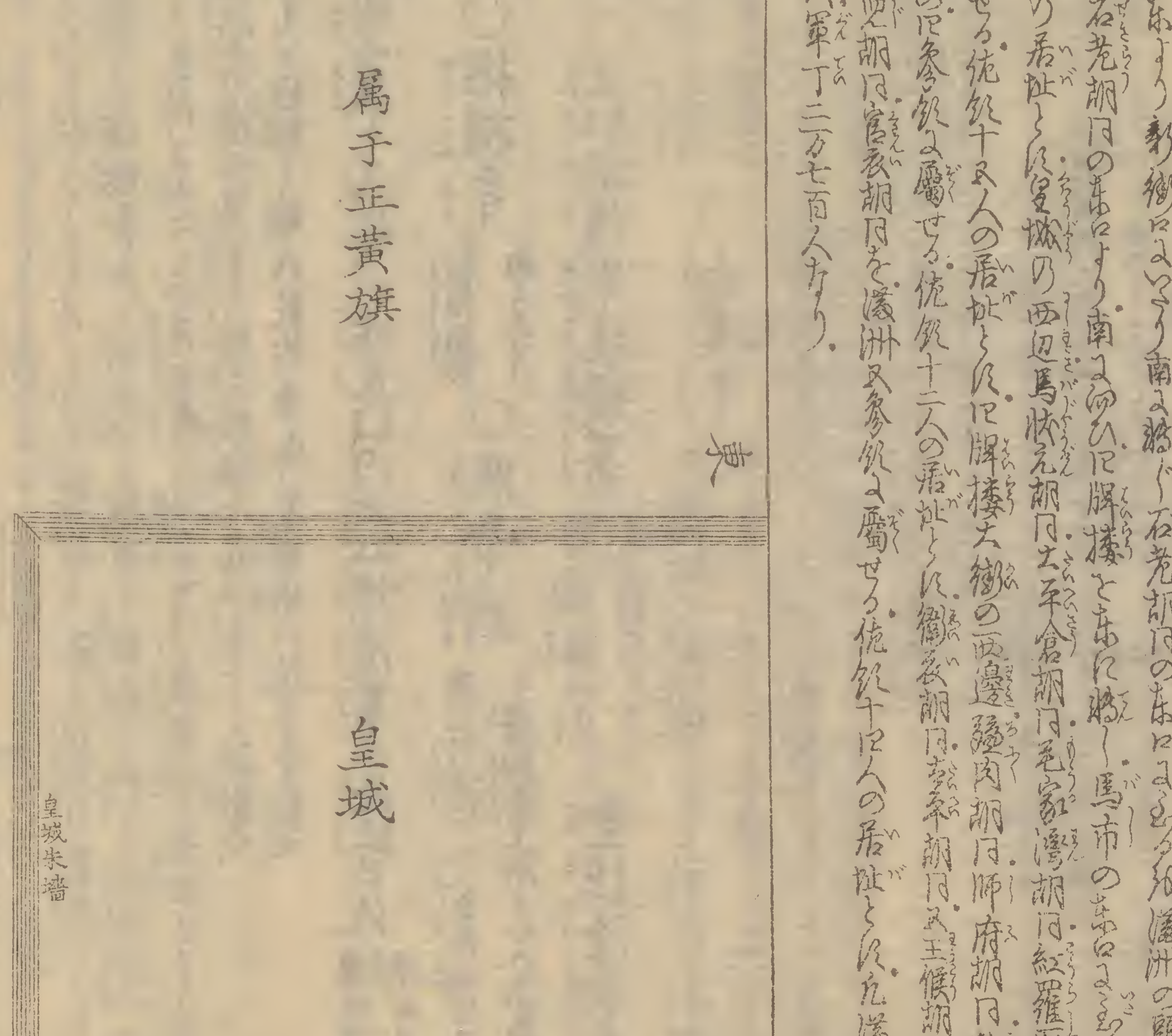
正紅旗居址

正紅旗満洲蒙古漢軍の正黄旗と界を接る所ハ馬状元胡同の東口より西口に至まで又西直門大街留玄観の東より新街口よいたり南に轉じ石老胡同の東口にいたるまでを満洲の頭参領に属せる佐領十二人の居址とし石老胡同の東口より南にゆいて四牌楼を東に轉じ馬市の東口にいたるまでを満洲の二参領に属せる佐領十六人の居址とし皇城の西辺馬状元胡同太平倉胡同毛家湾胡同紅羅厰胡同楊梅胡同と満洲の三参領に属せる佐領十五人の居址とし四牌楼大街の西辺驢肉胡同師府胡同猴子胡同真武廟胡同石老娘胡同と満洲の四参領に属せる佐領十二人の居址とし錦衣胡同苦茶胡同又王侯胡同車兜胡同石牌胡同宝禅寺胡同帽児胡同宮衣胡同を満洲五参領に属せる佐領十四人の居址とし凡満洲正紅旗乃参領官五人佐領六十九人軍丁二万七百人なり。

○西直大街の南辺并又厰胡同柳巷胡同西観音寺胡同綵胡同大喜胡同と蒙古乃頭参領に属せる佐領十二人の居址とし大学寺胡同南宗厰胡同教寺祖家街柵欄胡同東観音寺胡同槐樹胡同若水井を蒙古の二参領に属せる。佐領十二人の居址とし凡蒙古正紅旗の参領官二人佐領二十二人軍丁六千六百人也。

○阜成門大街より宮門口よいたる漢軍の頭参領に属せる佐領四人の居址とし宮門口より東にゆいて馬市橋にいたると漢軍の二参領に属せる佐領四人の居址とし馬市橋小辺蘿羅卜胡同回子営にいたるまで漢軍の三参領に属せる佐領四人の居址とし回子営よりゆいて茶葉胡同旧孝花衚を漢軍の四参領に属せる佐領四人の居址とし宮門口より北にゆいて葡萄園のあたりにいたると漢軍五参領に属せる佐領三人の居址とし凡漢軍正紅旗の参領官五人佐領十九人軍丁五千七百人なり。三軍合して三万三千人なり。





後人ぞ至元通寶の文字を携へ帰て、宜く至元は朕が年号なり、佛の蔵の末に今の治世を知る此兆を現ずることそ、滋に元慈の銭を用ひんと、ことく為る数ましけるなり。限り有し、遂に此塔を修造なさしむ。濁りは玉杵を翫し、堅に石闌を布き、蒼に華鬘をかけ、塔身には珠網を纏ひ、其制度の巧なる、古今無類なる荘厳なり。凡塔の制度は下廣く上狭し。此塔においては上廣く下狭く、頂は長く尖く節々真飾り、其上に銅盤を設け、又銅をもって作れる小塔を安置、全体白きをもって白塔と称る。惜むべし、辛未の年二月十三日雷火に燒る。

雷火焚故宮白塔

數聲起蟄乍聞雷　驟落千山白雨来
恐有怪龍遭電取　赤應佛塔被魔災
人傳妖鳥生謌火　誰覓胡僧話劫灰
豈復神靈有遺恨　冷烟殘燼滿荒臺

十洲平光亂書

○朝天宮　阜成門の内、朝天宮衚にあり。明の嘉靖年中ここに斎醮し、侍べる処なり。宣宗・憲宗の両帝御製の詩文あり。後に勅して天啓六年火災にて、今は宮門は或は東廊下に、又は西廊下に寄たる名のみ残て、多く武の住居となれり。○正紅旗覚羅宗学　阜成門の内、宮門口にあり。

阜成門　内城の西門なり。元代平則門といふ。明の正統間今の名にあらたむ。○柳巷　西直門後廠胡同にあり。昔笑山岩徳宝禅師といふ人あり。都下に生れて法を玉泉明聴に受。明の萬暦の初年、柳巷に住居し、世人其高徳を知る者稀なり。一日梵僧来て笑山岩禅師に見んことを乞ふ。袖を翻さまく乃秘翻となして禅師と問答し、禅師杖をもって地上に畫し、陸て梵僧[illegible]從即徳に包して飛去りき。弟子ら怪しみ其故を問。禅師の曰く、是阿羅漢西天秘密の密を以て問答[illegible]。翌歳秋世にとおる日は僧て雲棲の袾宏といふ者人に語りて曰く、吾聞師に於て笑岩禅師に柳巷に於て見えたり。敗屋数椽殘僧数輩のみあり。誠にさびしき住居なりしが、大徳誠かくのごとし。家に依るもの僅二三人の外数て訪ふ人なし。甚だ敬慕ふべし。今笑山岩が旧菴に其侍者の弟子天童密雲山[illegible]、澄昇漢月なる人の塑して傍に西直門の外小西門にあり。笑山岩徳宝寿年七十にして[illegible]の帝ふる。其徳に仰ぎたまひ新壊に詔で祀まとなし、且月の朔望毎に宿に命して[illegible]。笑岩が落凡書蘭後、西直門外小衚衕観音寺胡同にあり。土人呼で弥勒菴又は小留寺といふ。集あり。今世に行はる。○十方禅院　唐の貞観年中創建せり。○明の馬文駿が詩に、究在風光裡悠然水本同。慶曇治岸寺猶見蓄鐵山、[illegible]佛雞除樹逢僧郎共閑滝留無不可携與暮[illegible]還。其風[illegible]の清き思ひ見るべし。○正黄旗覚羅宗学　朝天宮の西。

○寶禅寺　宝禅寺胡同衚にあり。此地は元代の大萬華寺の址なり。明の内官麻俊といふ者此地を購て居宅を建んとせし時、地中より[illegible]の碑を掘出せり。是より家をさして其寺趾なる事を知りて一寺を造立せり。世の朝廷に禁へて即宝禅乃勅額をたまふ。○崇國寺　西[illegible]衚にあり。寺は其西崇國寺なり。元朝[illegible]の宅地なり。明の[illegible]大慶法王領占班丹、大覚法王著肖藏卜なる者を寓し居らしむ。中殿三層殿八後には宗命殿あり。殿の側に佛舎利塔二あり。又佛殿の前に二像あり。荒翁の[illegible]頗雄逸し、朱の衣を被せし像と、荒燼の風雅といへる朱の密衣と名るとの二像なりとぞ。天順七年八月両日此寺に市あり、百貨つらねて買ふ者あつまり群を成して藩市となる。

康煕乾隆両帝御製の碑あり。元代明代の碑甚多し。繁きをもってこれを略す。

地静烟雲満開軒水上樓泥封丹竈泐竹護茶苗薺火懐时高帝水石自有躋馮君子古夢能為指陸操

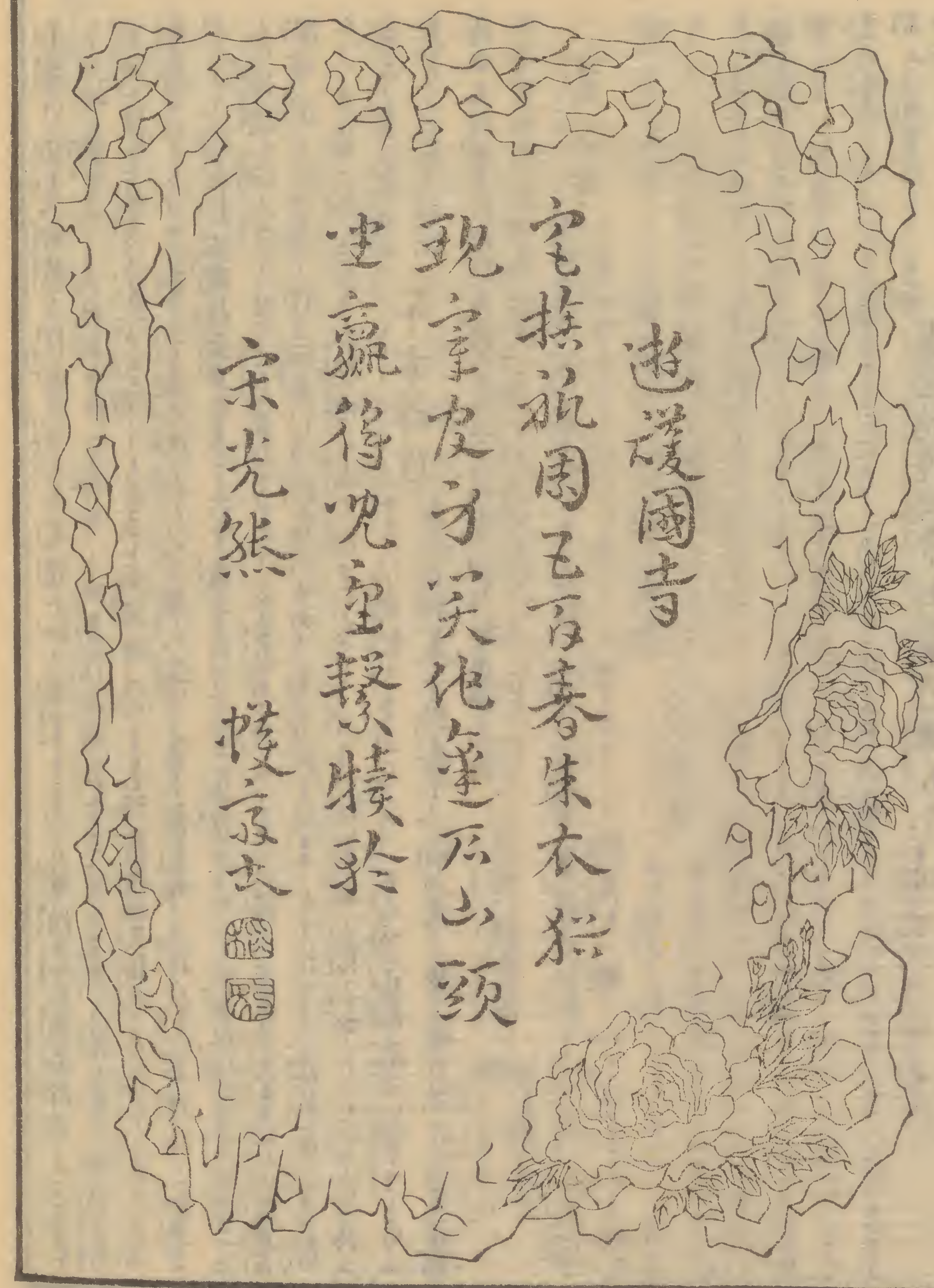
右李鍊師水竹軒詩

西河子出岑書

○以上正紅旗西直門内護衛軍の界とす。以下ハ徳勝門内正黄旗護衛軍の居址とす。

○火徳真君廟　地安門の外。萬寧橋の北にあり。唐の貞觀年中に建。明の天啓年中に重修。廟制宮を命して毎年六月三日此廟を祀せしむ。旧例として今まで いう。

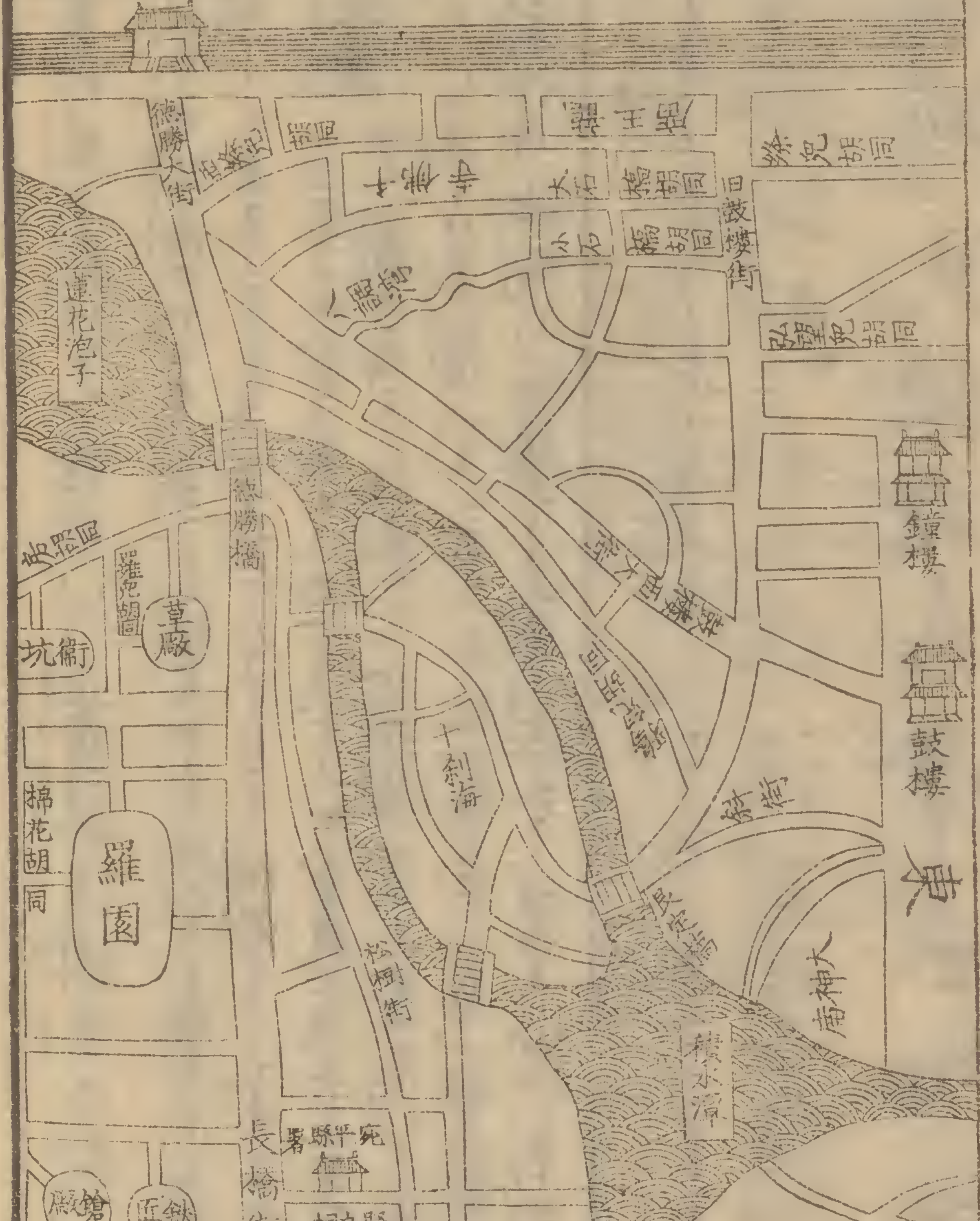
廟門一間。東に向ふ。左右門各一。内を解坊門とす。正殿三間南に向ふ。西に廡あり。廣三間。東に向ふ。南殿三間。其東西の廡各二間なり。正殿の後に三間の閣あり。其後に鐘楼あり。十丈間又廟門の内南北に鐘鼓の楼各一あり。外には解坊一を設く。左門の楼ハ黄琉璃の瓦を覆ふ。殿ハ緑琉璃の瓦を覆ふ。殿ハ丹雘を施す。楼の関帝殿並に宮閣斗母閣には乾隆帝御製の扁額あり。其後ハ水に直なり。北面より小湖を望み風景佳し。



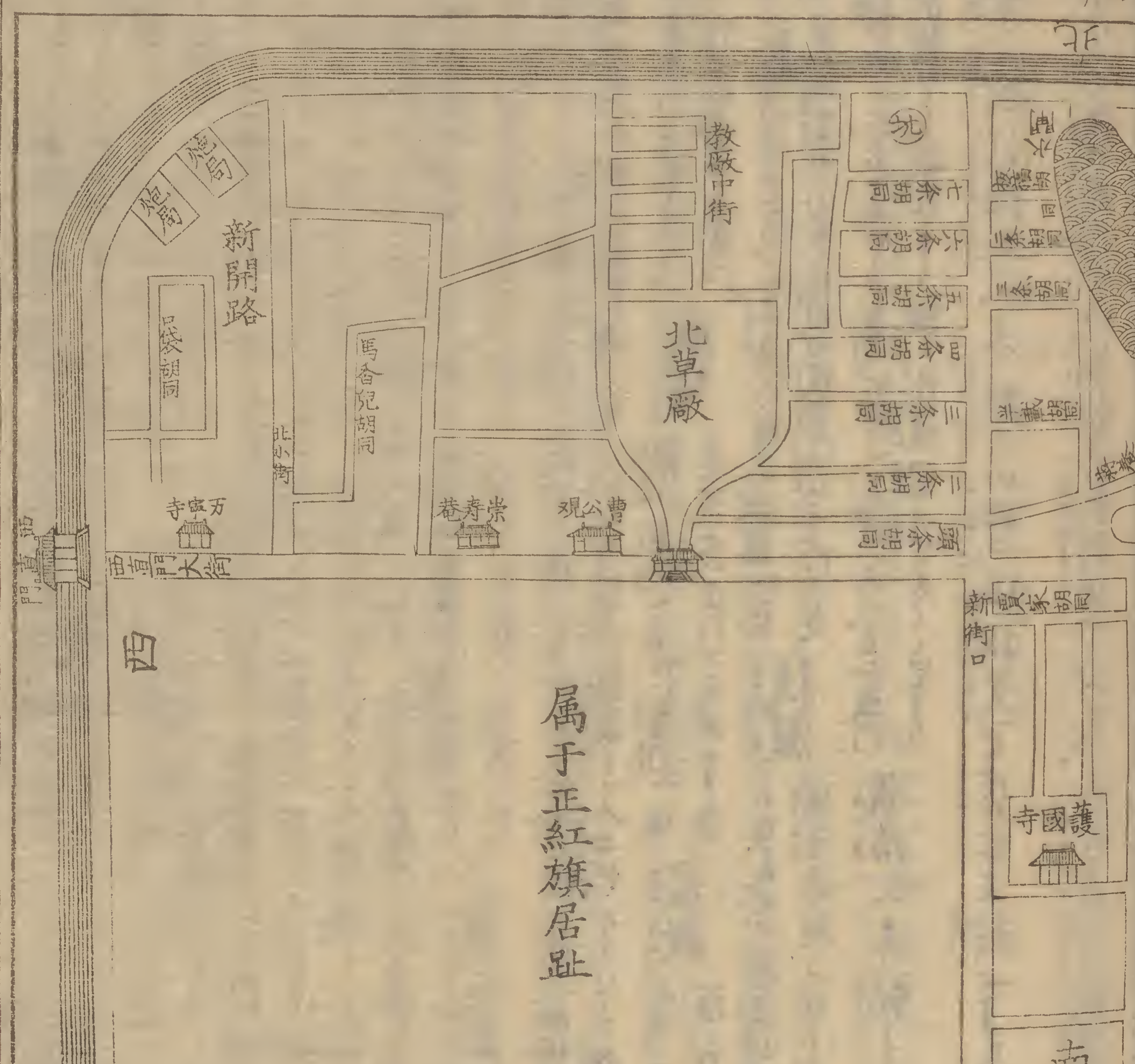
正黄旗居址　満洲蒙古漢軍三の正黄旗ハ鼓楼大街より西に向ひ小系王廟の南にて内城の北に
あり。まづ満洲の頭参領に属せる佐領十九人の居址とハその系王廟より西に向ひ大街
をまつすぐに八間湾の南口にあるハ満洲二参領に属せる佐領十九人の居址とハ八間湾の南口より徳
勝門を南へ過ぎ徳勝橋にいたるを満洲の三参領に属せる佐領十八人の居址とハ鼓楼大街より
銀錠橋を西へ向ひ李廣橋より徳勝大街にいたるハ満洲の四参領に属せる佐領十八人の居址とハ松樹街
の西口より果王廟にいたるハ満洲の五参領に属せる佐領十八人の居址とハ凡満洲正黄旗の参
領官五人佐領九十二人軍丁二万七千六百人なり。

○松樹街の南口より西に向ひ徳勝橋街を少し過ぎて弘善寺胡同の西口にあるハ蒙古の頭参領に
属せる佐領十二人の居址と
ハ弘善寺胡同より徳勝
橋にいたるハ蒙古の二参領に
属せる佐領十二人の居址とハ凡
蒙古正黄旗の参領二人佐領
二十四人軍丁七千二百人也。

○護国寺街より棉花胡同
の南口羅圏胡同の西にある
ハ漢軍の頭参領に属する
佐領十人の居址とハ羅圏胡
同の西口より棉花胡同御房
胡同蔣家胡同にいたるハ漢軍の二参
領に属せる佐領十人の居址
とハ蔣養房の東口より西口に



あるハ漢軍の三参領に属せる
佐領十二人の居址とハ新街口
より小石橋後の四條胡同の東口に
あるハ漢軍の四参領に属せ
る佐領十人の居址とハ四條胡
同の東口より鐵嶺の祠堂にい
たるハ漢軍の五参領に属
せる佐領九人の居址とハ凡漢
軍正黄旗の参領官五人佐
領五十人軍丁一万五千人なり。
三軍合して七万九千八百人
なり。



○大覺寺 御河にあり。東の方後殿に火神を祀る。西の中殿後殿に關帝。薬王を祀る。順治。乾隆兩度重修ありて。雍正帝。乾隆帝御製の碑あり。又關帝薬王兩殿の額は乾隆帝の宸翰なり。○火神廟 地安橋の西にあり。廟の後湖あるに臨ひて樓あり。窓より望む絶景限りなし。○三旗參領署 地安門の外。白米斜街にあり。

積水潭 徳勝門の西。水関の内にあり。一に淨業湖といふ。其源西山一畝馬眼の諸泉水甕山の後灘と繞りて七里濼より出て高梁橋の西に至り東南に折る事殺十里これを高梁河と稱す。積水潭に至りて二派となり一ハ都城の水門に入て積水潭に注ぎ。一ハ内城を繞りて外城に至り玉河橋より外に注ぐと合して。通恵河を同て運送の船を積水潭に至らしむ。明代京城を流る諸潭みなを經て運河に注ぐ。これに依て積水潭寛若より遠し。今徳勝門に進き諸と積水潭とし積水潭を十刹海と号し。其又東南を蓮華泡子とて。皆一の水たなくかね名けたり。○藥王廟 地安門海子の西にあり。東の方海子のめぐり。流れに添て蓮藕の柳色と競ひ。京師の人夏月酒を攜へ此水濱に納涼し。あるひハ小舟を柳の蔭に繋ぎ。器を遊ぶ者と又東なるは西步糧橋といへ。玉河水これより御苑に入。○漢壽亭侯廟 地安門の西にあり。繚に周垣をめぐらし。廟門一間。前殿 三間。三の階あり。各九級東西。明の萬曆中に建つ。廟制 左右門各一。正門ハ三間なり。廡ともに三間。御碑亭 前殿の西にあり。又東廡の南に燎爐一あり。又殿室あり。各三間。殿の後鼓樓なり。門三あり。後殿 五間。東西の廡及び燎爐。祭器庫あり。正殿の東に祭器庫あり。西に治牲所あり。各三間なり。廟門の外に石坊一あり。正殿門廡ともに緑琉璃瓦を覆ひ。餘ハ皆灰瓦なり。楹ハ丹雘。梁棟ハ五采なり。順治九年勅して。忠義神武關聖大帝に封じ。雍正三年關公の曾祖祖父を皆公に封ず。又後殿の中に祀る。又忠貫天人の額ハ雍正帝の宸翰也。乾隆紀十六年。又忠義神武靈佑

關聖大帝に封ぜらる。謚を忠義と改む。毎年二月八日。又月十三日には官を遣りて祭らしむ。○此廟を白馬廟といへり。むかし慕容氏薊城に都せる時。白馬あつく前導せり。依て祠を建白馬を祀る。后其遺址を白馬といへり。又一說に明の英帝並に關帝の白馬に乘るを見給ふ。依て白馬廟と名づくといへり。

○賢良祠 白馬廟の前にありて南に向ふ。崇忠念舊といへる額は雍正帝の御書也。繚に周垣あり。大門三。門各三間。左右夾門各一。正殿 三間。東西の廡各三間。東廡の南に燎爐あり。東に治牲所。西を宰牲房とす。御碑亭 二門の左右に各一あり。凡正殿正門均しく綠琉璃の瓦を覆ふ。餘は皆筒瓦なり。門楹は丹雘。梁棟は五采を彩る。凡王公大臣の國家に勳績ある者を祭れり。○半瓦寺 關帝廟の西にあり。元の至元の間僧彌義佛といふ者獨と瓦る者なり。世人此僧の道行を慕ひて半瓦と呼んで名を號せり。○旌勇祠 半瓦寺の西にあり。乾隆中。云明瑞を祭る。○宛平縣署 地安門の外西。積慶橋の北にあり。宛平縣といふハ漢代の薊縣なり。唐代に幽都といひ。遼より以來元明清宛平と名く。此署の中に古雲盤といへるあり。明の邑令李蔭といふ者嘗て唐の李北海が書し雲麾將軍の碑を買て是を齋の壁に甃けり。今ハ久しく山が祠の中に嵌れり。又署の東に亦小亭を構へ。竹と柳を植。公餘退食の所とす。○海子橋 海子の南岸にあり。一名橋といひ。俗に三座橋といふ。○銀錠橋 地安門海子三座橋の北にあり。此下水深く。此より郭外の山を望むに絶景限りなし。○廣化寺 鴉兒胡同にあり。元代僧名にて佛号を唱へて一聲を誦すれば米一粒を置て記とし。二十年を經て米凡十八石を得たり。以て寺を建るといふ。○龍華寺 鴉兒胡同にあり。明の成化中に建。清の康熙二年重修して寺号を瑞應寺と改め。時に康熙帝御書の瑞額を賜ふ。其の年の某寺中にありし文宣果亞聖帝孫額ものを生じて光澤あり。寺僧これを朝廷に奏す。衆人嘆じて額とかなへの感ありといへり。

龍華寺看新竹　高士奇

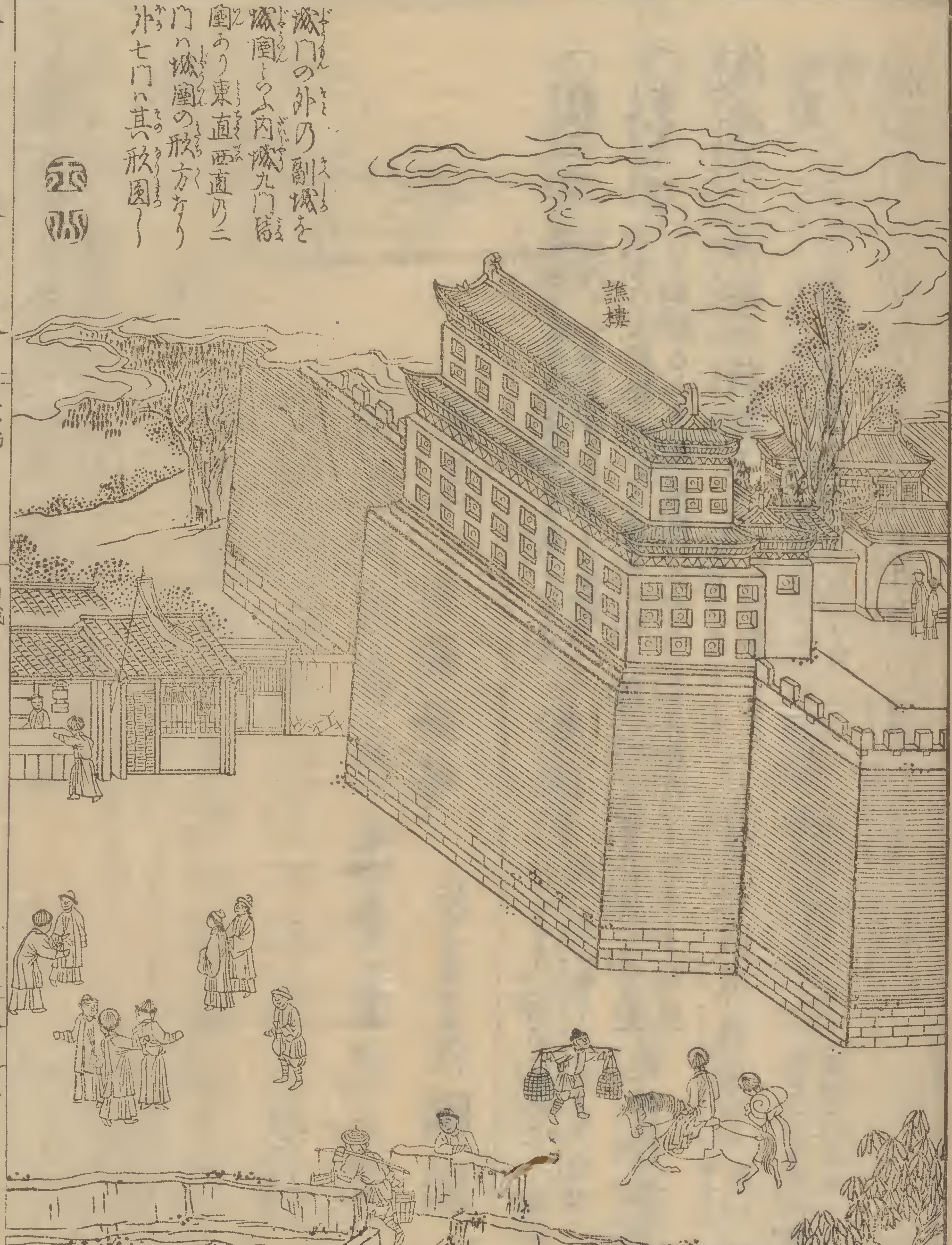
拂檻清陰細窺篁緑影深露香生静夜風簌
簌微心鮮籜粉抽條匝滿林渭川千畝望
如蒼日披襟

望甫早之衛書

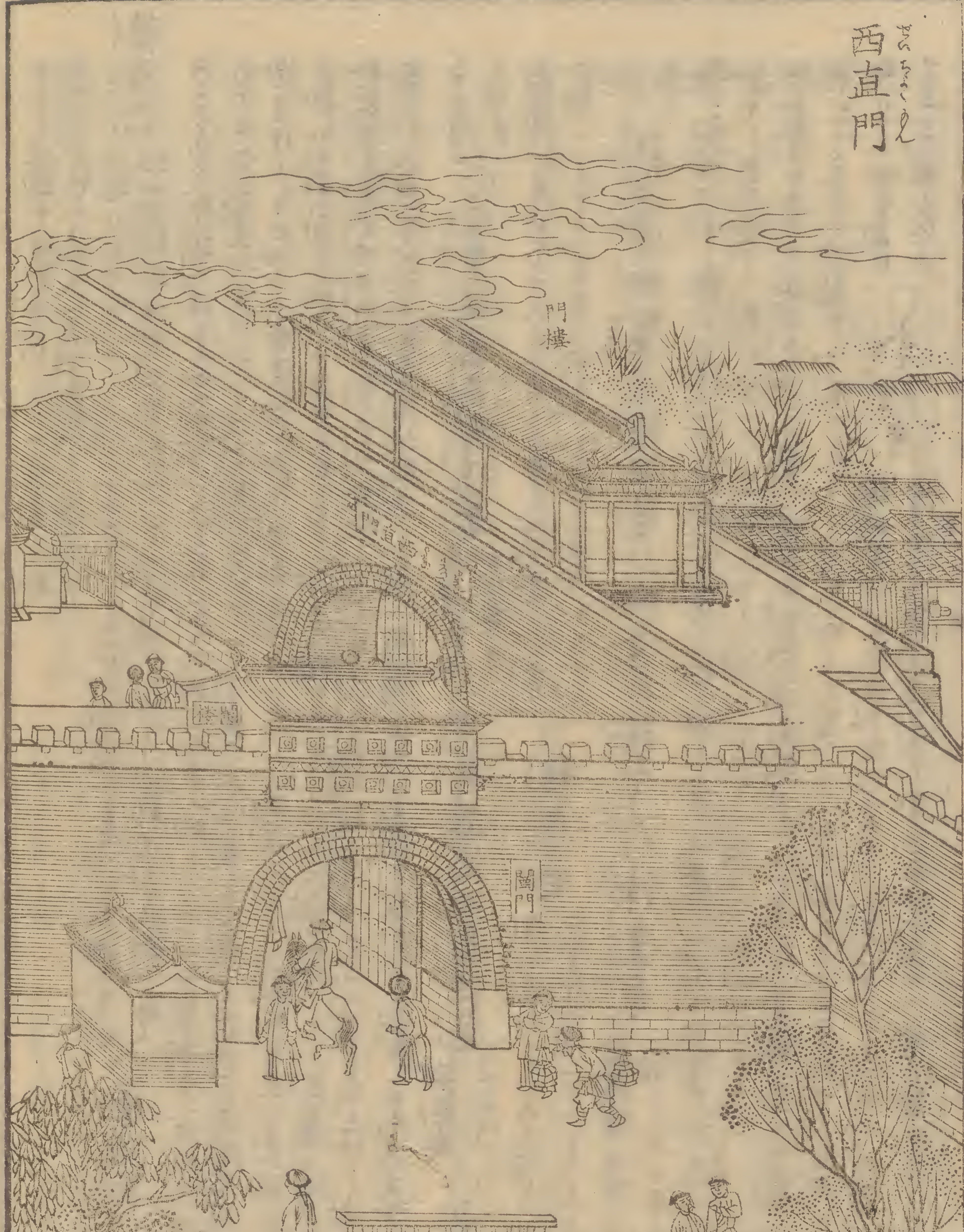
○心華禪寺 龍華寺の西にあり一に小龍華寺といふ此寺の東に稲田八百畝あり即御用田なり内監の支配する所なり。○十刹海 龍華寺の西にあり明の萬暦の間三義僧徧融といふ者これを建十刹海は方五十畝室三十餘あり桐樹ならべうゑ鏡台のごとし佛殿を其中にあり。○王皇廟○小藥王廟 俗に舊鼓樓大街にあり。○雙寺 德勝橋胡同にあり東を嘉慈寺といふ西を廣濟寺といふ佛せ称して雙寺といふ。○妙緣觀 大石橋の小妙緣觀胡同にあり明の景泰の間真武廟と換て觀とす。○千佛寺 德勝門の東八歩にあり鍋敦胡同にあり明の萬暦九年孝定皇太后の創建なり清朝雍正乃間重修せらる。殿の額は雍正乾隆二帝の御書なり。又雍正御製の碑文あり。寺内に銅像乃毘盧世尊あり其遶華宝坐の花辨すはるの小佛旋繞して朝參せる者のごとし又十八羅漢の銅像二十四天伽藍天王等の塑像あり皆明の御馬監楊用が僧の徧融が指揮を受て造る所なり。○華嚴鐘廠 德勝門の東にあり華嚴鐘今僅に一を存して光正寺の中に懸る又四鐘の高さ二丈闊さ一丈

なるもの数十此を地に作りて上に掛る書乃華嚴經と称する是に亦全く微ぜざるも德あるべし。

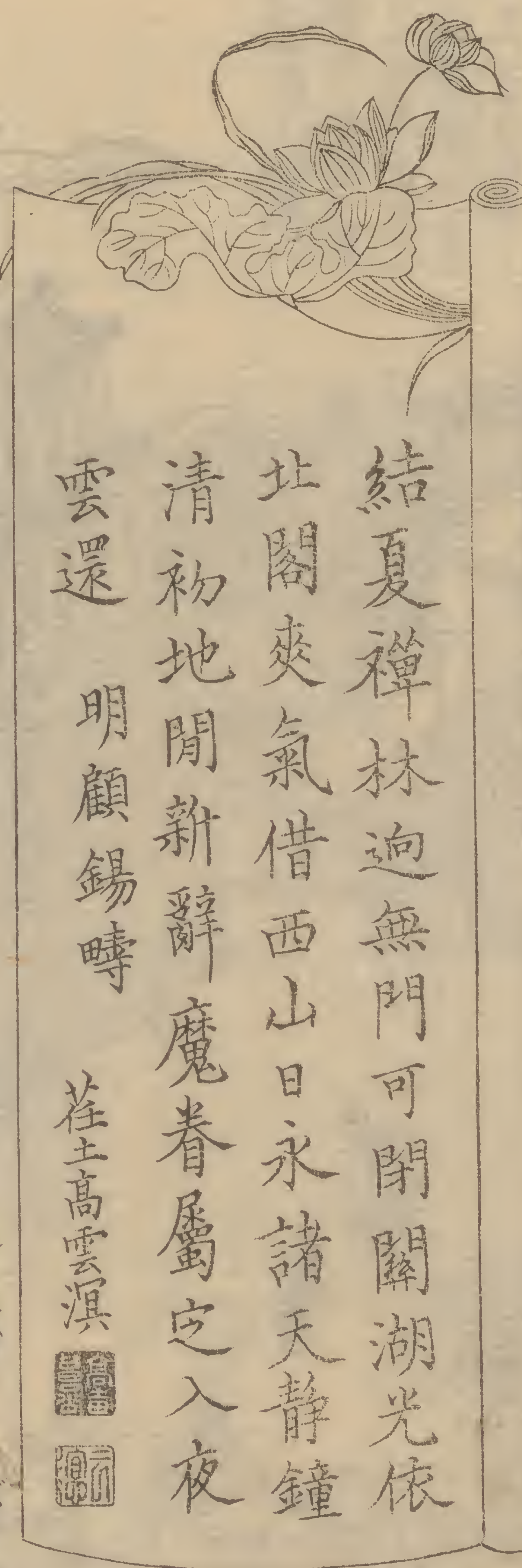
德勝門 内城の北の西門なり元代健德門といふ明の正統の間今の名に改む崇禎甲申の乱に兵部右侍郎王家彦此門を守て節に死せり清朝謚をて忠毅と稱す。○德勝橋 德勝門の内にあり西は即積水潭にて潭水橋の下に過ぎ東に流れ西南に轉ずる所に李廣橋あり此間緑樹岸をのぞみ人の往来せるもなく唯古樹乃枝びさしく生繁りて日蔭をも洩ざる寂寞たる風光畳畫溪のけしきに似たり。畳畫溪は湖州府長興の西にあり一に西溪と名く古樹岸を夾み叢篠甚だ繁り其花多く樹上に旋花の時は處に於ぶ人蹤を絶せり其所に畳畫亭あり劉燕が詩に云く竹林深處杜鵑啼両岸青々草色齊欲識人間真畳畫朱藤倒影入清溪。又常州府の双雲溪とも畳畫溪といふ。○毎歲六月六日中貴人儀仗鼓吹して馬を牽引し此河上に浴せしむ名けて洗馬といふ三伏の日馬を洗ふ事なるべきかくのごとし。○正黄旗蒙古都統署 德勝門大街石虎胡同にあり。○正黄旗満洲都統署 德勝橋にあり。○水關 德勝門の西一里にあり水の西山より出て高梁橋を經て城中に流して入なり其所に關ありてこれが限界をなせり。○觀音菴 積水潭の上にあり明の永樂の間建乾隆二十六年に名を滙通祠と改む。乾隆帝御製の詩碑並び御書の額あり。○淨業寺 德勝門の西城下に沿ひ勝しく都が寺あり明の宣德六年に建る鐘一あり。○昔は寺の東に軒二楹あり茶をたて廊棚を張て都下の探客集りて尊を設し酒を傳へて宴飲せしが今は廢して此所に湖上の魚藕ありなし。○太平菴 淨業寺の西にあり城壕の水陂ふて橋あり橋下に水關の清流瀉ぐがごとくにして南に注ぎて太湖に入。○此道場は王粲洲より入る者の營創なり菴のめぐりに澄を堀りて地中より太平菴の三字を刻せし石碑をほり出しより仍て名けて太平菴といふ。○金剛寺 積水潭の東南鵝手胡同にあり。○金剛寺の後湖あり湖の遶に西菴ありて一つは此遶竹多く生ひ茂りて小園あり後に禅室あり紙窓



甕門の外の副城を甕圏といふ内城九門皆圏あり東直西直の二門は甕圏の形方なり外七門は其の形圓し



紫禁城に幽雅あり。後に世宗此段に大殿を建る。閣をつくる林
いとくへり。清深幽遠を失ひたり。此ゆゑより湖中蓮華多し。



○龍王廟 新街口にあり。雍正七年勅して建。乾隆十八年黄瓦をもてこれを覆ふ。○廣濟寺 阜内にあり。明の正德九年楊樂禪師がために勅して建る所也。明碑二あり。

○崇元觀 西直門内。新街口にあり。俗曹公觀と稱ス。明の璫曹化淳の建る所也。門に牌樓あり。上に三界聖境の四字を書ス。乾隆二十三年重修ス。乾隆帝御書の扁額并に御製の詩碑あり。毎年正月一日より十日迄廟市あり。

○正黄旗漢軍都統署 西直門の内。丁家井と云。○正黄旗護軍統領署 西直門乃内。崇元觀の後寛街に在。○正黄旗覺羅宗學 西直門の内小街兒胡同にあり。○永泰寺 ○萬佛寺 ○宗壽寺 ○萬寧寺 倶に西直門の内に在。

西直門 内城西の北門なり。元代和義門といふ。明の永樂の間改め建。○明の弘治戊午の年一の賊。西直門より城中に入り。守衛乃軍士いつじさりたるかゞ者臣し。城中の人民を殺傷する者多し。洛陽の馬公といへる人の云く。獄の城に入るべき兆あらんや。豫め武備を修べ盗賊を防ぐべしと。又何景春といふ人同列の者に語て曰く。盗の兆あるや盗賊の侵入のことあるべからず。又正しく史冊を閲しむべしといへり。果して城中頻に火災起り。盗賊多く此府藩部の署も焼うせき。

内城大概右に記とごとし。且親王公侯貝勒貝子の府第は悉くこれを略せり。

又廟祠寺觀の屬も事實の記すべきなきはすべて除きて載せず。

唐土名勝圖會巻之三終